
天の夢 地の道

ミナモトヒデカズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天の夢 地の道

【Nコード】

N7172H

【作者名】

ミナモトヒデカズ

【あらすじ】

室町幕府の成立を描く群像劇。百を超える登場人物が日本を再生していく。

「天の夢 地の道」

・第一章…朝廷はなぜ滅びなかったのか？鎌倉時代、承久の乱で敗れた朝廷を復活させたのは一人の男だった。・第二章…鎌倉幕府はモンゴル軍を撃退した後になぜ迷走したのか？モンゴル軍がやってきたとき、日本に何かが起きた。戦場に立った武士達は、自らが「日本人」だと気付いた。朝廷は持明院統と北条氏に分裂した。し

かし、執権北条時宗は、新時代を築く間もなく死んだ。残されたのは、幕府改革を訴える安達泰盛と、北条得宗家執事の平頼綱だった。

・第三章…父達の時代に何があったのか？時宗の後を継いだのは、息子貞時だった。貞時の狂気が、幕府を怪物へと変えた。これを危惧した持明院統は、幻の倒幕計画を策すが…。

・第四章…後醍醐天皇を二度も破った鎌倉幕府は何故滅んだのか？帝王後醍醐の即位によって、皇位を奪われた持明院統。持明院統の花園上皇（先の天皇）は、革命児日野資朝と出会う。敵であるはずの後醍醐天皇が、国を変えようとしていることを知る。

・第五章…建武の新政とは何だったのか？鎌倉幕府が滅び、建武政権が誕生した。奥州に小幕府を築いた北畠親房・顕家父子は、鎌倉の足利と対立を深めていく。思いもかけぬところから動乱は再開された。

・第六章…足利尊氏と後醍醐天皇は敵だったのか？京での戦いに敗れた尊氏は西国へ。しかし、勝利に沸く朝廷に、楠木正成は尊氏との和睦を進言した。

・終章…その種をまいたのは撒いたのは誰か？隠された史実。

「地の道 人の難」

・第一章…陸奥の北畠顕家のもとに吉野から勅命が下った。奥州軍は二度目の上洛作戦を開始するが。

「太平記」とは一味違う、南北朝時代を堪能下さい。

【天の夢 地の道】・序章

序章…天の悪戯

【四条天皇の悪戯】

物語は、およそ八百年前、日本列島に大変革が起きようとしていた時代から始まる。この頃、日本には二つの政権が併存していた。東の鎌倉幕府と西の朝廷である。

当時、幕府の長に征夷大將軍の位を与えたのは、朝廷だった。しかし、武力をもって朝廷を抑えたのは、幕府だった。そのため、両者には奇妙な関係が生まれていた。

鎌倉時代中期の一二四二年一月五日、宮中で一人遊びをする少年がいた。

御年十二歳の四条天皇である。

この天皇は、二歳で即位して以来、生涯政務に頭を悩ませる事がなかった。なぜなら、政治は、外祖父にあたる九条道家が行なっていたからである。

だから、幼帝の仕事は、宮中を遊び回る事であった。先月、道家の孫娘（彦子）が嫁いでいたが、天皇は幼少である。お世継ぎなど、まだまだ先の話だった。

『さわがしきまでの御遊びのみにて明しく暮らさせ給ひける』（増鏡）

“騒がしい程に、お遊びばかりの日々を暮らしておられた”

その遊び相手は、彦子の弟忠家が務めたという。

しかし、「その日」に限って、四条は一人で遊んでいた。忠家も彦子も側にはいない。そして、あろうことか、身边を警護すべき女官の姿さえ見えなかった。

したがって、間もなく起こる“事件”は女官達の大失態といえる。

一人遊びに興じる幼帝は、先頃から、御所の床に向かって「何か」

をしていた。

一体、何をしているのだろう。

『主上あどけなくわたらせ給ひて、近習の人、女房などを倒して笑わせ給はんとて、

弘御所に滑石の粉を板敷にぬりおかれたりけるに』(五代帝王物語)

“帝は、いたずら心を起こし、そこを通る近習・女官を転ばせて笑おうと、御所の床に「滑石の粉」を塗っておられた”

不幸は、まもなく起こった。

『主上あしくして御顛倒ありける』

“運悪く、お転びになった”

不注意にも、自分が「滑石の粉」に滑り、床に頭を打ちつけてしまったのである。しかも打ち所が悪かったらしく、そのまま意識を失った。

四条は、この日を境に公式の場合から姿を消し、一月九日にその死が公表された。

四条天皇の急死。この事件は、京の朝廷はおろか、鎌倉の幕府をも巻き込む大問題に発展した。何故なら、承久の乱以来の権力図が、修正を余儀なくされたからである。

【後嵯峨天皇の即位―北条泰時の置き土産―】

四条天皇が亡くなった後の十数日間、朝廷には「天皇」がいなくなった。

君臨すべき人物がいなくなったからである。

承久の乱後に、幕府が奉じた皇統は、ここに断絶した。

幕府は、後鳥羽上皇の子孫に継るしか、なくなったのである。

報せは、鎌倉の執権北条泰時の下にも届けられた。まさか、幼帝

が急死するとは。

『三日三夜寝食を忘れて案じける』（五代帝王物語）

“泰時は、三日三夜、寝食を忘れて対策を考えた”

こうなった以上、後鳥羽上皇の子孫を奉じるほかない。

候補には二人の人物がいた。土御門院の皇子と順徳院の皇子である。土御門院も順徳院も、承久の乱後、幕府が京から追放した上皇である。

だが泰時は、順徳院の皇子だけは天皇にしくなかつた。

順徳院が乱の首謀者だったからである。

何よりも、九条道家が、早速この皇子を奉じようと画策している事が気に掛かった。

幼帝の死は、本当に事故死だったのか。

順徳院を京に呼び戻し、幕府に復讐するための“力”が働いたのではないか。

それは、後鳥羽上皇の怨霊なのかもしれないし、暗殺者の手なのかもしれない。

だとすれば、なおさら順徳院の皇子は奉じられぬ。

泰時は土御門院の皇子を奉じる事を決意した。

そして、東使（使者）として京に派遣する安達義景に、こう言い含めたという。

―順徳院の皇子が既に天皇となっていた場合は、皇位から降ろし申し上げよ―

一二四二年一月十九日、義景は京に到着した。

この時、廷臣の多くは順徳院の皇子に東使が来ると考え、その邸に集まっていた。

しかし、東使は別の方角に向かっていく。

『みな驚きあわてて、お返しこなたに参り集ふ。』（増鏡）

“貴族達は、みな驚き慌てて、邦仁王のいる土御門殿に参集した”
身の危険を感じた貴族達の行動は素早かった。

『異域蛮類の身をもって、この事を計らい申すの条、宗廟の冥慮いかん』（平戸記）

“異域蛮類の身で、天皇の即位を強行するとは。泉下の帝らがどう思われることか”

朝廷の故実に詳しい民部卿平経高は、幕府に対する憤りをそう記した。

かくして、土御門院の皇子が即位した。後嵯峨天皇である。

第一章：前史（前書き）

「なんでここから始めるの？」と思われる方が多いと思います。
理由は主に3つ。

1.. 鎌倉時代に負け続きの朝廷が滅亡しなかった理由を説明するに
は、

九条道家という貴族が欠かせないから。

2.. 西園寺という特殊な貴族の紹介のため。

3.. 後の章の出来事と、比べてもらうため。

基本的に、第一章・第二章は、伏線のための章です。

伏線が回収されるのは第五章以降となるので、そのつもりで。

第一章：前史

第一章：前史

【建久七年の変―政略家久我通親―】

序章で、北条泰時が危険視していた「九条道家」は、藤原の氏長者（指導者）である。

したがって、「藤原道家」と呼ぶべきなのだが、後世の人はそう呼んでいない。

その理由は、摂関家が分裂したからである。

平家が滅びた後、源頼朝は東国で政権づくりを進めた。

それが、頼朝を奉じる鎌倉武士たちの願いでもあったからである。

しかし、これは京の後白河法皇の承諾なしには、実現しえない道であった。

朝廷は、荘園領主として、未だ侮りがたい勢力を持つ。

これとの政治的折り合いが必要であった。

そこで、頼朝は法皇を牽制するため、摂政九条兼実（九条家の祖）と手を組んだ。

一方、それを見た法皇は、兼通の甥である近衛基通を重用した。

ある意味で、摂関家は京と鎌倉の対立の決着を決める、鍵となったわけである。

しかし別の見方をすれば、この時、摂関家は分裂を決定付けられた。

摂関家にとっての悲劇であった。

それに一層拍車がかかったのは、京と鎌倉の対立が、一一九〇年の頼朝の上洛をもって終わった事だろう。頼朝は、冷静な政治家である。いつまでも、法皇と敵対し、平氏と同じ轍を踏む筈がなかった。

かくして、後には「摂関家の分裂」だけが残された。

一一九二年、後白河法皇が逝去し、頼朝は征夷大將軍となった。もはや、頼朝を遮る者はいない。

慢心した頼朝は、娘大姫を後鳥羽天皇に嫁がせようと画策した。

おそらく將軍の權威を高めようとしたのだろう。

だが、当時、天皇の後は「兼実の娘」である。頼朝の行動は、兼実に対する裏切りであった。

そんな状況が続く一一九五年十一月、久我通親という貴族の養女が、後鳥羽天皇の皇子を産んだ。

当時、天皇に然るべき皇子はなく、この皇子が後継ぎとみなされた。この久我家は、村上源氏の一流で、朝廷でも藤原氏に次ぐ地位にあった。

そして、通親は、亡き法皇の側近として頭角を現した、一流の政略家であった。

通親は、頼朝と兼実の間隙を見逃さなかった。

今こそ、摂政を失脚させる好機。

ある日、皇后任子が突如内裏から追い出され、父兼実が罷免された。『九条殿に参るの人、関東將軍咎めを成す。用心すべし』（三長記）

“九条家の邸宅に近付く者は、関東の將軍から、とがめを受ける。用心すべし”

どうやら、通親は、裏で頼朝の黙認を取り付けていたようだ。

通親の手回しの良さが窺える。

この「建久七年の変」により、九条兼実は没落し、近衛基通が担ぎ上げられた。

頼朝は、通親なら兼実よりも御しやすい、と侮っていたのだろうか。

しかし、一一九六年、肝心の大姫が亡くなった。

頼朝は、なおも娘三幡の入内を画策したが、一一九九年一月十三日に亡くなった。

死因は、何と「落馬」による怪我だったという。

鎌倉武士が落馬するなど聞いた事もない。何とも不可解な最後だった。

通親は、これを機に謀略を用いて幕府派公卿を一掃し、六月内大臣に昇進した。

だが、通親は己の能力を示しすぎた。

院政を始めた後鳥羽上皇は、通親を恐れ、まもなく九条家を復活させた。

通親は、敬して遠ざけられ、一二〇二年に急死した。

【摂家将軍】

九条道家が活躍するのは、それから十数年後の時代である。

その頃、朝廷を動かすのは、後鳥羽上皇と、その日常を世話する女官達だった。

上皇に口添えをするかどうかは女官達の胸次第。

とりわけ人事は、上皇の乳母、藤原兼子の承諾なくしては成り立たない。

『京には卿二位ひと世を取りたり』（愚管抄）

“京では、藤原兼子が、世を動かしている”

故九条兼実の弟慈円は、忌々しそうに、そう記している。

古今東西、権力者のそばにいる人物が、周囲の反発を買う事は後を絶たない。

西園寺公経という貴族も、兼子を憎む一人だった。西園寺は、源頼朝と姻戚関係を結び、朝廷で地位を高めた家で、この頃、関東申次

を務めていた。

関東申次とは、幕府と朝廷の仲立ちをつとめる役職である。その権限は強大だった。

何しろ、幕府は、相談役である関東申次の意見を聞きながら、朝廷に口を出すのだ。

公経は、幕府を動かす、上皇に圧力をかける事ができる立場にあった。

上皇に取り入って、朝廷を操れる兼子。関東申次の権限で、幕府を操れる公経。

やがて両者は、互いを憎悪するようになった。

一二一七年、西園寺公経が謹慎を命じられた。

原因は、「官位昇進を果たせず、腹を立て、出家して鎌倉の將軍を頼ると放言したため」とされている。

しかし、公経本人に言わせれば、「それは兼子に讒言されたから」だった。

追い詰められた公経は、鎌倉に泣きついたのだろう。

まもなく、源実朝が抗議し、公経は許された。

しかし、この後、上皇は関東申次を信用しなくなった。

一二一九年、三代將軍源実朝が鶴岡八幡宮で暗殺された。

この時、鎌倉の武士達は、頼朝未亡人の実家、北条家に後を委ねた。しかし、源氏でない北条は、將軍になれない。

そこで、北条政子と義時は、「皇子を將軍として迎えたい」と上皇に懇願した。

だが…、

『いかに将来にこの日本国二に分る事をばしをかんぞ、こはいかに』
“どうして将来、日本を二つに割る火種を撒かねばなんのだ、そうは思わんか”

『ただの人は、関白摂政の子なりとも申さむにしたがふべし』

“貴族でもない関東武士など、摂関家の子にでも従っていればよか

ろう”

この言葉に従い、四代目鎌倉殿が派遣された。

即ち、皇子ではなく、九条道家の三男三寅が、鎌倉に下向したのである。

「摂家将軍」誕生の後、後鳥羽上皇と北条一族は、険悪な関係となった。

【承久の乱】

一二二一年五月十五日、後鳥羽上皇は、全国の武士に北条一族の討伐を命じた。

『義時朝臣、偏に言詞を教命に仮り、恣に裁断を都鄙に致し、剩え己の威を耀かし皇憲を忘るるが如し』（小松美一郎氏所蔵文書・承久三年五月十五日官宣旨、「日本史史料」〔2〕中世〕一一三頁）

“北条義時は、幼い将軍の言葉と偽り、鎌倉でほしのままに政治を行ない、己の威光を高め、天皇の存在をないがしろにしている”

『これを政道に論ずるに謀反と謂うべし』

“これは、謀反に他ならない”

『早く五畿七道諸国に下知し、かの朝臣を追討せしめ』

“一刻も早く、諸国の武士に、義時を追討させよ”

しかし、これは余りにも勝手な理屈だった。

後白河法皇の時代に、戦乱を鎮めたのは源頼朝である。

何よりも、鎌倉幕府に東国の支配を認めたのは、朝廷ではないか。

『一往のいはればかりにて追討せられんは、上の御とがとや申べき』

（神皇正統記）

“源氏将軍が絶えたという理由だけで追討を試みるとは、非は明らかに院にあった”

とは、後に南朝を率いた北畠親房（久我通親の子孫）も認めるところ

ろである。

多くの武士の感情も同様だった。

鎌倉に報せが届いた時、北条政子（源頼朝の未亡人）は、集まった御家人（幕府に仕える武士）達にこう言った。

『いかに侍どもたしかにきけ』（承久軍物語）

“侍ども、よくお聞き”

―むかし日本国の侍は、三年の京警固を朝廷に命じられ、家臣共々着飾って上京したもの。

されど、三年の奉公。

最後はみな困窮し、裸足で領地に帰った。

頼朝公は、これを憐れみ、務めを半年にして下さった―

『かかる御なさけふかき御心ざしをもわすれまいらせ。こんど京かた仕らんか。またくはんとうに御ほうこう仕らんか。ただいまたしかに申きれ』

“かかる情け深きお心を忘れ、朝廷に付くか、又は幕府に奉公するか。今この場で申せ”

みな涙を流した。

昔、武士達は貴族の犬であった。

その武士を、「犬」から「人」にしてくれたのが頼朝公だった事を、想い出したのである。

鎌倉は武士の都である。

それを失う時、武士は、また犬に戻されるであろう。

『にんげんの身としてだいだいかうをんをいただき。あに木石におなじからんや』

“我等は、人間として、代々厚恩をいただいた。（情けを知らぬ）木石とは違う”

奮起した幕府軍は、朝廷方を一蹴して京に攻め上り、後鳥羽上皇

らを島流しにした。
以後、「六波羅」（近畿に設置した幕府の役所）が朝廷を監視する体制がとられた。

【民政家九条道家―ある貴族の決意―】

鎌倉幕府の四代将軍は「九条頼経」であった。
その父は九条道家で、母方の祖父は西園寺公経である。
九条家と西園寺家。鎌倉殿九条頼経の誕生は、この閥閥が機能した結果といえる。
そして、この事が、父親の九条道家の運命をも変えた。

一二二一年、承久の乱で後鳥羽上皇が敗北した。

その際、摂政九条道家は、位を近衛家に譲り渡した。

しかし、道家は將軍の父である。

舅の西園寺公宗にいたっては、承久の乱で幕府に味方し、戦後太政大臣になっている。

そのうしろ盾もあって、一二二八年閏白に返り咲いた。

朝廷は、何よりも、血縁が物を言う世界だった。

こうして、復権した道家は、舅と共に朝廷を主導した。

一二三〇年には、娘が後堀河天皇の皇子を産んでいる。

この皇子こそ、最初に登場した四条天皇である。

道家は、「子が將軍で、孫が皇太子」という、鎌倉時代でも有数の閥閥を築いた。

しかし、“藤原の氏長者”である道家は、この現状にむしろ憤りを覚えていた。

後鳥羽上皇が島流しにされ、摂関家が武家の顔色を伺う「現状」。
これでは、栄華とは程遠い。

一二三二年、道家は後堀河天皇を強引に退位させ、孫の四条天皇を即位させた。

『其の上更に違異あるべからず』（民経記）

“その上の異論は認めない”

幕府はこれに反対したが、道家はそう言い放ったという。

次いで一二三三年、道家は朝廷の求心力を回復するため、ある改革案を打ち出した。

『後白川院・隠岐院の御時、世務の失、多くこれに在るか』（九条道家奏状）

“後白河院、後鳥羽院の治世では、政治の失敗が多くあった”

『官位昇進の事、訴訟決断の間、能く謹慎せらるるは、政道の肝要たるか』

“官位の昇進と裁判の判決、この二つを正しく行なう事が、政治の要である”

まもなく、有能な下級（中原氏・小槻氏ら）・中級貴族（平氏・吉田氏・葉室氏ら）が登用され、彼らで諮問機関（親政時なら「記録所」、院政時なら「文殿」）が組織された。

そして、朝廷に持ち込まれる訴訟が、『道理』に基づいて審議されるようになったのである。

九条道家の大改革によって、朝廷は急速に息を吹き返した。

断っておくが、道家は後鳥羽上皇に批判的な人物ではない。大叔父の慈円とは違う。

むしろ、後の行動を見る限り、上皇の時代を懐かしんでいる節さえあった。

その道家が、敢えて上皇らを名指しで非難し、朝廷改革を訴えている。道家の決意は固い。

後世、「徳政」の始まりと評されるこの改革は、内外から評価を受けた。

【東関の武略】

一二三五年、九条道家は「後鳥羽上皇の赦免」を幕府に嘆願した。だが、あっさり斥けられた。

この出来事は、道家に一つの教訓を与えた。即ち、“改革だけでは足りない”と。

このまま幕府を野放しにする限り、朝廷の凋落は止まらないだろう。

それを象徴する事件も起きている。

この年五月、岩清水八幡宮と興福寺が、ある地域の水利を巡って衝突した。

閏六月、岩清水八幡宮は、この騒動を口実に朝廷に強訴（脅迫）し、因幡国を寄進しろと要請した。

道家は調停を試みたが失敗し、結局これを呑んだ。

十二月、今度は興福寺が春日神社の神木を担ぎ出し、朝廷に強訴をした。

興福寺は藤原の氏寺である。へたに逆らえば、道家とて「藤原の氏」を剥奪されてしまう。

やむなく、道家は「岩清水八幡宮の指導者を解任し、因幡国の寄進も止める」と回答した。

表面上、その場しのぎの対応を続ける道家は、実はその裏で二つの事を画策していた。

1…一二三六年一月、西園寺公経の仲介を得て、娘任子を近衛兼経に嫁がせた。

2…万が一の場合には、軍勢を派遣するよう、將軍九条頼経に要請した。

朝廷内で危機感を煽るだけ煽った上で、「興福寺への牽制」を口実に、摂関家を再統一する。

そして、それでも興福寺が引き下がらないなら、息子に叩かせる。何とも、恐ろしい筋書きだった。

七月、案の定、道家の対応に苛立った興福寺が再び蜂起した。そこで十月、道家は、六波羅に大和への出兵を要請した。ここまでは、道家の目論見通りだった。

しかし、道家は北条を侮り過ぎていた。

執権北条泰時は、気前よく軍勢を動かすようなお人好しではない。泰時は、出兵の条件として次の事を要請してきた。

「今後、暴徒鎮圧に際して、僧侶・神官を殺害しても不問にしてもらいたい」

平安の御世から、僧侶や神官を殺傷した武士は罰せられる。

泰時は今回の騒動を収めるために、これの撤廃を朝廷に要求してきたのである。

道家は、武家に格好の口実を、むぎむぎ与えてしまった事を悟った。

しかし、もはや後の祭りだった。

抵抗すれば、僧侶・神官も切られる。

震え上がった興福寺は、まもなく屈服した。

『東関の武略によって、南都の落居に及べり』（九条道家告文・『院政』二三〇頁）

“幕府の武略によって、興福寺は屈服に至った”

結局、騒動を収めたのは『東関の武略』だった。幕府の力が、改めて天下に示されたのである。

—こんな筈ではなかった。

「隠岐院の時代」ならこんな不始末は起きなかった—

道家の中で、昔日を想う気持ちがますます強くなった。

しかし、道家が帰京を切望していた後鳥羽上皇は、一二三九年、隠

岐で亡くなった。

【宮騒動―九条道家の大博打―】

そして、一二四二年に戻る。

四条天皇の死後、九条道家は北条得宗家（泰時の血統）との対決を決意した。

それは、北条に味方する、舅西園寺公経との決別を意味した。

幕府に逆らった道家が直ちに失脚しなかったのは、敵対者の死が相次いだからである。

この年六月、執権北条泰時が鎌倉で亡くなり、幕府は反撃の機を失った。

一二四四年四月、執権北条経時（泰時の孫）は、ようやく將軍九条頼経を廃し、その子頼嗣を五代將軍とした。しかし、ここでも不幸が起こる。八月、京で西園寺公経が死去したのである。

道家は、これを機に、西園寺から関東申次の職を奪った。

一二四六年一月、後嵯峨天皇が退位し、皇子の後深草天皇が即位した。

この天皇は西園寺公経の子実氏を外祖父とする。

自然、道家は実氏の排除を画策するようになった。

・九条派…一条実経（道家の子）・近衛兼経（娘婿）・鷹司兼平（兼経の弟）

・西園寺派…二条良実（父道家と陰悪）・土御門定通（久我通親の子）・後嵯峨上皇（黒幕）

かくして、朝廷は二分されたのである。

そんな中、執権経時も病に倒れた。

この政治空白に乗り、道家は二条良実を罷免し、言う事を聞く一

条実経を摂政とした。

道家は反対派の締め出しを図ったのである。

道家がここまで強気の行動に出たのは、幕府評定衆（重臣）の千葉秀胤・後藤基綱・藤原為佐・三善康持らが、前將軍九条頼経を奉じ、味方に付いたからである。

『入道將軍、東山禪閣を示し合わせ謀を廻し、猛将等を相語らい』
（岡屋関白記）

“前將軍は父道家と示し合わせ、謀略を廻らし、猛将等と相語らった”

皆、日頃から北条の専横に不満を持つ連中である。

その狙う所は、北条一門の名越光時を執権に据え、將軍の力を復活させる事だった。

執権は將軍を操り人形にした。ならば、將軍が執権を操り人形にして何が悪い。

閏四月一日、執権北条経時が、弟時頼を後継者に指名したうえで亡くなった。

前將軍派は、これを認めず、鎌倉は緊張に包まれた。

しかし、若き執権時頼は有能だった。

時頼は、北条政村（一門長老）・北条実時（金沢）・安達義景（有力御家人）を味方に付け、ついに付け入る隙を与えなかったのである。

そのため、様子を窺っていた最有力御家人三浦泰村が、時頼への支持を表明した。

この三浦の動きが大勢を決した。

五月二十五日、追い詰められた光時は出家し、伊豆に流された。

そして、企てに失敗した前將軍頼経は、六月十一日鎌倉から追放された。

時代は得宗家を選んだのである。失意の道家は六年後に亡くなった。

【後嵯峨上皇の時代】

一二四六年十月、執権北条時頼の申し出で、西園寺実氏が関東申次に就いた。

九条道家の転落が決定付けられたのである。

以後、摂関家は、近衛・鷹司・一条・二条・九条に分裂した。五摂家という。

その後の朝廷を主導したのは、後嵯峨上皇だった。

上皇は、幕府の要請もあって「徳政」を行ない、葉室定嗣ら中下級貴族を政権に参加させた。

特筆すべきは、自らも臨席する院評定（会議）の実施だろう。

評定には、西園寺・土御門・久我ら上級貴族も参加した。

九条道家が始めた改革は、後嵯峨上皇によって、朝廷全体の取組みとなったといえる。

道家の政治は、敵対した側すら、否定できないものであった。

道家の歩みは、決して無駄ではなかったのである。

一二四七年、高野山から下りた安達景盛が、子の義景・孫の泰盛に三浦泰村の討伐を命じたため、鎌倉で宝治合戦が起きた。この戦いで三浦は族滅し、千葉氏らも没落した。

一二五一年、その幕府に対し、上皇は皇子の宗尊親王を派遣した。上皇は、幕府念願の「親王將軍」を実現させたのである。公武が共存共栄する時代となった。

上皇と時頼の蜜月を支えたのは関東申次だった。

後嵯峨はこれに報い、西園寺実氏・洞院実雄兄弟の娘達を、次々と皇子達の妃として受け入れた。

そのため、西園寺・洞院の血を引く天皇が、その後の朝廷では続いた。

その割りを喰う者も現れた。

一二五八年三月、後嵯峨上皇は大々的な御幸を行った。

華美を極める行列が向かう先は高野山。

だが、行列の主の表情はどこか沈痛であった。

それは、この御幸の隠れた目的による。

上皇は、高野山で“土御門顕定”という人物に会わなければならなかった。

後嵯峨が即位する前に「土御門殿」に居た事を思い出してもらいたい。

顕定の父定通は、不遇な時代の後嵯峨を支えた数少ない貴族であった。

ある時、顕定は近衛大将への昇進を希望した。

恩人の子の頼みである。上皇は快諾した。

しかし、官位叙任直前に、西園寺実氏の横槍が入った。

西園寺は無碍に出来ない。やむなく、後嵯峨は実氏の息子公相を、昇進させた。

一二五五年、これを嘆いた顕定は突如出家し、高野山に登った。

その時の事を託びようと上皇が顕定の庵室を訪ねたところ、昨日まで居たはずの顕定の姿は無かった。それどころか、庵はきれいに片付けられ、誰一人いなかった。

既に引き払っていたのである。

上皇は、しばらく呆然とした後、ぽつりとつぶやいた。

『今更に見えじとなり。いとからい心かな』（増鏡）

“今更、私と会うつもりなどないというのか。きつい仕打ちをしてくれる”

あんなに気落ちされた院など、見た事がない、廷臣達は口々にそう言った。

【新たな時代】

一二五九年、後深草天皇が譲位し、龜山天皇が即位した。共に後嵯峨上皇の子である。

この頃も、朝廷は、後嵯峨上皇の時代が続いていた。

しかし、後深草は持明院統の祖で、龜山は大覚寺統の祖である。役者はそろった。

一二六五年、後嵯峨上皇は、“神社や寺の領地を返還する”という院宣を発した。

寺社は、これを「徳政だ」と喜んだ。

しかし、徳政とは、本来なら九条道家や北条時頼が行なったような「有能な人材の登用と、公正な裁判によって民を救う政治」の事を指す。

“今回の徳政令”は、それとは違う。その目的は、「荘園領主を保護するため、土地の売買や質入れを禁止する」事であり、民の経済活動の否定であった。

日本列島が変わろうとしていた。

天災や戦乱にも負けず、民は一所に定住し、まばらで消滅の多かった集落に代わり、安定した集落が誕生しつつあった。これが、現代の「市町村」の原型である。

人々は、やがて荘園領主や地頭とも、渡り合うようになった。

集落で生産された作物・特産品は市で取引され、有力寺社と結び付いた商人が、遠隔地との商いを盛んにしていく。今や、京を中心とした一大商業網が完成し、南宋からは次々と貨幣が輸入されていた。

時流に乗った者が金を貯め、落ちぶれた領主達から土地を買い上げていく。

奈良・平安の御世とは明らかに違う、何かが誕生しようとしていた。

この物語の背景となる「現代につながる日本の誕生」である。上皇も、この動きを黙視できなくなり、『徳政令』の乱発が始まった。

一二六六年、幕府では將軍宗尊親王（後嵯峨の皇子）が廃され、京に送り返された。

北条時頼と長時を相次いで失った鎌倉では、北条一族長老の政村が、自ら執権に就任し、御曹子時宗を守り抜く事を決意していた。その政村が「宮騒動」の再現を恐れ、先手を打ったのである。

親王の子惟康王が、僅か三歳で將軍となった。

一二六八年、津軽で蝦夷アイヌが蜂起し、蝦夷管領安藤五郎を討ち取った。

閏一月、高麗王經由で蒙古からの国書が幕府に届いた。

評議の結果、「古来遣唐使などを派遣している朝廷が外交権を持つ
のだから、幕府がこの問題を扱うべきではない」という意見が出て、
二月朝廷に国書が回送された。

『古より小国の君、境土相接すれば』（調伏異朝怨敵抄・至元三年
八月日蒙古国書）

“いにしえより、小国の君（日本）は我が国の隣に位置するのだから……”

しかし、国書を読んだ朝廷は、「小国の君とは何事か」と、国書を黙殺する方針を決定した。

三月、政村は時宗を執権に就け、自らは連署（副執権）に退いた。

第二章：蒙古襲来（前書き）

さて、日本史の転換点、元寇です。

ただし、リアル元寇なので、鎌倉にも京にも蒙古兵はやってきません。

にもかかわらず、ここが転換点です。

元寇を機に目覚めたのは、最前線にいた九州の武士達と、最も後方にいた朝廷・幕府の指導層であった。

第二章：蒙古襲来

【二月騒動―北条政村の威―】

一二六九年九月、高麗から再び蒙古の国書が届いた。この時、朝廷は返事を用意したが、幕府に差し止められた。幕府は「外交権は朝廷のもの」という前言を翻したのである。

しかし、その幕府も、この頃は「新將軍の元服」や「比叡山への対応」などに追われていた。結局、高麗の密使や、蒙古の三度目の使者が来るまで、国防は後回しにされた。

一二七二年二月頃、幕府に不満を持つ公卿達を抑えていた後嵯峨法皇が危篤に陥った。余命いくばくもない。鎌倉の執権北条時宗は、この事態に焦った。

法皇が崩御すれば、朝廷が動揺し、幕府内の不穏分子と結託する恐れがある。

・北条時宗派…北条政村（連署）・金沢実時・安達泰盛（妻の養父・義景の子）

・北条時輔派（異母兄、六波羅南方）…名越時章・教時兄弟（反主流派）、中御門実隆（公家）ら

二月十一日、御内人（得宗家直臣）らに焚きつけられた時宗は、鎌倉で名越時章・教時兄弟を討ち取り、続いて十五日、六波羅北方の北条義宗に時輔を討ち取らせた。

しかし、当初、名越兄弟は「捕縛」する予定であった。

時宗の行動は、果敢などと言う聞こえの良いものではない。政治経験の少ない者のとる、指導者にあるまじき独断専行であった。

北条は、鎌倉幕府の第一の「実力者」に過ぎない。単に強いだけ。威徳によって立つ將軍とは異質の存在である。だからこそ、北条が鎌倉に君臨するためには、幅広い御家人層の支持が必要であった。

時宗の独断は、この現実を無視したものといえよう。

連署北条政村は、その事を骨の髄まで理解していた。

時宗が暴発した十一日、騒ぎを知った政村は、即座に次の法令を発した。

『今自以後、有蒙御勘当輩之時、追討使蒙仰不相向之外、無左右於馳向之輩者、可被処重科之由、普可令相触御家人等給之状、依仰執達如件』

（『追加法』第四四八条・『中世法制史料集』第一卷「鎌倉幕府法」二二一頁）

“以後、謀反人が現れた際、將軍の命令もなく動いた者は、「例外なく」厳罰に処す”

例外なく。つまり、執権とて、独断専行にはしまった場合は断固とした対応をとる、と宣言したのである。

老人の睨みに鎌倉は震え上がり、武力衝突が生じたにもかかわらず、鎌倉は間もなく沈静化した。

当時、鎌倉の人々は、時宗以上に連署政村を恐れたようである。

孫のような若執権が起こした、軽はずみな動揺を抑えた政村は、しかし、この機を十全に利用した。

六波羅にいる不穏分子、時輔への肅清を止めなかったのである。長年、政争を生き延びてきた老人の、凄みといえる。

そして、騒動の処分に際しては、安達泰盛らの意見を用いた。泰盛が政権の次代を担う実力者であり、御家人達から信頼を集めていたからである。

かくして、時章の誅殺は誤りだったと結論づけられた。

『尾張入道見西（時章）、遠江守時誅せらる。但し、見西その咎無』（鎌倉年代記裏書）

“名越時章と教時は誅殺された。しかし、時章には何の罪もなかった”

時章に咎がない以上、これを討った御内人らは、単なる「謀反人」という事になる。時章を討った者らは斬首に処され、教時を討った者らには何の恩賞も与えられなかった。

つまり、時宗を焚きつけた御内人（時宗直臣）らは、見事にその頭を抑えつけられたのである。

しかし、時章がつとめた筑後・肥後・大隈の守護職は、何故か名越には返されず、分配され、大友・少弐（間もなく泰盛）・三浦輩名頼連（安達派）に与えられた。いずれも有力御家人である。

結果として、時宗政権は、去就が不透明であった反主流派を完全に排除したかたちになり、しかも蒙古侵攻時の最前線を、御家人達が担う事が決定された。騒動の経緯を鑑みて、おおよそ考えがたい好都合な結果が、政権に実現した。

この二月騒動で、若き日の時宗は、貴重な事を二つ学んだ。一つ、政治とは流血を防ぐために存在する。二つ、一方で、意に染まぬ流血すらも利用し尽くすのが政治である。

それを教えたのは、一族長老の北条政村であった。

【後嵯峨法皇の死】

『御心に仕うまつり、いささかも、いでやとうち思さるる一ふしもなく』（増鏡）

“後嵯峨院の御心のままに振舞い、異を唱える様子は、いささかも見えない”

一体どの貴族の事だと言う記述だが、後深草上皇の事である。退位後の後深草は、ひたすら影のごとく父に従った。隠忍自重。弟の亀山が天皇で、その子が皇太子になろうとも、その姿勢は変わらなかった。

このような姿は、周囲から見れば奇妙に映ったかもしれない。なぜなら後深草は、その気になれば、政治的立場を強硬に主張できる力を持っていたからである。

後深草は、一二六七年に後鳥羽上皇の娘、宣陽門院から、大莊園「長講堂領」を相続している。宣陽門院は、後嵯峨政權にあって、その経済力を背景に第三勢力を形成した女性である。従って、彼女の「猶子」（その人の財産を相続するが、実の親との関係も変えない養子のこと）となった後深草も、それができた筈なのだ。

強硬策をとらなかったのは、父への畏れのためだけではなかったと思われる。

『御腰などのあやしくわたらせ給ふ』

“腰が奇妙に曲がっておられた”

後深草は、幼少期には腰が曲がり、室内で女官達と大人しく遊ぶ事が多かった。

そのため、長じて温厚な人物に育った。側近くに仕え、子供も産んだ女官“二条”の著作『とはずがたり』によると、言葉遣いも女性的だったという。

但し、ただのお人好しではなく、政治感覚に富み、執念深かったともいう。

なお、成長後は腰もある程度治ったのか、時折蹴鞠などの運動に興じている。

しかし、深酒に及んだ宴席の後や、精神的に疲れた時には、二条に腰を揉んでもらっている。どうやら、完治はしていなかったようだ。（余談となるが、弟の亀山天皇は、この時点で鳥羽法皇の遺産「八条院領」を受け継ぐ予定だった。しかし、莊園を管理する安嘉門院が、姪の室町院に譲り状を書いたため、彼女と分割するはめになり、後に政治問題となった。）

一二七二年二月十七日、後深草が影のごとく仕える、父後嵯峨法

皇が崩御した（五十三歳）。

朝廷に君臨すること三十年。幕府との協調に努め、一時代を築いた人物の死だった。

『なき御後まで、人のなびき仕うまつれる様、来し方もためしなき程なり』

“お亡くなりになった後も、廷臣達がなびき従う様子は、前例のない程だった”

おそらく、朝廷にとって、最後の幸福な時代が終わりを遂げた。

【御素意】

後嵯峨法皇の死を乗り越えた貴族達は、改めて深刻な問題に向き合わざるを得なくなった。

法皇は、後継者を指名していない。後継者は後深草上皇か、龜山天皇か。

この問題は、法皇の生前から取沙汰されており、廷臣は既に二派に別れつつあった。

『院方・内方と人の心々もひき分かるる』（増鏡）

“院方・帝方と、廷臣達がひき別れていった”

龜山を支持する者は、現政権の維持を唱えた。

後深草を支持する者は、その皇子を皇太子にせよと主張した。

困った朝廷は、幕府に判断を仰いだ。しかし、幕府はこの時、二月騒動の始末に掛かりきりである。それどころではなかった。亡き法皇への信頼もあり、幕府は、“この時”朝廷に介入するのを控えた。

そして、このような時、日本では女性が表に引っ張り出される。

幕府は、後深草と龜山の母親である大宮院に、その判断を委ねた。

大宮院は、こう応えたという。

『先院の御素意は当今にまします』（神皇正統記）

“亡き後嵯峨院の「御素意」は、龜山天皇にありました”

「御素意」。さしずめ、「本音」という意味だろうか。この良く分からぬ一言で、龜山政権の存続が決まった。しかし、そもそも、そんなものがあつたのだろうか。

亡くなる前の後嵯峨法皇の行動を列举すると。

1…生前に後継者の指名は行っていない。幕府への協調姿勢を最期まで貫いて、皇位に下手な意思を示さない事が朝廷の利益になると考えたようである。

2…『十三日の夜よりは、物など仰せらるることもいたくなかりし』（とはずがたり）

“二月十三日夜から、昏睡していらした（二月騒動を認識できる状態ではなかった）”

3…『御かくれの折、構えて御覧じはぐくみ参らせられよと申され』
“亡くなる前に、構えて息子後深草をよく後見してくれ、と鷹司兼平に言った”

一方で、昏睡する前に、鷹司兼平に後深草の後見を頼んでいたようである。

兼平は、藤原の氏長者で、既に摂政・関白・太政大臣を歴任している。

このような重要人物に、3の言動をとっている後嵯峨が、後深草をただ冷遇していたとは考え難い。

後深草にも「御素意は自分にあつた」と言い張る余地があつた。

こうした曖昧さが龜山政権の致命的な弱点となつた。そして、これが百年以上も尾を引いた。

【脱線一・粥杖事件】

宮中では、毎年一月十五日は「粥杖の日」である。この日に“粥を煮た木”で尻を打たれた女官は男子を産むとされ、当日には粥杖から逃げ回る女官の姿が見られた。

一二七五年一月十五日、後深草上皇の御所でも、この行事は行われた。

この行事。通常、女官の尻を打つ役は、上皇である。

しかし、この年の上皇は、戯れに公卿らに女官を打たせた。

女官達が逃げる様子に上皇はご満悦だった。しかし、女官達はこの屈辱を忘れなかった。

三日後の十八日、朝食を終えて御所の廊下を歩く上皇は異変に気付いた。

『など、これほど常の御所には人影もせぬぞ』（とはずがたり）

“どうして、今日の御所には女官の姿が見えんのだ”

すると、「末の間」から声がする。

あの声は、東の御方と二条か（共に後宮を彩った）。

しかし、上皇が部屋に足を踏み入れても、二人の姿は見えない。

上皇は途方に暮れた。

その時。背後で息を殺していた東の御方が、突如上皇をはがい締めにした。

驚く上皇に対し、更に、“粥杖”を手にした二条が立塞がった。

『あなかなしや、人やある、人やある』

“ああ何てことを、誰かおらんか、誰かおらんか”

その声に、北畠師親が馳せ参じようとした。

しかし、渡り廊下は女官真清水に塞がれ、その手にも粥杖が握られている。

これを見とめるや、師親はそそくさと逃げて行った。

『思ふさまに打ち参らせぬ』

“（その後、）気が済むまで院を打って差し上げました”
かくして、師親に見捨てられた上皇は、二条に気が済むまで打ちすえられた。

『昔の朝敵の人々も、これほどの不思議は現ぜず候』

”昔の朝敵の人々でも、これほどの珍事は起こしませんでしたなあ”
夕食時、上皇に恨み言を言われた師親らは、そう応じた。

「この罪をどうするか協議しましょう」「罪は親類にも及びましようか」「しかし、新年早々、流罪にするのも面倒だ」公卿らは面白がり、冗談半分で勝手な事を口々に言った。

あるいはこうも言えるかもしれない。貴族達は、後深草上皇が暴君ではないと分かっていた、と。

結局、二条の縁者らが「贖い（つぐない）」をする事になった。

二十日、二条の祖父四条隆親が太刀・小袖を周囲に配った。

翌日は、叔父四条隆顕。さらに、親類の隆へん僧正が、出家の身でありながら、”罰の一環として”引き出物の中にあつた魚を、包丁で裁かされた。

こののち、二条の愛人であつた西園寺実兼も、「贖い」に巻き込まれた。

「贖い」を面白がつた上皇によって、対象者は際限なく広げられていったのである。

もともと、後深草上皇は悪ふざけが好きな人物であつた。

『花園天皇宸記』という記録にも、伝聞話として「上皇が酒席で乱舞した」と記している。上皇の欠点は、悪ふざけを始めた際、限度を忘れるところにあつた。

最後に巻き込まれた、久我の尼という女性などは、さすがにあきれ、「あの子は御所で育ちました。悪戯者に育つたのは院の御不覚です」と、にべもなく贖いを拒否した。

院の御不覚。つまり、騒動の一番の原因は上皇にある、と言うのである。

これには上皇も仰天した。

『とは何ごとぞ。わが御身の訴訟にて贖はせられて、また御所に御贖ひあるべきか』

“とは何じゃ。わしの訴訟で償いをさせたのに、今度はわし自身が償いをするのか”

しかし、ここで面白いのは、上皇が、そのあと「贖い」をした事であろう。

公卿らには太刀が、女官らには衣が下された。

衣の方が、太刀よりも上等品である。つまりは、女官たちの方が、良い物をもらえた。この事から、上皇が、「粥杖の日」に女官たちにした悪戯を反省していた事が窺える。

上皇は、間接的に、女官たちに詫びたのである。

持明院統の祖、後深草上皇は、このような一面を持った。

【両統迭立】

一二七三年五月、連署北条政村が、六十九歳で亡くなった。

政村の政治歴は長い。若い頃は、北条泰時と執権の座を巡って対立した事もある。

しかし、泰時に許された後は、歴代執権を支え、北条一門の柱となっていた。

京の貴族すら、政村を「東方遺老」と呼び、畏れ敬ったという。

政村の死後、次の連署塩田義政が選ばれるまで、二ヵ月の時間が掛かった。

これは、政村を失った政権で動揺が起きた事を示す。

その結果、政権内で二つの勢力が台頭した。

安達泰盛（時宗の妻の養父）と内管領（御内人筆頭）平頼綱である。

一二七四年一月、京では、後宇多天皇が即位し、父亀山上皇が院政を開始した。

十月、蒙古が九州に侵攻している（文永の役）。

翌十一月、蒙古の脅威を実感した幕府は、安芸の武田信時に重大な指令を発した。

『国中の地頭御家人ならびに本所領家一円地の住人等を相催し、禦戦せしむべし』

（東寺百合文書・ヨ函・文永十一年十一月一日関東御教書）

“国中の地頭・御家人・「本所領家一円の住人達」を動員し、防戦せよ”

蒙古が攻めてきた時には、幕府が治めない本所一円地（貴族・寺社の土地）からも武士を動員せよというのである。これは、朝廷側から見れば、支配圏の浸食であった。

だが、亀山上皇は、敢えてこれらを容認した。国防のための、“高度な政治的判断”である。

しかし、荘園領主である貴族達は、亀山の対応に不満を持った。

一二七五年秋頃、趨勢を見極めた後深草上皇が、側近らと共に出家の準備を始めた。

『とりわけむつまじゅう仕まつる人、三、四人ばかり御供仕まつるべき用意す』（増鏡）

”特に、側近くにお仕えしている者、三・四人ほどが、院と共に出家しようとした”

これは、「皇子熙仁親王を皇太子にしないなら、御所全員で出家する」という抗議行動であった。

後深草は、弟亀山のように、政務に堪能な指導者ではない。

しかし、その時々、政治情勢を読み、望む結果を引き出す手腕に関しては、天才的なものがあつた。

今回の騒ぎで後深草が利用したのは、「本所一円地からの動員」を認めた亀山に対する廷臣達の不満、安達派（亀山と懇意）と御内人の緊張、である。

―騒ぎを起こせば、安達泰盛への牽制として、御内人らはこちらの支持にまわる。

おそらく、執権北条時宗は、御内人らの意見を看過できまい―

京の騒ぎを聞いた時宗は、案の定、強硬策を避け、熙仁を皇太子にするよう亀山に上奏した。

『いかでか忽ちに名残なくはものし給うべき。いと怠々しきわざなり』

“後深草院の子孫が皇統から離れていくなど、あつてはなりません”幕府の意向に鷹司兼平らが賛同する中、十一月熙仁親王が皇太子となった。

後深草の持明院統、亀山の大覚寺統。いわゆる「両統迭立」のはじまりであつた。

【雪解け】

両統迭立が始まつた朝廷は、今や喜劇の舞台と化しつつあつた。貴族達は、保身のため、今日は後深草上皇に伺候し、明日は亀山上皇に伺候した。

その姿は、さながら道化であつた。

一二七五年十一月、父帝の死後、仲違いしていた母大宮院と後深草が、珍しく対面した。

『今宵は珍しくなん。心とけてあそばせ給へ』（増鏡）

”今宵は珍しい。どうぞ、楽しんであそばせませ”

などと、大宮院が後深草に語りかけ、宴がはじまる。名目は、伊勢に下向していた齋宮（後深草の異母妹）の帰京を祝う会。権大納言西園寺実兼らがこれに相伴した。

宴席の雰囲気は和やかで、双方にこやかであったが、実兼達が飲む酒は、何故か美味くなかった。

それでも、後深草が今様を謡ったりして、座が盛り上がってきた頃、大宮院曰く。

『天子には父母なしと申すなれど、十善の床を踏み給ふも、いやしき身の宮仕ひなりき。一言報い給ふべうや』

“天子に父母はいないと世間では申すそうですが、あなたが今あるのも、卑しい身の私が後嵯峨院にお仕えしたからです。もう一声謡ってくださいな”

父後嵯峨法皇が亡くなった時、母大宮院は、後深草ではなく弟亀山を後継者に支持した。

後深草と母大宮院の仲は、それ以来、冷え切っている。

そのため、大宮院の言葉に、座の歓声は掻き消え、貴族達は凍りついた。

『人々目をくはせつつ忍びてつきしろう』

“実兼達は、慌てて互いに目配せし、次々に大宮院の言葉に追従した”

今夜の酒は、とうてい酔えそうになかった。

また、亀山と後深草が、同じ牛車に乗って出かける姿も見られるようになった。

『御仲快からぬ事、悪しく東ざまに思い参らせたるといふ事聞えて』（とはずがたり）

“（但しそれは、）二人の不仲に幕府が難色を示しているからでした”

そのため、宴席などでの二人の遣り取りは、何かと周囲の目を気にしたものが多い。

『故院の御時、定めおかれし上は、今更にやは』（増鏡）

“後嵯峨院の時に、（兄君が）上座と定めているのに、今更対座などとは”

『朱雀院の行幸には、あるじの座をこそなほされ侍りけるに』

“（源氏物語の）御幸の場面では、主人（亀山）の座を対座に直したものだ”

そして、こうした状況に焦りを募らせたのが、亀山であった。

朝廷指導者として、実績を上げなければ、いつ兄に地位を奪われるか分からない。

亀山は、自ら評定（会議）を積極的に主宰し、政務に勤しんだ。兄と結び付いた関白鷹司兼平が権威を強化した事にもめげず、亀山は「治天の君」（朝廷指導者）たる自らに貴族達を屈伏させ、権力の掌握を推し進めていくのである。

後世、亀山は、朝廷改革を進めた指導者として記憶されている。

【建治年間の幕府】

一二七六年、高麗への出兵計画が中止となった。他にやるべき事が山ほどあったからである。

各領主に軍役を課し、兵糧・兵船を確保し、「文永の役」の戦功者に恩賞を与えなければならぬ。

安達泰盛（時宗妻の養父・）が御恩奉行として活躍したのも、この頃である。

建治年間、幕府には源氏将軍が君臨する。これは惟康王（【新たな時代】参照）が、源氏姓を賜り臣下となったためである。安達・足利ら、源氏一門の御家人は、これを喜んだ。

執権北条時宗の狙いも、まさにそこにあった。この頃、幕府には連署（副執権）が置かれていない。

一門衆が連署を巡って対立し、遂には前連署塩田義政が、領地に引っ込んでしまったからである。

期せずして、時宗の手には、全ての権力が集まった。

だが、時宗はこれを喜ばなかった。強大すぎる権力は、却って大きな災いを招く。

政村に叱責された記憶の残る二月騒動を、時宗は忘れなかった。

自分は、父時頼のように、將軍を敬い、一門・御家人からも慕われる執権になりたい。

“鎌倉時代で最も生真面目な独裁者”の誕生であった。

海外からは、蒙古が南宋を滅ぼしつつあるという情報が、流れてくる。

モンゴル高原の遊牧民。中央アジアの交易商。イスラム商人の造船技術。そして、世界経済を牽引した南宋。それらを一手に集めつつある蒙古に対して、どう向き合うか。

ユーラシア大陸統一のために従うか。それとも高麗、南宋、東南アジア諸国、琉球、カラフト・アイヌのように抗うか。それは、執権一人の手で、扱える問題ではなかった。

だから時宗は、自らの政権を、国を纏める政権に育て、蒙古に対処しようとした。

そのためには皆の団結が要る。「源氏將軍」を奉じる必要があったのである。

時宗は、安達泰盛と平頼綱（内管領・直臣筆頭）の対立をよく抑え、次々と蒙古に対する布石を打った。一二七七年、時宗は北条時村（故政村の子・父譲りの手腕）を六波羅に赴任させている。これは、六波羅を蒙古対策の司令塔として成長させる事が目的だった。

時宗の努力は、まもなく実を結んだ。

まず、六波羅に赴任した時村は、さっそく現地で父譲りの手腕を

發揮し、六波羅を「単なる出先機関」から、「西国を裁く一大機関」へと急速に整備していった。

そして、九州で、目に見える蒙古対策が始まったのである。

『異国警護の間要害石築地の事。高麗発向の輩の他、奉行の国中に課し』

（『深江文書』建治二年三月十日少弐経資石築地役催促状）

“異国の襲来に備えて石築地（防壁）を整備し、また高麗を攻めるため、軍役を課す”

即ち、北九州・関門海峡に、大軍勢が集められた。

一二七九年二月、がい山の戦いで、南宋が遂に、「蒙古」こと、大元帝国に滅ぼされた。

【治部少輔広橋兼光の多忙な日々】

一二七九年二月二日は晴れだった。その日の夜、『勘仲記』を記した広橋兼光は、関白鷹司兼平邸に参上していた。兼平に贈り物をする武士がいたからである。

『泰盛朝臣、御馬二疋・御劔一腰・砂金五十両、予に付けて進入』

（勘仲記、以下同様）

“安達泰盛が、馬と劔と砂金を私（兼光）に託し、殿下に進上した”
兼平は、泰盛からの名馬の贈呈を喜んだが、劔と砂金は舍人に返させた。

泰盛は、故後嵯峨法皇から信用され、京都政界で顔がきいた。また、亀山上皇とも懇意だったといわれている。ならば、京に來た泰盛は、何故、亀山と仲の悪い鷹司兼平とこんな遣り取りをしているのだろう。何か魂胆があったのだろうか。

七月二十五日も晴れだった。この日、亀山上皇のいる仙洞御所で評定があった。

関東經由で、南宋からの書状が届いたからである。

『宋朝、蒙古の為にすでに打ち取らる』

それは、南宋の旧臣による、国の滅亡を伝える書状であった。その日の会議は紛糾し、書状への見解は終に纏まらなかった。

しかし、後日、他国の臣下の書状など、取り上げない事が決められた。

朝廷は、「書状に対して鈍感だった」のではなく、「鈍感を装った」のである。

九月三十日は雨だった。その日、広橋兼光のもとに、内裏から女房奉書が到来した。

奉書を読んだ兼光は仰天した。

『狂人常御所に推参す』

“狂人が御所に押し入った”

『北門より劔を抜き手に堤み推参し、馬道立部をり破り、次いで第に推参』

“（警護がない隙を突いて、）抜き身刀を手に、北門から御所に押し入った。

そして、『馬道立部』を破壊し、ついで建物にあがりこんだ“

それにしても、無用心である。しかし、これが鎌倉時代の御所警固の実態であった。

狂人は風呂場を経由した後、更に、後宇多天皇がいる常御所にも潜入した。

『主上、御屏風の傍らに隠れ御す』

“帝は、屏風の後ろに隠れておられた”

御年十二歳の天皇にとっては、一生忘れえない体験だっただろう。天皇が、狂人に怯えて物陰で息を殺すなど、通常ありえる話ではない。

しかし、この事件には何の背後関係もなく、関白も首をかしげている。

あの狂人は一体何だったのだろうか。

【脱線二・仏光国師は一喝が好き】

祖元の回答を聞いた北条時宗は、思わず師を見つめた。

通詞が、通訳を間違えたのかと思ったのである。

しかし、祖元はいつもと変わらぬ様子で、言葉を続ける。

『須らく當に放下すべし』（仏光国師語録・卷七「太守道を問うに答える法語」）

“その公案を捨てて下さい”

祖元が鎌倉に来て間もない頃の、某日の出来事である。

祖元は、日本からの要請を受け、「蒙古」から来日した僧である。臨済宗の僧として、日本での、禅宗興隆を期待されていた。

だが、この祖元。わざわざ荒海を越えて日本に来てくれたもののに、終世日本語を話さなかった。やむなく、時宗は、通詞を介して、祖元と話をしている。

そのためであろうか、時宗が座禅を組んだ時、祖元が喝を入れる相手は「通詞」であった。

時宗は首をかしげる。何故、自分を叩かない。遠慮しているのか。

しかし、祖元は、時宗に今までついたどの僧よりも厳しい師であった。

蒙古兵に切られそうになった経験を持つ祖元は（本人は「一喝して追い払った」と言い張っている）、時宗の心にある蒙古への恐れを見ぬき、しばしば、時宗を一喝したのである。

そして今回は、『公案』に悩む自分に対し、あろう事か「捨てろ」と言った。

「公案」とは、悟りの境地に辿り着くため、師から与えられる「問い」である。

これを一つ解けば、一步悟りに近づく事ができた。

ただし、この公案。拘泥し過ぎれば他が疎かになるという弊害があった。

鎌倉時代の禅宗はこの弊に陥りがちだったという。

特に、時宗のような真面目な人物は、その見本となっていた。

『反て毒薬』

“（解けない公案に捉われると）却って、毒薬となります”

捨てる。それは、父時頼を失って以来、ずっと、一身に重圧を引き受けてきた時宗にと

って、天地が引っ繰り返るような視点だった。そんな考え方もあったのか。

こうした遣り取りが続くうち、いつしか時宗は祖元を師父と慕うようになった。

独裁者となり、孤独に苦しむ時宗は、幕府内には見出せなかった知己をここに得たのである。

この祖元の仏光派が、のちに夢窓疎石を排出し、室町時代に五山の主流派となる。

元の侵略が生んだ、出会いであった。

【弘安の役】

一二八一年、蒙古軍が再び九州に攻めてきた。文永の役から数年。防衛体制は既に整っている。北九州に武士が集う中、朝廷も慌しくなった。

『本院・新院は東に御下りあるべし。内・春宮は京にわたらせ給ひて、東武士ども上りてさぶらふべし』（増鏡）

“いざとなれば、後深草院と龜山院は関東に下っていたたく。帝と皇太子は京に踏み止まり、関東武士がこれをお守りするべし”

朝廷も意地を見せた。いざとなれば、天皇と皇太子が都と運命を共にするというのが、勇ましいものがある。

この時期、印象的なのは、天皇・皇太子とは違って身軽な、後深

草上皇・龜山上皇が、各地の寺院に参詣して、蒙古の殲滅を祈っている事であろう。

二人の心が奈辺にあったのか。次の龜山上皇の願文が全てを語っている。

『まことにこの日本のそこなはるべくは、御命を召すべき』

“まことに日本が滅びるようなことがあれば、この命を召し上げて下さい”

日本にとって幸いだったのは、この「弘安の役」でも、元が本腰でなかった事だろう。

元軍十四万のうち、実戦に耐えうるのは、元・高麗軍の混成部隊、「東路軍」の四万だけであった。

残り十万の「江南軍」は、旧南宋の軍隊のうち、どこにも配属でなかった弱兵である。その大半は、日本に移住させるための屯田兵であり、一部に見られるイスラム教徒兵も、おそらく戦後に造船や交易に従事させるための連中だった。

酷な話だが、フビライ・ハンにとって「江南軍」は捨石だった。

全滅して帰って来ない方が、不良兵が街からいなくなり、江南の治安が良くなるくらいである。そのため、フビライが「江南軍」の将に任命したアタガイは中級モンゴル人指揮官であり、凡そ十万の軍勢を率いる格ではなかった。ただ一人、副将の范文虎だけが遠征に意欲的だった。范文虎は南宋の降将である。この遠征を成功させて、帝国内における江南人の地位を改善したいという願いがあった。

このように、元側から見て、この遠征は精々「南宋併合の後始末の一環」だった。

とはいえ、大魚にとっては小戦でも、小魚にとっては決戦である。実働部隊である「東路軍」四万のうち、半分が水夫だとしても、戦闘員二万である。かつて、「未曾有の大軍」と称された富士川の戦いでの“平家軍四千”の五倍であった。

しかし、北九州・関門海峡に集結した日本の軍勢が、当初からこの危機を認識できていたのかは疑問である。例えば、御家人の中には所領を過少に申告し、最低限の兵しか出さない連中もいた。また、御家人でない（幕府の支配下でない）武士も参加していたが、半ば強制的に動員された連中だった。戦意旺盛なのは、恩賞獲得を期待する無足の浪人と庶子（相続する土地もない御家人の子弟）くらいであろう。

しかし、今日に伝わる「弘安の役」関係の史料は、高麗側・日本側、いずれの記録にも「日本勢の好戦的な様子」が記されている。武士達に、一体何が起きたのか。

本格的な戦いが始まったのは六月六日。「東路軍」が博多湾に出現した時である。

「東路軍」は、その途上で対馬・壱岐に侵攻し、島民を虐殺していた。

博多湾を大船団が埋め尽くす。その数、六百隻。「文永の役」をはるかに上回る数だった。

武士達は、これからいかなる戦いが始まるのかを肌で知った。

―敵はこの地を奪おうとしている―

石築地（防壁）を突破されれば、領地が蹂躪され、妻子・一族が殺される。

今日、「弘安の役」に参加した武士の多くが、九州に領地を持っていた事が指摘されている。

戦場に立つ武士達が、蒙古の大軍勢を目の当たりにした瞬間、この戦いは、“存亡をかけた戦い”へと様相を変えたのである。日頃の小競り合いとは違う決戦に直面し、武士達は、自分たちが「筑前の住人」や「薩摩の住人」であるという以前に、「日本人」である事に気がついた。

「日本人」へと覚醒したのである。

これは絵空事ではなく、この「元寇」を境に、書状や文書の中で「日本」という言葉が急激に使われ始めている事が、多くの研究者によって指摘されている。

武士達は、震えを抑え、矢をつがえていく。
最初の矢が放たれた。

夜になって、敵の攻撃は止んだ。しかし、小船を用意し、次々と蒙古軍に夜襲をかけに行く者が現れた。七日夜には、伊予の河野通有（九州に領地）が、敵船に乗り移り、指揮官を生け捕っている。犠牲を厭わず、捨て身の攻撃に出る者が後を絶たない。

「東路軍」は志賀島にも上陸した。

八日、豊後の大友頼泰率いる軍勢がこれに喰らい付く。更に、安達盛宗（泰盛の子、現地で代官）率いる肥後の軍勢もこれに加勢した。『日本兵突進し、官軍潰え、茶丘馬を棄てて走ぐ』（「高麗史」・卷一百四・金方慶伝）

“日本兵が突撃をしてきた。高麗軍は崩れ、將軍洪茶丘は馬を棄てて逃げた”

『王万戸復たこれを横激し、五十余級を斬る。日本兵すなわち退き』
“將軍王万戸がこれを横撃し、五十余の首を取った。これによって日本兵を退けた”

『翌日また戦いて敗績す』

“翌日また戦ったが、今度は元・高麗側が敗れた”

「東路軍」の狙いは、石築地（博多湾の防壁）を迂回して志賀島を突破し、一気に大宰府を突く事にあった。しかし、その意図は挫かれ、ここに「東路軍」は博多湾周辺での立ち往生を余儀なくされた。
「東路軍」は体制を立て直すため、やむなく壱岐に後退した。

「東路軍」は、壱岐で「江南軍」の到着を待ち、数に物を言わせて

勝負を決めるつもりだった。

しかし、合流予定日である十五日を過ぎても、「江南軍」は到着しない。

『今南軍至らず、我軍先に至りて数戦す。船腐り糧尽く。それ將に如何せんとす』

“今、江南軍は到着せず、我々は先に戦場に着き、戦端を開いてしまった。

船は腐り、兵糧も残り少ない。この事態をどうすればよい”

しかし、高麗の將軍金方慶は答えなかった。

十日後、また同様の意見が出た。しかし、金方慶はこう言い放ったという。

『今一月の糧尚在り。南軍の来るを俟ち、合に攻めて必ず之を滅ぼすべし』

“まだ一カ月分の兵糧が残っている。江南軍の到着を待ち、合流して敵を滅ぼすのだ”

おそらく撤退を示唆したのは、洪茶丘ら元の將軍である。

洪茶丘は、現在の瀋陽（中国の東北地方）に割拠する高麗降民の指導者であった。

遠征前、洪茶丘は「金方慶らに叛意あり」とフビライに讒言し、高麗を窮地に陥れていた。高麗が、今回の遠征で先鋒を買って出ざるを得なかったのは、この事情による。

金方慶は退けなかった。退けば、フビライが高麗への疑念を強める。

七月初旬、ようやく、「東路軍」と「江南軍」は平戸付近の沖で合流した。規模としては、兵力十四万・軍船五千隻の大軍勢となったわけである。しかし、金方慶は「江南軍」の実態を知り愕然とした。これが、援軍だというのか。烏合の衆ではないか。

「元軍」は再編成に手間取り、東進を再開する頃には、七月の下旬となっていた。

そして、ここで、「元軍」の船団は暴雨風に出くわす。

『大風に値い、蛮軍皆溺死す』

閏七月一日、「元軍」は大打撃を受けた。博多湾は、溺死者の屍で埋め尽くされたという。

こうして、「日本」は残った。

敗走する蒙古軍に対して、猛烈な追撃戦が始まった。

後世、この追撃戦を研究する者は、常に首をひねる事になる。

―後方からの、追撃を命じる文書が一枚も見つからないのは、一体どうしてだ―

つまるところ、この追撃戦は前線に立つ武士達の判断であり、彼らは猛り狂っていた。

このような追撃戦が重ねられる九日、執権北条時宗は、朝廷に「高麗まで追撃する可能性もあるので、今後も、貴族・寺社領の住人を動員したい」と打診した。

これを受けて、蔵人弁経俊は宣旨の手続きをした。しかし二十一日、京に蒙古軍壊滅の報が伝わった。そのため、幕府の要請で、宣旨の日付が閏七月“九日”に修正された。

幕府は、宣旨が「有事の際に」発行された事にして、後日の反発に備えたのである。

一方、遠征軍壊滅の報に触れたフビライは、ようやく事態の深刻さを認識した。帝国の威信をかけ、三度目の遠征を企画する。今度こそ、日本存亡の危機であった。

しかし、一二八七年に東方三王家の反乱が起こる。モンゴル帝国は分裂し、対応に迫られた高齢のフビライは、一二九三年に自らの余命を使い果たした。

『むまもいられずして、ゐてきのなかにかけいり、みちやすつつかさりせは、しぬへかりしみなり』（蒙古襲来絵詞）

“馬を射られず、そのまま敵中に駆け入り、白石通泰殿が駆けつけなければ、死んでいた”

一二七四年の「文永の役」において、肥後国御家人竹崎季長は、僅か数騎の配下と共に蒙古軍に突撃した。それは将に先駆けの功だった。

しかし、幕府から下された感状には、その事が一切記されていないかった。

「季長主従が傷を負った」とだけある。季長はいたたまれない気持ちになった。

自分達は、ただ深手を負ったのではない。先駆けをしたのだ。幕府への注進（報告）に漏れたのではないか。

一二七五年六月三日、季長は中間の弥二郎と又二郎だけを連れ、鎌倉へ旅立った。見送る親族は誰一人いない。皆、制止を聞かなかった季長を見捨てたのだ。所領を持たない季長には、僅かな路銀しか用意できない。しかも、その路銀すら、馬と鞍を売って工面した。八月十二日、季長は鎌倉に着いた。まず、鶴岡八幡宮に詣で、武運長久を祈る。

『ちうけん一人はかりあひくして』

従う中間は、一人しかいない。一人は、道中で逃げたのだろう。しかし、季長は、蒙古襲来絵詞の中で、逃げた中間がどちらなのかを敢えて記していない。

竹崎季長とは、そういう人だった。

二ヵ月経った。季長の訴えを聞く奉行は一人も現れなかった。貧乏御家人の訴えなどに、誰が耳を貸すというのか。面会すら、満足にしてもらえなかった。

十月三日、思い余った季長は、御恩奉行安達泰盛に対して庭中（直訴）に及んだ。泰盛は季長の言葉にも耳を傾けてくれた。そして一通り聞き終えた後、的確で無駄のない尋問を開始した。

「注進の内容も知らないのに、何故それに漏れたと申す」

「小式経資から、先駆けの事は報告するので感状に載るだろうと聞きました、載らなかつたからです」

「もし不審が残るのでしたら、小式景資（経資の弟・証人）へ御教書でお訊ね下さい」

「御教書で問い合わせなど、先例がない」

「あるとも思えません」「これは異なることを」「異国との合戦に、先例はありません」

「仰せはもつともだが、訴訟は先例がなければ成立しない」

泰盛の反応は、冷淡とはいえない。現代の裁判でも、手続きは重んじられている。

しかし、泰盛はそう言いながらも、季長の発言を、決して遮らなかつた。

『ちきにくゑんしやうをかふり候はんと申せうに候はす。さきをし候事御たつねをかうふてきよたんを申あけ候はは、くんこうをすてられて、きひをめさるへく候、しつしやうに候ははけんさんにあかりいり候て、かせんのいさみをなし候はむ申あけ候』

“私は、すぐに恩賞をいただこうと直訴に及んだわけではありません。

「先駆け」の事を景資に訊ね、嘘だと判明したら、勲功を捨てられ、首を刎ねていただいて結構です。事実と判明したら、功を披露していただき、合戦の勇としたいと申しているのです”

そう繰り返す季長の言葉に、偽りが無い事を見抜いたのだ。竹崎季長という一途な御家人をここまで思い詰めさせた原因は、他ならぬ幕府にある。泰盛はそれを理解していた。

それに、嘘と分かれば首を刎ねてくれと言う、この男を、泰盛は気に入った。

『御かせんの事うけ給はり候ぬ、けんさんにいれ申へく候』

“御合戦の事は承知した。見参に入れよう”

その晩だろうか、泰盛は、大勢の家来達がいる席で季長の事を話し、こう評した。

『きいのこハものな』

“奇異の強者である”

『今日の御大事にもかけつとおほゆる』

“後日の大事にも、駆け付けるだろう”

四日、泰盛に仕える同郷の者からこれを聞いた季長は、この言葉を生涯の誇りとした。

十一月一日、季長は、泰盛から御下文（新領の安堵状）を手渡された。恩賞百二十名の中、直に手渡されたのは季長一人だった。帰国する季長に、泰盛は栗毛馬を贈った。

一二八一年六月、「弘安の役」。季長は家来を志賀島に派遣し、自らは島津久長の配下達と小舟で敵船に移ろうとした。事前に、河野通有から船戦について教わっての行動だった。漕ぎ手が怖気づいて移れなかったが、季長は肥後国で一番の戦功者とされた。

そして、閏七月五日、風雨で大打撃を受けた蒙古軍への追撃が開始された。

しかし、季長には、軍船がない。このままでは、追撃に参加できぬ。焦る季長の前を、安達盛宗の旗を立てた大船が通った。しめた。季長主従は、配下と偽って、船に乗り込んだ。

だが、途中で船を降ろされた。どうする、端舟（小舟）で揺られていては後れをとるばかりだ。

すると、今度は“たかまさ”という人の船が、近くを通った。

よし。「守護殿が仰せである、船をよせられよ」。たかまさの船が近づいてきた。「守護などいいではないか。船を退けよ」「乗せていただこうと、そう申したのです」「この船には、もう余裕な

どない」

しかし、季長は手を擦り「私一人だけでも乗せてくだされ」と懇願する。

『戦場のみちならては、何事にかたかまさにあひて、こんはう候へき、めされ候へ』

“戦場の道でなければ、このたかまさに、これほどまで懇望されまい。お乗りくだされ”

こうして、一人たかまあの船に移った季長は、兜を家来に預けたままだった。

仕方なく臍当てを外し、額に結び合わせる。その様子を見るたかまさに、季長は言った。

『いのちをおしミ候てしと候とおほしめさるましく候。敵船にのりうつり候まで、と存候てし候、ふねちかつき候へは、くまてをかけたいけとりにし候とうけ給候。』

“命を惜しんでいるとは思わないで下され。敵船に乗り移るまでの事です。船が近付けば、

熊手を掛けて生け捕りにしてくると聞き及んでいます”

『いけとられ候て、異國へわたり候はむ事、しにて候はむにはおとるへく候』

“生け捕られて、異国に連れていかれる事は、討死に劣ります”

たかまさは、思わず溜息を洩らし、申し訳なさそうに季長をみた。
『ふかくつかまつりて候。野中殿はかりはのせたてまつるへく候つる物を』

“不覚を致しました。せめて、野中殿（季長の親類）だけでも共に乗せるべきでした”

たかまさは、近くにいた若党の兜を、季長に渡そうとした。

『かふとをきられ候はてうたれ給候なは、季長ゆへに、と妻子のなけかれ候へ』

“兜をかぶらなかつたせいで若党が討死したら、季長のせいだ、と

妻子が嘆くでしょう”

季長は、その申し出を丁重に断った。

しばらくして、たかまさの船は、敵の船団に追い付いた。季長は、たかまさ達と共に敵船に移り移っていく。激闘の末、みごと船の指揮官と思しき人物の首をとった。

明くる六日、季長は、軍奉行合田遠俊の仮館を訪れ、合戦の次第を報告した。

『自船候はて、一度ならすかり事のみおほせて候て、ふねふねにめされ候て、御大事にあはせ給候御事は、大まうあくの人に候』

“船もないのに、度々虚言を用いて船々を移り、追撃に加わるとは。大猛悪の人である”

遠俊はそう言って、証人になる事を快く引き受けてくれた。時に季長、三十六歳。

一二九三年二月九日、季長は蒙古襲来絵詞の奥書を執筆していた。当時、「絵詞の作成」は上流貴族や大寺院だけができる大事業である。

しかし、季長はそれを成し遂げなければならなかった。

安達泰盛が殺されたのである。

泰盛は、幕府を変えようとして、殺された。

ここ九州でも、泰盛に殉じる者たちが、絶望的な戦いをしかけ、敗れた。

いまや、幕府は御内人らの時代。内管領平頼綱の天下である。

頼綱は九州にも監視役の御内人を派遣し、御家人達の動向に対してにらみを利かせてきた。

これは、得宗家の犬頼綱が御家人達を恐れている証拠でもあった。

―頼綱は、いつ御家人達が牙をむくのかと、怯えている―

”御家人竹崎季長”は安達泰盛に殉じなかった。だから生き伸びている。

だが、泰盛の恩を忘れる日は、一日とてなかった。

あの時、親類の者すら季長を見捨てた時。

中間すら逃げ出し、八幡大菩薩に縋るしかなかった時。

泰盛だけが、話を聞いてくれた。

「奇異の強者」と称え、自分を認めてくれた。

既に、平頼綱に対する皆の怒りは静かに積もり、吹き出そうとしている。

後日の大事。泰盛の恩に報いる時は、今を置いてほかにない。

幕府は將軍と御家人のものである。

鎌倉を御内人の手から奪い返す。

『又々君の御大事あらん時は、最前にさきをかくへきなり。これをけふのことすへし』（蒙古襲来絵詞）

“私は、將軍に危機が迫る時、何度でも先頭を駆けてみせる。これを今日の誓いとする”

九州の片隅で大事業が始まった。

それは、あの蒙古襲来の時に戦場に臨んだもののふ達が遺した言葉。そして、あの安達泰盛ら堂々たる御家人達の威風を伝える絵。それらが一体となった絵巻物の作成である。

―皆が置き忘れた鎌倉武士の魂を蘇らせる―

動き始めた大事業に沿い、同郷の御家人・元寇での戦友たち。彼

らは、安達泰盛を思い出し、眠れる魂を呼び覚ました。

折しも、前年末に蒙古から久々に使者が来航し、“三度目の元寇が危ぶまれていた時期である。”

あるいは、この魂が天下を駆け巡り、鎌倉に届いたのだろうか。

四月二十二日、平頼綱が討たれた。

後世、絵詞を見た人は、泰盛と季長を武士の鑑とした。

季長の生存は、一三二四年まで確認できる。したがって七十九歳以上の長寿だった。

季長は天に愛されていたらしい。

【時宗の死】

一二八三年四月、北条業時（普音寺・極楽寺流）が長年空席だった連署に就任した。

時宗は何を思って連署を復活させたのか。おそらく、弟達の相次ぐ死が、これに関係している。

北条宗頼が一二七九年、北条宗政が一二八一年に、兄に先立っていた。

宗頼は、長門に派遣され、元寇時には時宗の分身を務めた弟である。

また、宗政は、鎌倉で長年補佐役を務めた弟である。とりわけ、宗政の死が、時宗を打ちのめしていた。

『なのめならぬ御なげきにて候』（金沢文庫古文書・四三三七号、『人物叢書北条時宗』二四六頁）

“（宗政様が亡くなった時は）尋常ではないお嘆きようでした”

時宗は、寂しくなった周囲を固める必要を感じ、連署を復活させた

と思われる。

しかし、その時宗も一二八四年四月四日に亡くなった。

二度にわたる元寇を戦い抜き、安達泰盛と平頼綱らの対立を抑えていた若き指導者は、たび重なる心労のためか、わずか三十四歳でその生涯を終えたのである。

その死に、泰盛をはじめとする上層部十数名が、一度に出家した。また、朝廷の亀山上皇は、四ヵ月間諸国の殺生を禁じた。これは異例の事であった。

この時、泰盛は「陸奥守」の位を返上し、五番引付頭人（なんと五番は、頼朝の墓の管理ができる）の地位を息子宗景に譲っている。自分の政治思想に対しても、ある程度の理解を示してくれた執権の死は、泰盛にとっても痛手だったのだろう。ただ、評定衆には留まっているので、幕政を退いた訳ではない。

時宗は三月末に倒れ、わずか数日で亡くなったという。そのため、北条一門の中には「自分こそが次代の執権・連署になれるかもしれない」と色気を見せる者も現れた。

例えば、四月十七日に六波羅北方の北条時村（故政村の子）が関東に入ろうとしたが、三河で平頼綱の命を受けた者らに止められ、京に引き返している。

しかし、安達泰盛と平頼綱。両者はともに、執権の地位を北条一門の手に渡す気など毛頭なかった。

一門を執権に就ければ、得宗家に対するわざわいとなり得たからである。

執権職を継ぐべきは、あくまで嫡子貞時とされた。若干十四歳の貞時が執権職に就くまでの数ヵ月間、幕府では、連署業時のみを置くという異例の措置が採られた。

そのため、五月三日に出された「諸国の一宮・国分寺の由緒、管

轄者、所領の調査を命じる」法令は、“連署が將軍の意を奉じる”という、妙な法令になっている。

そして、この法令を主導したのは、泰盛だった。泰盛は、仲が悪い平頼綱と協力して貞時の執権就任への布石を打ちつつも、公然と「行動」を開始したのである。

北条時宗の死によって、泰盛と頼綱を止められる者がなくなった。

【弘安德政】

一二八四年五月二十日、安達泰盛の主導で、「弘安式目三十八ヵ条」が提出された。

- 1.. 「寺社や貴族の土地に対する調査・軍役の徹底」
 - 2.. 「蒙古と戦った者の御家人への取立て・寺社の復興」
 - 3.. 「越訴（裁判のやり直し）の奨励」
- 以上の三つが、その中で謳われている。

これは、あくまで“意見状”だったが、「幕府が全国政権となる一方、新たに支配下に入る者に対して、相応の保護を行なう方針」が検討されるようになったのである。

果たして、こんな大改革が成功するのだろうか。

しかし、勝算はあった。この年、安達一門は、六名が評定衆・引付衆（幕府重臣）に名を連ねている。

評定衆・引付衆は三十名であり、北条一門ですら八名だった。

金沢顕時（娘婿・金沢実時の子）ら友好的な評定衆・引付衆を抱き込めば、勝負ができる。

泰盛五十三歳は、これを最後の好機と捉えた。

更に、同日、「関東御領の確認把握」を命じる関東御教書が出された。

「関東御領」とは將軍家直轄領の事である。しかし、当時、その大

半の運営は、地頭職をもつ得宗家が行っていた。即ち、泰盛は“得宗領の調査”に手をつけたのである。

幕府の目が届かない「領地」からの収入、海上統制を無視して全国を航海する「得宗分国の船」は、得宗家の財政を潤していた。無論、御内人らの懷も、であろう。

「將軍は全国の武士を統括する。政務は得宗がする。だからこそ、得宗家は清廉でなければならない」

泰盛の考えは、理に適っている。

だが、正論とは得てして反発を招く。

内管領（御内人筆頭）平頼綱らは、自らの収入源が暴かれる事を恐れ、これに強く反発した。

両者の対立は、六月に「関東御領の管理・決裁方法」を定める事書が発された前後から激化した。

まず、有力御家人の足利家時が自害した。家時は、泰盛や極楽寺流（塩田義政の一族）と懇意の人物だった。二十二日には、六波羅南方の北条時国が捕縛された。

そんな中、七月七日、北条貞時がようやく執権に就いた。

貞時の外祖父は安達泰盛である。だが、傳役は平頼綱だった。これで立場を強めたのは、本来陪臣（家来の家来）に過ぎない頼綱の方だろう。八月には、陰謀があったとして、北条時光が土佐に流された。

そして、十月二日、北条時国が配流先の常陸で殺された。

『打手は平左衛門尉』（平岡定海氏所蔵『東大寺別当次第』・「新・中世王権論」一九一頁）

“討ったのは、平頼綱である”

時国は、吉良満氏（足利一族・越前守護）の娘を正室とする安達派だった。

そこで、頼綱は、時国と仲の悪い北条宣時（大仏）らを抱き込んで、消したのである。

しかし、泰盛は、次々と新法令を出すのを止めない。泰盛は真の政治家だった。

【弘安の大和一国落書事件】

弘安年間、幕府は蒙古の脅威を片時も忘れる事ができなかった。少なくとも、この時点では、元のフビライ・ハンも日本への三度目の遠征を企画していたからである。

そのため、「蒙古が攻めてくる」という風説が何度も日本に伝わり、幕府指導層を動揺させた。

今なお、御家人・御内人らの「九州・西国への移住」が進められているのもこうした背景があるからである。安達泰盛の意図する「幕府の全国組織化」も、これを踏まえての事である。

一方、幕府の統制が進む西国では、この頃「悪党」の出没が問題となっていた。

一二八五年三月十六日、興福寺が「悪党と噂のある者を名指しせよ」というお触れを出した。

当時、興福寺は朝廷から大和一国の支配を認められている。このお触れは、それを尊重する幕府からの依頼によるものと思われる。

お触れに従い、次のような告発がされた。

『教信房並びに教念、僧身としてシシを殺し、また強盗をし、万の寄沙汰する身なり』

（鎌倉遺文一五五一二・海津「蒙古襲来」七八頁）

“教信房と教念は、僧なのに鹿を殺し、強盗し、他人の裁判争いに暴力で介入している”

この告発から察するに、「悪党」とは大和国内の犯罪者の事らしい。つまり、「悪党」とは強盗・山賊・海賊・博打打ちなどを指すのだろう。

当時、大和では、寺社の腐敗が問題となっていた。悪党を寺で養い、修行もせずに悪事を働く破戒僧が、後を絶たない。教信房と教念も、そうした類いなのだろう。

しかし、そうであるなら、悪党を育てたのは、他ならぬ寺社勢力ではないか。

仮に興福寺が幕府に協力したとして、悪党が根絶できるのか。そもそも、興福寺の僧兵と寺々の破戒僧に、いかほどの違いがあるというのか。この問題の根は深かった。

三度目の元寇を恐れる日本社会では、幕府や朝廷によって、統制が強められた。

結果として、地域社会の「慣習」と黙認されてきた事が、「悪」とみなされていくのである。

当然反発も強く、西国を中心に、「悪党」の活動は日を追って活発となった。

これらは、泰盛の改革の負の側面といえる。これが、次の時代への「産みの苦しみ」となるかどうかは、泰盛と平頼綱の対立の決着次第である。

執権北条貞時の耳には、相異なる二種類の意見が、ひっきりなしに入れられた。

『泰盛・頼綱なかあしくして互いに失はんとす、共に種々の讒言を成す』（保暦間記）

“泰盛と頼綱は仲が悪く、互いに相手を失脚させようとして、数々の讒言をした”

しかし、少年執権には、有効な手を打つ事ができなかった。

それどころか、この年二月には疱瘡を患い、四月初旬にも病に倒れている。何と間の悪い。

安達泰盛の勝算は狂い始めていた。甥の大仏宣時（泰盛の妹の子）が、北条時国の排除を喜び、平頼綱に接近している事など、その最たる例だろう（【弘安德政】参照）。

改革に賛同すべき人士が、めいめいの都合で動いている。不慮の事態だった。

ただ、泰盛に同調する動きも起きている。朝廷の亀山上皇であった。

亀山は、一二八五年七月に「常陸国の朝廷領の回復を命じる院宣」を発するなど、徳政を開始している。

無論、泰盛の改革に乗り遅れば朝廷が衰退するという危機意識もあったのだろう。

ではあるが、亀山と泰盛の関係は、おおむね良好だったと判断できる。

例えば、十一月一日、延暦寺が祈祷を行っている。

標的は、摂津四天王寺別当職の獲得を阻んだ「安達泰盛」だった。

事情を端的に説明すると、比叡山が四天王寺を支配下に置こうとしたが、泰盛と亀山が退けたのである。結局、前年九月、亀山は西大寺の叡尊を別当に補任している。

この叡尊は、故金沢実時に招かれて鎌倉にも滞在した僧で、幕府受けの良い人物である。

これなどは、亀山が泰盛と結びついていた傍証といえる。

しかし、亀山の援護は遅すぎた。

泰盛の周囲の掃除を済ませた（【弘安德政】参照）平頼綱は、最後の仕上げにかかろうとしていた。

十一月四日、頼綱は、日光山で祈祷を行なわせている。

祈祷を行なった源恵に対し、十万貫文の謝礼が与えられた。

更に十四日にも、祈祷を行なわせている。

この源恵は、五代將軍九条頼經の子で、將軍源惟康に近い立場の僧だった。この頃、頼綱は、泰盛と將軍周辺を切り離す事にも成功していたらしい。

更に御家人達も、心ある者を除き、多くは既得權益を失う事を恐れ、泰盛の改革に反発していた。

既に、幕府内では、泰盛の劣勢が固まりつつあったのである。

十七日、鎌倉に不穏な空気が流れた。

別荘で執務をする泰盛も、これを察知した。

『其後依世中動、塔ノ辻ノ屋方へ午時ニ被出けるニ、被参守殿云々、死者卅人、手ヲイハ十人許』（熊谷直之氏所藏梵網戒本疏日珠抄裏文書・歴史学研究会編日本史史料「2」中世一五八頁）

“泰盛は周囲の動きに身の危険を感じ、午時に塔の辻の館に向かった。

執権殿のもとに参上するためである。

しかし、（途中で襲撃を受け）死者三十人・手負い十人を出した”安達派の面々は、やむなく別荘に引き返したが、そこも間もなく包囲された。

泰盛の最期の様子を伝える記録は残っていない。しかし、結果だけは伝わっている。

即ち、名門安達一族は「ほぼ族滅された」。

安達派の人々も次々と討たれ、將軍邸からは火の手が上がった。御家人の同志討ちも少なくなかったという。

二十一日、京にはこんな奇妙な情報が届いている。

『相州□□の由、今夜飛脚京都に到来の聞候』（「蒙古襲来と徳政令」二〇一頁）

”「北条貞時は□□した」という飛脚が、今夜京都に到着した”

残画によると、“□□”には“逐電”の文字が判読できるらしい。

これが本当だとすると、貞時は何を思っただけか一時姿をくらし、頼綱を慌てさせていた事になる。

この「霜月騒動」により、有力者が数多く討たれ、更に全国で安達派が討たれた。

〈討死・自害〉鎌倉…安達一族、三浦葦名頼連、吉良満氏、伊賀景家、二階堂行景（引付衆）、南部孫二郎、大江泰広、佐々木氏清、伴野長泰ら

上野…倉賀野其重ら 武蔵…武藤氏、片山氏、河原氏ら
遠江…安達宗顕 常陸…安達重景 美作…安達景盛の子ら
信濃…伴野・小笠原一族（泰盛の母は小笠原時長の娘）

〈失脚〉宇都宮景綱（評定衆・泰盛の妹婿）・長井時秀（引付衆・泰盛の妹婿）ら

金沢顕時（評定衆・金沢実時の子・泰盛の娘婿、領地のある下総に引退）

〈没落〉足助氏（尾張）など 〈逃亡〉伴野奏房（三河へ）など
これらは、ほんの一握りである。泰盛の根拠地、上野・武蔵では五百騎が討たれた。

結局、評定衆・引付衆合わせて十二名が、何らかの形で姿を消した。

そして、九州でも、安達盛宗（泰盛の子）らが攻撃を受けた。

盛宗は、「弘安の役」以来、肥後国守護である父泰盛の代官として、九州に留まっている。

弘安徳政では、「鎮西特殊合議訴訟機関」なる機関で、九州の実務を統括していた。しかし、神社の領地を保護する政策が、御家人の不満を招き、この年九月頃には機関の停止が決定されていた。

そこに、鎌倉での騒動が伝わり、筑前守護少貳経資からの攻撃を受けたのである。

盛宗は博多で討たれた。

しかし、弘安の役で活躍した少貳景資が、博多郊外の岩門で抵抗を試みたため、合戦となった。

結局、多勢に無勢で景資は敗死したが、これを「岩門合戦」という。

一番賢明だったのは、時宗夫人の覚山志道に庇護を求めた人々であろう。

夫人は、安達泰盛の二十歳以上年下の妹であり、泰盛の養女として時宗に嫁いだ人だった。

堅物の夫から、生前一身に愛情を受けた夫人は、夫の菩提を弔って生涯を終えるつもりだった。

しかし、今回の騒動では、関係者を秘かに匿っている。

安達派に対する捜査が全国に及ぶ中でも、夫人にだけは、頼綱も手出しがでなかった。

覚山志道は、頼綱没落の日まで、長く静かな戦いを続ける事になる。

夫人が、安達宗顕の遺児時顕が成長する姿を見届けた上で他界するのは、一三〇六年の事である。

ともかくも、“幕政改革”はここに頓挫した。

【京都と鎌倉】

霜月騒動の後、平頼綱は幕政改革を否定した。もはや、二度と本所一円地の住人（幕府の支配外の武士）を御家人に取り立てようという意見が出る事はなかった。

將軍源惟康は皇籍に戻され、全国五十六カ国のうち、二十八カ国の守護職を、北条一門が占めた。

幕府は北条一門の私物と化し、“御内人の天下”となったのである。

そして、一二八八年、後宇多天皇が退位させられ、龜山上皇は政権を失った。

こうして後深草上皇は念願の政権を得た。

苦節数十年。亀山の失脚を、目の当たりにした上皇は、朝廷運営に
関して一つの結論を出していた。

「幕府と事を構えてはならない」

現に、一月二日に上洛した東使（幕府の使者）二階堂盛綱もこう
言っている。

『一、任官加爵事。理運昇進、不乱次第可被行之歟』（公衡公記）

“一、官位昇進について。昇進は、ちゃんと筋が通るように行なっ
て下さい”

『一、僧侶・女房政事口入事。一向可被停止歟』

“一、僧侶・女官の政治介入について。そんな事がないようにして
下さい”

つまり、朝廷は何もせず、無難に活動していればよい、というの
である。

この時期、関東申次の台頭が著しい。

六月、大納言西園寺実兼の娘鏡子が、伏見天皇に入内した。

大納言の娘が皇后になるなど、そうある話ではない。

実兼は、亀山上皇の失脚を機に栄達したといえる。一二九一年には、
太政大臣となった。

一二八九年四月、実兼の奔走で、伏見の皇子、胤仁親王が皇太子
となった。

後の後伏見天皇である。

ちなみに、この親王の母は鏡子ではない。実兼は、その生涯で、
多くの天皇に娘を嫁がせている。

しかし、生涯天皇の外祖父にはなっていない。

にもかかわらず、以後、独自の立場を保持したのは、それだけ非凡
だったからだろう。

九月、亀山上皇がこの情勢を見て、世の中が厭になったのか出家した。

しかし、持明院統の繁栄は止まるところを知らない。

間もなく、鎌倉の惟康親王が帰洛し、十月、代わりに久明親王が將軍となった。

この久明親王も後深草の皇子である。

こうして、天皇・皇太子・將軍の全てを持明院統が握った。これらは、内管領平頼綱の意向である。

弘安德政・霜月騒動を経て、幕府と朝廷の派閥が、強固に結びつく情勢が生まれた。

『六波羅の驛使鞭を上て鎌倉に下着。行程三ケ日。』（梅松論）

“六波羅の使いが早馬で鎌倉に下着した。行程は、三日間である”

京と鎌倉は一見遠く見えるが、早馬でたった三日。承久の乱・元寇を経た通信網強化の成果である。

鎌倉時代最後の数十年間、京と鎌倉の政治は、より密接に連動していく。

【二条、頼綱夫妻に会う】

久明親王が鎌倉に到着する前後の様子は、二条が記録している。

“二条”は大納言久我雅忠の娘で、長じて後深草上皇の御所に女官として仕えた（【後嵯峨の死】参照）。その間、皇女を出産した事もある。しかしながら、彼女の名は後世に伝わっていない。

そこで、本人はこの呼ばれ方を嫌ったらしいが、便宜上「二条」と呼んでいる。

一二八九年の時点で、二条は宮中の人ではない。

しかし、“物事が見え過ぎる”彼女のような人にとっては、案外の方が幸せだったのかもしれない。

尼になった二条は、宮中で得た人脈を活かし、この頃全国の神社仏閣を精力的に回り、三月に鎌倉に到着していた。七月、病に倒れた事もあり、鎌倉滞在は長引いていた。

十月、久明親王が鎌倉に到着する前、二条は旧知の小野殿からある頼みを受けた。

平頼綱の奥方が、東二条院（後深草の皇后・二条とは犬猿の仲）から五つ衣を贈り下されたのだが、宮中風の縫い方が分からないので、教えに来て欲しいというのである。

二条は、出家の身でわずらわしいことは嫌だと断った。だが、小野殿が、終には執権北条貞時からの書状まで持ち出してきたので、“しぶしぶ”招きに応じた。

相模守邸に着いた二条の前に、まず現れたのは夫人だった。薄青の地に、濃い紫色の糸で紅葉を織り浮かした着物を二枚重ねで羽織っていて、気位が高そうで、背丈も高い。

『かく、いみじ』（とはずがたり）

“これはまた、何とも”

二条は、その派手な衣装に、半ばあきれつつも感心した。

そうこうしていると、壮年の男が、向こうから小走りで部屋に入ってきた。

『袖短かなる白き直垂姿にて馴れ顔に添ひゐたり』

“袖が短く白い直垂姿（腕がはみ出た姿）で現れ、馴れ顔で夫人の横に座った”

どうもこの男が平頼綱らしい。

もっとまじな人物を期待した二条は、感想をこう記す。

『やつるる心地し侍りし』

何だか二条は疲れたが、それでも気を取り直して、指導に当たった。二条の適切な指導を頼綱夫妻は大いに喜び、この後、二条は貞時のお声掛かりで、將軍を迎える間の調度まで直す羽目になった。

二条がここまで歓迎されたのは、彼女が後深草上皇と深い係わりを持つ重要人物とみなされたからであろう。頼綱は、然るべき地位も持たず、幕府に君臨している。

そのきな臭さを隠すため、朝廷の権威が大いに利用されたのである。

【二条、新將軍の到着を目撃する】

時に一二七九年、鎌倉で取り調べが行なわれていた。

刈田狼藉の嫌疑（他人様の田の作物を勝手に刈った疑い）で連行されてきた駿河の百姓二十名だった。

震えおののく彼らは、そんな事実などないと主張するが、一切聞き入れられない。

やがて、取り調べを行なう平頼綱が、容疑とは関係のない事を口にしはじめた。曰く、信仰を捨てよ。

百姓達が逮捕された真の理由は、「時宗の母の領地の近くで、日蓮の教えを信仰した」事だった。

しかし、百姓達は法華宗を捨てようとしない。

これに対して、頼綱は百姓達の行動の自由を奪い、傍らにいた息子の飯沼資宗に「この者達を射よ」と命じた。泣き叫ぶ百姓達に、次々と鎗矢が射られていく。

この私刑で三人が死に、十七人が禁獄となった（弟子文帳）。

一二八九年十月、新將軍久明親王が鎌倉に到着した。

仙洞御所から、“一旦”將軍本邸のある六波羅へ移り、鎌倉へ。

京から迎えられる將軍が必ず通る道を、親王もここまで通った。

それを警護するのは飯沼資宗である。

資宗は、この頃、兄の宗綱を差し置いて、父から引き立てられてい

た。

資宗は、この事を鼻にかけ、横柄な振る舞いが見られた。

この度、久明親王を迎えに上洛する際にも、わざわざ足柄山を越える道を選んだという。

『流され人の上り給ひしあとをば通らじ』（とはずがたり）

“鎌倉を追放された惟康親王が通った道など使いたくない”

「源氏将軍」の匂いが残る人物など、頼綱らにとっては、疫病神でしかなかった。

やがて、新将軍を乗せた御輿は御所に着いた。

『御所には、当国司・足利より、みなさるべき人々は法衣なり』

”将軍の御所には、北条貞時・足利貞氏が出迎えにあがり、さるべき人々は、みな法衣姿でした”

御所で鎌倉殿を迎えたのは、執権北条貞時や足利貞氏（足利尊氏の父）らである。

二条が、貞時と並べて記す価値があると判断した、「足利」。

安達泰盛が粛清された今では、残存する数少ない有力御家人である。しかし、その足利氏でさえ、貞時から「貞」の字を貰って、半ば臣従しているのが現状だった。

新将軍を迎える儀式は、その後、数日に及んだ。

二条は、このしばらく後、資宗と交流を持ち、夜通しで和歌を詠んだりもしている。

『思ひしよりも情あるさま』

“思ったよりも情趣を解する人である”と、二条は資宗を評す。

仲良く和歌を詠む事はあっても、『思ひしよりも』という留保は外さないらしい。

後深草上皇に重宝がられ、内心怖れられてもいた、その鋭さは顕在だった。

二条がどこか辛辣に資宗を記すのは、十年前の“あの出来事”を

聞き及んでいたからかもしれない。

【浅原事件】

一二九〇年二月、後深草上皇が出家した。持明院統の繁栄に、政敵亀山の出家。

『然而。思今生之榮。彌恐來世之果』（後深草天皇宸記）

“しかし、今の栄えを思うと来世に報いがあるのでは、といよいよ不安になる”

そう思うと、長年望んだ政権運営も、軌道に乗ると何やら煩わしい。そこで後深草は引退を表明し、仏道に専心した。関白鷹司兼平も、三月三十日に出家し、引退している。

その少し前、宮中で異常な事件が発生した。

三月九日夜、浅原為頼を中心とする武士三・四人が馬で内裏に乱入したのである。

為頼らは、下級女官部屋にいた女官を問い詰めた。

『御門はいつくに御寝るぞ』（増鏡）

“帝はどこで寝ている”

蔵人康子（中務内侍日記）は、怯えた声で、「夜の御殿にいます」と答えた。

だが、これを聞いた為頼らは、何とも要領を得ない返事をした。

『いづくぞ』

“それはどこにある”

突如内裏に侵入し、帝の居所を探す暗殺者たち。

なのに、「夜の御殿」の場所すら知らない。

この愚問に、康子は、侵入者達がろくな下調べもせずこの暴挙に及んだ事を察した。

康子は、身の内で、急速に冷静さが取り戻されていくのを感じた。

―ここは、騙して、時を稼がないと―

『南殿より東北のすみ』

”それは、南殿より東北のすみにあります”

これを聞いた浅原一党は、康子をその場に置き去りにして、“南殿より東北のすみ”に向かつて行った。

もちろん、夜の御殿はそんな所にはない。

浅原一党は、康子の機転に、引っ掛かったのだった。

内裏とは、魑魅魍魎の類の多い、朝廷の中心地である。

そんな場所に生きる女官らは、帝王の政治秘書であるばかりでなく、最後の護衛でもあった。

鎧武者に凄まれたくらいで、我を忘れるような者などいない。

浅原一党の敗因は、彼女らの危機管理能力を侮った点に求められる。

一党が見当違いの所を探している間に、伏見天皇は女装して皇太子胤仁親王と共に春興殿に移る事に成功した。また、三種の神器も、女官らによって無事運び出された。

かくして、一党がようやく夜の御殿に着いた時、そこは既にもぬけの殻だった。

不幸な侵入者達には逃亡する時間も残されていなかった。

間もなく宮中護衛の侍・在京御家人らと乱闘になり、追い詰められた浅原は伏見の寝所で自害した。

この事件は、武士が天皇の暗殺を企て宮中に乱入したという異常な事件である。

『甲斐國小笠原一族に。源為頼と云者あり。』（保暦間記）

『いつくにても、見合はん所にて可誅由、諸国へ触らる』

”甲斐國小笠原氏の一族に浅原為頼という者がいる。

いずこでも、「見つけ次第討て」と幕府から追討を受けていた”

為頼が追討を受けていた原因は、おそらく小笠原一族の多くが犠牲となった霜月騒動であろう。そのため、浅原の背後には、平頼綱・後深草法皇らに敵対する黒幕がいるのではないかという疑いが生じた。

幕府の捜査で様々な事実が浮かび上がった。

1…浅原が乱闘中に射た矢には『太政大臣源為頼』（神皇正統記）と書かれていた。

然るべき人物に、「帝を討てば太政大臣にする」とでも唆されていた可能性がある。

2…浅原が自害に使った刀が三条家に伝わる『鯰尾』（増鏡）という刀だった。

幕府は亀山の側近三条実守を首謀者として、六波羅に連行した。では、黒幕は亀山なのだろうか。しかし、亀山がこんな杜撰な計画に乗ったかは甚だ疑問である。

真相はともかく、暗殺されそうになった伏見天皇は、この事件に激怒し、亀山法皇の嚴重な処分を主張した。そこで、伏見を支援する関東申次西園寺実兼の嫡子公衡は、大覚寺統に対して徹底追及を行うよう、後深草に進言した。

『この事はなほ禅林寺殿の御心あはせたるなるべし。』（増鏡）

“黒幕は亀山院に違いない”だから、「幕府に打診して院を六波羅に移すべきです」。

しかし、政敵を葬り去る進言を聞く上皇は、むしろ迷惑そうな表情を浮かべた。

『実ならぬ事をも人はよくいひなす物なり』

“人というのは事実でないことを噂するものだ”

そう言って涙を流すばかりで、ついに公衡の進言を聞き入れなかった。

『心弱くおはしますかな』

“何とお気の弱い”

若い公衡はただ呆れかえるばかりだった。

しかし、ここで、公衡は思い起こすべきだったであろう。

後深草上皇は、長年の雌伏の末に政権を取り戻す事に成功した、一流の政略家である事を。

この時の後深草上皇の対応は、おそらく「高度な政治的判断」に類するものであった。

もはや、両統対立が単なる兄弟争いを越えた次元の問題になりつつある中、この冷静な判断を下せた事は評価に値する。

もし、公衡の進言を採用して亀山を捕縛させたら、どうなる。

近視的には持明院統の天下となるだろう。しかし、より大きな視点で見ると、「幕府に、大規模な兵乱でもないのに天皇経験者を処罰できる先例」を与えてしまう。

後深草はこれを避けたのである。

後深草の政治判断により、朝廷は権威失墜の危機を逃れた。

結局、大覚寺統が事件への関与を否定する御誓書を幕府に遣わし、事件は手打ちとなった。後深草が追及しない方針を示した以上、幕府も捜査を打ち切ったのである。

事件の翌月、後深草と亀山は、ともに母大宮院を見舞った。詩経に曰く、“兄弟かきにせめぐとも外そのあなどりを禦ぐ”。大宮院は、この二年後、六十八歳で亡くなった。

十一月、二月騒動で討たれた北条時輔の次男が、俄かに御内人三浦頼盛を訪ねた。

『謀叛の企有由する間、搦進ければ、同月首を刎られけり』（保暦間記）

“謀叛の企てがある様子なので、捕縛して届け出た。同月、首を刎

ねられた”

京も鎌倉も陰謀で満ちていた。だから、こういう得体の知れない事件が起こる。

【反骨の歌人】

伏見天皇は身内に甘い人だった。一二七九年、そんな人物が皇太子の頃、西園寺実兼の推挙で、歌道の師として一人の人物が出仕した。かの藤原定家の曾孫京極為兼という。

時に一二二〇年、当代随一の歌人藤原定家は風雅を愛し享樂を嫌った。

時の権力者後鳥羽上皇は風雅を好んだが享樂も好んだ。

ために、定家と上皇は、反りが合わなくなった。

ある日、終に破局が訪れた。その日、亡母の忌日だからと歌会への出席を渋る定家に、上皇は、「それでも参内せよ」と使いを送った。

定家五十八歳。老公卿は、気むずかしい顔をしかめ、次の和歌を詠んだ。

『道の辺の 野原の柳 下萌えぬ あはれ嘆きの 煙較べに』（順徳院御記）

“自分を評価しない院の治世だから、自分はこんなに不遇なのだ”
後鳥羽は激怒して定家を閉門にした。

しかし、定家は運が良かった。

間もなく起きた承久の乱で後鳥羽は島流しとなり、後妻の実家、西園寺家が台頭した。

以来、定家とその子孫は優遇され、西園寺の庇護のもと、朝廷における歌道の師として活躍した。

曾祖父譲りの気骨を持つ為兼は、やがて伏見天皇から信頼を受け、

様々な相談を預かるようになった。その一つが、禪空という怪僧についての問題だった。

禪空は朝廷の訴訟や人事に口利きをし、その見返りとして莫大な所領を要求する僧で、この頃多くの公卿が被害を受けていた。しかし、聞けば、禪空は内管領平頼綱と繋がっているため、伏見の父後深草法皇もそれを憚って、今まで黙認してきたという。

一二九一年、これを除かずして朝廷改革はならない、と嘆く伏見に、為兼は勅使役を買って出た。

そして、鎌倉に下向した為兼は、なんと平頼綱に禪空の処分を承諾させた。

この年、頼綱は「判決が出ていない裁判につき、自分が指定した五人の御内人（息子らが中心）に希望すれば、得宗に披露する」と触れている。為兼は、これに乗じたのだろう。

それに、以前「僧を政治介入させるな」と言ったのは幕府である（

【京と鎌倉】参照）。

五月、禪空の所領を元の持ち主に返還する旨が、朝廷に言い渡された。

『返付せらるるの所領二百ヶ所に及ぶ』（実躬卿記）

返還された所領は二百に及び、その中には、何と龜山法皇の所領もあった。為兼の功績は持明院統だけでなく大覚寺統からも評価され、彼の名声は両統問わず高まった。

『当時彼卿に諸人帰伏す。』

“当時、かの卿（為兼）に誰もが帰伏した”

そして、公卿たちは平頼綱を屈服させた為兼を畏れ敬うようになった。

【夢見る帝】

掃除が済んだ朝廷で、伏見天皇の改革が始まろうとしていた。龜

山法皇の“治天が迅速に政務の断を下していく改革”に対して、“政務の手続きを簡素にする改革”。

世に「正応徳政」という。その折に活躍したのは、京極為兼だった。

一二九二年一月十九日、伏見天皇は変な夢を見た。

『今曉夢想、禪林寺殿より、仙洞に謝り申さるるの旨あり。その趣、日來の凶害、御後悔の由なり』（伏見天皇宸記）

“未明に夢を見た。龜山法皇が出てきて、父後深草法皇に謝罪している。

謝罪の内容は、日頃、持明院統に対しておこなってきた凶害を後悔するものだった”

夢に驚いた伏見は、禪空事件の後、ますます信頼を深めている京極為兼に、この夢について話した。

何かが起こる予兆だろうかとの問いに、為兼は答えた。

『今日一日、夢に、山に松樹三本有り。開口これを吞む』

“私も、一月一日にめでたい夢を見ました。山に松の木が三本立っていて、それを私が口を開けて飲み込む夢です”

「私は常に、帝の在位が長きに渡り、君臣が久しく一体となり、さらに私が優れた歌道を打ち立てる事の三つを願っています」、きくとそれが叶う予兆ですと為兼は答えた。

めでたい夢を見たものと、伏見はこの事を日記に書いた。

一月二十日、伏見はまた変な夢を見た。

『夢想の事有り。吾れ女犯せんと欲す。その時思ふ所、我身これ法師なり。而して忘却の間、日來此の如き女犯の事有り。今日に於いては、此の如きの不浄□これを停べきの由、即ち覺め了んぬ』

“夢を見た。夢の中で、私は女犯をしようとした。

その時、自分が法師の姿をしている事に気付き、はっとした。思えば、自分は僧なのに、日頃奔放な女性関係を築いている。

今こそ、悔い改めようと決意したところ、目が覚めた”

この決意は、ある程度守られたらしく、伏見の女性関係を責める記録は、それほど残っていない。

この点、伏見は父後深草法皇や叔父龜山法皇とは異なる人物だった。

あるいは、二つの夢は、浅原事件で自分を殺そうとした（と伏見は考えている）大覚寺統への怨みを捨て、女性に熱を上げるのも控え、政務に打ち込もうという決意の表れなのかもしれない。

そして、そんな伏見の心を支えたのが、京極為兼だった。しかし、為兼を妬む貴族達は、次第に為兼を「奸臣」と見るようになった。

【平禅門の乱】

京で伏見天皇と京極為兼が手を取り合っている頃、鎌倉では殺伐とした君臣関係が築かれていた。

執権北条貞時と内管領平頼綱の対立である。

安達泰盛亡き後、鎌倉では、頼綱によって恐怖政治が展開されていた。

『諸人、恐懼の外他事なき』（実躬卿記）

“皆恐れはばかりより他になかった”

弁護しておくが、それでも頼綱の得宗家に対する忠誠心は本物だった。

頼綱が独裁期におこなった政策は、全て「得宗家の」権力を拡大させるものだった。しかし、

『今は更に貞時は代に無か如に成て』（保暦間記）

“当代の北条貞時は、お飾りのようになっていた”。

頼綱が責められるべきは、主君「貞時の」立場を二の次に置いた

事だろう。

貞時は成長するにつれて、頼綱を厭うようになっていた。頼綱のやり方ではもう古い。

1…この頃、悪党が活躍し、頼綱の「反徳政」政策が現実合わなくなっていた。

2…一二九二年七月、改革を決意した伏見天皇が、十三条の新制を發布し、自分の出席する記録所を最高政治機関にするなど、朝廷で徳政が復活してきた。

3…一二九二年末、蒙古から再び国書が届いたため、三度目の来襲に備えて、得宗の主導が必要となっていた。一二九三年三月、九州に鎮西探題が置かれている。

先の禅空事件も、頼綱の政治的矛盾を曝す良い機会になったかもしれない。怪しい僧に発言力を与えて朝廷に介入するなど、明らかにやり過ぎだった。

一二九三年四月十三日、鎌倉で大地震が起きた。

死者二万三千人とも記録される大災害に、鎌倉は混乱に陥った。

大規模な余震が続く中、聞き捨てならない密告が貞時に届いた。

『父子違逆』（親玄僧正日記）

“父平頼綱と弟飯沼資宗が謀叛を企てている”

父頼綱との仲が冷えつつある、嫡子宗綱の密告だった。

地震で混乱している今なら、どさくさに紛れて討てる。

二十二日、北条貞泰（時村の孫）らが差し向けられ、追い詰められた頼綱父子はあっけなく自害した。「平禅門の乱」である。

密告した宗綱は、佐渡に流された後、召し帰され、更に後、また流された。

ところで、肝心の蒙古は、この年フビライ・ハンを失っている。そのため、初代鎮西探題の北条兼時（宗頼の子）は、翌年、鎌倉に帰還した。

ここに、「危機の時代」は去ったのである。
次に訪れるのは、前時代からの不満が爆発する「内紛の時代」だろう。

第二章：蒙古襲来（後書き）

さて、蒙古襲来でした。

両統迭立・元寇・霜月騒動。

政治闘争やら合戦場面やら、思う存分、楽しんで書きました。

1…時宗の独裁について

時宗については、大雑把に言って、次のような評価があります。

「安達泰盛・平頼綱の抑え役にすぎなかった説（ダメ執権説）」

「得宗家の専制をうまく実現した説（やり手執権・独裁者説）」

「何だかんだで、邪魔者を、すべて退けてるように見える説（肅清者説）」

これらが、研究者や視点によってまちまちであります。

本書では「北条政村に育てられ、立派な執権たろうとした独裁者」として描いています。

2…竹崎季長について

季長は安達泰盛に認めてもらった”恩”を生涯忘れませんでした。

しかし、彼は、博多合戦で玉碎する道は選びませんでした。

季長が待ったのは、仇敵平頼綱の没落の日です。

そして、彼が書いた絵巻によって、安達泰盛の魂は後世に伝わりました。

ペンは剣より強し。彼こそ、勇猛果敢な、れっきとした鎌倉武士の典型として、今日評価されています。

思うに、真の武士とは「魂を知る人」を指すのでしょうか。

第三章：忘れられた時代（前書き）

「太平記」直前の時代。父たちの時代です。
テーマは、まぼろしの討幕計画。

第三章：忘れられた時代

【分裂の時代】

平頼綱の死によって、鎌倉は変わった。

頼綱の遺領は御家人に分配され、金沢顕時・宇都宮景綱ら、安達派が政務に復帰した。

これらは、すべて、政権を掌握した執権北条貞時の差配である。貞時の掲げるところは、祖父時頼・父時宗の時代の再現であった。没落御家人を救い、悪党を絶やす。

この時、若き執権は理想に燃えていた。

さて、これに刺激された京の伏見天皇は、一二九三年六月頃、「庭中」を設置している。

『下情上に通ぜざるの間、徒らに訴訟に疲る』（勘仲記）

“民の不満が上に伝わらないため、裁判が長引く事が多い”

即ち、裁判に倦む民を救うため、「直訴」を導入したのである。

朝廷には、連日公卿らが交代で出仕し、裁判のやり直しがひっきりなしに受け付けられた。

そして、再審の必要あり、と判断された案件は雑訴沙汰（正式な裁判）に送られ、次々と議定衆（裁判官、なんと関白も参加している）によって、新たな判決が下されていった。

朝廷のこのような善政は、明らかに鎌倉に呼応したものであった。というよりも、明らかに鎌倉に「対抗したもの」であった。

八月、その伏見天皇が、歴代の優れた天皇のように和歌集を編纂したいと言い出し、四人の歌人が集められた。京極為兼と二条為世、そして老齡の飛鳥井雅有と九条隆博である。

だが、この人選には難があった。

当時、朝廷の歌壇は、三つの流派が担っていた。

それぞれ、藤原定家の子孫が担う、京極流・二条流・冷泉流である。この中でも、京極流と二条流は極めて不仲であり、それは周知の事実だった。

案の定、選者となった為兼と為世は対立し、まもなく為世が撰者を辞退した。

所変わって大和。

守護のいないこの国を支配したのは、ご存じ興福寺である。

困った事に、興福寺の最高職は二つあった。

一乗院の門跡（長）と、大乘院の門跡である。

共に、摂関家の子弟が門跡を務めた。

指導者が二人、という事は軋轢が起こる。興福寺は常に火種を抱えていた。

十一月、その興福寺で、一乗院派と大乘院派が武力衝突をした。

興福寺の国大和とはいえ、治安の維持は幕府の仕事である。

ほどなく六波羅と近国の軍勢が動員され、暴徒は鎮圧された。

以上の出来事を列挙した上で、これからの時代を総括する言葉を紹介しておこう。

―中世は分裂の時代である―

幕府・朝廷・寺社。この時代、各勢力は、分裂問題を抱えていた。

【花嫁泥棒】

一二九四年、後深草法皇の御所で一風変わった騒動が起こった。騒動のものは、亀山法皇の子後宇多上皇と後深草の娘遊義門院である。

女院は、一二八五年に、当時の後宇多天皇の皇后に立てられていた。その頃、朝廷は亀山が君臨していたのだから、この婚姻は、持明院統の起死回生の一策だったのだろう。

ところが、婚姻後も、女院はなぜか父後深草のもとで生活してい

た。

両統の関係が悪化していたからだろうか。

奇妙な夫婦生活は、後宇多の強引な行動によって転機を迎えた。

六月二十八日、後宇多上皇は遊義門院を後深草の御所から盗み出し、自らの御所に住ませた。

『いと忍びがたく思されければ、とかくたばかりて、ぬすみ奉らせ給ひて』（増鏡）

“恋い慕う思いが忍び難かったので、あれこれ謀って、盗まれた”盗んだとは大げさな表現である。

あれこれ謀って、というのだから、おそらくは上皇と女院が示し合わせて計画を実行したのだろう。

それはさておき、この事件は周囲を驚かせた。

娘を「盗まれた」側の父である後深草法皇はおろか、「盗んだ」側の父である亀山法皇にとっても、この事件は寝耳に水であった。

しばらく、息子達が起こした事件にあっけにとられていた亀山は、結局息子を応援する事にした。

即ち、持明院統との仲を修復する好機と判断し、息子夫婦の仲を取り持ったのである。

そして、これを機に、長らく低迷していた大覚寺統は息を吹き返した。

さて、後宇多上皇と遊義門院はそれで良いとして、後宮に今までいた他の女性はどうなったのだろうか。意地悪な言い方をすると、九年も別居していた本妻が急に來たのだから、後宮で一悶着あったのではないかと邪推したくなる。

そこで、五辻忠子という女性をここで紹介したい。

忠子は、後宇多の後宮の一人で、既に三男一女をもうけていた。

忠子への寵愛は、遊義門院が御所に來た頃から失われた。後宇多が忠子を捨てたのか、門院がそう仕向けたのか。いずれにしろ、忠

子は庇護者を失った。

ここまでは、後宮ではよくある話だが、彼女はこれで終わらなかった。

『近頃は法皇召しとりて、いとときめき』

“近頃は、亀山法皇が召しとって、たいそうな寵愛をうけた”

気が付くと、忠子は、亀山の寵愛を受ける立場に納まっていたのである。

舅への鞍替え。子供達を護る忠子は強かった。

忠子は、結果として、自らと子供達に対する、最高の庇護者を手にしたのである。

上皇は、多少後ろめたかったので、父と忠子の仲を黙認した。

さて、この忠子の長男尊治こそ、後の後醍醐天皇である。

【南都闘乱】

再び大和。一時はなりをひそめていた一乗院派と大乘院派が、幕府の裁定に不満を持ち、再び騒ぎ始めた。一二九五年十一月、事態を重く見た後深草法皇は一乗院派の占拠する春日神社に七日間参籠した。隠居の身ながら、密かに調停に乗り出したのだろう。

しかし、僧達は法皇に遠慮して神社を引き上げるところか、居座り続け、あるうことか法皇が引き上げたのを見計らい、再び衝突した。

『勇士ら甲冑を帯び社檀に乱入の間、惣衆徒ら防戦』（略年代記）
“大乘院派が武装して春日神社に乱入したため、一乗院派が防戦した”

武士の場合なら、こういう時は相手の首を採った方が勝ちである。僧侶の場合は、御神体を奪った方が勝ちらしい。罰当たりにも程がある。春日神社の四神体のうち、二つを大乘院派が奪った。

破戒僧らが地獄への道を邁進している間、後深草は無事に仙洞御

所に帰還した。伏見天皇は、父の無事を聞いて安堵しつつも、幕府に再度の出兵を求めた。

しかし、綸旨を受け取った北条貞時は、再度の出兵を渋った。興福寺がいつまでも騒ぐのは、つまるところ伏見天皇の親政に「問題」があるからである。

出兵の前に落とし前をつけてもらう。

一二九六年五月、中納言京極為兼が、なぜか籠居となった。

『有陰謀之企由一旦及其沙汰』（正和五年三月四日伏見法皇事書案・「京極為兼と公家政権」より）

“陰謀の企てがあったので、一旦その沙汰に及んだ”

九月、満足した幕府は大乗院と一乗院の両門跡を更迭し、大乗院の莊園を没収した。

しかし、十一月十四日、大乗院派がこれに反発し、再び大和は戦場と化した。もはや泥沼化の様相を呈していたが、幕府はこれに即座に対応できなかった。

なぜなら、鎌倉で陰謀が発覚したからである。二十日、鎌倉で吉見義世という人物が捕縛された。義世は、源範頼（源頼朝の弟）四代の孫だった、という。

『義世は龍口にて首を刎ねられ』（保暦間記）

黒幕は不明である。事件の深刻さも分からない。ともかく、義世は首を刎ねられた。

『吉見殿、武勇拔群なりし』（雑談集・「安達泰盛と鎌倉幕府 霜月騒動とその周辺」一九二頁）

しかし、尾張国長母寺の無住は、何故かこれを「貞時三度の難の一つ」に数えている。今日考えられているよりも、根の深い事件だったのかもしれない。

一二九七年一月、幕府はようやく再度の軍事介入を行ない、興福

寺と春日神社を制圧した。

だが、興福寺の僧兵達は始末に終えなかった。幕府軍が去るとまた騒ぎが起きた。

秩序を乱す悪党どもめ。統治者貞時は、「秩序」に目覚めてしまった。

【永仁の徳政令】

一二九七年三月、執権北条貞時は、「永仁の徳政令」を発した。

1…過剰な裁判のやり直しはやめる

2…土地の質入れ・売買を禁止する

3…金銭の貸し借りについての訴えは扱わない。

その目的は二つあった。一つ、領主の没落を防いで、秩序を保つ。二つ、裁判で扱う案件を減らし、処理を速くする。以上であった。

徳政の効果は荘園領主や百姓にも及んだ。

荘園領主にも及んだ理由は簡単である。御家人身分を持つ荘園領主がいたからである。

例えば、関東在住の神主がこれにあたる。参考までに触れるが、一方で、御家人の中にも荘園領主はいる。この時代最大の荘園領主は、平家と後鳥羽上皇から膨大な荘園を分捕った幕府に他ならない。なるほど、朝廷と幕府が協調する必要があるわけである。

百姓が徳政に便乗したのは幕府にとっても誤算だった。何の関係もないのに実力行使で土地を奪回しはじめたのである。銭は借りたが、元は自分の土地。銭で売ったが、昔は先祖の土地。代々の営みを守る事こそ、我が正義。東国を中心に混乱が起きた。

この混乱のため、畿内・西国での徳政令の実施は遅れた。六月、貞時はこういう不屈きな連中への見せしめとして、興福寺を檜玉に挙げる挙に出た。

『武家敵対と称し、地頭を一乗院領に補し』（略年代記）

大和一乗院領に地頭が設置された。

争いを続ける者は根こそぎ捕縛する。

僧らもこれには震え慄き、南都闘乱は終結した。以後、大和の諸勢力は、興福寺からの自立を進めた。

八月、六波羅に徳政令が送られ、十月、満足した貞時は一乗院領の地頭を廃止した。

結局、この徳政によって得をしたのは、没落御家人・没落荘園領主・百姓。

損しなかったのは、幕府や朝廷に泣きついた者。それと、徳政の対象外となった、得宗関係者。

してみると、本当に損をしたのは、“悪党”であった。

幕府はこの徳政によって、御家人を救い、統治を強化する事に成功したのである。

以後約三十年間にわたって、永仁の徳政令は続けられた。

しかし、所詮は焼け石に水であろう。

『法に違いて家用足らず、或いは領所を売り、或いは料所を置く』

（平政連諫草）

”幕府の決まりに背き、御家人としてのお金に困り、あるいは土地を売り、あるいは土地を貸した”

経済の発展に乗り遅れた御家人の境遇は悲惨なものであった。

一二九八年二月、1・2は解除された。一方で、質入れ・売買で手に入れた土地は、引き続き「元の持ち主に返せ」と触れられた。矛盾を感じるのは、気のせいだろうか。

【立かへるならひ】

一連の騒動が終わり、伏見政権は崩壊しつつあった。幕府からの不信。

父後深草法皇は、既に政権を見限り、大覚寺統との融和を考える

ようになっていた。

持明院統にこれ以上の傷をつけないためである。

今の大覚寺統には、娘の遊義門院がいる。政権を譲っても、そうひどい仕打ちはしてこないだろう。法皇の黙認のもと、大覚寺統の復権が進められた。

一二九八年一月、既に失脚していた京極為兼が六波羅に連行された。

『陰謀の聞へあつて』（保暦間記）

“幕府に対する陰謀を画策したという風説があつた”

さきにも触れたが（【南都鬪乱】）、史書・史料は口を揃えるかのように、そう記す。

しかし、その「陰謀」とやらの実態は、今なお不明である。ただ、この頃為兼が公卿達から強力な反発を受けていた事は確実で、三条実躬という貴族などは、「伏見天皇から官位をもらうため、為兼の御機嫌を取りに行く日々」を、涙ながらに記している（実躬卿記）。そのため、「単なる讒言ではないか」とみる向きもある。

何にせよ、為兼には、禅空事件で幕府を言い負かした経歴がある（【反骨の歌人】参照）。

禅空事件は、平頼綱失墜の一因とはなった。しかし、同時に、執権北条貞時も体面を汚された。その意味で、小癪な為兼を罰する事は、幕府にとっては、良い絵図だったのかもしれない

庇護者の西園寺実兼は関東申次である、これに配慮して、命だけは助けてやる。

三月、佐渡への配流が決定された。

佐渡へと向かう為兼は意気消沈していた。もはや、伏見天皇と一緒に朝廷を改革する夢も、後代に残る和歌集を作る望みも絶たれた。自分は、かの後鳥羽上皇のように、孤島で都を想いながら、人生

を終えるしかないのだろうか。

そんな為兼を天が哀れんだのだろうか。佐渡に渡る前、越後の寺に泊まった為兼は、一風変わった遊女の世話を受けた。名を初若という。風流を解する女性で、都を離れ、こんな才女と出会えると思っていなかった為兼は、感動の夜を過ごした。

翌朝、出立に当たって、また会いましょうと和歌を詠んだ為兼に、初若は返歌した。

『物思ひ　こしぢの浦の　しら浪も

立かへるならひ　ありとこそきけ』（玉葉和歌集　）

“白浪が佐渡に押し寄せては越後に立ち返るように、貴方もきつと都に帰れます”

それは、都のとりすました和歌とは違う、素朴で温かい歌だった。

この日を境に、京極為兼という男は、「絶望」という言葉を忘れた。

【天下の副將軍】

一二九八年七月二十二日、伏見天皇が退位し、後伏見天皇が即位した。更に、八月十日、後宇多上皇の皇子邦治親王が皇太子となった。大覚寺統が復権したのである。

この時、龜山法皇は、庇護する尊治（のちの後醍醐天皇）を皇太子にしたかったという。

『この君をすゑ奉らんとおぼしめして、八幡宮に告文ををさめ給し』（神皇正統記）

“龜山院は、尊治を皇太子にしようと、八幡宮に告文を奉納された”しかし、嫡孫邦治親王を排する訳にもいかず、断念したという。その代わり、伏見退位の前日、母親の五辻忠子が従三位に叙されている。

その影で、この頃、関東申次西園寺実兼が在職のまま出家した。実兼は、謀略にも手を染めるが、基本的には律儀な人だった。

ところで、この年には、執権北条貞時に長男菊寿丸が誕生している。しかし、この子は、生来足の立たない子であった。そして、僅か四年後に亡くなる運命にあった。

貞時は、その後生まれた次男・三男にも「寿」という字の入った幼名を付けた。我が子の長寿を願ったのだろう。しかし、その子達も次々と夭折する。

従って、「最後の得宗北条高時」は、記録に残る限りで、四男という事になる。

さて、このような不幸を記したのは、祖父安達泰盛と傳役平頼綱の屍の上に、権力の座に座る貞時の因果を、殊更にあげつらうためではない。もっと、大きな理由がある。

「鎌倉幕府がどうして倒壊したのか」を説明するために避けて通れないからである。

あと三十五年で滅亡するにも関わらず、鎌倉幕府に決定的な衰退は見えない。平家・後鳥羽上皇・九条道家父子・蒙古・悪党・寺社。東国政権は、負け知らずである。

それどころか、北条時頼が苗を植え、北条時宗と安達泰盛が育て、平頼綱が枝打ちをした“得宗専制体制”という大樹は、あと少しで実を結びつつあるかに見える。

『当副將軍相州太守平朝臣』（正応四年出版の中山寺本『教行信証』出版奥書）

”副將軍、相模守、平朝臣（北条は平氏の一族である）”

今や、得宗家の当主北条貞時は、時に「副將軍」と呼ばれる存在になっっていた。そして、その後の北条家は、幕府倒壊の二三年前まで、拡大を続けるのである。

にもかかわらず、鎌倉幕府は“分裂した朝廷の一派閥”に手を焼き、硬直を見抜いた足利高氏らに滅ぼされる運命にある。

かかる不可解な出来事を、「後醍醐天皇」と「足利尊氏」を語るだけでは、説明できない。

そこで、現在でもあまり触れられない、これからの時期を、敢えて飛ばさずに記したい。即ち、「北条貞時の挫折」と「鎌倉幕府の停滞」の物語である。

【北条貞時の挫折】

一三〇〇年十月、執権北条貞時が、また「越訴（裁判のやり直し）」を停止した。

これは、裁判制度の改革が目的で、成熟期に入った組織ならではの問題だった。

裁判が上手く機能しなければ、幕府は統治能力を疑われる。

焦る貞時は、これまでに二度、裁判を自らの手で管理し、外科手術を試みている。

これをもって、後世、貞時は「独裁志向だ」と評されている。

が、試みは失敗に終わっていた。

そうなったのは、「引付頭人―評定衆―引付衆―開闔―執筆―合奉行」という、巨大な組織が貞時を阻んだからである。その頂点が、北条時村（一番引付頭人）であった。

時村は、かの北条政村（【二月騒動―北条政村の威―】参照）の子である。

父譲りの政治手腕を持ち、時宗の時代から六波羅で活躍するなど、一門で重きをなした。

この時点では、かつての父のように、一門の長老的立場になろうとしている。

六波羅を大組織にした経歴を持つ時村に言わせれば、「政治は組織で動く」。

組織を改革する事と、貞時のように独裁を試みる事とは、似て非なるものであった。

北条貞時と言う人には、どこか短慮なところがある。

執権とは思えない平頼綱の討ち方。南都闘乱への強引な対処の仕方。そして、あの永仁徳政令。

指導者にとって最も必要な「時機を待つ」という事が欠けている、きらいがあった。

この時も、貞時は時村らをじっくり説得しようとはせず、強引な手に出た。

すなわち、十一月、六波羅北方の北条宗方を呼び戻し、翌年一月に四番引付頭人としたのである。

宗方は、先年亡くなった北条兼時の弟で、貞時にとって従弟にあたった。

六波羅で「永仁の徳政令」の実行を指揮した宗方を、貞時は信用していた。

というより、都合のよい手駒と考えていたのだろう。以後、急速に宗方の地位が整えられていった。

一三〇一年一月、貞時は後伏見天皇を急に退位させ、後二条天皇を即位させた。

『上下惘然』（『継塵記』・「人物叢書 京極為兼」一二二頁）

これは全く突然の政変であった。

持明院統の後深草法皇と伏見上皇は、幕府で何が起こったのかと茫然としていたという。

これも、貞時らしい、短慮の匂いがする。

おそらく、幕府の改革に協力させるため、実務に強い大覚寺統を一気に再登板させたのだろう。

そのあたりの期待を感じてか、院政を行なう後宇多上皇の評定には、引退した筈の父亀山法皇が臨席していた。亀山と後宇多は、貞時の期待通り、乾元・嘉元年間に「政理乱れず」（花園天皇宸記）と評される善政を行なった。

大覚寺統にとっては、まさに降ってわいた幸福だった。

だが、まもなく彼らも腐臭に気付いた。

それは三月頃に届いた、平宗綱が突然佐渡から鎌倉に呼び戻され内管領となったという報であった。

なぜ、突然内管領が変わる。しかも、罪人が内管領になった。

父頼綱に冷遇され、ついには父を貞時に売った、「あの宗綱」がである。

亀山らは、状況が樂觀できない事を悟った。こんな人物が、わざわざ呼び戻されるという事は、貞時の周りから人が減っている。即ち、貞時が孤立しつつある。万が一、後二条天皇が退位に追い込まれた場合、皇子の邦良は一歳。これを奉じるのは無理がある。

七月二十日、五辻忠子が准三宮とされた。

准三宮は、「天皇」に近い女性に与えられる位である。亀山らは、用心深くも、尊治（のちの後醍醐天皇）を皇位継承者にする準備を始めたのだった。

この布石は、間もなく功を奏した。即ち、次の報が京に届いたのである。

「八月二十二日、北条貞時が執権職を辞し、出家した。翌日、連署大仏宣時も退任した。」

新執権は北条師時、連署は北条時村となった」

【ねじれ政局】

一三〇一年八月二十四日、後伏見上皇の弟富仁親王が皇太子となった。北条貞時が執権を退いた僅か二日後、新執権北条師時は、持明院統を復活させたのである。

更に翌二十五日、越訴が復活した。一方で、越訴頭人には、北条宗方と長井宗秀（元安達派の御家人）が就任した。得宗派と執権派

の間で、政治取引があったと見られる。

師時は中央で実績を積んだ貞時の従弟（北条宗政の子）で、その母は連署北条時村の妹である。一連の政変で、時村が最も利を得た事は、誰の目にも明らかだった。

しかし、貞時が“得宗として”抵抗を続けたため、この時期、後世から見て、判断に苦しむ政治決定が繰り返されている。十一月、幕府は朝廷に対して、次の宣言を行った。

『両御流踐祚、依違すべからず。遅速叡慮にあるべし』（吉続記）
“両統が皇位を共有していくなら、即位と退位の時期はそちらで決めて構わない”

・大覚寺統…「亀山法皇（後見）―後宇多上皇（院政）―後二条天皇―邦良親王」

・持明院統…「後深草法皇（後見）―伏見上皇（院政）―後伏見上皇…富仁親王（太子）」

後深草法皇などは、これに驚喜したようだ。

幕府は内輪もめの末に、“両統の存続を保障してしまった”。

ならば、両統が共存共栄していく契機となるではないか。

実際その通りで、この宣言は、武家にとって以後の長い期間足枷となった。

持明院統と大覚寺統。武家はどちらにも加担できなくなってしまうのである。

かくして、鎌倉幕府は後醍醐天皇に翻弄され、足利尊氏・義詮・義満も南北朝の扱いに手を焼くことになる。

一三〇二年二月二十三日、法皇の呼びかけで、諸上皇が亀山殿に集まった。持明院統は後深草法皇・伏見上皇・後伏見上皇。大覚寺統は亀山法皇・後宇多上皇。この日、後伏見が亀山に蹴鞠を教わっ

た。晩年の後深草は、「皇室の家長の責任」を自覚した行動が多い。

『頼及亂醉』（実躬卿記）

“その後の宴会は乱醉に及んだ”

確かに、後宇多上皇が永嘉門院（院領の相続権者）を後宮に迎え、「室町院領（【後嵯峨の死】参照）問題」で大覚寺統が優勢となったのは、この時期である。

だが、皇位争いは存亡問題。領地争いは遺産問題である。問題の次元が違う。

九月、鎌倉で、何故か引付頭人が八人編成に変更された。

- ・得宗派…大仏宗宣（一番）、大仏宗泰（三番）、北条宗方（四番）、長井宗秀（七番）
- ・執権連署派…北条熙時（六番、時村の孫、貞泰が改名）
- ・要検討…赤橋久時（二番）、名越時家（五番）、摂津親政（八番）

これは、当時の実力者（足利氏除く）が勢揃いしたもので、「大連立」の観さえある。

こうした中、佐渡に流されていた京極為兼が、いきなり幕府から赦免された。

おそらく、幕府の誰かが、持明院統の歓心を得ようと、そう計らったのだろう。

【金沢貞顕の手紙】

一三〇二年七月、金沢貞顕は六波羅に赴任した。一度六波羅に赴任しておけば、連署になるのも夢ではない。しかし、貞顕の心は複雑だった。六波羅は「将来拔擢したいが、今鎌倉にいと困る人物」に任される事も多い赴任先である。得宗に信頼された父顕時が前年他界した今、鎌倉で、誰があらぬ讒言をするか分かったものではなかった。

そこで、貞顕は鎌倉との連絡を密にした。今日、貞顕の手紙は「金沢貞顕書状」と呼ばれ、鎌倉時代末期を語るに欠かす事が出来ない。手紙の相手は釵阿と長井貞秀だった。

釵阿は、祖父金沢実時が整備した称名寺の僧で、一三〇八年貞顕の後押しで寺の長老となる人物である。一方、貞秀は、長井宗秀の子で、貞顕にとっては従兄弟にあたる。

釵阿は専ら、貞顕と貞秀の間を取り持つ役だった。よって、大事なのは「旧安達派の金沢氏と長井氏の連携」である。例えば、一三〇三年二月二十六日にこんな手紙がある。

『中書御事をこそたのみ思まいらせ候へ、掃部御方能々申され候て、掃部又吉様に申され

候はむに、一ささへはなと候はさらんと覚候』

（『金沢文庫古文書』九六十一〇、『鎌倉遺文』未収十二一七―一四、永井晋「鎌倉後期における京都・鎌倉間の私的情報交換―六波羅探題金沢貞顕の書状と使者―」二〇頁）

“長井貞秀を頼るのだ。父宗秀殿に口添えしてくれる。宗秀殿が、金沢にとって良いよう、周囲に言ってくれよう。一支えもきつとある”

貞顕は、釵阿にこんな連絡を取っている。長井貞秀の父宗秀は、御家人の長老として、引付頭人・越訴頭人を担っている。金沢にとって、宗秀の存在は「生命線」だった。

貞顕がここまで身の安全に気を配ったのは、「旧安達派への抑圧」があったからに見える。この時期、得宗派と執権・連署派の睨み合いと並んで、「得宗の補佐役を誰が担うか」という争いも熾烈を極めた。即ち、大仏宣時・宗宣の存在である。

そもそも、大仏は安達泰盛を捨てて地位を得た一族である。一方、金沢・長井は泰盛の横死で不遇を味わった一族である。両派の対立は深刻だった。一三〇三年八月には、大仏宗宣が長井宗秀から越訴頭人職（得宗への取次ぎ役）を奪っている。これは、旧安達派にと

って、「貞時に声を伝える経路を一つ切断された」事を意味したのではないか。

前段では、得宗派と執権派の対立に焦点を当てた。しかし、大仏と旧安達派、それに平宗綱と北条宗方を加算すると、当時、得宗派自体が火薬庫だった事が分かる。

幕府の政局は複雑怪奇で、当事者達を疑心暗鬼に陥らせるに十分なものであった。

苛立つ首脳部の間に、次第に“安易な解決”を望む空気が生じつつあった。

【当事者達の晩年】

一三〇三年五月、老齡の亀山法皇に皇子が誕生した。恒明親王という。

母親は、西園寺瑛子といい、実兼の娘である。

瑛子は、一説に、二条の隠し子といわれている。

晩年における、孫より幼い愛児の誕生。

この出来事は、西園寺の思惑も絡み、大覚寺統を揺るがす問題に発展した。

大覚寺統の“家庭事情”。気が付けば、「亀山（祖父）―後宇田（父）―尊治」の三世代には複雑な関係が生まれていた。しかも、原因の大半は亀山にあるといえた。

1.. 亀山が、後宇多上皇の後宮にいた五辻忠子を寵愛している（今や准三宮である）。

2.. それに伴い、尊治親王（一応、後宇多の子・前年親王となる）が地位を高めている。

3.. 亀山に、溺愛の末子、恒明親王が誕生した。

1・2は、幕府を睨んでの政治行動でもある。しかし、3の恒明親王は後宇多の弟であり、子ではない。亀山と後宇多の仲は一気に冷え込み、かくして大覚寺統は分裂した。

十二月、鎌倉では内管領平宗綱が失脚した。そして、上総に流され、そのまま生涯を終えた。復権後、僅か二年九ヵ月。得宗の補佐役候補が、まず一人減った。

翌一三〇四年七月十六日、後深草法皇が六十二歳で亡くなった。十七日夜、葬礼が行なわれた。その日、月は不思議と澄み渡っていたという。

棺を運ぶ御車が通り過ぎる間、伏見上皇はその場に倒れ伏し、泣き続けた（公衡公記）。

『七旬の老僧面に子孫継牀の栄昌を見奉る。希代の幸運自愛志深く候。御幸六日一定候や。心本無く候』（伏見天皇宸翰法華経・「天皇の書」一五二―一五四頁）

“老い先短い老僧にとっては、子や孫の栄達した姿を見るのが何よりの幸せです。”

六日には間違いなく来てくださるのだらうね。それが心配です”

正月に後深草が伏見に送った書状である。両者のわだかまり（【立かへるならひ】参照）は、京極為兼の赦免も手伝って、いつのまにか消えていたらしい。

また、葬列を見物する衆に紛れて、尼の姿も見られる。二条だった。

あれほど仲の悪かった東二条院（後深草の皇后）も、この一月に亡くなった。

西園寺実兼もこれを機に引退し、息子公衡に関東申次職を譲るつもりだという。

『つらく覚えしこそ、我ながらせめてのことと思ひ知られ侍りしか』（とはずがたり）

“この別れを、つらいと思える事こそ、せめてもの救いなのかもしれない”

皆、時の前には無力である。二条は、葬列を照らす月を、しばし見

つめ続けた。

【嘉元の乱・鎌倉幕府停滯のはじまり】

一三〇四年十二月、引付頭人が五人編成に戻った。その際、北条宗方は引付頭人を退き、内管領となった。幕府の内輪揉めは、まだ続いていたらしい。

翌一三〇五年四月二十二日、鎌倉で大地震が起き、得宗北条貞時の館が焼失した。

『禅門被移了相州師時岩所』（見聞私記）

“得宗貞時は執権北条師時邸に移った”

そんな中、（三浦）和田茂明ら十二名は、内管領から特命を受けた。

曰く、連署北条時村が、混乱に乗じて謀反を企てている。先鋒としてこれを討て。

翌二十三日夜、茂明らは「得宗の仰せ」と号して連署邸に踏み込んだ（保暦間記）。

“謀反人”は家臣と共に防戦してきたが、茂明らは、見事これを打ち破った。

後日、関与が噂された六波羅の金沢貞顕も、長井父子を介し、得宗に誓紙を提出してきた。

だが、何故か時村の殺害は「誤殺」とされ、英雄十二名は「召籠」となった。

二十八日、北条熙時（時村の孫）が、何故か所領を安堵された。

『前入道殿御計之条、顯然』（『嘉元三年雜記』）

“（これが）得宗の計らいなのは、明白である”

得宗家に対する”謀反人”の孫が、なぜ所領を安堵される。

このあたりから、事件は不可解な様相を見せ始めた。

当然、当事者たちも、これを察知できた筈であろう。

しかし、仮にきな臭さを嗅ぎとれたとして、このような時、身の処し方を変えられる人は少ない。まして、鎌倉幕府は、百年を超える組織でなのがある。

「その中で唯々諾々としていれば天寿を全うできる」

「命に従い、得宗家を盛りたててさえいれば、子孫も安泰である」
そう盲信するのが、人の習性なのである。

だが。結局のところ、自らを生かすのは自らであり、自らを殺すのも自らなのである。

内管領北条宗方。連署誅殺の先鋒をつとめた十数名。

死の直前まで、「自らの力で生きる」という選択を置き去りにした”彼ら”は、やはり、死ぬべき人達だったのだろう。

今回の事件で、賢明な選択を行えたのは、和田茂明一人であった。
某日、身の危険を感じた茂明は、召籠先を抜け出し、一人鎌倉を逐電したのである。

五月二日、逐電した茂明を除く”時村誅殺の先鋒”、白井胤資ら十一名が斬首に処された。そして四日、内管領が、大仏宗宣と宇都宮貞綱に誅殺された。

『既欲攻寄之處、宗方聞殿中師時舍官閣同宿、禪騷擾。自宿所被参之間、隱岐入道阿？爲宗方被討訖』（鎌倉年代記裏書）

“（宗時と貞綱が）攻め寄せようとした時、宗方は館で、執権邸が騒がしい事を耳にした。宗方が、（得宗に弁明するためか）執権邸に参上したため、佐々木時清が討たれた”

宗方は、厩前で時清に阻まれ、刺し違えたという（実躬卿記）。

これを機に、宗宣と貞

綱が出撃し、宗方の家来が方々で討たれた。また、金沢顕茂（貞顕の甥）が自害した。

六月十日、山内殿で評定が開かれた。しかし、そこに得宗と宗宣の姿はなかった。

『入道殿当時無御出仕候。陸奥殿同無出仕候』（『高野山文書』「又続宝簡集」七八）

“得宗殿は出席しなかった。大仏宗宣殿も出席しなかった”

つまりは、黒幕は、貞時だったのだろう。

「連署を消して実権を握る」

その予定がどこかで狂い、宗方の口を封じた。そして、居直ったのである。

以後、貞時は政治を捨てた。

その陰で、茂明は逃げ伸びた。

一三一七年、茂明は、越後で、子供に領地の譲り状を書いている。賢明にも、茂明は天寿を全うしたのである。茂明の天寿を嘉して、この馬鹿馬鹿しい事件の締めとしたい。

【海賊大暴れ】

一三〇五年七月、大覚寺統の亀山法皇が火種を蒔いたまま逝去した。

『立坊の間の事、院ならびに持明院殿御返事かくのごとし』（『宸翰英華 第一冊』四三号文書）

“後宇多上皇と伏見上皇に皇太子にするよう頼み、返事は得てある”
八月五日付の亀山法皇の遺言である。遺言の相手は愛児恒明親王だった。

ご丁寧に、伯父の西園寺公衡を後見人にしたから、「公衡と相談して幕府の後ろ盾を得なさい」とまで書いてある。恒明は字も読めないのだから、実質は公衡への遺命だろう。

公衡は「遺命」にしたがって、政治活動を行っていたのだろうか。

十二月二十二日、公衡は籠居を命じられた。

『伊豆・伊与両国、左馬寮等被召放云々、依院勅勘也』（公卿補任）
“後宇多院の勅勘（お叱り）により、伊豆・伊予等の所領が没収された”

西園寺に手を出すなど、普通あり得ないことである。亀山の遺命を実現しようとする公衡の動きに、後宇多は大覚寺統分裂の危機を直感したのだろう。上皇は、更に、恒明に譲られる筈だった亀山の莫大な遺領を取り上げて異母妹昭慶門院の名義で管理し、後に自分のものとした。その後、一三〇六年二月、公衡は幕府のとりなしで許された。

徳治・延慶の頃、つまり一三〇六―一三一一〇年頃、熊野水軍が蜂起した。幕府はこれを重くみて、一三〇八年三月、九州にいた河野道有を四国に呼び戻し、近海の警固を命じた。しかし、抑えきれず、さらに十五カ国の軍勢が派遣されるに至り、戦闘は少なくとも八年間続いた。この大乱を「徳治・延慶の熊野海賊の蜂起」という。

この頃、得宗家は、会計に堪能な西大寺の僧達を全国の湊に派遣し、主要な湊を掌握しつつあった。この動きに、畿内の海賊が、反撃に出たのだろう。

日本は海国である。海を使えば、伊勢から常陸にも、紀伊から薩摩にも行ける。当時の海賊達は、その程度のことをやってのけた。こんな機動力をもつ連中を討伐するなど、不可能である。それでも、北条氏は海賊を取締まろうにとした。このあたり、海賊を海上警固に利用した、後年の室町幕府とは対照的である。興福寺といい（【南都闘乱】参照）、海賊といい、鎌倉幕府は、西国の政治問題から脱け出せなくなりつつあった。

蜂起が一段落した頃、幕府は橘氏（後の安宅氏）と小山氏を紀伊に土着させた。いわば、放し飼いの番犬である。しかし、北条氏の見通しは甘かった。番犬は鎖に繋いで、毎日世話をしてこそ番犬を

やってくれるのだ。土着した両氏は、いつのまにか現地の海賊と利害を共有する勢力と化した。北条氏は、この種の過ちを、以後重ね続ける。

【触れてはいけないこと】

後宇多上皇は、七歳の時、病で死にかけた事がある。医師団が無能で、病名すら満足に診断できなかったのが原因だった。容態を心配して駆けつけた父亀山天皇はその事に不機嫌になりながらも、これは黄疸だと診断した。博識な天皇は、医学にも堪能だった。

容態がここまで悪化した以上、灸治を行なう他ない。「東宮（皇太子）に灸治をした先例などない」とうるさい周囲の声を無視して、亀山は灸治を断行した。

医師と傳役の土御門定実だけが近仕を許され、亀山の御前で、五箇所に灸がすえられる。定実に抱かれて灸の熱に耐える東宮の顔は次第に苦悶に歪んだ。

その時、東宮の手が、大きな手に力強く握られた。父の手だった。

『御手をとらへ、よろづに慰め聞えさせ給ふ』（増鏡）

“東宮の手を握り、ずっと励まし続けられた”

東宮は声も上げず治療に耐えた。この灸治が功を奏し、東宮は一命を取り留めた。

それから数十年が経った。今や、東宮は大覚寺統の指導者となり、天下の政務を取り仕切っている。しかし、父亀山は、晩年に仲違いしたまま逝去していた。

一三〇七年七月、後宇多の愛妻遊義門院が病死した。故後深草法皇のもとから、盗み出して十三年。夫婦仲は終生睦まじかったらしい。愛妻の死に悲観した後宇多は出家した。

一方、この時期、持明院統は後二条天皇を退位させようと、さかんに政治運動を行っている。政権を一向に手放さない大覚寺統に焦

れたのである。

その断片が、伏見上皇が平経親に作成させた幕府向けの文書である。その内容は、「亀山法皇の遺言通りに恒明親王を皇太子としてはどうか」というものだった。実現すれば、後二条天皇は尻に火が付いて退位し、「後宇多（院政）―後二条（天皇）」が終焉する。そして、皇太子の富仁親王が自然と即位できる。持明院統復活の奇策だった。

しかし、完成した文書に目を通した、伏見は、この文書を世に出す事を躊躇った。

『万里小路殿、偏御向背孝道已□了』（恒明親王立坊事書案）

“後宇多法皇は、（父亀山の遺言を破り）孝道に背いた”

親不孝者の傍流ではなく、恒明親王に大覚寺統を継がせるべきだ。この内容を知れば、後宇多は我を忘れて激怒し、持明院統そのものを殲滅しようとしてくるだろう。

数年前、「家庭問題」に口を出した西園寺公衡を籠居させた時のように（前段参照）。

『不出之』（恒明親王立坊事書案の端裏書）

結局、この文書が幕府に提出されることはなかった。

【長崎円喜の登場と貞時の晩年】

一三〇七年、御曹子北条高時が馬乗り始めと弓始めを行なった。

『徳治二當殿御時、宗宣奥州始此沙汰候云々』（金沢貞顕書状・鎌倉遺文三〇八五四号）

“徳治に高時様が馬乗り始め・弓始めをした際、連署大仏宗宣がその扶持を行なった”

嘉元の乱後、大仏宗宣は連署となっていた。かの乱で、漁夫の利を得たのである。

一方で、北条宗方が亡くなった後の得宗家の執事は、「長崎円喜」なる人物が務めている。長崎は平頼綱の一族である。頼綱が討たれた後の数年間、円喜の父光綱は、内管領を務めている。安定した内

管領を望む北条貞時は、頼綱一族を復活させる事にしたらしい。

ところで、「円喜」とは、貞時が亡くなり出家した後の名である。しかし、確実な史料で名が確認されていないので、「長崎高綱」は避け、「円喜」で統一しておく。

翌一三〇八年七月、久明親王（後深草の子）が將軍を辞めて、京に帰還した。

原因は不明だが、一人前の年齢になった將軍が、政争に巻き込まれる前にご退場頂いたらしい。子の守邦親王が將軍となった。八歳。これなら戦乱の種にはなるまい。

八月、中原政連という官僚が、得宗貞時に諫言状を書いた。後世、これを『平政連諫草』と呼ぶ。しかし、「現存する書状」は、貞時に提出されなかったようだ。文が雑なので、書き直したのか。もつと穏当な文に変えたのか。提出を止めたのか。何にせよ、へたな訂正が加えられていないので、この書状は却って当時の様子を余す所なく語っている。

『一 政術を興行せらるべき事』（平政連諫草、「日本中世史を見直す」二一六～二三三頁）

“一 まじめに政治をして下さい”

『政連、疎遠微弱の身、庸瑣愚鈍の性なり』

“この政連、得宗から見れば取るに足らぬ身、つまらぬ愚か者です”

『然りといえども念々恩徳に報ぜん欲して、度々諫言を献ずるところあり』

“しかしながら、得宗の恩徳に報いようと、たびたび諫言をしてきました”

『賞翫なしといえども賢慮に違わざるか。仍って鄙底を残さず重ねて言上するところなり』

“それで褒められた例ありませんが、（罰された事もないので）お考えに違う諫言でもなかったとお見受けします。よって、腹に溜

まっている事を、残さず、重ねて言上します”

『禪閣御在俗の時専ら覇業を扶け、御出世の今漸く政要に疎なり』

“得宗は、出家するまで覇業をたすけましたが、出家してからは政治を離れておられます”

『評定の裁判は両国吏に任せ、引付の探題は七頭人に委ぬ』

“評定は執権（北条師時）と連署に任せ、引付の裁決は引付頭人に委ねておられます”

『日々政務に接りがたきよし思食さるるか』

“もしや、日々政務に励むのが嫌だと、お思いか”

『無端徒らに政事に纏れんよりは、余算限りあり、歓宴を催さんにはしかじと相存ずるか』

“つまらぬ政治に励むよりは、限りある命、宴会でもする方が良いとお考えか”

『一向に御綺なくば万機何れの仁に任せんや』

“得宗がこのまま政治に参加しないなら、一体誰に政治をお任せすれば良いのです”

『何ぞ況んや毎月御評定の間五ケ日、御寄合三ケ日、奏事六箇日許り、闕かさず御勤仕あるの条、強ち窮屈の儀なからんか』

“まして毎月、評定に五日・寄合に三日・裁決に六日（つまり一カ月に十四日）、欠かさず得宗の仕事をするぐらい、何という事もないではありませんか”

『先祖右京兆員外大尹は武内大神の再誕、前武州禅門は救世観音の転身、最明寺禅閣は地

蔵薩& amp; #22517;の応現と云々。倩々思うに貴下在生の作法は同じく無上大聖の応化たるか』

“御先祖の北条義時様・泰時様・時頼様は、神仏の生まれ変わりとして、民を思う政治をされました。思えば、あなたのご誕生も、無上大聖が現世に現れた時と同じでした”

『子葉孫枝の繁華のおんため、徳を種え功を樹つるの余薫を積むべ

し』

“御子孫の繁栄のためにも、徳を積み政治的功績をあげ、後代に恩恵を残して下さい”

他にも色々言っているが、つまるところ、「貞時に再登板してほしい」と言っている。貞時が政治を捨てた後、幕府は停滞しつつあった。しかし、貞時は一向に顧みなかった。

『一 固く過差を止めらるべき事』

“一 贅沢はやめて下さい”

『亭の入御を禁むるの理は、御一門の人々、諸大名の家々、御渡りを以て一期の本望となし、御儲のために残涯の余資を尽くす』

“得宗を自宅の宴に招き、寵を得ようと、一門も大名も皆、財を傾けています”

『その人を選ぶにおいては、自ずから恨みを成すべきか』

“誰の家に足を運ぶにしろ、選ばれなかった者はこれを恨みに思うものです”

『無足及び凡人においては、狂惑を以て宗となし、姦謀を以て先となす』

“（まして）領地のない御家人や一般の御家人達の中には、貧しさに狂い、道を踏み外す者さえ出ています（そういう昨今ですから、上が手本を示し、儉約をして下さい）”

結局、政連の思いも空しく、貞時は行動を改めなかった。そして、この二十六年後、政

連の子の紀親連が「新田義貞の挙兵の引き金を引く」というのが、史実である。

【約束】

一三〇八年八月、後二条天皇が急死したため、持明院統の花園天皇が即位した。

期せずして、政權が持明院統に戻ったのである。治天に返り咲いた伏見上皇は、天皇を後伏見上皇の猶子（簡単な養子）とした。これは、持明院統を大覚寺統のように分裂させないための措置である。その上で、伏見は京極為兼を傍らにおき、政務を再開した。

この頃、為兼は花園天皇の傳役を務め、以前に増して権勢を振るった。

この時、問題となったのが、皇太子の人選である。天皇が持明院統だから、皇太子は大覚寺統から出せる。大覚寺統の後宇多法皇は、その人選に頭を悩ませた。

可能ならば、孫の邦良親王を皇太子にしたい。しかし、まだ八歳である。

そこで、法皇は尊治親王に白羽の矢をたてた。あれは父亀山に可愛がられていた。仲も良くない。だが、有能ではある。「一代限りの天皇」としては悪くない。

閏八月三日、法皇は尊治に対し、皇太子に推す条件を示した。

1 『一期之後、悉可譲与邦良親王』（御遺領処分状・『南朝史論考』五六頁）

“一期後には邦良親王に位を譲ること”、あくまで中継ぎの天皇とする。

2 『以後二条院宮可如実子』

“邦良親王を猶子（簡単な養子）とすること”、後見の為なら院政を行なうことも許す。

3 『於尊治親王子孫者、有賢明之器、濟世之才者、暫為親王仕朝輔君』

“だが、尊治の子孫は補佐役に徹すること”、天皇となるのは尊治一代のみである。

4 『天下之謳歌如虞舜夏禹者、可任皇祖之冥鑒』

“しかし、尊治の子孫の即位を、天下万民が強く望んだ場合はその限りではない”

後年、4が問題となった。「破格の業績を残せば、子孫も天皇になって良い」と解せる。法皇は、何故こんな条件を書いたのか。理由は、これだろう。

『彼親王鶴膝の御病あり』（神皇正統記）

“邦良親王は鶴膝の御病だった”

小児麻痺である。医学の発展していないこの時代、法皇は、邦良の早世を懸念した。

しかし、それだけだろうか。思うに、この辣腕家は、息子の境遇にどこか負い目を感じていた節がある。この条件は、父親として唯一の手向けだったのかもしれない。

九月、尊治は条件をのみ、皇太子となった。

その後、法皇は密教に傾倒した。何しろ、愛妻と嫡子をたてつづけに失ったのである。大覚寺統として、最低限の足場は確保したのだから、今は菩提を弔いたかった。

【金沢貞顕の転勤生活】

一三〇八年十一月三日、六波羅の金沢貞顕は、鎌倉に呼び返してもらうため、劔阿に工作进行を指示した。六波羅で汚れ役を務め、はや六年。朝廷や寺社に手を焼く日々だったが、その甲斐あって公卿らと懇意になった。裁判制度を整え、奉行人からも支持を得た。

機は熟した。中央に戻り、出世するのだ。

『下向一事、いまハ身の大訴候に、彼障碍と成候はん条、勿論と覚候之間、若御沙汰候ハ

ハ、此事相構無転変之様ニ、洒掃禅門へも令申給、又御意得候へと、よくよく武庫へ可

令申給候』

（鎌倉遺文二三四四〇、「鎌倉後期における京都・鎌倉間の私的情報交換―六波羅探題金沢貞顕の書状と使者―」一九頁）

“鎌倉に呼び戻してもらいたい件は、訴訟中の劔阿には迷惑かも知

れない事は、重々承知している。しかし、取り計らってくれるなら、長井宗秀殿に申し上げ、長井貞秀（宗秀の子・貞顕の従兄弟にして盟友）にもよくよく意を伝えてほしい”

鎌倉時代後期、北条一門の関心は、専ら「幕府内での出世」に集中していた。貞顕もその例に洩れなかったらしい。十二月七日、北条貞房が南方に赴任した。

そのため、翌一三〇九年一月、貞顕は念願叶い鎌倉に呼び戻された。

鎌倉に帰還した貞顕は、二十一日、御曹子高時の元服式で、剣を持つ役を務めた。

元々、得宗北条貞時は金沢を信用している。忌わしい政争が一段落したいま、貞時は安

心して貞顕を用いる事ができた。風一つない天候のもと、滞りなく式は終わった。

『天下の大慶この事に候』（「金沢文庫古文書」一〇四号、「人物叢書金沢貞顕」六四頁）

“天下の大慶とは、この事である”

しかし、三月十二日、長井貞秀が亡くなった。

『涙を催し候』（「金沢文庫古文書」一〇七十四九十一一五号、「人物叢書金沢貞顕」六五頁）

その父宗秀はこれに氣落ちし、孫（広秀ら）の養育に専念するため、引付頭人を退いた。

代わりに、貞顕が三番引付頭人となった。八月には、二番引付頭人に昇格した。

普通なら、貞顕はその後も鎌倉に留まり、一番引付頭人、あわよくば連署へと昇進していく筈だった。しかし、貞顕は六波羅と縁があったらしい。十二月二日、南方の北条貞房が亡くなり、六波羅が空になった。翌一三一〇年二月、貞顕はやむなく引付頭人を退き、

六月から再び六波羅に赴任した。今回は、北方としてだった。鎌倉時代を通じ、北方と南方の両方を経験する羽目になった人物は、北条兼時と金沢貞顕しかいない。

その陰で、連署大仏宗宣は、邪魔者を体よく追い払い、ようやく一息をついた。

【北条貞時の死】

一三〇九年、関東申次の西園寺公衡が左大臣に就任したが、三ヶ月で辞職した。何か事情があったのだろうか。以前に右大臣に成った時も、年内に辞職している。

『珍しげなし。一上にて止みなん』（徒然草・第八十三段）

“このまま、太政大臣まで昇進しても珍しくもない。左大臣でやめておく”

公衡は、娘寧子を後伏見上皇に嫁がせている以外に、皇室との縁を持たない。後宇多法皇・伏見上皇・花園天皇、いずれの母親も、西園寺から分離した洞院の出身である。

それを踏まえると、右の発言には何やら屈折を感じる。

この年の冬、「京極為兼が島流しで中断していた和歌の撰集を完成させつつある」という噂が宮中で流れた。これを聞いた二条為世は、阻止に動いた。一方、阿仏尼（為兼の“師母”）の子冷泉為相は、自分も参加したいと言い出した。この訴訟を「延慶の訴陳」という。

為相は関東での仕事に忙しいため、為兼と為世が訴訟の中心となった。

『永仁辞退候上は、今更争か申し出づべく候はん。』（二月八日付為相書状案）

“以前に撰者を辞退した為世が（【分裂の時代】参照）、何で今更難癖をつけているのだ”

この頃、「京極家は持明院統、二条家は大覚寺統」というのは、公

然の事実だった。

伏見上皇が、為兼の肩を持つに決まっている。それでも、為世が抵抗を続けたのは、為兼に反感を持つ一派に、期待したからだろう。一三一〇年十二月、為兼は権大納言に昇進している。公卿らにとって、為兼はますます目障りな存在となりつつあった。

しかし、この裁判は公式な判決もないまま終わった。実質は為兼の勝訴であった。

この件で看過できないのは、幕府がそれを容認した点である。関東申次が振るわず、為兼が我が世の春を謳歌する。幕府にとっては不都合な筈である。しかし、鎌倉がまたしても動揺し、朝廷まで手が回らなかったらしい。まず、一三一〇年十一月、鎌倉が焼失した。『悉焼失了。先代未聞人殊事也』（見聞私記）

“ことごとく焼失した。前代未聞の災害である”

翌一三二一年九月二十二日、執権北条師時が、奇怪にも評定の座で倒れて亡くなった。過労か、はたまた毒殺か。十月三日、連署の大仏宗宣が執権となった。貞時が、最も信用する男である。連署には北条熙時が就いた。嘉元の乱で死んだ、時村の孫である。

何ともきな臭い。というのも、二十六日貞時も死去するからである。これではまるで、「死期を悟った貞時が師時を道連れにした」ように見えるではないか。

この世に残す息子高時（九歳）の地位を守るために。

【持明院統と京極為兼】

一三二一年十月、北条貞時は、死の床で、二人の人物に我が子（高時）を託した。

『彼等二人二貞時世事置タリケレバ』（保暦間記）

“長崎円喜と安達時顕の二人に、世の事を任せ置いた”

安達時顕は、霜月騒動で亡くなった宗顕の子である。騒動の際には、乳母に抱かれ、戦火を逃れたという。嘉元の乱後、貞時に引き立て

られていた。

貞時は、長崎円喜が平頼綱の再来となる事を恐れたのだろう。円喜への牽制として、時顕の娘が高時の正室として輿入れし、ここに安達一族は復権を遂げた。

一三二二年三月、京極為兼が遂に「玉葉和歌集」を完成させた。もはや朝廷に、為兼を表立って非難できる者はいなかった。十二月、伏見上皇はこう遺言している。

『為兼卿当時知行所々、改動の儀あるべからず』（鎌倉遺文二四七六七号）

“為兼卿が知行している荘園は、今後絶対手をつけてはならない”

一三三三年六月、為兼は病に倒れた。四日、花園天皇は日記にこう記している。

『朝家に付き殊に悦たるものなり。才學無しと雖も直臣なり。又深く忠を在する人なり。歌道に於いては只一人なり』（花園天皇宸記）

“廷臣の中でも特別な者である。学才はないが、直臣である。また、深い忠節を持つ人である。歌道においては、この人を置いて他にいない”

「佐渡に流されても変わらぬ忠節」。伏見上皇や花園天皇が、為兼を特別に思うのは、それ故である。翌日、為兼はにわかに回復し、御年十六歳の少年天皇は大喜びだった。

十月、伏見上皇が息子後伏見上皇に政務を譲る事を決め、平経親が関東へ交渉しに行く事になった。九日、その報告のため、内裏に向かう経親を、突如矢が襲った。

『二條高倉に於いて騎馬の者有り。矢を發して経親の車を射、？侍の馬の鞍に中る』

“二条高倉で騎馬の者があらわれた。その者が牛車を狙撃し、警護

侍の馬の鞍にあたった”

『其の矢聊か？侍の肱に中り、流血す』

“その矢が、警護侍のひじにあたり、流血した”

牛車の中にいた経親は、何とか無事だった。

十一日、伏見・後伏見・花園親子は、玄輝門院（伏見の母、東の御方。【粥杖事件】参照）と食事をする機会を設けた。引退前の一家団欒。伏見はしみじみと言った。

『只今の儀、故院御覽じ有りシカハ』

“今日の様子を、亡き父君（後深草法皇）がご覧になったらなあ”
伏見と玄輝門院は、涙をぬぐった。傍らで給仕をする典侍典子も、静かに袖をぬぐった。

十七日、伏見は出家した。しかし、共に出家した為兼は、政務への関与を続けた。

【脱線四・祈る存在】

一三三三年六月二日、京は未曾有の豪雨にみまわれた。

『天陰り雨降る』（花園天皇宸記）

“天は曇り、雨が降り続いている”

『河水溢れるるの間、人多く流死す』

“京の河川は氾濫し、多くの民が溺れ死んでいる”

花園天皇は、これに心を痛め、その日は何事も手につかなかった。

翌三日になっても、雨脚は一向に衰えなかった。

『天猶陰り雨休まざる』

“天は、なお曇り、いまだ雨が止まない”

降り続く雨に、河川の氾濫は、増すばかりである。

しばらく天を見つめていた天皇は、やがて意を決した様子で書斎に向かい、筆を執った。

『絶句の詩を作り、内侍所に祈り申す』

“絶句の詩を作り、内侍所（三種の神器「八咫の鏡」が安置されて

いる）に納めて祈った”

『假令民に代り我が命を棄つべきの故なり』

“例え、我が命を引き換えにしても、民の危急を救うためである”
この時代、天皇には二つの顔があった。

一つは、統治者としての顔。もう一つは、祭祀者としての顔である。
かつて亀山上皇は、蒙古の侵攻を受けた時、その殲滅を祈った。

歴代の天皇も、いざという時には、“祈る存在”となっていたのだろう。

そして、花園天皇も、まぎれもなくその一人だった。

まもなく、雨は弱まり始めた。

『暫くして雨灑ぐ。即ち晴れ、夕陽の影新し』

“しばらくして雨は止んだ。空は晴れ渡り、夕陽の影に染まり始めた”

『神威新たなるものか』

“祈りが天に通じたのだろうか”

『詩の珍重にあらず、心の？潔に依るか』

“何も私の詩が良かったから天に通じたのではない。心が通じたのだ”

天は統治者の行ないを見て、民に福を与え、時に罰を下す。統治者が政治をおろそかにした時、飢饉や天災は起こる。少なくとも、当時の統治者はそう信じたのである。

【暗躍】

一三二四年一月、院政を行なう後伏見上皇が病に倒れた。十八日、疱瘡と判明した。

『今日大覺寺の法皇東宮に御幸』（花園天皇宸記）

“今日、大覺寺統の後宇多法皇が皇太子尊治親王（後の後醍醐天皇）のもとを訪れた”

持明院統の指導者が消えれば、大覺寺統が政権を握る好機が到来す

る。

法皇の行動は、下心が見え見えであった。

その翌日も、法皇は、わざわざ広義門院（後伏見の後、西園寺公衡の娘寧子）に上皇の体調を尋ねている。しかし、不謹慎な法皇の期待も空しく、二月に上皇は一命を取り止めた。

ここまでは笑い話である。

しかし、この出来事は、大覚寺統が焦れ始めた事を示す。

この頃から、大覚寺統に、なりふり構わぬ政治行動が散見されるようになった。

例えば、この正月、驚くべき事実が発覚していた。

『東宮の息所、懷妊五个月を経て着帶す』

“皇太子の后が、妊娠五カ月となり着帶した”

この后というのが、西園寺実兼の娘禧子である。実兼は隠居である（【当事者達の晩年】参照）。そもそも西園寺は、持明院統派の公卿である。一体どういう事だろうか。

『去年の秋の比、東宮密かに盗み取るところなり』

“去年の秋に、皇太子が密かに盗み取ったのだ”

どうも、皇太子が父を真似て「花嫁泥棒」をしたらしい（【花嫁泥棒】参照）。

という事は、大覚寺統と西園寺実兼は、何故か手を組んだのである。

この年は、寺社勢力による騒動が相次いだ。三月、春日神社の神木が入洛し、閏三月、石清水八幡宮の神輿が入洛した。神木と神輿が同時に入洛するなど、前例がない。

更に、五月一日、ささいな騒動がもとで、今度は新日吉社と六波羅北方が衝突した。

相次ぐ騒動は、朝廷と六波羅の双方に打撃を与えた。とりわけ、後伏見上皇は、父に引退を打診している。これに対し、伏見は「花園

天皇が親政をし、自分が後見をする」意向を示した。

しかし、慌てた西園寺実兼が後伏見を説得したため、沙汰止みとなった。

八月二十一日、後伏見は実兼に次のような手紙を送っている。

『偏佞臣等之張行』（伏見宮御所蔵文書一、「藤原定家明月記の研究」三二五頁）

“（今回のお家騒動は）ひとえに、佞臣（京極為兼）の暗躍による”
一方、六波羅の方は、北方の金沢貞顕を鎌倉に帰す事となった。

ただ、幕府は、これで引き下がらなかった。

翌一三二五年一月、幕府は悪党を逮捕するよう、守護や地頭に命じた。しかも、その指令内容は「路地で人の物を盗り、むりやり物乞いをする者は、召し捕れ。噂だけでも捕えよ」という苛烈なものだった。

この時期の幕府は、内には保守的で、外には攻撃的である。かといって、それで屈するほど、寺社・悪党もやわではなかったが。

【謎の歌会】

一三二五年二月十一日、長講堂で蹴鞠が行なわれ、後伏見上皇・花園天皇が参加した。

『入道大納言声をはなちておめきざめき褒美申されければ』

（『二老革菊話』・「人物叢書 京極為兼」二五九頁）

“（蹴鞠を見物する）為兼卿は、大声を出し、院や帝の妙技を褒めちぎった”

花園は嬉しそうに為兼を見た。後伏見は為兼を一瞥しただけだった。

一三二五年三月八日、鎌倉が、またもや火事で焼失した。

『関東大焼亡、將軍御所・左馬権守屋形以下、相州、奥州、相模左近大夫、武蔵左近大夫、

八幡宮上下、建長寺門等悉滅亡』（公衡公記）

つまるところ、ありとあらゆる建物が、ことごとく焼失した。

『当時將軍ハ讃岐守基時龜谷亭ニ御座』

“ 火事が起きた時、將軍守邦王は北条基時の屋敷におわした”

その際、普音時基時（普音寺業時の孫）は、將軍の安全を確保する事に成功した。

四月二十四日、京極為兼が、一門一党を引き連れ、春日神社に参拝した。

『種々の願を果たさんがため』

“（長年の）数々の願いを果たすためであったという”

やがて、首座に着いた為兼の前で、蹴鞠がおこなわれ、延年舞・童舞が奉納された。

『儀の嚴重、臨幸の儀に異ならず。摂関の礼を超過する者か』

“ 儀式の嚴重さは、まるで天皇の儀式のようでした。摂関家を越える礼式でした”

臣下が何故それを行なう。その模様は、この頃病に倒れた、関東申次の西園寺公衡にも伝わった。公衡は病身をおして、弟覚円僧正から、儀式の詳細を聞いた。

二十八日、春日神社で歌会が開かれた。出席者の和歌に加え、都から送られた和歌が披露された。摂関家・公卿、そして“無名”の和歌が二首。伏見法皇らの和歌だろう。

事実上、朝廷上層部の大半が参加していた。こんな不可解な歌会は前例がない。

五月十日、病床の公衡は、日記の中で為兼の権勢を嘆いた。十七日、関白近衛家平が病で辞任した。そのため、朝廷は幕府に後任人事を尋ねたが、鎌倉を復興中の幕府は、「朝廷に委ねる」と回答した（正和五年三月四日伏見法皇事書案・「京極為兼と公家政権」）。

【謎の失脚】

この段では、「京極為兼がいきなり幕府の軍勢に捕えられる」。し

かし、その原因は、未だ解明されていない。目下どの説も、決定打を欠くのが現状なのである。

そこで、先にこの結末を記したうえで、前後の状況を可能な限り再現する。

一三一五年夏、鎌倉は復興で混乱していた。この時代、災害は兵乱を招くと信じられ、野心家は好んで政変を煽った。「平禅門の乱」・「嘉元の乱」、災害の後に起きた政変は多い。

この夏もそうだった。七月か八月頃、執権北条熙時が死去した。そして、遅くとも九月十日には、執権普音時基時・連署金沢貞顕の新政権が誕生した。しかし、諸記録が記す、これらの日付は混乱している。どうも、正確な記録が、残せない状況だったらしい。

いずれにしろ、数ヵ月前の火事で将軍を保護した基時が、突如執権となるのである。

家格でいえば、普音寺は連署を輩出した一門である。連署すら出していない金沢を差し置いても不自然ではない。しかし、基時と貞顕では、実力が違いすぎる。“傀儡”と見るべきだろう。

「御曹子高時が受け継ぐべき権力の座を死守する」。

この時期、得宗周辺は、「御曹子高時が受け継ぐ権力の座を死守する」事だけを考えていた。

九月二十一日、鷹司冬平が後任の関白となった。

しかし、新政権を発足させた幕府は、「二条道平が良かった」と難色を示した。そんな折の二十五日、公衡が永眠した（五十二歳）。そのため、父実兼が関東申次に復帰した。

だが、当時の実兼には、実衡（孫・二十六歳）という、立派な後継者がいる。隠居の復活には、理由があったと見られる。理由の一つは、西園寺の衰退だろう。

・伏見法皇派・京極為兼・洞院実泰（西園寺の分家、大覚寺統派ながら為兼と懇意）

・後伏見上皇派・西園寺実兼・公衡親子

公衡が後宇多上皇から勅勘を受けた過去といい。分家の影に怯え、ほとんど家来だった為兼の権勢に翻弄される今といい。これは「衰退」と呼ぶに相応しい。

隠居の再登板は、「後伏見上皇の院政を支え、西園寺の凋落を止めるため」だった。

したがって、まもなく起こる事件について、花園天皇は後年こう記す。

『彼の讒に依り』（花園天皇宸記）

“入道相国（西園寺実兼）が幕府に讒言したのだ”

幕府指導層の思惑と関東申次の焦燥。この二つは、為兼失脚の背景の中でも、ほぼ確実なものである。したがって、これらをもって説明する場合、為兼の失脚はこう説明できる。

「再び関東申次となった西園寺実兼は、権道に身を委ね、為兼を失脚させた。その際に、

関白の後任人事を巡る朝廷と幕府の対立を利用し、幕府の介入を仰いだ」

十二月二十八日、安東左衛門入道率いる六波羅が、毘沙門堂を包囲した。

『六波羅數百人軍兵、馳向毘沙堂、召取爲兼候、其罪科未知』（鎌倉遺文二五七〇二号）

“数百の六波羅兵が、毘沙門堂に馳せ向かい、為兼卿を捕らえた。その罪は分らない”

入道は御内人の長老である。内管領長崎円喜の直命だった。

この頃、六波羅は裁判制度の整備をほぼ完成させている。その六波羅から有利な判決を得るため、当時の公家や寺社は、何かと六波羅の活動に口を出したらしい。京極為兼などは、その筆頭格と見なされ、日頃から六波羅奉行人の敵視を受けていたのかもしれない。

六波羅に連行された為兼は、翌年一月十二日、入道が守護代を勤める土佐に流された。

そして、八月二十三日、鷹司冬平が退けられ、二条道平が関白となった。

幕府の措置は異様に厳しい。「幕府首脳部の緊張、関白人事を巡る軋轢、実兼の讒言。以上が重なり、“当事者の意図を超える大事件”となった」のである。

だが、ここまで話は進めたが、不可解な点が多い。

まず、勝利した筈の実兼は、このの後伏見上皇との対面すら憚り、持明院統から距離を置いた。

しかし、不可解な事に、孫の西園寺実衡を相変わらず、持明院統に仕えさせた。

しかも、歌道においては、“宿敵為兼”の京極派歌道を生涯奉じ続けるのである。

その姿は、「卑劣な讒言者」とは程遠い。仮にそのような人物であつたなら、実兼が亡くなった時、花園が『朝の元老、国の良弼』などと悼むだろうか。後代の史書が、こう疑う所以である。

「実は持明院統の討幕計画が発覚したのだ。西園寺実兼は、京極為兼を犠牲にして、事を収めた」

為兼が六波羅に連行されていく様子は、多くの衆に見物された。周りを軍兵が囲う中、毅然と牛車に乗る為兼。逃げも隠れもしない。既にこうなる事を覚悟していたのだろうか。

そんな為兼の様子を、一人の少壮の貴族が羨望の目で見つめていた。

『あな羨まし。世にあらむ思ひ出、かくこそあらまほしけれ』（徒然草）

“ああ羨ましい。この世に生まれたからには、あのような思い出が

欲しいものだ”

日野資朝。後醍醐天皇の側近として、討幕を始める人物である。

【脱線五・悪党、兵庫に乱入す】

播磨国は、悪党の活動が盛んな地域である。

『正安乾元ノ比ヨリ目ニ餘リ耳ニ滿テ聞ヘ候シ』（峯相記）

“（悪党の活動は）一二九九―一三〇二年頃から、目に余り、頻繁に耳にするようになった”

海賊・寄取・強盗・山賊といった連中が、各地で狼藉をはたらいたという。

『異類異形ナルアリサマ人倫ニ異ナリ』

“（その姿は）異類異形であり、人とは異なった”

『柿帷ニ六方笠ヲ着テ。烏帽子袴ヲ着ズ（「シ」を訂正）。人ニ面ヲ合セズ。忍タル體ニテ』

“柿色の衣に六方笠をかぶり、えぼし・はかまは着けなかった。そして、人に顔を見せようとはせず、世を忍んでいる様子だった”
山伏と同じ柿色の衣を身に纏い、えぼしもはかまも着けない。

悪党は、世を捨て、天狗と同じ世界に棲むようになった「異形」であつた。

それゆえ、彼らは世を忍び、人から顔を背ける。と、『峯相記』は記す。

ならば、彼等は世を捨てた日陰者か。悲観に囚われた落伍者か。さにあらず。

『高シコヲ負ヒツ。柄鞘ハゲタル太刀ヲハキ。竹ナガエサイ棒杖』

“（矢をいれる）えびらを負い、柄や鞘がはげた太刀をはき、竹長の棒状（で武装していた）”

『カカル類十人二十人或ハ城ニ籠リ。寄手ニ加ハリ。或ハ引入レ返リ忠ヲ旨トシテ』

“このような悪党等は、十人二十人の集団で城に籠り、（小競り合

いが起こると）攻め手に加わり、あるいは引き入れ、裏切りを旨とした”

『博打博奕ヲ好テ忍ビ小盗ヲ業トス』

“さいころ博打・賭博を好み、隠れて小規模の強奪を行なう事をなりわいとした”

『武士方ノ沙汰守護ノ制禁ニモカカハラズ日ヲ逐テ倍？ス』

“（そして）六波羅の沙汰や守護の禁制にもかかわらず、日を追って倍増した”

と、『峯相記』は記す。

一三一五年九月、六波羅北方の北条時敦は、淀・尼崎・兵庫の関税徴収の実態調査を命じた。十一月二十三日、これに対して、都賀河の僧達は「悪党」百名を動員して兵庫津に乱入し、守護使と合戦した。「悪党」の力は、遂にここまでのもとなったのである。

しかし、実のところ、この事件にいう「悪党」とは周辺で海運に携わる「淀・兵庫・尼崎の住人」の事だった。畿内と西国を結ぶ兵庫を支える民。『峯相記』の記す、悪党の姿とは程遠い。この頃、鎌倉幕府は、民との繋がりを失おうとしていた。

【文保の和談】

京極為兼の逮捕後、伏見法皇が討幕を策しているという噂が流れた。

『いかでか不義を存すべきや』（「南北朝の動乱と王権」一一〇頁）

“幕府に不義をはたらくなど考えもしない”

これに慌てて、一三二六年十月、法皇が幕府に送った起請文である。しかし、幕府はこれ以降、持明院統に対して拭い難い不信を持ち、大覚寺統に肩入れするようになった。

父貞時の「先例」に従い、御曹子北条高時が、十四歳でようやく執権に就いたばかりの幕府である。長崎円喜らは、絶えず周囲に目

を光らせていた。

翌一三一七年三月、高時が相模守となった。これも祖父時宗の「先例」である。

先例を重んじる政権では、温厚な人物が好まれる。連署は、引き続き金沢貞顕が務めた。一年で出家させられた前執権普音寺基時こそ、良い面の皮だろう。

こうして、最後の得宗が表舞台に立った。後代、高時は次のように評される。

『すこぶる亡氣の躰にて、將軍家の執権も叶いがたかりけり』（保暦間記）

“無氣力で、執権職を務められるような人物ではなかった”

しかし、当時の幕府を動かしたのは、長崎円喜と安達時顕である。

一三一七年四月、持明院統と大覚寺統の間で、今後の皇位継承について協議が行われた。

『春宮踐祚の後、後二條院の一宮立坊あるべし』（花園天皇宸記）

“尊治親王が即位した後は、邦良親王（後二条天皇の遺児）を即位させてもらいたい”

つまり、「持明院統の量仁親王が即位するのは、二代ほど待つて欲しい」というのである。

る。それが、大覚寺統側（後宇多法皇）の主張だった。

こんな勝手な主張があるか。

交渉は一旦決裂した。しかし、九月、伏見法皇が死去する。中心を失った持明院統は追い込まれ、その抗議の声も、西園寺実兼によって封じられた。

こうして一三一八年二月、花園天皇が退位した。幕府は一貫して退位を望んだ。関東申次の実兼も、幕府の意に従うばかりだった。花園は、この時の実兼を酷評している。

『國家の輔佐の器となすに足らず』

“国家の補佐に相応しい器ではない”

その後、花園はこの人らしい余生を送った。泰然と世を見つめ、儒学・禅・和歌に打ち込む花園を、貴族達は「変人」と陰口した。しかし、動乱期にあって、花園だけが理性的だった。花園の日記がなければ、鎌倉時代末期の再現は不可能だったといわれている。

本書でも、この日記に従い、国の停滞を破った「後醍醐天皇」の登場を記したい。

【脱線六・少年の愚】

一三一七年三月三十日、幕府からの使者が上洛した。幕府の意向は大覚寺統にあり。

花園天皇の退位は既に時間の問題だった。しかし、花園はこう思う事にした。

『在位已に十年に及ぶ。新院・後二條院共に十年に及ばず。愚身を以て已に此の兩院を過ぐるの條、誠に過分の事なり。何ぞ歎くべけんや』（花園天皇宸記）

“在位は既に十年に及んでいる。兄後伏見上皇も後二条天皇も、十年に及ばなかった。私は、二人よりも長く皇位にあった。誠に過分の事である。嘆く事などないではないか”

『學至らずと雖も、心を勵みて？を勤め仁を施す。若しくは此の一得纔かに天意に叶ふか』

“学至らずといえども、心を励まし徳につとめ仁を施した。あるいは、これがわずかながら天意になったのだろうか”

『年齒父の如し。誠に道理然るべし』

“皇太子は、私にとって父のような年齢である。即位するのも、まことに道理である”

ただ、内裏の造営が完成する前に退位する事だけは、残念でならなかった。

その夜、花園天皇は持明院殿を訪れた後、宮に帰還した。その途

中、雨が降り始めた。急な雨だったらしく、花園一行は、雨具の用意もしていなかった。

行列がようやく宮門に差し掛かった頃、花園を乗せた牛車は濡れ鼠となっていた。

『公卿皆退出す』

しかも、雨に濡れる事を嫌った随身の公卿達は、早々と行列を離れていた。

花園はいたたまれない気持ちになった。こんなものなのか。自分の退位が確実になるや、こうも変わるものなのか。行列には、「有守」という貴族が一人残るのみである。

やむなく、牛車から降りた天皇に対し、剣を持つ役も、鈴を鳴らす役も、有守が一人で行なった。しかしながら、役に慣れていない有守の作法は「言語道断だった」と花園は記す。花園は、もはや無言で宮に入って行った。

花園の、この日の日記では、『不可説不可説』（「口にするのも馬鹿馬鹿しい」や「理解に苦しむ」の意、花園は怒った時にこの言葉を使う）という言葉が何度も繰り返された。

後日、この日の日記を読み返した花園は赤面した。

『後に披見のところ、此の記甚だ以て愚なり。道義に至らざる故なり』

“後日読み返したところ、この日は馬鹿な事を書いてしまった。道義に至らない訳だ”

花園は正直なところ、この日の記述を破棄したかったが、思い直して残す事にした。

ひとえに、『少年の愚』を恥じての事である。

第三章：忘れられた時代（後書き）

というわけで「忘れられた時代」でした。

子供の頃、どの本や漫画を読んでも、

「元寇（弘安の役）終了⇒いきなり、永仁の徳政令⇒話が飛んで、倒幕」であり、この時代は、省略されていました。

不満ではありませんでした。

同時に、何で省略されているのかが疑問でした。

しかし、本章を書くに当たって、色々調べる中、次の事情がある事を知りました。すなわち、「この時代は、圧倒的に記録が残っていない」のです。

理由1：幕府側

そもそも、鎌倉幕府の歴史は「吾妻鏡」という史書をもとに、研究されています。頼朝と義経・北条と三浦といった、鎌倉幕府の内事情が「吾妻鏡」を読めば分かるからです。

さて、この「吾妻鏡」ですが、北条時頼時代の三浦氏滅亡で終わっています。そのため、これ以降の幕府の内部事情は、断片的な史料（鎌倉遺文とか）をもとに、”手探りで判断する”しかありません。

その結果、元寇という一大イベントが終わった後の事情は、よく分からないのです。

理由2：朝廷側

京極為兼の事件のせいです。下手な記録を残して、鎌倉幕府に睨まれるのを恐れた貴族達は、この時期の日記を処分してしまいました。

（あるいは比叡山等は、正確な記録を遺していたのかもしれませんが、
ですが、いかんせん、信長公に燃やされて今や灰です）

現代の歴史学においても、「都の貴族の日記」は超重要史料です。
日記がなければ、政治事件の詳細な事情は、容易に掴めません。

・最後に、では本章は何故書けたのか？

近年の研究の著しい進展によります。

森茂暁氏・細川重男氏・本郷和人氏・村井章介氏といった方々が、
意欲的な研究をされた結果です。その成果を一粒一粒、拝借して、
本章を記しました。ご堪能いただければ幸いです。

蛇足…欲を言えば、持明院統の日常を、もう少し書きたかったです。
例えば、花園天皇が、父伏見引退の食卓で記録している「典
子」。

晩年の後深草上皇の日常を世話した女性です。
だから、上皇の話題が出て、泣いてます。

第四章：討幕 ―策謀編―（前書き）

普通は、ここが始まりなのでしょうね。

鎌倉幕府の倒壊と言えば、遠い話に聞こえるかもしれませんが。

その原因は、「国政の停滞」と「社会システムの混乱」。

明治維新から140年。一つの国家体制（中央集権）が、ある意味で曲がり角の一本目（経済的に見れば、戦前と戦後は別に断絶していない）を迎えようとしている現代にも、重なるところは少なくありません。

「鎌倉時代から室町時代」への変動は、「日本を再生する話」です。革命ではなく、改革の話です。

じつのところ、後醍醐天皇も鎌倉幕府も、見つけている事（政治目標）は、似ています。

―すべてを総括できる政治体制を築きあげる―

その手綱を握るのは、どちらか…。

第四章…討幕 ―策謀編―

第四章…討幕

【後醍醐天皇の即位】

一三一八年二月、後醍醐天皇が即位した。天皇は御年三十一歳である。

しかし、政治は父後宇多法皇が行なった。法皇は、時期をみて皇太子邦良親王を即位させるつもりだった。「この孫こそ大覚寺統の後継ぎ」、法皇はそう考える。

そのため、天皇と法皇の関係は、良好とはいえないものだった。しかし、両者はそれなりには周りが見えたので、あからさまな対立は避けていた。

その緩衝材となったのが、天皇の姉奨子である。奨子は五辻忠子の娘だが、父との仲が良く、父と弟の仲を取り持ち続けていた。三月、後醍醐はこれに報いるため、姉を皇后に立てた。勿論、本当の皇后ではなく、単に地位を与えた“名誉皇后”である。

京極為兼の失脚後の混乱に乗り、天皇と皇太子を大覚寺統で独占した今、いかに持明院統を封じ込めるかが目下の優先課題だった。内輪もめどころではなかったのである。

翌一三一九年一月十四日、持明院統の後伏見上皇・花園上皇は、西園寺邸を訪問した。

持明院統とて、手をこまねいていた訳ではなかった。

関東申次との関係を修復し、いずれ皇位を奪回する。これがなければ、持明院統に明日はない。

しかし、何故わざわざ二人で。

どうも後伏見上皇は、この数年で貴族達が手のひらを返していく様子をみて、結局「兄一人、弟一人」である事を悟ったらしい。

花園上皇の日記には行幸（お出かけ）や儀式に参加する公卿の名が逐一記されている。これを丁寧を追うと、公卿達が手のひらを返す様子を、よく窺うことができる。

そう、貴族とは、その大半が、あるじを都合よく変えることで命脈を保ってきた連中なのである。

父伏見法皇の死後に起きた一連の騒動で、持明院統は皇位を失った。

皇位のない持明院統からは、官位もろくにももらえない。

そのため、多くの貴族は、持明院統から距離を置くようになっていた。

手のひらを返された兄弟は、おそらく、この時になってはじめて自分たちの境遇を知ったのであろう。

「兄一人、弟一人」

だから、この兄弟の関係は一変した。

この頃を境に、花園の日記には、しきりに兄後伏見上皇の名が記されるようになる。

その内容は他愛のないもので、例えば、「宴席への出席をしるる弟花園に対して、兄後伏見が無理に何度も使者を送って、引っぱり出した」といったものである。

そして、そのような出来事を日記に記す花園上皇は、表面上、迷惑そうなそぶりをしているが、どこか嬉しそうであった。

古人曰く、困難は人を結びつける。

この日も、兄後伏見上皇は、西園寺実兼と一人で会うのが億劫なので、花園を連れ出した。

京極為兼の事件が起こる前には見られない事であるが、後伏見は、弟に自分の弱さを見せたのである。

だがこの日、家主の西園寺実兼は、ついに姿を見せなかった。

『起居叶はざるに依り、兼ねて？障子を儲け候するの由』（花園天

皇宸記)

“病で起き上がれないので、青障子を設けてその陰に仕候すると伝えてきた”

これは本当だろうか。三月二十七日にも、両上皇は西園寺邸を終日訪れている。しかし、その日も実兼は“留守だった”。代わりに、年端もいかない、ひ孫の公宗が散策のお供をしている。

このままでは埒があかない。

五月十五日、一計を案じた両上皇は、ある「琵琶」を修理させ、西園寺邸を訪れた。

琵琶は、西園寺家のお家芸であった。

仮にも、主筋(持明院統)の両上皇にここまで気を使わせた以上、これを無視すれば西園寺は不人情な貴族と後ろ指を指されることになる。

両上皇の計らいに、さすがの実兼も姿を見せた。

『近年此くの如き一獻の席に候せずと雖も、故に三獻に祇候すべき』

“近年、このような席には出ておりませんが、本日は三献ばかりお付き合致します”

この日、両上皇は、久しぶりに実兼と対面したのである。

しかし、人と人の関係は難しい。

…というよりも、実兼が難しい人になってしまったのだろうか。

この日、実兼は、相当淡々としていたらしく、花園の日記が記録する宴席の様子は、おおよそ乾いたものであり、そこには、延々と実兼が「杯を仰ぐ」様子が描写されるのみである。

しかも、家主は、しばらく席を共にした後、再び邸の奥へ引っ込んでしまった。

その後ろ姿は、あたかも苦行を終えた修行僧のようであった。

【鎌倉と六波羅】

一三一九年春、六波羅は、山陽・南海の十二カ国に、奉行人と両六波羅の家人を一名ずつ派遣した。その任務は二つ、現地の守護代と協力して悪党の籠もる城郭を焼き払う事と、海賊が根城とする湊に地頭を駐在させて海路の安全を確保する事であった。

『兩三年ハ靜謐ノ由ニテ有リシ』（峯相記）

“その後二三年間、（播磨国は）静かになった”

これが、一定の成果を収めた。

勢いを得た六波羅は、その後、常時、地頭を海上警固に張り付かせた。これに危機感を覚えた“悪党”らは、警固役に対して盛んに賄賂を贈り、討伐を免れたという。

これらの一連の積極策は、六波羅の独走だったのか、あるいは幕府の指示だったのか。

この年五月から翌年九月にかけ、幕府は「六波羅管轄国六カ国」を直轄国に編入している。対象となったのは、加賀・美濃・尾張・三河・伊勢・志摩の六カ国である。

いずれも、長年六波羅の管轄国だったが、この時期だけ、幕府が管理した。

この措置について、「幕府が六波羅の独走を牽制した」と見る見解と、「幕府が六波羅の負担を肩代わりし、六波羅を援護した」と見る見解があり、対立している。

前者を採用するなら、次のように論が進められる。

・「鎌倉時代末期、鎌倉と六波羅は対立し、それが後醍醐天皇に跳梁する隙を与えた」

後者を採用するなら、次のように論が進められる。

・「六波羅が、幕府に管轄六カ国を委ねたのは、南方の大仏惟貞（大仏宗宣の子）の奇策であろう。北条にとって、悪党の活躍は、こ
とほどさように深刻な問題だった」

両説とも決め手がないので、判断は保留しておく。しかし、鎌倉幕府が滅んだ一因が「悪党の活躍」であり、この出来事が、その重大な伏線となった事だけは確かである。

『奥州惟貞下向ノ後ハ彌蜂起シ。正中嘉暦ノ比ハ其振舞先年ニ超過シテ耳目ヲ驚ス』

“一三二四年、大仏惟貞が（任を終え）鎌倉に帰った後は、いよいよ悪党が蜂起した。

一三二四〜一三二八年頃、その活動は以前をはるかに超え、諸人の耳目を驚かせた”

『吉キ馬に乗り列リ。五十騎百騎打ツツキ。引馬。唐櫃。弓箭。兵具ノ類ヒ金銀ヲチリバ

メ。鎧腹卷テリカガヤク計リ也』

“（悪党は）良馬に乗って、五十騎百騎で活動し、立派な武具を身に付けるようになった”

これらは、「悪党の成長」というよりも、「より豊かな層が、悪党として、北条と対立するようになった」と解すべきである。動乱前夜、北条は静かに孤立しつつあった。

【道を知る人】

一三一九年六月末日、六条有房が内大臣とされた。有房は、後宇多法皇の側近を長く務めた人物だが、既に死の床にあった。特別の榮譽を賜った有房は、七月二日永眠した。

有房が亡くなり、法皇を制御できる者がいなくなったのだろうか。閏七月二日、法皇は花園上皇が領する室町院領の一部伊勢国證誠寺を突然奪った。

『法皇より故無く召さる』（花園天皇宸記）

“法皇から、理由もなく召された”

花園は洞院実泰を通じてこれに抗議したが、「先例がある」と法皇

に退けられた。

日頃、学問研鑽に励む法皇がこんなまねをするとは、言行不一致も甚だしい。

花園はこれに憤った。

しかし、重ねて抗議する事は、思いとどまった。

『朕身を顧みて忽ち理にあらざるを知る』

“自分の身を顧みて、抗議するのが道理に合わないと気付いたからである”

花園は、在位時に兄後伏見上皇が「冬房という貴族の所領」を故無く取り上げ、女官に与えるのを黙って見過ごした事があった。今も、冬房は、所領を奪られたままである。

『豈吾が小過を穩し、他の理にあらざるを謂ふか』

“どうして自分のあやまちを捨て置き、他人の不条理を口にできる”
おそらく、理屈としてはその通りなのだろう。

しかし、このあたりが、花園が「変人」と陰口される所以である。世に、高潔な人は少ない。

従って、この上皇は、本質的に孤独だった。

四日夜、そんな上皇に一人の友ができた。

『夜に入り資朝参る。前に召し道を談ず』

“夜に入り、日野資朝が参上した。御前に呼んで、「道」について語り合った”

「道」というからには、儒学の話をしたのだろう。

当初、軽く話をするだけのつもりだった花園は、しだいに眼を輝かせた。

どんなに難解な話を振っても、資朝はついてくる。

しかも、並みの学者や僧のように、経書の字ずらをただ鵜呑みにしているだけではない。

その本意を正確に掴んでいる。

—この男、違—

『今始めて意を知るに逢ふ』

“今始めて、我が意を知る人に出会った”

二人は時を忘れて語り合い、気が付くと、外には陽が昇っていた。

日野家は、持明院統に仕える学問の家である。資朝は、その俊英だった。

同時に、朝廷の現状を憂う人物でもあり、だからこそ二人の君主と心を通わせた。

一人は花園上皇。そして、もう一人は後醍醐天皇である。

【帝王の師】

一三一九年九月、この年、厄年にあたる花園上皇は、これを機に出家しようとした。

日々の雑務から離れ、学問に打ち込むためであった。

しかし、これを知った兄後伏見上皇は血相を変えた。

『親王の事以下扶持すべき由の事、先皇の仰せなり』（花園天皇宸記）

“我が子、量仁親王（北朝初代）を養育するよう、父伏見法皇が遺言したではないか”

もちろん、「養育」は口実である。

父の名を出せば、生真面目な弟は無理を言えないという判断だった。実際その通りで、花園は、やむなく隠居を思い止まった。

しかし、相当未練が残ったらしい。

六日の日記で、花園は延々と愚痴を書き続けている。

そもそも、花園が出家を思い立ったのは、学問専念のためだけでは

なかった。

『或は相傳の私領久しく返し給はざるの地有り』

“（持明院統に仕える男女の中には）所領を長く召し上げられたままの者もいる”

『隠居を企て、諸事を省略し、男女又人数を減すべき由を思ひ企つる』

“隠居して、諸事を省略すれば、奉公する男女の数も減らせたのに”

花園は、隠居によって御所の運営費を削減し、それで浮いた所領を、困窮する貴族らに返してやるつもりだったようだ。

だから、その意図も理解せず、兄に阿った貴族らの態度には、どうにも我慢がならなかった。

朝廷において、大局を見ることができる貴族は、数えるほどしかない。

今回の出家をめぐる出来事についても、

「世上を乱す」「上皇（兄君）に御向背するとは」「御意思に背く」この手の発言が後を絶たない。

『此くの如き利口出来す』

“こんな告げ口が出てくる”

しかし、立場があるので、貴族らを叱責するわけにもいかない。

以前に所領を工面し、貴族らに土地を返した時も、日野俊光（資朝の父）などは、

『徳行を立て、相傳の地悉く返し給ふべし』

“（院におかれましては）更なる徳政を掲げていただき、この際、院に預けたままになっている我らの土地を、全て返していただきたい”

などと言ったという。

さすがに、こんな進言は無茶である。

そんな事をすれば、持明院統は組織として成り立たなくなってしまう。

大黒柱である日野家に、それが理解できない筈もない。しかし、この体たらくだった。

花園が愚痴を言う気持ちも分かるというものである。

十月二十六日、花園は重ねて「量仁親王に、帝王学を伝授してくれ」と頼まれ、これを了承した。元々、学問が好きな上皇は、甥の教育も悪くないと考えたのである。

【儒学奨励と蝦夷蜂起】

前段の花園上皇は、あるいは後醍醐天皇に触発されたのかもしれない。

一三一九年秋頃、宮中では儒学奨励運動が始まっていた。

『冬方朝臣・藤原俊基等、此の義殊に張行の者なり』（花園天皇宸記）

“吉田冬方・日野俊基らが、旗振り役をしている”

何かと風紀が乱れている、宮中の綱紀粛正が目的だった。

もっとも、腐敗を指摘された側には、これが面白う筈はない。

一部の公卿が、俊基らに反発した。

その点、花園は俊基らを次のように擁護している。

『仕朝の士、隠を以て難ずべからず。隠山の士、仕朝を以て難ずべからず』

“人にはそれぞれ役割があるのだから、俊基らが役割を果たすのを非難すべきではない”

わざわざ、「隠山の士（隠者）」などときわどい表現を用いているのは、出家できなかった事を引きずっているからだろう。とはいえ、言わんとするところは、正しい。

ただ、当時の「腐敗」とは、後宇多法皇に他ならない。

この頃、善政が奨励される一方で、法皇による強引な人事と賄賂が横行していた。

『政、賄を以て成す』（花園天皇宸記）

“政治で賄賂が横行している”

これを踏まえると、後醍醐天皇の儒学奨励は、父法皇への挑戦に見える。

法皇と天皇の仲違い。大覚寺統分裂のきざしは、この時期には外部に漏れるようになっていた。

例えば、十一月十五日、後醍醐の母五辻忠子（談天門院）が逝去した際、法皇は冷淡な態度を見せた。

『後聞く、法皇御喪籠の儀にあらず』

“後に聞いたところ、後宇多法皇は喪に服さなかったそうだ”

そして、それは持明院統の注視するところであった。

さて、ここで、目を北に転じたい。

翌一三二〇年、数年間小康状態にあった出羽で、蝦夷が再び蜂起した。^{アイヌ}

そもそも、蝦夷が、最初に蜂起したのは、元寇前の事である。

以来、数十年、この地は安定していなかった。

蝦夷は、奥羽、あるいは今日の北海道で、交易や漁業や狩猟を営む民である。

そこに、北条得宗家の力を背景に君臨したのが、安藤氏であった。したがって、安藤氏やその背後にいる北条得宗家は、侵略者といえるよう。

かつて、蝦夷は、北に接近した蒙古に対応するため、盛んに動いた。

今度は、南の方がうるさくなったから、それに対応しているだけであつた。

しかし、蝦夷に背景があるように、安藤氏にも事情がある。

端的にいえば、安藤氏の支配する津軽十三湊は、北の海最大の湊であった。

「北の海」は日本海と太平洋が出合う要所である。

日本全国はおろか、元・高麗との交易も盛んで、莫大な富が動いたという。

北条得宗家も、「鎌倉・津軽」間を往復する船に特権を与え、北の経済活動に参加していた。

このような地の、支配者の地位は、おいしい。

だから、安藤一族の間で、後継者争いが起きた。

それは、「北の海」を巡る争いであり、海で交易を営む蝦夷にとっても他人事ではなかった。

そのため、安藤氏の対立は蝦夷を巻き込み、奥羽は大乱に陥った。

そして、おそらくこの大乱の直接のきっかけは、この年日本列島を襲った寒波である。

では、以上の事を踏まえて、再び京に視点を戻そう。

京も、寒波の余波を受けた。

『五六旬の老人皆云ふ、未だ此くの如き寒有らず』

“五十六十の老人は口をそろえて、こんな寒さは体験した事がないと言っている”

『北國の人、寒死に遇ふ者十の五六と云々』

“北國の人は、十のうち五六が凍死したそうだ”

三月二十四日、後醍醐天皇は、この危機に日野資朝を蔵人頭（実務の要職）に抜擢した。

【辛酉の年】

一三二一年は、「辛酉の年」にあたる。「政治を革める」という意味を持つ年だった。

持明院統にとっては、待望の年の到来である。

二月、後醍醐天皇は、公卿会議の提言を容れて、辛酉革命説を否定した。

そして、従来とは異なる理由で改元を行なった。これは、退位を望む声を、かき消すためだった。

しかし、後伏見上皇（持明院統の総帥）は、この機を逃さなかった。

『ことは旧きを革めて新しきをたつべき天運なり』（盧山寺文書）

”今年辛酉の年、帝が退位すべき年です”

『すでに使を東関に遣して思ところを述べんとす』

“すでに幕府に使者を送りました”

十月四日に、後伏見が捧げた、岩清水八幡宮への願文である。

後伏見は、「辛酉の年」を口実に、幕府に対して、後醍醐天皇の退位を働き掛けたのである。

後醍醐天皇は、自らの目論見が甘かった事を痛感した。

十月十六日、父後宇多法皇が、大納言吉田定房（後醍醐の傳役）を鎌倉に向けて発させた。

その目的は、「後醍醐天皇への政権移譲」を幕府に打診する事であった。

定房が交渉役選ばれたのは、法皇と天皇が、共に信頼する臣下であるからだ。

『凡そ定房卿は常に直言を納るる』（花園天皇宸記）

“定房卿は、事あるごとに、後醍醐天皇に諫言をしている”

宮中でも評判の一徹者なら、法皇と天皇のどちらも裏切らない。

このような人選は、背後にある、法皇と天皇の側近団の緊張関係を物語っている（増鏡）。

実は、後宇多法皇は、この時点でも、政治案件のほとんどを決裁していた。

そんな法皇が、簡単に引退するとは考えにくい。
おそらく、後醍醐側が、政権移譲を強力に求めたと思われる。
口実は、さしずめ「親政を始めて、“政治を革め”、持明院統の声を消す」だろう。

法皇は、しぶしぶこれをのんだ。以前、後醍醐が政権を握る事を認めていた（【約束】参照）うえに、この頃政権の腐敗を内外から指摘されていたからである（前段参照）。

十一月、鎌倉に着いた定房は、周到的用意をしたうえで、交渉にのぞんだという。

『吉田大納言定房爲勅使下向、御治天下之事、數十ヶ條被仰合云々』（鎌倉年代記裏書）

“勅使吉田定房は、のべ数十カ条に及ぶ、親政に関する規定を提示し、交渉に臨んだ”

法皇と後醍醐天皇の対立を幕府に突かれないう、定房は万全を期したのである。

定房の用意した詳細な規定に感心した幕府は、あっさりと申し出を承諾した。

こうして、十二月、親政が開始された。

鎌倉幕府は、この時、すすんで自らの処刑書にサインした事に気付いていない。

【老臣の諫言―討幕は可能か―】

定房は、前段の鎌倉に行く旅先で、後宇多法皇から依頼されたのか「後醍醐天皇の討幕計画」について、奏状を書いている。後世、これを「吉田定房奏状」と呼ぶ。

『国家草創の事、叡念議あるに似たりと雖も』（『日本中世史を見直す』二四五～二五四頁）

“新しい国造りについて、帝のお考えに、議論がなされている”

『天命未だ知らず、時機測り難し』

“しかし、天命はいまだ明らかではなく、時機が来ているか測りたい”

『敢て十分の逆鱗を犯す』

“私は、敢えて、帝の逆鱗に触れる意見を奏上したいと思う”

さて、このおだやかではない言葉で始まる奏上は、この頃の朝廷の裏事情を語っている。

「国家草創の事（新しい国造り）」

この文言は、どう考えても”後醍醐天皇による討幕計画”を示している。

後世の我々は、後醍醐天皇が鎌倉幕府を倒す事を知っている。しかし、「一体後醍醐天皇がどの時点で討幕を決意したのか」については、議論が分かれていた。定房の奏状により、後醍醐天皇は非常に早い時期から討幕を考えていた事が判明したのである。

あるいは、”そもそも鎌倉幕府を倒すつもりで即位した”といっても過言ではないかもしれない。

前段で、父後宇多法皇が後醍醐天皇に政権を譲ることを認めた裏事情。それは、暴走を始めた息子をなだめるためだったのである。

そして、定房の奏上も、つまるところ後醍醐天皇を止めるための諫言であった。

これを踏まえ、以下ではその要所を見よう。

『王者は仁を以て暴に勝つ事』

“王者は仁政によって天下を手にするものです”

『頃年天下の体、百分して九十は武家の有なり』

“現在、天下の百のうち九十は、幕府の手中にあり、”

『革命の今時、関東妖なし』

“（しかも）辛酉の年にあつて、幕府に決定的な衰退は未だ見られません”

つまり、幕府は強大で、衰退の兆しすら見えないから、討幕計画など捨てなさいと定房は言っている。

おもしろいのは、「幕府は天下の九十をおさえている」と分析している事だろう。

いいかえれば、鎌倉時代末期、朝廷はもはや天下の十しかおさえていなかったのである。

― 十対九十 ―

これでは話にならない。

研究者が好んで用いる表現として次のようなものがある。

「鎌倉幕府は全盛期に滅んだ」

そう、後醍醐天皇が討幕計画を始めた時、まさに鎌倉幕府は全盛を極めていたのである。

だから、定房は次のように言葉を続ける。

『異朝は紹運の体すこぶる中興多し』

“王朝の交代がある他国ならば、王室が衰えても、再び繁栄させる事ができます”

『本朝の利利祚一種なるが故に、陵遲日に甚だしく、中興期なし』

“本朝では王朝の交代がありません。故に、衰退した朝廷を再び繁栄させる事は至難です”

『通三儲式の廃立、高槐大樹の黜陟、事みな武威より出ず』

“天皇も皇太子も、大臣も将軍も、幕府が決めているという現実を見て下さい”

そう、朝廷はもはや手足をもがれたも同然。それが現実であった。

だから、このような「現実」を踏まえて定房は、後醍醐天皇の討幕計画をこう断じている。

『天嗣ほとんどここに尽きなんか』

“朝廷は今度こそ滅亡してしまいます”

『兵革を用いずして暫く時運を俟つ。これ大義のみ。』

“倒幕計画はやめ、幕府が衰退する日をお待ち下さい。それが大義です”

朝廷の指導者相手に、滅亡の可能性を指摘するのだから、定房もただ者ではない。

そして、このような言葉は、あくまでも後醍醐天皇を思つての事だったようだ。

かの花園上皇が定房を『忠臣』（花園天皇宸記）と評し、賛辞を惜しまない理由がここにある。

定房は、並みの一徹者ではなかった。

『この意見、去年六月廿一日の状なり。件の状は禁中御調度の内にあり。仙洞取り置かるるの由風聞す。定めて出現の期あらんか』

“この意見は、去年六月二十一日にも書いた。その紙は、禁中の御調度の内にある。後宇多院が書状を取り置かれているのだと聞く。いずれ、帝に提出する機もあろう”

しかし、史実としては、定房の帰京後まもなく、後宇多法皇は腰痛で倒れる。

そして、そのまま起居もままならぬ体に衰えてしまうのである。

【脱線七・日野資朝と老犬】

後醍醐天皇を支えた側近達。多くは学問を研鑽した者達である。

彼らは、大きく、二つの層に分かれていた。

・父の代からの側近…所謂「後の三房」。吉田定房・万里小路宣房・北畠親房。

・後醍醐自身の側近…日野資朝・日野俊基・四条隆資・千種忠顕ら。前者は、後宇多法皇が送り込んだ“お目付け役”としての色合いが濃い。

そのため、後者との間には、「世代間断絶」ともいうべき齟齬があ

った。

後日、それに拍車が懸かったのは、後者が公家社会の異端児達だったからだろう。

その代表格が日野資朝である。日野家は、本来持明院統派である。しかし、資朝は持明院統の花園上皇と友情を育てる一方で、政治的には後醍醐天皇に重用されていた。

その資朝には次のような逸話がある。ある時、西大寺の静然上人が参内した。腰は曲がり、眉は白く、その姿からは長年に渡る仏道修行で得た威徳が窺い知れた。

その様子を見ていた西園寺実衡（西園寺実兼の孫・故公衡の子）はつぶやいた。

『あな尊の気色や』（徒然草・第百五十二段）

“何と、尊いお姿だ”

しかし、それを横で聞いていた日野資朝は、冷淡に応じた。

『年の寄りたるに候ふ』

“（ただの）年寄りです”

後日、資朝は「贈り物」を西園寺邸に送り、使者にこう伝えさせた。

『この気色、尊く見えて候ふ』

“この姿が、尊く見えたのでお持ちしました”

実衡は仰天した。差し出されたのは“老いて毛の禿げたむく犬”だったのである。

当時、西大寺には、得宗家の所領経営を手伝って理財をなす僧や、仏法をもって朝廷・幕府の指導層に取り入る僧が数多くいた。

どうやら資朝は、そんな西大寺の老僧が、お気にめさなかったらしい。

無論、こうした姿勢は、公家社会への挑戦と捉えられかねなかった。

そして、だからこそ、皇后の父西園寺実兼や、諫言役吉田定房の評

判は上がった。

『はかばかしき人のさふらはぬ故にこそ』（徒然草・第百十八段）

“すっかりした者が、側に仕えていないからこうなる”

だから、慣習を守らない皇后の側近を叱った実兼の逸話が、好意的に残されている。

【後醍醐天皇の親政】

一三三二年二月、後醍醐天皇は、年中の官位除目と叙任の回数を、昔の形に減らした。

『政道は淳素に歸すべし』（花園天皇宸記）

“政治というのは簡素であるべきだ”

これを聞いた花園上皇は、「もっともだ。帝は朝廷を建て直すかもしれない」と喜んだ。

この時期、政権を譲った父後宇多法皇は腰痛で病床に就き、皇后の父である西園寺実兼も死病に倒れている。名実共に、後醍醐天皇の時代が始まろうとしていた。

『夙に起き、夜半におほとのごもりて、民の憂へをきかせ給ふ。』

（神皇正統記）

“早朝に起き、夜遅くに寝るまで、民の訴えに（自ら）耳を傾けられた”

このような善政は、京極為兼の騒動や、賄賂が横行した後宇多法皇の時代を忘れさせるものだった。

十八日、上皇と日野資朝が、深夜まで文学・仏教の話をした際にも、帝の話は出た。

『当時の政道正理に叶ふ』（花園天皇宸記）

“今の帝の政治は、道理にかなっている”

さて、ここで話は分からなくなる。

後醍醐天皇は大覚寺統である。花園上皇は持明院である。

両者は、宿敵の筈ではないか。

だから、説明しよう。

この時期、後醍醐天皇は、大覚寺統の総帥ではない。次期総帥は甥の邦良親王（後宇多法皇の嫡孫）なのだから、有り体に言って、反主流派である。本質的な敵は、父後宇多法皇であった。

また、持明院統の政敵も、実は「大覚寺統の総帥」後宇多法皇である。

後醍醐天皇と花園上皇。実は、この時期、両者の政治的立場は非常に近かったのである。

そして、もう一つ。両者の境遇は似ていた。

先にも述べたように、後醍醐天皇は、大覚寺統の総帥にはなれない。そして、花園上皇も、後伏見上皇の弟であり、持明院統の総帥にはなれない身である。

共に深い学識を持ち、当時の状況にいいしれぬ疑問を抱きながら……。そんな花園からみて、後醍醐天皇は、もう一人の自分であった。もしも自分が天皇であった時、十代の若年でなかったら。あれほど病弱でなかったら。

後醍醐天皇のように、朝廷を改革したかった。

こうした背景があり、花園は後醍醐天皇を好意的に見る事が出来た。

二十三日、花園上皇は、後醍醐天皇の始めた風潮を後押しするため、尚書（儒学）の講義を始めた。

『近代儒風大廢し、近日中興す。然り而して未だ廣きに及ばず。或は異議有り。人の過を解かんがため、殊に談ずるところなり』

“ 廢れていた儒学が、近頃（帝によって）見直されている。しかし、未だその風潮は広く及んでいない。間違った見解も横行している。これを解くため、特に講義を行なうところである “

一三二四年三月まで続く、この「尚書談義」は月六回。資朝ら多くの俊英、時に後伏見上皇・量仁親王も参加し、日々講義と議論が行われた。

のちの北朝の帝王学は、ここで誕生したと思われる。
更に、後年には、「論語」の講義もなされた。

四月七日、中納言北畠親房が検非違使別当（警察権を併せ持つ都長官）となった。この親房のもとで、検非違使庁は京の商人や神社神人（流通に大きな役割）を朝廷の傘下に加えていった。またこれらと並行し、日野資朝らの手引きで、寺々の僧や悪党が、帝の周囲に集められていった。のちに、これらが討幕勢力となり、南朝に引き継がれていく。

【何故幕府を倒すのか】

一三二二年春、出羽では安藤氏の内紛が激化していた。

津軽安藤貞季と秋田安藤宗季・季久兄弟による家督争いである。

両陣営は、共に御内人であるため、幕府に裁定を求めた。

しかし、内管領長崎高資（円喜の子）が双方から賄賂を受け取ったため、幕府は裁定を下せなくなった。

四月九日、京では、持明院統の後伏見上皇が、弟花園上皇に政務を譲ろうとしていた。

『永福門院を以て、院中の雑務悉く沙汰すべきの由を傳へ仰せらる』
（花園天皇宸記）

“（兄君が）永福門院を通じて、持明院統の政務を譲りたいと伝えてきた”

しかし、花園上皇はこれを再三固辞した。

その理由はよく分からない。

ではあるが、あえて推測するなら、後醍醐天皇が政治改革を進めて

いる今、自らが政治の舞台に立つ必要はないと考えたのではないだろうか。

自分は、あくまでも学問をもって、朝廷の気風を変える。

この時期の上皇の心理は、おそらくそうしたものだっただろう。

かくして、政務委譲の件は、兄弟で色々話し合った末、沙汰止みとなった。

五月二日夜、花園は、日野資朝ともこの話をしている。

『身の進退の事申す旨有り』

“我が身の進退について言う事があった”

おそらくその会話内容は、資朝を通じて、後醍醐天皇の耳にも届いただろう。

資朝の立場は不可解である。

一体、資朝は持明院統派なのか、後醍醐天皇派なのか。

資朝は持明院統の花園と友情を育てている。

一方で、花園に隠れ、おそらくこの頃には、討幕計画の首謀者となっていた。

その目的は、無論、”後醍醐天皇の手による”倒幕である。

この点、資朝に葛藤はなかったのだろうか。

仮に後醍醐を助けて幕府を倒したとして、その先持明院統はどうなる。

かつて、後醍醐の父後宇多法皇は、こんなうかつな約束を息子にしていた。

『天下之謳歌如虞舜夏禹者、可任皇祖之冥鑒』（【約束】参照）

”天下が、後醍醐天皇の子孫の即位を強く望んだ場合は、そうしても良い”

これは、「後醍醐天皇とその子孫によって、皇位を独占しても良い」と解せる。

善政によって天下を喜ばせ、かつ打倒鎌倉幕府の方策を練る後醍醐天皇には、それなりの野心があった。これを踏まえると、後醍醐天皇と歩みをとにもにする資朝は、本質的に花園上皇を裏切っている。

仮に、そんな資朝を弁護するとすれば、その使命感であろう。

今や、天下の九割をおさえる幕府は、迷走の末、根から腐り始めている。

かたや、朝廷は分裂に疲れ、吉田定房が「滅亡」を指摘するまでに至った。

この時代、日本は、国の根幹が麻痺しつつあったのである。

これは、政治が現実への対応力を失い、国が崩壊しつつあった事を示す。

討幕計画は、この停滞を打破するために始まったといっても過言ではない。

仮に後醍醐天皇が、（後宇多法皇の院政・持明院統を排除し）、皇位を独占する結果になったとしても、

それによって、新たな朝廷を建て、日本を蘇らせる事は可能となる。資朝は、これに賛同したからこそ、討幕計画の首謀者となったのである。

七月二十七日、花園上皇はいつものように尚書談義を行った。

これに出席した紀行親が、“ある発言”をした。

『近日禁裏の風なり。即ち宋朝の義なり』（花園天皇宸記）

“（紀行親の発言は）近頃、帝の周囲で流行っている宋学の影響を受けたものだ”

宋学とは「華北を奪った異民族を倒せ」という思想だった。日本に当てはめれば「鎌倉幕府を倒せ」とも解せる。花園は、宋学に理解も示していたが、警戒はしていた。

『或は取るべからざるの事有り』

“（この学説には、）決して採用すべきでない考えが混じっている”

行親は、あきらかに後醍醐天皇の影響を受けている。

後醍醐天皇は善政を行う君主である。

正しい…、はずだ。

だが、仮にそれが兵乱という手段に通じるものであれば、それでも正しいのか。

花園上皇が、後醍醐に対し、頭の片隅で、言い知れぬ不安を直感し始めたのは、この時からである。

【死別と決別と】

一三三二年九月十日、病床の西園寺実兼が「怡然として」（心安らかに）逝った。享年七十四歳。

『朝の元老、国の良弼なり』（花園天皇宸記）

“朝廷の元老として、国政を良く輔弼してくれた”

文保の和談を水に流した、この評こそ、花園上皇の真骨頂だろう。

実兼は、時に権謀を用い、皇位決定や政敵排除を行なった。

しかし、多くの場合、それは朝廷内の対立を早期に収めるためだった。

善悪だけでは測れない人物。

「元老」の評に恥じない廷臣だった。

後任の関東申次には、孫の実衡が就いた。しかし、御しやすい人物だったようだ。

一度引退した実兼が、死ぬまで関東申次の職を譲らなかった事がそれを物語っている。

日野資朝には、からかわれた事さえある。

実兼の死によって、後醍醐天皇周辺は、一気に討幕計画を推し進める事が可能となった。

『近年、禁裏・龍樓不和』

”近年、帝と院が不和である”
そのため、これを危惧する後宇多法皇との間で、ますます不和が目立つようになった。

そんな折の十一月六日、突然、日野俊光が息子資朝との縁を切った。

『父子の間の事、強いて口入に及ぶべからずと雖も、又争か身放つべけんや』

“父子の間の問題だから、強いて口出しはしないが、また何で縁を切ったのだろうか”

俊光は討幕計画を察知し、息子の持明院統に対する裏切りに、激怒したのだろうか。

確かな事は、以下の事である。

1…この時期、後醍醐天皇が持明院統の荘園末久領に手を出したため、花園上皇は資朝を通して後醍醐に抗議をしており、資朝は両者の間で板挟みとなっていた。

2…十二月二十一日、花園は方違のため御幸しようとしたが、急に行き先が俊光邸となった。

『佛閣に幸するの條憚り有るに似る。卒爾に毎事具はず。然り而して私第に幸すべき』

“仏閣に行くなど、とんでもない。いつもはお供をしていませんが、どうぞ我が邸に”

かつて、花園を「変人」と陰口していた人物とも思えないこの行動。俊光は、この頃から、何かと花園の顔色を窺うようになっていた。

何か理由があったのだろうか。

3…そして、十二月二十五日頃、後醍醐天皇が、持明院統の荘園を、よりによって「資朝の妻」に与えた。持明院統で居場所を失いつつ

ある資朝を、籠絡したようだ。

『此の一事を以て察するに、闕くるところ有るか』

“この一件を思い返した限りでは、（帝の人格には）欠けるところがある”

この一手により、花園と資朝の仲は引き裂かれた。

そして両者は、徐々に疎縁となった。

【脱線八・逆お家騒動】

一三二三年四月九日、後伏見上皇は西園寺実衡を介して弟花園上皇に書状を送った。

『長講堂領に播磨國已下の御領、悉く管領すべし』（花園天皇宸記）

“（いいかげんに、）持明院統の莊園を相続せよ”

後伏見は、弟に政務を譲るのを、諦めていなかった。前年の春に拒絶されたというのに（【何故幕府を倒すのか】参照）、この年の春も“お家騒動”は起こった。

但し、「家督を譲れ」「いや渡さん」ではなく、「家督を継げ」「いやです」という騒動である。

この手の騒動は、時代劇ならともかく、現実には他に例がない。結局、この日も、花園は相続を承諾しなかった。

十一日、さすがの後伏見も痺れを切らした。

弟は、我が子量仁親王（花園にとって甥）を育ててくれている。その可愛がりようたるや、実父の自分以上である。院としての立場があり、息子にかまえない自分には、妬ましいほどであった。

だから、息子が成長するまでの間、持明院統の”中継ぎ”を勤めてくれと頼んでいる。

なのに、なぜ承諾してくれんのか。

早朝、花園は兄から呼び出され、日野俊光を間に挟んで再度長講堂領を相続するよう命じられた。

『再往固辭。然り而して仰する旨嚴密。其の恐れ有るの間、恣に以

て領納なり』

“再三拒絶した。しかし、（兄君の）剣幕があまりに凄いので、相續すると言ってしまった”

『委細記す能はざるのみ』

“その間にあった遣り取りの詳細は、とうてい書き残せない”

どこか肩を落として退出していく弟だったが、兄の方は一仕事を終えた顔をしていた。

しかし、花園は諦めなかった。後醍醐天皇に対して覚えた不信が、上皇の心に重くのしかかっていたからである。今、自分が身を置くべきは、執務の場ではない。

『猶然るべからざるの事等はれ多し』

“やはり、納得がいかない”

十五日、花園は迷惑顔の俊光に相続を断る旨を伝えた後、更に右大臣（今出川公衡だろうか）を呼んだ。しかし、右大臣が病を口実に来ないと知るや、俄かに菊第に向かった。

『御問答の時、所存委細に及ばざるなり。仍て領状の由思食さるか。以ての外の事なり』

“（先日）話し合った時、私の考えを詳しく申し上げていませんでした。それで、相続を認めたと勘違いされたものではありませんか。もってのほかの事です”

こうして花園は、この時も持明院統の家長になる事を固辞しぬいた。この事について、後伏見の側近達から、色々非難があった。しかし、花園曰く。

『燕雀豈鴻鵠の志を知らんや。小人嘲ふなかれ』

“彼らに私の志の何が分かる。小人あざけるなかれ”

花園が、「台記」（源平合戦開始時の記録）の研究を始めたのは、十二月からである。

【脱線九・昔語り】

大仏宣時は、権謀を用いて権力争いを勝ち抜き（【弘安德政】参照）、連署となった人物である。しかし、北条貞時の引退に伴い（【貞時の挫折】参照）、連署を退いた。

以来、二十数年となる。貞時は酒に溺れて早世した。息子宗宣も先に逝った。しかし、宣時は幕府が腐敗していく様を目の当たりにした。そして、晩年によく昔話をした。

『最明寺入道、或宵の間に呼ばるる事ありし』（徒然草・第二百三十五段）

“ある晩、最明寺入道（北条時頼）様が、私を呼ばれた事があった”
すぐに参上しますと使いは送ったものの、きれいな直垂もなく、どうしようかと思っていたところ、再び入道様から使いが来た。

『直垂などの候はぬにや。夜なれば、異様なりとも、疾く』

“直垂などがないのではないか。夜なのだから、どんな服装でも良い、早く”

そうおっしゃるので、よれよれの直垂をかぶり、普段着で館に参上した。

すると、入道様が銚子と杯を持って出てこられた。

『この酒を独りたうべんがさうざうしければ、申しつるなり』

“この酒をひとりで飲もうとしたのだが、それでは寂しいので、呼んだのだ”

『肴こそなければ、人は静まりぬらん、さりぬべき物やあると、いくまでも求め給へ』

“酒の肴はないのだが、家人は寝静まっている。探せば何かあるだろう、探してくれんか”

そうおっしゃるので、隅々を調べたところ、台所の棚の皿に味噌が少しついていた。

『これぞ求め得て候ふ』

“これを見つけました”

『事足りなん』

“でかした”

そうして、私と入道様は心ゆくまで酒を酌み交わした。入道様は、始終ご満悦だった。

『その世には、かくこそ侍りしか』

“その頃は、かくのようだった”

昔を語る時、宣時は、いつも遠い眼をする。そして、話を終えると、急に哀しい眼をした。自分のいる場所が「今」だと気付くのだろう。あの頃と違い、立派な衣装を着ている。貴族の真似事のような生活もしている。しかし、「あの頃」はもうない。

そしてやりきれない事に、安達泰盛を死に追いやり、幕府をこんな風にしてしまった咎は、間違いなく自分にある。宣時は、一三二三年七月、八十六歳で亡くなった。

【末代の英主】

一三二四年二月、幕府から朝廷に申入れがあった。「元享の悪党鎮圧令」という。

1…悪党を捕えない荘園は、守護が没収する（没収地の処分は公家に任せる）。

2…南都北嶺として例外にはしない。また、在京の僧を調査し、もとの寺へ帰住させる。

つまり、朝廷も寺社も関係なく、幕府が踏み込むと言い出したのである。悪党対策を装った、統治権の侵害だった。後醍醐天皇は、やむなくこれをのんだ。

この傲慢な法令の内容からも、鎌倉幕府の最盛期は、まさにこの時期であったといえる。

一方で、看過できない事に高時政権になってから、新法令がほとんど出されていない。

幕府は、変革を止めたまま、膨張だけを続けていた。

しかし、そこまで事情を理解していない後醍醐天皇とその周辺は、焦りを強めた。

二月二十日、病床の父後宇多法皇は、これを察知した。

息子の周辺が急に慌ただしくなっている。

法皇は、突如、後宮の永嘉門院（【ねじれ政局】参照）に室町院領の持分を譲った。

その上で、吉田定房を介して、持明院統に「室町院領の持分を女院に返して欲しい」と要請した。

二十五日、幕府も、これを支持する姿勢を見せた。

『此の事一向貞顕張行す』（花園天皇宸記）

“この件では、（吉田家と仲が良い）鎌倉の金沢貞顕が動いている”
永嘉門院は、皇太子邦良親王の後見人である。法皇の狙いは明白だった。

皇太子の力を増大させ、討幕計画を練る後醍醐天皇を、退位に追い込むつもりだったのである。

三月、後醍醐と親しい僧文観が、大和般若寺に文殊菩薩像を設置した。この像の施主は伊賀兼光といい、“六波羅の引付衆”であった。しかも、像には次の文句が書かれていた。

『金輪聖主御願成就』（「異形の王権」二〇二頁）

“帝の願いが、かないますように”

「願い」とは、“討幕計画の成功”を指す。後醍醐の討幕計画は、既に実行の段階に移ろうとしていたのである。これが失敗すれば、朝廷は存亡の危機に立たされるだろう。

しかし、一三二四年六月二十五日、後宇多法皇がついに力尽きた。愛妻と嫡子に先立たれ、その後も、ひとり大覚寺統を切り盛りした老人の死だった。

賄賂政治、後醍醐への煮え切らない態度。法皇には非難されるべき点も多い。

しかし、一三二一年に引退するまで、一貫して敏腕を見せたのも事実である。

この法皇は、功績の割に、あまりにも報われなかった。

『晩節脩らずと雖も、末代の英主なり』（花園天皇宸記）

“晩節はばからずといえど、末代の英主だった”

花園上皇は、長年の政敵の死を、そう嘆いた。

【正中の変】

討幕計画は進められていく。

首謀者は、日野資朝と日野俊基だった。

両名は、宣旨をたてに各地の有力者を引き入れ、『無礼講』と称し、後醍醐天皇も参加する宴席で彼らと酒を酌み交わした。その参加者は衣冠を着けず、殆ど裸形だったという（花園天皇宸記）。

一三二四年八月三十日、六波羅南方の北条惟貞が鎌倉に呼び戻された。これにより、六波羅は、北方だけとなった。資朝らは、これを絶好の機と捉え、計画の実行日を定めた。

しかし、資朝らは急ぎすぎたのかもしれない。

細心の注意を払って集めたはずの同志には、不純物が混じっていた。同志、多治見国長の一族、土岐頼員である。

頼員は六波羅奉行斎藤利行の娘婿であり、本来なら、もっと慎重に接触すべき相手だった。

頼員は、一度は計画への参加を約束していたが、まもなく翻意した。

幕府に一泡吹かせるなど無理がある。計画次第では舅殿に報告すべきだ。

そう思い定めた頼員は、国長の宿所を訪ね、改めて計画の詳細を聞くことにした。

頼員を信頼する国長は、何ら警戒する事なく、計画の全容を披露し

た。

「計画実行は十月二十三日。北野天満宮祭の警備に人員が駆り出され、手薄になった六波羅を近国の同志と共に制圧し、北方の北条範貞を討つ。しかる後、

『山門南都衆徒ら仰ぎ、宇治勢多等固む』（花園天皇宸記）

“比叡山・興福寺の僧兵に呼びかけて、京への通り道を封鎖する”
即ち、畿内を幕府の軛から解き放ち、朝廷の手に戻す」

頼員の背を汗がった。朝廷は何を考えているのか。仮に、一時でもこんな計画が成功すれば、加担した土岐一族は幕府に族滅される。計画実行まで、あと一ヵ月。一族総領の頼貞と相談している時間などない。いや、下手に諮れば、自分が頼貞に殺される。

九月十六日、頼員は上洛して舅の下へ赴き、討幕計画を密告した。計画は、あっけなく露見したのである。六波羅は即座に京中洛外の武士を招集し、更に九州の鎮西探題も軍勢を集めた。この時、幕府の対応は素晴しく早かった。

九月十九日未明、六波羅の軍勢が多治見国長と土岐頼有の宿所を襲撃し、両名を自害に追い込んだ。又、錦織判官と足助重範も連座した。いずれも、源氏である。

昼過ぎ、西園寺邸滞在中の後醍醐天皇に、日野資朝・日野俊基らの引渡しが要求された。

『勅答等前後に依り違ふ』

花園上皇の聞いたところ、後醍醐の返答は二転三転したらしい。計画発覚は予期せぬ事態だったのだろう。しかし、しだいに追い詰められ、遂に引渡しを認めた。

【関東は戎夷なり】

一三二四年九月二十三日、権中納言万里小路宣房が鎌倉へ発ち、

後醍醐天皇に累を及ぼさぬための交渉にあたった。その際、宣房は、天皇から幕府への誓紙を携えていた。

花園上皇の聞いたところ、そこには、こう書かれていたという。不可説不可説。

『關東は戎夷なり。天下の管領然るべからず。卒土の民は皆皇恩を荷く。聖主の謀叛と稱すべからず。但し陰謀の輩有り。法に任せ尋ね沙汰すべき』（花園天皇宸記）

“そもそも、關東の幕府など、天下を管領する資格もない蛮族である。我が民は、みな天皇の恩を受けている。こたびの事を、「帝の謀叛」などと思いがるな。但し、討幕を企てた廷臣については、朕は寛大な心でその者を法で裁くことを許そう”

鎌倉に着いた宣房は、誓紙を読んだ長崎円喜・安達時頭から厳しい追求を受けた。

『出仕の時、彌臆病の氣有り、時顯を恐れ忽ち退座し、板敷に下る』
“宣房卿は怯えた様子で出仕し、時顯を恐れるあまり退座し、縁側の板敷まで下がった”

幕府は、帝への不信を一気に強めたのである。

当初、宣房はこれに震え上がったが、やがて違和感に気付いた。妙だ。何故叱責するだけで、帝の退位を要求してこない。

表面上は高圧的だが、その実腫れ物に触るようなこの対応は、一体何なのか。

理由はこれであろう。

『あなたさまにも、宣旨を受くる者のありけるなめり』（増鏡）

“關東にも、帝から宣旨を受けた者がいたようだ。”

後醍醐の手は幕府中枢にも及んでいたらしい。

へたに追い込めば、誰の名が出てくるか分からない。

円喜らの懸念はそれだった。

—あの誓紙、帝は手の内を見透かしている—

宣房もこの空気を読み取った。

そうか。奥羽の騒乱と内輪揉めで、朝廷と本気で遣り合う余裕などないらしい。

宣房の目が細まった。ならば、この交渉、乗り切れる。

交渉は成功した。幕府は“陰謀などなかった”という見解を出したのである（花園天皇宸記）。

大役を果たした宣房は、この功により権大納言に昇進した。

十月二十九日、懲りない後醍醐は顕職希望者を登用した。その際、政治論文を書かせ、眼鏡にかなった者四名を抜擢した。のんきに、宋の役人試験の真似事だった。

帝は何の反省もしていない。十一月十六日、ようやく失敗を悟った幕府は、金沢貞将（貞顕の嫡子）に「五千騎」を与え、六波羅南方に赴任させた。

更に、十二月、室町院領問題（【末代の英主】参照）で、一転して持明院統に肩入れし、「何の変更も加えない」という裁決を下した。

翌年二月、日野資朝が佐渡に流され、日野俊基が京で籠居となった。

【嘉暦の騒動―カウントダウン―】

一三二五年、奥羽の戦乱は、いまだ続いていた（【儒学奨励と蝦夷蜂起】参照）。

蝦夷が、津軽安東貞季と秋田安東季久の争いに乗じて蜂起し、戦いは三つ巴に発展していた。

もはや泥沼である。六月六日、幕府は安東貞季を解任し、庶流の安東宗季を代官に据えた。

しかし、これに不満を持った貞季は、やはりと言うべきか、徹底抗戦を続けた。

そんな状態が続く、翌一三二六年三月六日、執権北条高時が重病に倒れた。

十三日、高時は出家し、執権を退いた。

この事態に、連署金沢貞顕も出家を申し出た。

しかし、長崎父子と摂津親鑒らは、何故か貞顕の引退を認めなかった。

『五ヶ度雖申入候、御免なく候之際、周章無極候』

（金沢貞顕書状・三七六、「鎌倉政権得宗専制論」三一八頁）

“（長崎円喜らに）五度も出家を申し入れた。しかし、承諾してくれないので困惑している”

十六日、貞顕は長崎高資（円喜の子・内管領）から思わぬ申し出を受けた。

『愚老執権事、去十六日朝、以長崎新兵衛尉被仰下候』

（金沢貞顕書状・三七四、「鎌倉政権得宗専制論」三一九頁）

“執権になるよう、去る十六日朝に内管領から言われた”

まさか、この歳で執権になれると思っていなかった貞顕は、大喜びで申し出を受けた。

かくしてこの日、貞顕は、さっそく「新執権として」評定に臨んだ。一方、肝心の高時の容体は、この前後に峠を越したと見られる。

金沢貞顕の執権就任は、全く意外な出来事であった。高時には、泰家という立派な弟がいる。本来ならば、高時の子が成長するまで、泰家に中継ぎを頼むのが筋だった。

しかし、円喜には、そのつもりはなどなかった。

もし、そんな事を認めれば、「得宗に限りなく近い執権」が誕生してしまう。

篤実な貞顕を中継ぎとし、高時の子邦時（生後三ヵ月）の成長を待つ。

それが、得宗家の安泰と、何よりも自らの権勢にとって、一番の選択であった。

だが、泰家は、これを不服として突如出家した。

『関東の侍、老いたるは申すに及ばず、十六七の若者とも迄、皆出家す』（保暦間記）

“ 関東の侍は泰家に同調して、老いも若きも皆出家した ”

泰家に同調する者は、少なくなかった（今川範国も出家している・難太平記）。

長崎親子への反発が一举に顕在化したのだろう。鎌倉は一触即発の緊張に陥った。

二十日、貞顕は六波羅の息子貞将に近況を伝え、その上で尋常でない事を頼んでいる。

『愚状等其憚のミ候。やかてやかて火中に入られ候へく候』

（金沢貞顕書状・三七五、「鎌倉政権得宗専制論」三一九頁）

“ こんな書状を残していたら、おまえにも危険が及ぶ。読んだら、すぐ燃やしなさい ”

この時期に、こんな手紙を、鎌倉と六波羅間で遣り取りするのは相当危険である。

「燃やせ」など、手紙を携える使者に、口上させるべき内容だった。その手段が採られなかった事实は、貞顕が「信頼の置ける側近を身辺から離れたくない状況」に置かれていた事を示す。

貞顕は、いつ暗殺されてもおかしくない窮地に追い込まれていたのである。

同日、京で皇太子邦良親王が病死した。

正中の変に付け込んで、天皇の座を得ようと画策していた矢先だった。

図らずも大覚寺統内の旧後宇多法皇派は弱体化した。

『今こそ此天皇うたがひなき継体の正統にさだまらせ給ひぬれ』（神皇正統記）

“今こそ、天が帝（後醍醐天皇）の皇統を、正統だと定められたのだ”

二十六日、金沢貞顕は、鎌倉と京の政情を危ぶみ、遂に出家を決意した。僅か十日間の執権職だった。『保暦間記』は、「安達時顕が北条泰家に同調したため」とだけ記す。

時顕は、何故泰家を支持したのか。理由は、邦時の母が、御内人の娘だったからである。

『城務一門、御産所にも太守にも見えず候ひつ』

（金沢貞顕書状・三六八号、「人物叢書 金沢貞顕」二〇九頁）

“（長子邦時が誕生した時）安達時顕一門は、産所にも、得宗にも顔を出さなかった”

邦時が成長すれば、御内人の天下。平頼綱の時代が再現されてしまう。

時顕の行動は、ひとえにこれを恐れての事だったのである。

二十九日、騒動もようやく沈静化し、工藤貞祐（御内人）率いる追討軍が出羽に派遣された。幕府の財源地奥羽を、いつまでも放置するわけにはいかなかったのである。

四月二十四日、赤橋守時が執権、大仏惟貞（【鎌倉と六波羅】参照）が連署に就いた。「最後の執権」守時は、極楽寺流の嫡流で、一門の次席である。しかし、これが貧乏くじである事は、誰の目にも明らかだった。翌年に惟貞が亡くなった時、連署は空席とされた。

七月二十四日、その幕府の圧力で、持明院統の量仁親王が皇太子となった。

これによって、長期に及ぶ後醍醐天皇の政権は、一転して崩壊の危機に立たされたのである。後醍醐は焦りを強め、一度は頓挫した討

幕計画を、再び画策し始めた。

【関東調伏と御家人復活】

一三二六年七月、工藤貞祐が安東貞季を生け捕り、鎌倉に凱旋した。

しかし、その後も、奥羽の混乱は収まらなかった。

秋頃、後醍醐天皇が宮中で「幕府を調伏している」事を、六波羅が察知した。

情報を得た六波羅の者は、当初わが耳を疑った。宮中で帝自ら護摩を修すなど、聞いた事がない。

しかし、内裏に遠慮なく出入りする京童達も、目撃しているという。

京童の好奇心も大したものである。鎌倉時代、宮中には野次馬が多く出入りしていた事が、様々な記録に残っている。儀式を行う際には、皇女らの衣装を見物しようとする者が、後を絶たなかったという。公卿も警護の者も、辟易し、既に追い払うのを諦めている。そんな京童は、帝に好意的だった。彼らにとって、帝は「平安京の主」である。

例えば、怪僧文観の助けを借りて、怪しい調伏に没頭しようと、恐ろしくもなかった。

しかし、幕府にとっては恐ろしい。

十月、吉田定房が関東に下向した。祈祷についての説明を求められたのである。

曰く、「祈祷は、あくまで皇后の無事な出産のためです」、噂に過ぎません。

『偏以合躰之義、爲天下欲行政理』（鎌倉遺文二九六三五）

“（帝は）公武が一体となり、天下のために正しい政治をおこなう事を望んでおります”

この発言は、弁明というよりは、定房の願望だろう。
しかし、幕府は、これで矛を収めた。
むろん、帝を信じたのではない。いらぬ衝突を恐れたのだ。

この時期の鎌倉幕府の鈍重さは、際立っている。「指導層の対立」と「奥羽の動乱」という二つの火薬を抱え、身動きがとれず、醜態をさらし続けるのである。

翌一三二七年には、後醍醐天皇の退位をもちかけてきた持明院統を、何と退けている。

『禁裏ただちに申し談ぜらるべきの由、仰せ下さるるの間、禁裏に申さるべし』

（「御事書并目安案 嘉暦三年量仁親王践祚事」・「人物叢書 金沢貞顕」一一七頁）

“帝が「ただちにこちらに言ってくれ」とおっしゃっているので、帝に言って下さい”

同年六月、御家人である宇都宮高貞・小田高知が、奥州に出陣した。ついに得宗家は、御内人だけでは鎮圧できないと悟り、御家人の力を借りたのである。

一三二八年十月、奥羽でようやく和議が整い、動乱は収束した。しかし、長引く混乱による損失は計り知れない。

天下に晒された上層部の腐敗。

北条得宗家の重要領地の荒廃。

そして、乱の鎮圧に活躍した御家人達の幕府への不信。

かくして、鎌倉幕府は、時の流れから離れ始めた。

【踊る鎌倉幕府】

一三二九年三月十三日頃、鎌倉で、高野山と地頭太田信連の訴訟が行なわれた。

しかし、それは公正な裁判とは程遠いものだった。判決など、最初

から決まっている。

「信連の勝訴」である。

なぜなら、信連が“問注所執事（長官）の一族”だからだ。

そこで、裁判に臨む高野山代表の了信は、上層部に起死回生の策を提案している。

『今年大田・桑原・春船分年貢を、一向に令向候て、御秘計有るべきや候らん』

（「高野山文書」寶簡集九、（嘉暦四年）三月十三日備後大田莊雜掌了信書状、『鎌倉遺文』三〇五三三、『鎌倉幕府の官僚制化―合理化・効率化の必要と組織運営の変化』二六頁）

“今年の大田・桑原・春船の年貢を、鎌倉に送り、引付衆への御秘計とすべきです”

『御秘計』とは、「賄賂」の事である。

同じく三月、幕府上層部のひとり、二階堂道蘊が、後醍醐天皇の退位問題を巡る両統の対立を調停するため、上洛した。しかし、その頭は、「政所執事の後任」の事で一杯だった。道蘊は執事の有力候補である。京で調整役などしている場合ではなかった。

しかし、五月十九日、後任には二階堂貞衡が就いた。そのため、腹を立てた道蘊は、幕府の指示を曲げ、持明院統に有利な仕事を始めた。これを知った、金沢貞顕曰く。

『我が口において賢人の由を称しながら政所職を他人に仰せらるる時は腹立つ、言語道

断の事に候か』（金沢貞顕書状・四三九号、「人物叢書 金沢貞顕」一一七頁）

“口では賢人と称しながら、政所職を他人にとられて腹を立てるとは。言語道断である”

一三三〇年一月、後醍醐が、来日した禅僧明極楚俊を引見した。天皇が外国人と会うのは、かの菅原道真が遣唐使を廃止して以来禁

止されているので、これが問題となった。

六波羅の金沢貞将の不手際を責める意見に対し、その父貞顕は、息子をかばって気になる発言をしている。面会の手引きをしたのは安東平次右衛門入道（京極為兼を逮捕した安東平右衛門入道の後継ぎ）。入道が六波羅を通さずにやったのだ。

六波羅の統制は、緩んでいたらしい。この年、伊賀兼光が官位推挙を幕府に求めた。

『伊せハ難有御免之由被申』（金沢貞顕書状・四一四、「鎌倉政権得宗専制論」三二六頁）

“兼光の官位叙任は、許しがたい”

兼光は後醍醐との結託が疑われる人物である。安達時顕らが、これに反対した。

しかし、これにへそを曲げた兼光が六波羅への出仕を止めたため、慌てた貞顕が、これを取りなし、結局兼光の官位叙任が実現してしまった。

これらは「崩壊の兆し」と呼べるかもしれない。鎌倉幕府の最期が近付いていた。

【太子への警告】

今や、幕府は図体ばかりが大きい、間抜けな怪物である。

金沢貞顕は、六波羅の息子貞将に、「田楽や相撲が、たびたび催されている。いま、鎌倉でやる事と言えば、それを眺めて楽しむ事ぐらいだ」と書き送っている。

一三三〇年二月、花園上皇はこの情勢に危機感を強め、前年ようやく元服を認められた皇太子量仁親王（甥）に訓戒状をしたためた。後世、これを『誠太子書』と呼んでいる。

『余聞く。天蒸民を生じ、これに君を樹てて司牧せしむ』

（誠太子書・「日本中世史を見直す」二三四頁～二四四頁）

“私の聞くとところ、天が民を生み、これを君主に統治させているの

も天である”

その言葉から始まる訓戒は、『太子』こと量仁親王の日常への叱責から始まる。

父親の後伏見上皇以上に、親王を育ててきた花園だからこそその叱責ではある。しかし、これを「小言」とは思わないでもらいたい。この書状は、もっと深刻なものである。

『しかるに太子宮人の手に長じ、未だ民の急を知らず』

“しかるに、太子は宮廷人の手で育てられたため、いまだ民の急を知らない”

『ただ先皇の余烈と謂うを以て、猥りに万機の重任を期せんと欲う』

“歴代の天皇が遺した功績に乘るだけで、みだりに皇位に就こうとしている”

『豈自ら慙じざらんや』

“少しは自分を恥じたらどうだ”

『諂諛の愚人以為えらく。吾が朝は皇胤一統し、彼の外国の徳を以て鼎を遷し、勢によりて鹿を逐うに同じからず、故に徳微なりと雖も隣国窺視の危なく、政乱ると雖も異姓篡奪の恐なし、これその宗廟社稷の助け余国に卓礫する者なり』

“天皇におべっかをつかう愚か者は、我が国は皇統が一つだから、朝廷が衰退して政治が乱れても、外国のように異姓の者が天皇の位を篡奪することはない。これぞ神々の助け、我が国が他国に勝る所以だ、と考えている”

『然れば則ち纔かに先代の余風を受けて大悪の国を失うことなくば、則ち守文の良主ここに於て足るべし』

“太子についても、天皇家の威光を受け継ぐのだから、よほどの大悪行を行なわないかぎり朝廷は滅びない。代々の法を守る天皇にさえなれば、それで十分だと考えている”

『子女の無知、この語を聞いて皆以て然りとなす』

“物を知らない者は、この言葉を聞いて疑おうともしない”

『愚惟うに、深く以て謬りとなす』

“思うに、それは全く間違っている”

『太子宜しく熟察して前代の興廃する所以を觀よ』

“太子よ、何故朝廷がかつて繁栄し、何故いま衰退しているのか、原因を考えて欲しい”

『今時未だ大乱に及ばずと雖も、乱の勢萌すことすでに久し』

“現在、未だ大乱には及んでいないが、乱の兆しが生じて既に久しい”

『もし主賢聖にあらざれば則ち、乱恐らくはただ数年の後に起らん。一旦乱に及ばば則ち、たとい賢哲の英主と雖も、期月にして治むべからず、必ず数年を待たん。』

“賢明な天皇でなかったら、戦乱は僅か数年後に起こるだろう。一旦、戦乱に発展すれば、たとえ賢哲の英主であっても、一カ月では収められない。数年かかるだろう”

『何ぞ況んや庸主この運に鐘れば則ち、国日に乱れ、勢必ず土崩瓦解に至らん』

“ましてや凡庸な天皇が対処すれば、国は日を追って乱れ、終には土崩瓦解に至る”

『近代の主猶未だこの際会に当らず』

“今の帝（後醍醐天皇）の代には、まだこの事態に直面しない”

『恐らくはただ太子登極の日、この衰乱の時運に当らんか』

“恐らくは、太子が即位する時こそが、衰乱が起こる時と重なるだろう”

『これ朕強いて学を勧むる所以なり』

“これが、私が太子に、強いて学問に励むよう勧める理由である”

後の歴史と照らせば、この警告は、大半が的中した事が分かる。

「正中の変」が起きた際、花園上皇は、自らの情報網を駆使して情勢を分析し、「帝の企ては欲に基づく（皇位の掌握が目的）」と結論付けている（花園天皇宸記）。

帝は、国の停滞を打ち破るため、幕府を倒し、皇位を掌握しようとしている。

しかし、「孟子」・「台記」を研究した花園には、その危うさが見える。

武家は、現として存在する。現実への対処なくして、停滞は打ち破れない。

公武が力を合わせねば、この国は崩壊する。

花園は、その際の「公」を担う人物として、太子を育てようとしていたのである。

『一窓を出でずして千里を観、寸陰を過ぎずして万古を経ん』

“（書の中で故人に会い、聖賢と交わりを結べば、）身は御所にあっても、千里先の変に気付き、万古の時を経た知を持って、それに対処できる”

『少年の愚』から十三年。上皇はかつての少年ではなかった。

―決戦、鎌倉―

【老臣との別れ】

一三三〇年、京では、後醍醐天皇によって、討幕計画が進められていた。

既に、皇子尊雲法親王（大塔宮）が何度も天台座主（比叡山指導者）にされ、この一月には、四条隆資が検非違使別当（京長官）に任じられている。これは、明らかに僧兵・悪党を動かす準備だった。

三月、後醍醐天皇は南都北嶺に出かけた。これによって、春日神社・興福寺・東大寺・延暦寺・日吉社といった有力寺院を、味方につけようとしたのである。

しかし、このような動きに反発する声も小さくない。大体、貴族は行動を嫌う。まして、討幕計画は無謀だった。僧兵と悪党を結集したくらいで、武士に勝てるのか。

四月一日、その一人である中原章房が、清水寺で暗殺された。犯人は、“瀬尾”という悪党だった。

これは後醍醐の命で、「討幕に反対した章房の口を封じたのだ」と言われている。

後醍醐天皇のやり方は、さながら暴君である。しかし、そうばかりでもない。

五月二十一日、後醍醐は、米と酒の価格を下げ、商人にその価格で取引するよう命じた。これは、食料の高騰に苦しむ民を救うための政策だった。しかも、商人達が売り惜しみをすると見るや、二条町に小屋を建て、そこで商人に米を売らせた。更に六月十五日には、飢饉を救うため、諸国の関所で米を徴収するのを、八月まで停止している。

以上の政策は、人気取りなのかもしれないが、その実行で確かに民は救われた。

それを横目に、七月、幕府は六波羅南方の金沢貞将を鎌倉に呼び戻し、一番引付頭人とした。この時、二階堂道蘊も五番引付頭人になっている。

貞将はともかく、道蘊ごときが引付頭人になるとは（【踊る鎌倉幕府】参照）人事の混乱ぶりもひどい。貞将が抜けた後の六波羅は、北方が普音寺仲時（基時の子）、南方が北条時益となった。彼らが、「最後の両六波羅」である。

九月十七日、後醍醐天皇の皇子である世良親王が逝去した。

『今より記録所へも御供に出でさせ給ふ』（増鏡）

“（亡くなる前、皇子は）帝に御供して、記録所に出席されていた”
後醍醐天皇は、「この皇子こそ後継者」と考えていたらしい。
それだけに、周囲の落胆は大きく、傳役を務めていた北畠親房などは悲観のあまり出家してしまった。

そのため、のちに「南朝の柱石」となる親房は、このの数年間、政治を離れることになる。

一三三一年になった頃、諫言を容れない後醍醐に、吉田定房が出仕を止め、邸に籠った。

『勅許なきに依り、一向に蟄居す』（吉口伝・「南朝史論考」一二七頁）

後醍醐天皇の評価は難しい。しかし今、対等の政治思想を持つ者達が、側から離れていった。これこそ、かつて花園上皇が指摘した「欠陥」といえるかもしれない。

【陵王の舞】

一三三一年三月四日、後醍醐天皇が北山第の西園寺邸に行幸した。

嵐の前の静けさというべきか、この御幸は、表面上終始穏やかなものだったと伝わっている。

天皇を迎えるのは、西園寺公宗だった。公宗は、一三二六年に亡くなった西園寺実衡の後継ぎで、関東申次を務めている。また、皇太子の傳役を兼ねていた。皇太子は持明院統の量仁親王なのだから、公宗は持明院統派だったといえる。

一方、天皇にお供をするのは、源具行ら討幕計画の推進者たちである。

六日、桜吹雪の中、琵琶や笛の演奏が開始された。これを聴く後醍醐の傍らには、第一皇子尊良親王の姿が見える。だが、その腰には、物騒なものが覗いていた。

『御直衣に太刀はき給へり』（増鏡）

“直衣に太刀を差しておられた”

これは、後醍醐天皇を護るためであろう。

後醍醐らは、西園寺邸を「敵地」とみなしていたのである。

日が暮れ始めた頃、陵王の舞が始められた。

舞手は北畠顕家。先日出家した、親房の嫡男である。

庭園を彩る桜の間から夕日が覗き、舞手を照らす。

桜の枝に羽を休める鳥達が、舞に感応し、歌を奏でる。

『陵王のかがやき出たるけしきいとおもしろく。かたりつたふるばかりにて。いづれとみわきたるかたは侍らねど。ひけとる手などいふ事にやとおぼゆる』（舞御覧記）

“陵王の輝かしい様子は、たいそう趣があり。語り伝えたい程でした。最も優れた舞手を見分ける方法な

どございませんが。他に引けをとる事などあるまい、と思われしました“

天皇も、思わず笛を手にする。笛の音に包まれ、舞手は一層輝きを増した。

乱直前の儚い幻想。後年、誰もがこの日を懐かしんだ。

北畠顕家、生涯を絶人の舞で彩る麗人の初舞台であった。

七日、歌会が催された。

しかし、この日に後醍醐天皇が詠んだ和歌の上の句は、『増鏡』にも『舞御覧記』にも記録されていない。

『御製、代々の御幸のあとと思へば　この上、忘れ侍るのちに見出してぞ』（増鏡）

“上の句は忘れたから後で調べる”と白々しく惚ける「増鏡」の作者。

「増鏡」は、「公家社会に近い人物」が記したと考えられている歴史書である。

公家社会が、これ以降の後醍醐天皇をどのように評価したのかは、これより推して図るべし。

『宿からは　花も心に　とまるかな　代々のみゆきの　あとと思へば』（新葉和歌集）

このように、南朝作の歌集には、この時の和歌の記録が残っているのだから、忘れるはずがないのである。

その頃、籠居中の吉田定房が、非情の決意をしていた。

【元弘の変】

一三三一年四月二十九日、六波羅に密告が届いた。

『主上世を乱らしめ給う、俊基朝臣張行の由、一品定房卿内々申さる』（鎌倉年代記裏書）

“帝が日野俊基に唆されて討幕を企てていると定房卿が密告してきた”

吉田定房が、討幕計画を止めるため、行動に出たのである。即ち、日野俊基を首謀者に仕立て上げ、これを差し出す事によって、幕府に政治取引を持ちかけたのである。後醍醐天皇の安全を確保するための非情の策だった。

一説に、この密告は「後醍醐天皇が承諾し、幕府の動揺を誘ったのだ」ともいう。

しかし、これは荒唐無稽すぎる。先に、中原章房は討幕計画に反対しただけで暗殺された。そこまで徹底した行動を採る後醍醐が、何を好んで計画を漏らすというのか。この密告により、五月十一日には文観が、七月十一日には日野俊基が捕縛された。

この後、数ヵ月間、源具行・前天台座主法親王尊雲（大塔宮、のちの護良親王）・天台座主法親王尊澄（のちの宗良親王）らの指示でひそかに六波羅追討計画が練られた。

しかし、討幕計画を知った幕府では、対応を巡って、致命的な対立が起きていた。

八月五日、鎌倉で「得宗が内管領の抹殺を謀っている」という噂が流れた。

『長崎三郎左衛門尉高頼以下の者共に云付て、高資を討たんとしける』（保暦間記）

“（北条高時は、）長崎高頼以下の者に命じて、高資を討とうとした”

しかし、内管領に先手を打たれ、逆に高時の側近と長崎高頼が拘束された。

『我は知らぬ』

そう言い張る得宗は、追求を逃れたが、高頼らは流罪となった。

この事件は、高時が唯一意志を示した事件である。

高時が目論んだのは、幕府の停滞の打破である。討幕運動に危機を感じ、得宗による専断体制を築こうとしたのだろう。しかし、父貞時のようにはいかず、宮方に貴重な時間を与える結果に終わったのである。

八月二十四日、六波羅北方の北条仲時は、宮中の不穏な動きを察知した。

『やつれたる女車のさまにて、忍び出でさせ給ふ』（増鏡）

“帝は、粗末な女車に乗って、宮中を密かに脱出された”

間もなく、六波羅の軍兵が宮中に乱入した。

『宮人だに一人もなし』

“（しかし、）誰一人いなかった”

帝が内裏を捨てた。

まもなく、都は大騒ぎとなった。

【唐崎の戦い】

去る承久の乱の折、討伐軍大将北条泰時は鎌倉の父義時に尋ねた。

『鳳輦を先立てて御旗をあげられ、御幸の厳重なることも侍らんに参りあへらば、その時の進退はいかが侍るべからん』（増鏡）

“軍勢の前に、帝の行列が立ち塞がった場合は、いかがいたしましたでしょうか”

義時はしばらく黙考した後には答えた。

『ひとえにかしこまりを申して、身をまかせ奉るべし』

“ひたすらかしこまり、帝に身を任せるように”

その上で、「帝が戦場に出てこない場合は敵軍を殲滅せよ」と言い渡した。

得心した泰時は、京への進軍を開始した。

この話は、『梅松論』にも記載されている泰時伝説の一つである。

元弘の変では、後醍醐天皇が矢面に立ち、この逸話で危惧された事態が発生した。

泰時のごとく、戦場の帝には手出しをしないのか、それとも刃を向けるのか。

幕府は選択を迫られたのである。

『世の中の大小事、ただみなこの円基の心のままなれば』

“（当時、）世の中の大事も小事も、全て長崎円喜の心のままだった”

そして、元弘の変で、その選択を迫られたのは、長崎円喜だった。

一三三一年八月二十五日明け方、都を探索する六波羅兵は、京に残った後醍醐天皇の側近達を次々と捕縛した。万里小路宣房、洞院実世、平成輔らが六波羅に連行された。

無事だったのは、吉田定房と、隠遁中の北畠親房ぐらいであった。

さて、肝心の後醍醐天皇は、比叡山に替玉を置き、自らは大和に移動していた。

尊良親王・源具行・四条隆資・万里小路藤房・千種忠顕らがこれに随った。

二十七日、替玉に騙された六波羅の軍勢が、比叡山への攻撃を開始した。

まず、近江の佐々木時信率いる軍勢が、唐崎で延暦寺の僧兵と激突した。しかし、大塔宮・法親王尊澄を奉じる僧兵達は意気盛んで、時信は敗走した。

そのため、持明院統の後伏見法皇・花園上皇・量仁親王は六波羅に避難した。持明院統は武家に生殺与奪の権を預けたのである。公家一統を選んだ大覚寺統、公武合体を選んだ持明院統。この時、両統の運命は、はっきりと分かれた。

この日、後醍醐は笠置寺に到着し、近隣に檄を飛ばし始めている。そのため、比叡山にいるのは替玉だという事が露顕した。大塔宮と

花山院師賢（替え玉役）らは、動揺する僧兵達を放り出し、慌てて笠置に逃亡した。残された叡山は、間もなく降伏した。

【楠木正成の登場と笠置陥落】

一三三一年九月一日六波羅の軍勢が、五日以降は鎌倉の軍勢が、それぞれ進発した。

鎌倉からの軍勢を率いるのは、大仏貞直・金沢貞冬（貞顕の子）・江馬時見、そして父貞氏（【二条、新將軍の到着を目撃する】参照）を失って間もない足利高氏である。

一方、後醍醐天皇が籠もる笠置にも、大和・河内・伊賀・伊勢の武士が集まっていた。

この時、笠置に応じ、備後の桜山慈俊と河内の楠木正成も挙兵している。

楠木正成は、河内の武士である。その正体は、現在でもよく分かっていない。しかし、河内付近で流通に従事し、その関係から“畿内の悪党”と親しかったという。今回の戦いでは、楠木に呼応し、伊賀の服部氏ら（楠木と婚姻関係にあった）が蜂起している。

だが、これらの側面を持ちながら、正成本人は、妙に文字に品があり、その生涯の行動はどこかいさぎよい。つまるところ、“悪党らしくない”のである。そのため、近年では「元は御内人だったのではないか」と言われている。いずれにしろ、怪僧文観を通じて、後醍醐天皇と出会い、「元弘の変」を機に、幕府との対決に踏み切っていた。

畿内の広範囲に影響力を持つ楠木の挙兵を、幕府は重く見た。

そのため、九月初頭には笠置との和睦を画策していた東使二階堂道蘊も（花園天皇宸記）、首脳部の強硬策に従わざるを得なくなつた。二十日、幕府は、持明院統の量仁親王を即位させた。北朝初代の光厳天皇である。これによって、後醍醐は“廃帝”となった。

二十八日、笠置はあっさり陥落した。“先帝”は、やむなく源具行・万里小路藤房・千種忠顕らを連れ、逃亡を図った。しかし、三十日に身柄を拘束された。

『山中に人有り。仍て深津某馳せ來りて取る。即ち先帝なり』(花園天皇宸記)

“(南山城の)山中に人がいたので、深津三郎入道が捕えたところ、先帝だった”

『亂髪にして小袖一・帷一を着せしめ給ふ』

“(その際、先帝は)頭髮が乱れ、小袖ひとつに帷ひとつの姿だった”

この格好は、現代の感覚でいえば、ほとんど下着姿に近い。

『王家の恥何事か如かんや』

“天皇家にとってこれほどの恥はない”

『天下靜謐尤も悦ぶべしと雖も、一朝の恥辱又歎かざるべからず』

“(先帝の身柄が確保され、)天下が収まったとはいえ、この恥辱には嘆息を禁じえない”

十月三日、幕府軍は先帝を伴い、京に帰還した。宮方(後醍醐方)の完敗であった。

この顛末に、和睦を画策していた二階堂道蘊は、慌てて持明院統に陳謝した。

【天魔の所為】

一三三一年十月四日、幕府に捕えられた先帝が六波羅に護送された。

その際、六波羅は討幕勢力による先帝の奪回を恐れ、数万の軍勢に輿を囲わせた。輿を固める数万の松明の火に、手出しをする者は現れず、先帝は無事六波羅に送られ、南方に幽閉された。

ここで、深刻な問題が生じた。先帝と思しき人物を護送したが、

襲撃はなかった。

捕えたのは本当に先帝なのだろうか。先帝の顔を知る者など、六波羅にはいない。

そこで六波羅は、六日、三種の神器を回収しに來た堀川具親らに判別を頼んだ。

『今日は劔璽供奉のため参るところなり。此の事仰せを奉らず、難治』（花園天皇宸記）

“今日は三種の神器をお運びするため、参ったのじゃ。そんな事は聞いておらぬ。難儀”

しかし、先帝から怨みを買うことを恐れた具親らは、これを拒絶した。

そこで六波羅は、改めて先帝を検知する人物を派遣するよう、朝廷に要請した。

八日、貧乏くじをひかされたのは、関東申次西園寺公宗だった。

『今夕公宗卿六波羅第に行き向ひ、先帝を見奉る』

“今日の夕方、公宗卿が六波羅に行き、先帝にお会いした”

その席で、後醍醐は公宗にこう言ったという。

『天魔の所爲たり。？宥の沙汰有るべきの由、武家に仰すべき』

“こたびの事は、天魔の所業じゃ。我が罪を許すよう、武家に申せ”
これを聞いた花園上皇は、再び嘆息した。最早、先帝について言う事は何もなかった。

十五日、討伐軍は赤坂城へ侵攻した。

『梨本前門主河内国楠兵衛尉城に御坐す』

（金沢貞顕書状・五一二号、「人物叢書 金沢貞顕」一三七～一三八頁）

“大塔宮が、いまだ楠木正成の城（赤坂城）に籠もっている”

二十一日、その赤坂城も陥落した。しかし、そこに正成の姿はなかった。多分、焼け死んだのだろう。そう判断した幕府は、楠木の

所領を紀伊の湯浅党に与え、乱の幕を閉じた。

十一月、討伐軍は関東に帰国した。五日、大仏貞直に持明院統から馬が与えられた。

一方、それより前に、帰国する將軍もいた。

『足利高氏先日下向には御馬を給はらず』（花園天皇宸記）

“先日、足利高氏が帰国した際には、馬を下賜しなかった”

『一門にあらざるの上、暇を申さざるの故なり』

“北条一門でもないし、暇を言わなかったからである”

これが、足利高氏と持明院統の出会いであった。

【むら時雨】

元弘の変を経て、朝廷は鎌倉幕府への従属を強めた。もともと、持明院統の後伏見上皇は、これを甘受している。それで、朝廷の安泰が図れるなら、安いものだった。

幕府も心得たもので、皇太子の人選については持明院統を表に出している。

そのため、兄から政治仕事を任せられた花園上皇は、甥のためもあり、この時期多忙であった。

一三三一年十月十三日、大覚寺統の女総帥、媒子内親王は次の事を花園に依頼している。

『門院の御在所借り申さるゝの段、如何』（花園天皇宸記）

“（後深草院三女の）御所を康仁親王（邦良親王の子・媒子が庇護）にお借りしたい”

これは、持明院統が旧後宇多派（大覚寺統の穏健派）を屈伏させたに等しい。

おそらく支援を条件に、両統の間では、様々な密約が交わされたのだろう（室町院領の提供など）。

花園の政治家としての成長ぶりが窺える。十一月八日、康仁親王が

皇太子となった。

持明院統の勝利は、先帝派（大覚寺統の討幕派）の没落と無関係ではない。

・官位剥奪・西園寺禰子（皇后位を停止）・万里小路宣房（但し翌年大納言に復帰）

・預かり・恒良・成良・義良親王（全員、寵妃阿野廉子の子。関東申次西園寺公宗邸預かり。皇子のうち十歳以上の者は遠国に、十歳未満の者は幕府派公卿のもとに預けられた）、二条道平（前関白）等

・配流・尊良親王（第一皇子、土佐へ）・尊澄法親王（天台座主、讃岐へ）・万里小路藤房（宣房の子、常陸小田高知の許へ）・千種忠顕（隠岐へ）・花山院師賢等

・斬首・源具行（首謀格）・平成輔（阿野廉子の側近）・日野資朝・日野俊基

無事だったのは籠居中の吉田定房、厭世中の北畠親房、その子顕家くらいだった。

幕府に「先帝と袂を分かった」と見なされた彼らは、のちに先帝と微妙な関係となった。

『或はしのび隠れたるもあり』（神皇正統記）

“一方で、姿を隠して、幕府の追及から逃れた者もいた”

すなわち、畿内の山中に身を隠す、尊雲法親王（大塔宮）・四条隆資・楠木正成である。

『まだなれぬ 板屋の軒の むら時雨 音を聞くにも ぬるる袖かな』（増鏡）

“なじまぬ、粗末な板屋暮らし。むら時雨の音を耳にただけで、涙が頬をつたう”

この頃、六波羅のあばら屋に逼塞を余儀なくされていた先帝の和歌である。何ともしおらしいが、この和歌からこの時期の「後醍醐天

皇」を想像するのは早計である。

というのも、翌一三三二年一月十七日には、「先帝が脱走を企てた」という噂が流れている。表では意気消沈しながらも、裏では脱走を企てる。それが、「先帝」であった。

【一合一会】

一三三一年十二月、幕府は討幕計画を密告した吉田定房を、院評定衆に推挙した。

『累家の仁として、召し仕はるべきか』（花園天皇宸記）

しかし、翌一三三二年二月二日に開かれた院評定に、定房は出席しなかった。

『参るべからざるの所存』

“評定に参加するつもりはない、とも聞いている”

定房は、幕府の仕置に怒っていた。

確かに密告はした。だが、それは“帝”を護るためである。亡き法皇から委ねられた大覚寺統のためである。“帝”を六波羅に押し込め、自分を持明院統に推挙するとは。

定房はその後も出仕を拒み続けた。花園上皇は、そんな定房に好感を持った。

三月七日、隠岐へ流される事が決まった先帝が都を出た。出家は拒否したので、姿は以前のままである。車寄せは、西園寺公重（公宗の弟）が行なった。

隠岐での生活を共にするのは、寵妃阿野廉子と千種忠顕らだけである。

護送は、数百騎の武士が行なった。その中に気になる名が二つある。一つは「名和長年」、もう一つは「佐々木道誉」。護送役選ばれくるくらいなのだから、幕府の信任は厚かったのだろう。幕府の信任は、後日、見事に裏切られることになる。

佐々木道誉は名門近江源氏である。以前、行幸で護衛役を務めた

事があった。

淀の渡し場で、先帝は道誉に和歌を下した。

『しるべする 道こそあらず なりぬとも 淀のわたしは 忘れじともせじ』（増鏡）

“こたびは行幸の道ではないが、昔そなたが護衛を務めてくれたことを朕は忘れておらぬ。そなたも、忘れてはおらぬだろうな”

一方、道誉のような例外を除き、多くの武士は、この道中ではじめて“先帝”を見た。今、道中の小屋で休息する人物は、北条を討とうとした先帝。かつて善政を称えられた帝王である。がっしりした体からは圧倒的な精力が窺える。

『あはれとは なれもみる見るらん 我民と 思ふ心は 今もかはらず』

“そなたらは朕を哀れと思うているようじゃが、そなたら我民を思う朕の心も同じじゃ。配流の身とはなっても、朕の心は都にいた時と何ら変わっておらぬ”

歴代でも、“後醍醐天皇”ほど民想いの天皇は少ない。先の乱でも、内裏を捨て、京の民を戦に巻き込む事を避けた。その点においてのみ、先帝は後鳥羽上皇を上回っていた。

先帝は、無事隠岐へ送り届けられたが、後日、護送役の一部は宮方に馳せ参じた。

【脱線十・大往生】

一三三二年三月二十一日、河内で一人の老人が大往生を遂げた。

京極為兼、七十九歳。

『この人已に亡ぶ。和歌弥よ廃る』（花園天皇宸記）

“為兼の死で、故伏見院と為兼が築いた正しい歌道がいよいよ廃れてしまう”

花園上皇は、近年改めて為兼の歌道の正しさを確信し、度々配所

から教えを受けていた。

『近年以來の詠歌一卷、去年の比、爲基朝臣を使として泉州に遣はし見せしむ』

“ 去年の頃、近年詠んだ和歌一卷を、爲基に持たせて和泉に遣わし、見てもらった ”

十数日後、京に帰還した爲基は、爲兼からの言伝を伝えた。

『詠歌の趣、太以て？妙、深く此の義に達す』

“ 詠まれた和歌は、たいへん神妙。和歌の真義に達しておられます ”
『猶少歌數の故、言句尚練習すべき事有り。意地に於いては更に以て足らざる無し』

“ 歌の数が少ないので、なお励んで下さい。歌を詠む志として、足らぬ物はございません ”

そう言つて、爲兼は、花園が送った和歌の大半を合格とした。

『二三百首の歌、合點せざるの歌十首に過ぎず。尤も道に於いて爲？』

“ 二三百首の和歌のうち、合格しなかったのは十首だけだった。本当に嬉しい ”

察するに、一向に上達しない恋歌でも詠んで、それが不合格となつたのだろう。

花園上皇の和歌のできに驚いた爲兼は、爲基にこう尋ねたという。
『和歌に於いては器量たりと雖も、左遷の比口傳するところ、未だ此の奥義に及ばざるのみ。幽邃に至りては尤も不審』

“ 院は、元々和歌にご堪能じゃったが、儂が配流された頃、院に口伝していたのは、和歌の奥義に及ばない内容じゃった。一体どうやって奥義に達されたのか、不思議じゃ ”

爲基が「仏教に励んでおられたからでしょうか」と答えると、爲兼は膝を打った。

『然れば不審有るべからず。佛法和歌更に差別の意地有るべからざる』

“なるほど、納得いったわい。仏教も和歌も、根は同じじゃからな”
これは暴論ではない。かつて二条為世は、為兼の和歌を「一遍の念仏踊りと同類だ」と非難した。念仏と京極派。両者は、“物事をありのままに捉える”ところが共通している。それは、乱世にあっては、最も必要とされる事だった。

訃報に接した三月二十四日の日記は、妙に多弁である。

上皇の心に残るのは、もはや京極為兼だけであつたのかもしれない。先帝と親しかつた二条為定（為世の孫）が出仕を止められたのは、この時期である。

【そして刑は執行された】

一三三二年四月十四日、吉田定房は幕府に先帝の帰京を嘆願したが、退けられた。

『御帰京を免じ申すの条、何ぞ軽忽の儀あるべけんや』（吉口伝・「南朝史論考」一三二頁）

“先帝の帰京を許すのに、一体何の問題があるというのか”

二十日、そんな定房に京極為兼を重ねたのか、花園上皇が説得に乗り出した。

『定房卿を召し弘御所に於いて對面す。政道行はるべきの由を種々申す』（花園天皇宸記）

“定房卿を弘御所に呼び、対面した。政務に協力して欲しいと、懇々と説得した”

花園の説得に、さすがの定房も折れ、これ以降大覚寺統のため、政務に協力した。

定房とは違い、未来のない者もいる。五月二十二日頃、平成輔が伊豆で処刑された。

六月二日頃、正中の変以来、佐渡に流されていた日野資朝も処刑される事になった。

資朝は、動じる様子も見せず、都に残した息子国光に一筆したため

た後、刑に臨んだ。

『四大本主無し 五蘊本来空なり

頭をもって白刃を傾くれば ただ夏風を鑽るが如し』（増鏡）

“ 万物を形作る地水火風に主君などいない。ならば、それで出来た私にも、元来主君などおらぬ。そもそも、色受想行識など仮初め、初めから存在しなかったのだ。さあ、白刃を振り下ろすが良い。私を切ったところで、姿形のない夏風を切るようなものだ”

しかし、仏教学を知らない執行人には、資朝の言う事が、まるで理解できなかった。

だからとりあえず、資朝の要望に応えて、刃を振り下ろした。

三日頃、日野俊基が鎌倉郊外で処刑された。

十九日、源具行が近江で、佐々木道誉指揮のもと、刑死した。

『武き家に生れて、弓矢とるわざにかかづらひ侍るのみ、憂きものに侍りけり』

“ 武家に生まれて、こうゆう役目ばかりさせられるのは、辛いものです”

道誉の言に、この地での死を悟った具行は覚悟を決めた。数日後、刑が執行された。

『消えかかる 露の命の 果ては見つ さてもあずまの 末ぞゆかしき』

“ 今更、命などどうでも良いが、幕府の最期をみられなかった事が残念でならない”

刑を見届けた道誉は、先日つい口にしてしまった、先帝に対する評を思い出していた。

『世下り時衰へぬる末には、あまりたる御有様にや、かくもおはしますらん』

“ 朝廷が衰えた時代に、なまじ器量を備えておられるから、却ってあのように過酷な生涯を歩まれるのかもしれませんが”

では、そのような先帝に仕えた臣下達の生涯は、どう評するべきな

のだろうか。

【宮の還俗と楠木正成の再挙】

一三三二年六月頃、畿内に身を隠す大塔宮が還俗し、「護良親王」と名乗った。

『山々をめぐり、国々をもよほして義兵をおこさんとはたて給ける。』（神皇正統記）

“（親王は、）畿南の山々を駆け巡り、各地で義兵を起こそうと企てられた”

こうした動きは、まもなく持明院統や幕府の知るところとなった。

『熊野山より大塔宮令旨を執進す』（花園天皇宸記）

“熊野山から大塔宮が発した令旨（討幕命令）が送られてきた”

大塔宮から令旨を受けた熊野山は、さっそくこれを朝廷に届け出ている。

親王を奉じるのは、四条隆資・隆貞父子だった（高貴な人は、自分で書状をしたためたりはしない）。しかし、幕府は三人を捕捉できず、焦りを募らせた。

六月下旬、早くも親王の令旨に応じた竹原宗規が、伊勢に侵攻した。

『地頭兩三人打ち取られ、守護代の宿所焼かれ了んぬ。其の後凶徒引き退き了んぬ』

“地頭二三人が討ちとられ、守護代の宿所が焼かれた。その後、凶徒は退いた”

かくして、先帝の配流によって終わったかに見えた討幕計画は、護良親王によって再開

され、「元弘の乱」の第二幕が始まった。

そして、非常に心もとない事に、現在内容が分かっている「花園天皇宸記」はここまで

である。上皇が晩年まで日記を書き続けたのは事実であり、そこに

はいよいよ大事な時期が記されている筈なのだが、いかんせん、“現在発見されていない”。

したがって、「この時点から建武政権崩壊までの持明院統の動向はよく分らない」事は、ここで断わっておく。本書では、その期間についても可能な限り迫りたい。

さて、第二幕の前半、討幕の中心は、護良親王ともう一人の武将だった。

即ち、十一月に四条隆貞を奉じて再起した楠木正成である。正成は、手始めに湯浅党を下して赤坂城を奪還し、金剛山に千早城を築いて、周囲への進攻を始めた。

十五日、この頃風邪気味の花園上皇は、天台座主（比叡山指導者）への書状にこう記す。

『昨日より門々の番衆等、鎧直垂を著し祇候す』
（尊経閣文庫所蔵文書、原漢文・「地獄を二度も見た天皇 光厳院」七〇頁）

“昨日から、門の警固役は、鎧直垂で武装している”

『関東武士も上洛遅れの間、返すがえす畏怖無きにあらず候』

“関東武士の上洛も遅れているので、返すがえす事態が危惧される”

正成の狙いは、河内周辺で暴れに暴れ、全土の呼応勢力を煽る事である。

正成は、京を恐怖に陥れ、狙いを成功させつつあった。

翌年一月十四日、正成は河内・和泉の守護代を破り、十九日摂津天王寺に侵攻した。

『其勢五百余騎、其外雑兵数知らず』（楠木合戦注文）

“その軍勢は五百騎にのぼり、その他雑兵は数知れなかった”

最早それなりの軍勢である。楠木軍は、幕府方を各個撃破しつつ、兵糧の略奪に励んだ。

二十一日、護良親王の令旨に応じ、播磨の地頭赤松円心（則村）が挙兵した。

播磨は六波羅の根拠地の一つである。ついに、足元に火が点き、京は動揺した。

『或いは関東に行幸あるべく、面々用意す、或いは山上に行幸有るべしと云々』

（二条道平公記・「地獄を二度も見た天皇 光厳院」七四〇七五頁）

“帝を関東にお連れすべく、用意が行なわれ、また比叡山にお連れすべしとの意見も出た”

夜になり、重大な決定が下された。

『関東に行幸大略す』

“帝を関東にお連れする事が決まった”

この決定に焦った六波羅は、楠木を討つため、大軍勢を招集した。

これを率いるのは、阿蘇治時（河内道）、大仏高直・二階堂道蘊（大和道）、名越宗教（紀伊道）である。

それに、京警護で上洛していた、新田義貞ら上野・武蔵の御家人が加わった。

『於加誅戮之仁者、可被宛行丹後國船井、不可依其身也』（楠木合戦注文）

“正成を討った者には、丹後国船井を与える。その身分は問わない”

六波羅は気付いているのだろうか。幕府は、今、長年の政策を捨てたのである。

大軍勢の南下を察知した正成は、先手を打って後退し、千早城に籠った。二十二日、河内道の軍勢が赤坂城への攻撃を開始し、閏二月一日、守将平野将監を降伏させた。

一方、吉野に向かった大和道の軍勢も、同じ日、護良親王が籠る蔵王堂を陥落させた。惜しくも親王は確保できなかったが、この軍勢も、即座に千早城の包囲に加わった。

しかし、ここまでが限界だった。金剛山の千早城には、正成が顕在である。

堅牢な山城は、大軍をもってしても容易に落とせる城ではない。

『吉き地なりければ、左右なく打落され』（保暦間記）

“要害の地に立つ城なので、攻め寄せても打ち落された”

城からは、包囲軍に対して、次々と石つぶてが投げ落とされ、死傷者が相次いだ。

戦線の膠着に、まず遠国の御家人が倦み始めた。まもなく、播磨・伊予勢が、国元の混乱を鎮めるため、引き上げた。こうした中、新田義貞も、口実を設けて上野に戻った。

【伯耆の長者】

一三三三年閏二月十一日、長門・周防守護の北条時直が、伊予で挙兵した土居・得能氏（海賊）を討つため、四国に侵攻したが、返り討ちにされた。

これに力を得た先帝は、二十四日警護役の佐々木氏を寝返らせ、隠岐を脱出した。

『あまの釣舟のさまに見せて、夜深き空の暗きまぎれに押し出す』（増鏡）

“漁師の釣舟に偽装して、夜の闇に紛れて出航した”

二十五日、先帝は伯耆の稲津に着き、名和長年という者に宣旨を遣わした。

『あやしき民なれど、いと猛に富める』

“身分は低いが、現地での勢いは盛んで、財力に富んでいた”

名和長年は、伯耆を本拠に海運業を営む長者である。当時、海上統制を進める北条氏のもとで雌伏を余儀なくされていた。しかし、利に聡い長年は、北条の膨張をこれ以上許せば、従う自分達もいずれは潰される事を、理解していた。

元々、海の勢力は、北条とは相容れない。海は北条のものではな

いからである（【海賊大暴れ】参照）。なにゆえ、代々の生業を奪われなければならぬのか。

鎌倉時代後期、歴史の陰で、海の勢力は北条との対立を深めていた。阿波の商人の“悪行”などは、時に海賊を超えるものだったという。

海の勢力は、その力を一つに纏める者を、望んでいた。

そこに現れたのが先帝である。

先帝を奉じる事こそ、一族繁栄の道なのは、自明の理だった。

そして今、先帝は、民の呻きに、我が身の危険も顧みず隠岐を脱け出された。

最早、この人を先帝とは呼ぶまい。このお方こそ、帝である。

長年は、「後醍醐天皇」を迎え入れる事を、勅使の千種忠顕に伝えた。

二十八日、後醍醐天皇は名和一族を伴って船上山に移った。その勢、二三百騎。

『国々の兵どもに、御かたきを亡ぼすべきよしの宣旨遣しける』

“諸国の勢力に、幕府を倒すよう宣旨された”

これに対し、守護佐々木清高は、軍勢を率いて船上山を攻めた。だが、天険を活かす名和一族に翻弄され、遂に落とせなかった。隣国出雲の塩冶高貞は、助けにも来ない。

佐々木勢は、戦鬪に倦んだ頃に奇襲を受け、敗北した。清高は海路北陸に逃亡した。

この「船上山の戦い」での勝利をみて、山陰の勢力は、こぞって宮方に転じた。

この地域が安定した後、天皇は千種忠顕を播磨に派遣した。

【死闘】

一三三三年三月十一日、九州。肥後の住人菊池武時は、鎮西探題赤橋英時から召集を受け、博多に着陣した。しかし、「遅参につき

出仕を許さず」とのお咎めを受けた。

やはり嗅ぎ付けられたか。菊池氏は、元来朝廷との関係が深く、幕府に領地を削られた家である。武時は、既に後醍醐天皇から綸旨を受け、阿蘇氏と共に決起しようとしていた。

それが、探題方に察知された訳である。武時の進退は窮まった。

十二日、四国。北条直時が再び伊予に侵攻したが、平井城攻めに敗れた。

同じ頃、畿内。播磨の赤松円心が近隣の武士を糾合し、京への侵攻を開始していた。

赤松軍は、鳥羽と竹田の二手から、洛中への進入を試みた。

『上下たち騒ぐ。馬・車走り違ひ、武士どものうち込みののしりたる』（増鏡）

都は大混乱に陥った。後伏見上皇・花園上皇・光厳天皇は、この事態に六波羅へ避難した。京周辺では、赤松軍と六波羅軍の攻防が始まり、とめどなく続いた。

『都へ寄事十三度、毎度打負て叶はざる』（保暦間記）

“都に攻め寄せる事十三回、その度に赤松軍は攻めきれなかった”

しかし、円心は、何度敗走しても軍勢を立て直し、京への侵攻を止めない。

十三日未明、九州。追い詰められた菊池武時が、阿蘇氏と共に博多で挙兵した。

武時は、挙兵と同時に、少弐・大友に使者を送った。両家も、後醍醐天皇から綸旨を受けていたからである。しかし、両家は、宮方が敗れると判断していた。

少弐の陣に行った使者は切られ、大友の陣に向かった使者は行方をくらました。

卯刻。敗北を悟った武時は、嫡子武重と阿蘇惟直らを本国に逃し、攻撃を開始した。

『僅百五十騎にて、探題の館へぞ押寄ける』（博多日記）

“ わずか百五十騎で、探題の館に攻め寄せた ”

この博多合戦で、菊池・阿蘇軍は、一時探題館の庭に突入するほどの勢いをみせた。

しかし、僅か百五十騎の軍勢は、やがて戦に疲れ、力尽きた。

十六日、反撃に転じた探題は、肥後の規矩高政に菊池・阿蘇の討伐を命じた。

三月末、諸国で蜂起した宮方は、幕府の軍事力を前に限界を見せつつあった。

殊に、菊池の末路は宮方の敗北を予感させ、船上山の後醍醐天皇は焦燥を強めた。

こうした中、幕府首脳陣は、宮方にとどめをさすべく京への大軍派遣を決定した。

その軍勢を率いる将軍として、二人の人物が選ばれた。

一人は名越高家。もう一人は足利高氏である。

【足利高氏起つ】

八条院領が大覚寺統の手に渡った経緯には、もう触れている（【後嵯峨法皇の死】・【ねじれ政局】参照）。その中に、足利荘という荘園があり、足利氏が荘官を務めていた。

足利氏は、鎌倉幕府の重鎮で、草創期以来の威勢を保つ数少ない御家人である。

清和源氏の名門という家格。初代頼康の源頼朝との血縁関係。度重なる北条一門との婚姻。これらを駆使し、政争絶えない鎌倉時代を生き延びてきた。

現当主は足利高氏という。母は上杉清子といい、つまるところ、正室（金沢氏）の子ではない。北条の血も流れぬ高氏が、父貞氏の死後、当主となれたのは、兄高義（正室の子）が早世したからである。妻は、執権赤橋守時の妹、登子を迎えている。

北条は、この異色の当主に対し、厚遇を以て友誼を築く道を選んだ。

『源高氏從五位上に敘す。是れ關東申すの故なり。此の事に依り、今日除目を行なはるるなり。& amp; #24553;ぎ申すの故なり』(花園天皇宸記)

“(一三三二年六月八日、)高氏を從五位に叙した。幕府の依頼があったからである。この事により、わざわざ今日人事を行なった。急いで欲しいといわれたからである“

しかし、高氏は、祖父家時の無念の死を知っている(【弘安徳政】参照)。

宮方を討った足利を、長崎円喜がそのまま放っておくかは、甚だ疑問であった。

一三三三年三月二十七日、高氏は宮方討伐のため、鎌倉を離れた。妻登子と嫡子千寿王を鎌倉に残しての出立だった。兩人は、足利が幕府に背かぬための、人質である。

『疑をのがれんとにや、告文をかきおきてぞ進発しける』(神皇正統記)

“疑惑を逃れるためだろうか、(高氏は)誓紙を提出した上で進発した”

宮方につくべきか。『難太平記』によると、母清子の兄上杉憲房は、出発時から決起を促していたという。また、三河で、吉良貞義に是非を問うたところ、「遅いくらいです」といわれた。あるいは、『梅松論』によると、近江で、細川和氏と上杉重能が、前々からの工作で得た綸旨(後醍醐天皇からの命令書)を披露し、高氏に挙兵を勧めたという。

そんな高氏が向かう畿内・西国では、幕府軍と宮方が激突していた。

・二十八日、比叡山が赤松軍と呼応して京に攻め入るが、六波羅軍に防ぎきられた。

・二十九日、吉見頼行が長門探題を攻めた。

・四月三日、赤松軍が再度京に迫るが、攻めきれず退却した。
・八日、千種忠顕が山陰の軍勢を率いて、赤松軍と京を攻めた。一時京を占領したが、まもなく、支えきれずに後退した。
十六日、高氏は入京した。両六波羅は援軍の到着を喜び、さっそく高氏等に伯耆への進発を要請した。まもなく、高氏は後伏見上皇から院宣を受けて出立し、丹波・丹後を経て、伯耆に向かう事となった。一方、名越軍は、播磨を経て、伯耆を目指す事となった。

両六波羅は、なぜ高氏等を目の前の赤松・千種軍に差し向けなかったのか。おそらく、この時点で、京周辺の宮方は残力を使い果たそうとしていた。十七日、千種忠顕などは、護良親王と連携しながら、断末魔の悲鳴のように（後醍醐を奉じた）綸旨を発している。

『平高時法師、不領国家軌範、猥背君臣之礼儀、掠領於諸国、令劳苦万民』（「伊勢結城文書」元弘三年四月十七日後醍醐天皇綸旨案・「建武政権における足利尊氏の立場」三七頁）

“（結城宗広殿、）高時は国を乱し、君臣の礼に背き、諸国を掠め盗り、民を苦しめている”

実は、宗広に対しては、四月一日に、船上山にいる後醍醐天皇が綸旨を発している。

そのため、宗広宛ての綸旨は、同時期に「二通も」残っている。宮方の動揺が窺える。

入京後の約十日間、高氏の行動はよく分からない。足利軍は、ずっと京周辺で立ち往生していたわけで、その動向は六波羅から警戒されなかったのだろうか。

確かなのは、四月中に高氏と連絡をとったのが伯耆の後醍醐天皇であり、畿内で活動する護良親王・千種忠顕らとの間で連絡が成立するのは、五月以降という事だけである。

高氏は、京周辺の勢力には去就を示さず、遠国向きの工作を黙々と進めていたようだ。

二十七日、足利軍が西岡を經由した頃、名越軍では深刻な事態が発生していた。

大将名越高家が、久我縄手で、赤松軍にあっさりと討たれたのである。

戦意を失った名越軍は、京への退却をはじめた。丹波国篠村にその報が届くや、高氏は直ちに、篠村八幡宮に錦の御旗を掲げた。即ち、宮方への与同を表明したのである。

源氏の正統足利が離反した。高氏の決起は、大きな波紋を呼んだ。『京中に充満せし軍勢共御味方に馳参ずる事雲霞のごとし』（梅松論）

“京で去就を定めかねていた軍勢が、こぞって高氏の下に馳せ参じた”

高氏は、更に結城宗広ら各地の諸将に、相次いで挙兵を促す書状を發した。

二十九日、高氏は、九州の将にも挙兵を要請している。

『蒙勅命之間、令参候之处、遮御同心之由承候之条為悦候』（「大友文書」（元弘三年）四月二十九日足利高氏書状（鎌倉遺文三二一九）・「建武政権における足利尊氏の立場」三六頁）

“（伯耆から）勅命を受けて参じたところ、（大友貞宗殿が）お味方と知り喜んでいる”

この書状に、九州の諸将はようやく重い腰を上げた。

【六波羅陥落と新田義貞の挙兵】

一三三三年五月初頭、赤松・千種軍が足利軍に合流した。この時、足利高氏にとって好都合だったのは、千早城を囲む幕府軍が動けなかった事だろう。楠木正成が、護良親王と連携して幕府軍を釘付けにし、膨大な戦略的遊兵を生みだす事に成功していたのである。

七日早朝、嵯峨から内野に足利軍が雪崩れ込んだ。目指すは六波

羅である。

『関をつくるとかやいふ声は、雷の落ちかかるやうに地の底にも響き』（増鏡）

“ 関の聲が、雷が落ちるように地の底まで響き渡った ”

『ただ呆れ給へり』

“ その様子に、後伏見法皇・花園上皇・光厳天皇・康仁親王はただ呆然としていた ”

それでも、六波羅勢は最後の抵抗をみせ、激戦が展開された。

『雨の脚よりも繁く走り違ふ矢にあたりて、目の前に死を受くる者数を知らず』

“ 雨よりも激しく飛び交う矢にあたって、目の前で死ぬ者が数知れない ”

しかし、昼過ぎ、幕府軍の戦線が崩壊した。

『燃え上がる煙ども、四方の空にみちみちて日の光も見えず』

“ 火の手が上がり、燃え上がる煙が都の空四方に満ちて、日の光も見えなくなった ”

夜半。次々と寝返りが出る状況に耐えかね、終に六波羅が放棄された。

両六波羅も、後伏見上皇らを連れ、東へ落ち延びていく。

『行幸を洛外に成奉りて、関東の合力をば相待ち。又は金剛山を囲める勢共に事のよしを通じて合戦を致すべし』（梅松論）

“ 帝を洛外にお連れし、関東の救援を待つ。又は、金剛山の軍勢と合流して反撃に出よう ”

最悪の場合、仲時らは畿内を放棄し、持明院統を関東まで連れていくつもりだった。

両六波羅は、事ここに至っても、「東国は磐石だ」と信じていたのである。

しかし八日、関東でも異変が起きた。この日、上野国世良田に、幕府の徴税使として入部した紀親連と黒沼彦四郎入道が、新田義貞

の手に落ちたのである。親連らの任は、長楽寺の御膝元として商業が盛んな同地から、戦費を取り立てる事だった。宮方との戦いに倦んだ幕府は、諸国から戦費を集めようとしたのである。それが反発を招いた。

義貞は、黒沼を斬首にし、高官の紀親連は監禁した。そしてそのまま、一族の大館・堀口・岩松・里見・江田らと挙兵し、進軍を開始したのである。この挙兵は、高氏と連絡を取り合っただけの行動だった。そのため、新田軍には、足利一族の桃井氏が、早くから参加している。新田軍は、近国の勢力を糾合しながら、九日、武蔵に南下した。

【脱線十一・船上山からの指令】

一三三三年四月末～五月初めにかけて、後醍醐天皇は勢いづく宮方に釘をさしている。

『仙洞以下縦雖有与同、彼凶黨之義、不可混朝敵之族』

（「光明寺残篇」・「建武政権試論」一七一～一七二頁）

“（持明院統の）院以下は、幕府に味方したといっても、朝敵と混同してはならない”

『官軍等於仙洞邊不可致狼藉、若誤而有無禮事者、可處重科』（同 一七一頁）

“官軍の中で、院に対して狼藉、あるいは無礼を働いた者は、重罪とする”

また、持明院統の所領や、貴族に対する手出しも禁じた。

意外や意外。後醍醐は、以前に持明院統の所領を奪いもしたが、討幕戦では持明院統の保護を厳命するのである。そして、建武政権が成立した後も、持明院統に対し、必要以上の圧力を加えようとしなかった。後醍醐は、矜持というものを持っていたらしい。

ところで、天皇が軍勢に対して直接指示を出すのは、絶えて久しい。

南朝の特徴ともいえる、「天皇による軍事の掌握」は、この時期に起源を持つ。

しかし、これは必ずしも悪い事ではない。何故なら、後醍醐は軍の狼藉に対し、指導者としての責任を果たそうとしているからだ。例えば、五月に、こんな指令を出している。

『東夷等運命已窮、滅亡將至、依之、漫取無辜平民之首、不知其數』
(同一六八―一六九頁)

“もはや幕府の運命も窮まり、その滅亡は必至だが、戦乱に乗じて無喜の民の首を取る者が後を絶たない”

『盜奪尊卑男女之財、逐日暴、佛閣人屋之灰燼』

“民の財の強奪も、日を追って激しくなっている、また仏閣・人家も灰燼に帰している”

『獸心人面者也、不誅罰彼逆黨、萬民何措手足』

“（このような輩は）人の皮を被った獣である。これを罰さずして、民の安寧は図れない”

『官軍士卒上下同心、只伐叛者、不煩衆人、偏先仁慈、更無侵奪人』

“官軍は上下心を一つにし、ただ謀反人を討て。民を煩わさず、慈悲をもち、侵奪などは間違ってもするな”

『生擒之類、於凡下者速可放棄、於有名之輩者召置之、可經奏聞』

“捕虜のたぐいも、名もない者は放ち、名のある者は捕縛した上でこちらに報せよ”

つまり、「こちらの指示もなく捕虜を断罪するな」というのである。四月の時点では、「敵を捕らえたら切れ」としていたが、宮方の優勢が固まるや、それを改めたのであった。

しかし、これらの指示にもかかわらず、地獄が始まるのは、ここからだった。

【伊吹山】

一三三三年五月九日、畿内。普音寺仲時率いる六波羅の残党は、

後伏見上皇らを連れて、ようやく伊吹山のふもとに到着した。ここまで、宮方や野伏との戦闘が繰り返され、軍勢はもはや数百に減っている。南方の北条時益は、既に流れ矢で死んでいた。また、同行する公家衆は、日野資名らを除き、多くの者が混乱に紛れて一行を脱け出していた。関東申次の西園寺公宗なども、いつのまにか北山の私邸に逃れている。

しかし、この伊吹山を越えれば、畿内を抜けて美濃路に出られる。その時だった。

『待ちうけて矢を放ち給ふ』（増鏡）

“宮方の軍勢が、六波羅勢を待ちぶせ、矢を放った”

付辺で法師をする守良親王が糾合した、近江・美濃・伊勢・伊賀の悪党だった。

守良親王は故亀山法皇の第五子。亀山院を生前苦しめた六波羅の者を生かしては帰さぬ。

敗残軍を追い詰める悪党らは、さながら幕府への怨みを結集した怨霊だった。

仲時らは最後の力を振り絞って番場付近で応戦したが、やがて敗色が濃くなった。

連戦に疲れた軍では、もはや逃げる事もかなうまい。

『恐れながら仙洞を害し奉り各討死自害仕るべき』（梅松論）

“恐れながら、院のお命を縮め、おのおの討死・自害つかまつりましょう”

しかし、仲時はかぶりを振った。

『生て君を敵に奪はれんこそ恥なるべけれ。命を捨て後は何事かあるべき』

“仮に我等が生き延びて院を敵に奪われるというなら恥である。しかし、命を捨てた後に何が起ころうと、もはや我等の恥ではない”
院を巻き込むいわれなどない。そう答える仲時は、まるで憑き物が落ちたかのようなだった。仲時は表情を改め、南方の従者に、「それ

よりも時益殿の首は無事か」と尋ねた。

仲時は、運ばれてきた時益の首を見つめた後、自害した。

仲時と時益は、一三三〇年六波羅に赴任し、苦楽を共にした仲であった。

従者たちも、すぐに後を追った。かくして、一行は、後伏見上皇・花園上皇・光厳天皇・康仁親王らをその場に残したまま全滅したのである。

薄暗闇の中、数百の屍を見つめる上皇らは、守良親王の軍勢に保護され、帰京した。

六月、後伏見上皇は剃髪した。しかし、父から出家を勧められた光厳は、拒絶した。

『思ひ寄らぬ』（増鏡）

また、以前はあれほど出家を望んでいた花園上皇も、何故か出家をしなかった。

【若君の挙兵】

一三三三年五月中旬、関東では、新田義貞が勅命を奉じて幕府軍と衝突しながら、南下を続けていた。十二日、上野国世良田において、鎌倉から脱出した千寿王も挙兵した。

『十二日馳参上野国世良田、令参将军家若君御方之处』（鹿嶋利氏申状案）

“十二日に上野国世良田に馳せ参じ、若君（千寿王）の御味方に参じました”

千寿王は足利高氏の嫡子であり、母は執権赤橋守時の妹である。高氏が出立した時点では人質として鎌倉に留め置かれていたが、鎌倉からの脱出に成功していた。まだ子供とはいえ、血統も地位も、無位無官の新田義貞をはるかに上回る存在だった。

北条氏に代わり、関東に君臨すべき人物として、これ以上の貴種はいなかった。

『被付新田三河弥次郎満義世良田之手』

“（若君に合流した後は）世良田満義の軍に配属されました”

そのため、新田本家と仲の悪い世良田満義（新田一族）などは、この時点で千寿王と行動を共にしている。討幕軍が、僅か数日で「西は河内・東は奥州」からの参陣を得て、急速に膨れ上がったのは、京における高氏の軍勢催促と、関東における千寿王の挙兵ゆえといわれている。千寿王を奉じる軍団は、まもなく武蔵で新田軍に合流した。

同じ頃。父高氏は、千早城から南都へ後退した幕府軍の懷柔に乗り出していた。

『頼朝の旧義を忘れず、今の勅命を重んぜば、京都へ馳上て合力すべし』（保暦間記）

“頼朝公の旧恩を忘れず、帝の勅命を重んじるならば、京都へ駆け付け合力すべし”

投降勧告だった。注目すべきは、勅命と並べて“頼朝”の名を使っている事だろう。

実は、高氏がおさえた六波羅には「將軍の本邸」があった。京から鎌倉へ下向する將軍達が必ず六波羅に立ち寄る（【二条、新將軍の到着を目撃する】参照）理由。“六波羅の主”高氏は、この時点で、「頼朝の立場」を受け継ぐ資格を備えていたのである。高氏は、この政治効果を存分に利用し、“新たな幕府”をも視野に入れた手を打ち始めていた。

間もなく、南都の幕府軍は高氏に降服し、頭を丸めた大将らは禁獄された。

再び関東。新田・足利を中心とする討幕軍の南下で、鎌倉に危機が迫るなか、得宗北条高時は、出家していた弟泰家を復帰させて軍勢を与え、討幕軍の迎撃に向かわせた。

十五日、泰家率いる軍勢は、武蔵分倍河原で討幕軍の進軍を食い止

め、後退させた。

しかし、泰家は運に見放されていた。ここで、討幕軍に、三浦大和義勝率いる相模の軍勢が合流した。義勝は、足利の重臣、高一族から三浦に養子にいった人物である。

翌十六日、力を得た討幕軍は、泰家を鎌倉に追い返し、武蔵を掌握した。

【決戦、鎌倉】

一三三三年五月十七日、船上山には、公卿達が参集していた。この日、機が熟したと判断した後醍醐天皇は、「光厳天皇が行なった人事を白紙に戻す」と宣言した（伯州詔命）。

十八日。関東では、新田・足利討幕軍が、南下の末、七里ヶ浜に到着した。

ここで、ようやく討幕軍に加わる者も少なくない。結城宗広などはこちら言っている。

『自今月十八日、始合戦、毎日連々企数戦』（「伊勢結城文書」元弘三年六月九日結城宗広請文案、「福島県史」七、三六九頁・「建武政権における足利尊氏の立場」四〇～四一頁）

“十八日から合戦を始め、連日連戦しました”

という事は、後醍醐天皇や足利高氏からの誘いを黙殺し、直前まで傍観に徹していたのである。「太平記」などに描かれる”忠臣”結城宗広とは、随分姿勢が異なる。

しかし、これを非難するのは酷だろう。鎌倉幕府の倒壊は、後の室町幕府や江戸幕府の倒壊とは異なる。幕府は、ほんの二三年前まで勝ち続け、表面上、北条一門は圧倒的な優位にあった。なまじ中央を知る人物ほど、その倒壊を信じられなかったのである。

だが、その実態はどうか。内管領長崎高資は、この時期に史料上から姿を消し、「おそらく過労死か病死をしたのだろう」と言われている。父円喜も相次ぐ失策で力を失った。また、大仏惟貞ら有能

な一門も、既に亡くなっている。幕府は「指導者の不在期」にあった。しかも、改革を捨てた幕府には、それを補うべき制度もなかったのである。

この日、新田義貞は、小袋坂・化粧坂・極楽寺の三道から、鎌倉への突入を命じた。

小袋坂方面軍は堀口貞満と大島義政。化粧坂方面軍は新田義貞と脇屋義助。極楽寺方面軍は大館宗氏と綿打氏義がそれぞれ鎌倉市街を目指す。

これを防ぐ北条軍も三道に将を配した。小袋坂に陣取るのは、執権赤橋守時である。

守時は、妹婿足利高氏の裏切りに責任を感じていた。聞けば、新田軍は、千寿王を奉じてここまで膨れ上がったという。守時は執権である。ここで義貞を討つ責任があった。

赤橋軍の突撃は凄惨を極め、小袋坂方面軍は押しまくられた。このまま、一気にこの方面の敵を殲滅する。赤橋軍は前方に大きく突出した。だが、この追撃は、後続との連携を欠くものであり、赤橋軍は州崎付近で孤立を余儀なくされた。

化粧坂の義貞は、普音寺基時（【謎の失脚】参照）と金沢越後左近大夫将監（貞顕との関係は不明）が抑えているというのに。守時は歯軋りしたが、赤橋軍は体勢を立て直した堀口・大島勢に包囲されていく。もはやこれまで。守時は包囲の中で自刃した。

しかし、後方で軍を再編していた金沢貞将（貞顕の子）が、すぐさま戦線に投入されたため、小袋坂方面軍は、防衛線を突破できなかった。

一方、極楽寺方面では、「混戦」が展開されていた。この方面は、鎌倉市街に突入する進路が二つもあったからである。一つは極楽寺坂であり、もう一つは稲村崎である。

間に霊山という山を挟んで、北に極楽寺坂があり、南に海岸線を通

る稲村崎がある。

したがって入口は二つあり、突破は容易に見える。

しかし、難点があった。

この方面を守る大仏貞直は靈山に兵を置き、突入を図る討幕軍を側面から突く体制を整えていた。これではうかつに攻められぬ。しかも、極楽寺坂にも十分な軍勢が配備され、これのみでも突破は困難だった。そうなるに残るは稲村崎、海岸の狭路であるが、ここは水軍からの矢雨にさらされる進路であり、海岸線は逆茂木で固められていた。

したがって、極楽寺方面を突破する事も、至難であった。

だが、確かな記録によると、方面軍を指揮する大館宗氏は、十八日に稲村崎を突破している。おそらく敵の防衛体制が整う前に先手を打ち、少人数での突破に成功したのだろう。

『稲村崎の陣を駆け破り、稲瀬川ならびに前浜の鳥居脇まで合戦の忠をいたす』

（「鎌倉遺文」三二八—三三〇号、「鎌倉北条氏の興亡」二〇三頁）

“稲村崎の陣を駆け破り、稲瀬川及び前浜鳥居の周辺まで進出して戦いました”

この前浜というのは、稲村崎の更に奥にある浜辺で、この方面においては鎌倉中心街への最期の関門となる稲瀬川の一手前である。

つまり、宗氏は相当無理な進撃を重ねたようで、さしもの大館勢も稲瀬川で力尽きた。

『大將大館、稲瀬川において討ち取られ』（梅松論）

“大館宗氏は、稲瀬川において討ちとられた”

残された極楽寺方面軍は、極楽寺坂を中心に戦闘を展開せざるを得なくなった。

二十日、やはり靈山にいる軍勢が邪魔だ。極楽寺方面軍は、靈山寺に攻撃を集中した。

『廿日奉属新田遠江又五郎経政御手、就到軍忠、於鎌倉靈□寺之下

討死畢』

（元弘三年八月日熊谷寅一丸申状・山本「新田義貞」一〇一頁）

“新田経政の軍勢に参加して、軍忠を致し、鎌倉靈山寺で討死しました”

翌二十一日も、靈山寺を巡る戦いは続いた。靈山寺大門に陣取る貞直軍は、要所を渡すまいと散々に矢を射かけ、近づく綿打氏義勢を攻めあぐねさせる。

しかし、戦線の膠着が続くと思われたその時、寺とは別の方角に駆ける一団が出現した。

『俊連峯より折り下り先を懸け、敵の籠る大門狭板を打ち破り戦う』（和田文書・山本「新田義貞」一〇三頁）

“三木俊連が、峯に登ってそこから一気に駆け下り、敵の籠もる大門を突破した”

この俊連の働きによって、方面軍は、この日のうちに靈山を制圧した。

この間、化粧坂口を他将に任せた新田義貞も、本陣を稲村崎に移している。

大館宗氏が突破できたのだから、本軍による突破も可能はずだという理屈だった。

問題は、大軍の移動が難しい狭路をどう抜けるかであった。

ここで日を掛ければ、勝機を失う。

だが、力攻めをすれば、敵船団からの矢で大出血を強いられる。

何か策はないか。

午前四時十五分頃。稲村崎に異変が起きた。

『俄かに塩干して合戦の間干潟にて有し』（梅松論）

“にわか潮が引き、合戦の間、海は干上がった”

干潮だった。浜辺から海が後退していく。

さしもの敵船団も、浜辺から引き離され、稲村崎を通る討幕軍の狙撃が不可能となった。この瞬間、幕府は天に見捨てられたのである。

しばし、自然の脅威に圧倒されていた義貞は、やがて我に返り全軍に突入を命じた。

目指すは、東勝寺（北条氏代々の菩提寺）。北条高時の首一つ。

二十二日、北条軍は鎌倉市街に侵攻を受けていた。

各防衛拠点を固める諸将が最後を迎えるのは、この段階になってからである。

極楽寺方面の守将大仏貞直は、前方と後方から攻撃を受け、ついに討死した。

小袋坂の金沢貞将（貞顕の子）・化粧坂の普音寺基時は、軍勢が底をつき自害した。

鎌倉三道を守った守将の中、基時だけが過去の人である。後方の北条高時の側で控えていて然るべきなのだが、近江での嫡子仲時の最期を知り、それを望んだのだろうか。

そして東勝寺。得宗高時が籠もるこの寺にも、今や敵軍が殺到しようとしていた。

だが、高時は、自らの死に場所を鎌倉と思い定めている。弟泰家と亀寿丸（時行）らは、既に鎌倉を脱出している。得宗家は滅びない。

鎌倉に殉じたい者だけがここで死ねばよい。

高時に、長崎円喜・安達時顕・金沢貞顕。彼らは東勝寺で自害し、鎌倉と共に滅びた。

滑川で、東勝寺に向かう新田軍を防いでいた者達も、寺が燃える様子を確認するや、皆自害した。実に、千人を超える武士が、「武士の都」と運命を共にしたのである。

最期の将軍守邦親王は、この後、出家した。

一方、金沢越後左近将監は、化粧坂から前方に決死の突撃をかけ、血路を開いたようだ。その後の行方は、ようと知れない。

【京への帰路】

一三三三年五月二十三日、後醍醐天皇は、名和一族を伴い、京へ向けて進発した。

・二十五日、九州で少弐・大友・島津らが、鎮西探題を滅ぼした。探題赤橋英時に三百四十余人が殉じた。この日、後醍醐は道中で光厳天皇を廃した。

・二十六日、長門探題北条時直が降伏した。

『符契をあはすることもなかりしに、筑紫の国々・陸奥・出羽のおくまでも同月にぞしづまりにける。六七千里のあひだ、一時にこくりあひにし、時のいたり運の極めるはかかることにこそ不思議にも侍しもの哉』（神皇正統記）

“示し合わせたわけでもないのに、同じ月の間に諸国が静まった。時が至り、運命が極まるとはこういう事か。まったく不思議なものである”

後に北畠親房はそう振り返っている。

こうして、鎌倉幕府は、悉くが滅亡した。

無論、これは後醍醐天皇の力でも、足利高氏の力でもない。

この二人が、幕府倒壊時に果たした役割は、重大ではあっても不可欠ではない。

二つの個性が、余人に代え難い使命を果たすのは、むしろこの後である。

新たな朝廷によって、国を革めようとする後醍醐天皇。

鎌倉を捨て、六波羅に身を置いた足利高氏。

・三十日、摂津兵庫で赤松円心・則祐父子の迎えを受けた。

・六月一日、兵庫を出て、楠木正成の迎えを受け、鎌倉陥落の報を受けた。

後醍醐天皇の京への帰路は、確かに歓喜に満ちたものであった。

しかし、両者は鎌倉幕府が一気に倒壊した事によって、前時代の負の遺産をも全て引き継いだのである。

当時の日本が停滞を脱け出すには、なおも、様々な矛盾の解決が必要であった。

この話もしておこう。この時期、日本列島はしばしば寒気に覆われている。新田義貞が

鎌倉攻略に利用した干潮も、小氷期気候による著しい海退が原因であるという。

そういえば花園上皇も、一三三〇年に「寒波」の事を記していた（【儒学奨励と蝦夷蜂起】参照）。騒乱の背景には、人の力を超えた要素が大いに関わっていた。

兵乱の背後に天意あり。一四世紀、日本では、気候の異常が観測されていた。

両者は、早急に兵乱を鎮め、一刻も早く民に安寧をもたらす政治を行なわなければならなかった。変革の時代の始まりである。

―決戦、鎌倉―（後書き）

というわけで、「鎌倉幕府末期―幕府倒壊」の章でした。後醍醐天皇の登場。鎌倉幕府の迷走。

さまざまな政治勢力の暗躍。友情・裏切り。その他諸々。

そして、第三章以降の、延々と続く政治闘争に辟易した方にとっては、久々の合戦シーン。

楽しんでいただければ幸いです。

1…さて、本章は、花園上皇・吉田定房によって、皇室に関するデリケートな意見が提示されています。

その意見への賛否は、ここでは論じません。

しかし、少なくとも、「誠太子書」・「吉田定房奏状」は、今日においても一読の価値がある文書である事は間違いないでしょう。

鎌倉時代末期―南北朝時代は、皇室の存在意義・日本の国家体制が問われた時代でした。今日でも、議論が尽くされていない事柄です。

今、南北朝時代を取り上げる事の意義は、案外大きいのかもしれません。

2…本章は、「太平記」史観との決別の章でもあります。

本章において、楠木正成の活躍は、それほど大々的には扱ってありません。ちらっと登場する佐々木導誉も、妙にしおらしい。

また、後醍醐天皇の性格も、太平記とは随分違います。

しかし、「元弘の変で一時敗れ、西園寺に縋る後醍醐天皇」・「倒幕戦で持明院統の保護を言明する後醍醐天皇」・「戦乱に苦しむ民を思う後醍醐天皇」・「臣下と決別していく後醍醐天皇」。長所に短所。美点、欠点。いずれも、後醍醐天皇なのです。

この当たり前の事を忘れたら、「太平記」の劣化コピーになります。

3…そして、本章では、足利高氏がついに登場しました。

ここからが、本書の本領発揮です。

高氏が地位を確立していく過程と根拠。

続く、建武政権の変遷と崩壊。

かの佐藤進一氏が、「南北朝の動乱」（すばらしい名著）を執筆されて、数十年。なかなか進まない、この時代の政治史の解明。ご堪能下さい。

第五章：建武の新政 ― 尊氏なし ―

『今の例は昔の新儀なり。朕が新儀は未来の先例たるべし』（梅松論）

“どんな先例にも、その始まりがあった。朕の政治は、未来の先例となる”

『改めて益なき事は、改めぬをよしとするなり』（徒然草・第二百一十七段）

“改めても利益のない事は、改めない方が良い”

【建武の新政】

一三三三年六月四日、後醍醐天皇が東寺に到着した。久方ぶりの京への帰還であった。しかし。

『ただ遠き行幸の還御の式にてあるべきよし定めらる』（増鏡）

“（隠岐に配流されたのではなく）ただ遠くに出かけて帰ってきただけ、ということにされた”

後醍醐天皇が京を離れた後に起こった出来事は、全て「なかった事」にされた。

この時、畿内の政治情勢は、以下のようなものであった。

1…一部を除き、京にいた貴族達は、戦火を掻い潜って健在である。

2…千早城攻めに参加していた幕府軍の大半が、足利高氏に恭順の意を示している。

3…足利高氏が、六波羅に奉行所を置き、六波羅の奉行人らを取り込んでいる。

4…護良親王が、征夷大將軍を自称して大和の信貴山に居座り、高氏を牽制している。

後醍醐天皇にとって、あまり愉快な情勢ではなかった。

とりわけ、足利高氏と護良親王の対立は看過しがたい。即座に懷柔に乗り出したいところであった。

しかし、まずは足元の安定が先決だった。

そこで、帰京した後醍醐は、すぐさま二条道平を東寺に招き、藤原の氏長者たるべしと宣下した。

関白を設置するつもりはないが、藤原氏の力を認め、都の安定に力を注がせたのである。

五日、天皇は内裏に移った。その行列には、楠木正成・名和長年の姿も見られる。

衛府の武官に混じって、武士が帝を警護する。「建武の新政」の特色が、はやくも衆目に晒された。

これからは、武士も再び朝廷の一員となるのである。

そして、この日、皇后西園寺禰子が内裏に戻った。元弘の変以来、禰子は病で出家していたが、これも「なかった事」にされた。後醍醐の措置は徹底している。

また、同じ日に、高氏が内昇殿を許され、鎮守府將軍に任命された。

鎮守府將軍とは、前九年の役で活躍した源頼義、奥州藤原氏の全盛期を築いた藤原秀衡が任じられた職で、征夷大將軍に次ぐ地位であった。後醍醐は、高氏に武家の統括を認めたのである。

しかし、征夷大將軍ではないため、幕府を開く事はできない。

何のことはない。後醍醐は、公家の二条道平に対して行なった処置を、武家の足利高氏にも行なったのである。共に第一人者とは認めるが、親政を損なう動きは認めない。

公家も武家も、天皇の下に座ってもらう。これが、「建武の新政」だった。

そして、七日には後伏見・花園上皇らの荘園が安堵された。後醍醐天皇は、持明院統に“静かな生活”を営んでもらう事を選んだのである。

十二日、人事が行なわれ、高氏が従四位下・左兵衛督に昇進し、弟直義も左馬頭となった。

このように、帰京後の後醍醐天皇が行なった事は、さしずめ「政治体制の再構築」である。

その優先順位は、藤原氏・内裏・皇后・足利高氏・持明院統・高級人事であった。

そして、だからこそというべきか、信貴山に居座る護良親王への対応は後回しにされた。

蚊帳の外に置かれた、と言ってよい。

信貴山の護良親王は、これに焦り、足利高氏への警戒をますます露わにした。

それは、一見、足利の台頭を危惧した行動に見えて、その実は父帝への抗議であった。

【六月口宣案】

一三三三年六月十三日、後醍醐天皇は、やむなく護良親王を征夷大將軍に任じた。

親王を信貴山から引きずり出さねば、戦乱は終わらぬ。そのための任官である。

いずれ、口実を設けて剥奪する。そのつもりだった。

同日、そんな父の考えも知らず、“將軍”護良親王は颯爽と京に帰還した。赤松円心が前陣を務め、四条隆貞が第三陣を務める。親王の生涯で、初めて最後の晴れ舞台だった。

帰京後、父帝に拝謁した親王は、自分が認められたと思い込んだのだろうか。

さっそく足利高氏の脅威を父に説いた。

『高氏兵権を取ては昔の頼朝に替わるべからず。此次に誅罰せらるべし』（保暦間記）

“高氏が兵権を握れば、かの頼朝のように、幕府を開くに違いありません。北条を討った返す刀で、高氏を誅殺するべきです”

しかし、父後醍醐は取り合おうとしなかった。

『さしもの軍忠の仁也』

“多大なる軍忠を示した人物である”

その通りであった。高氏が鎌倉幕府に反旗を翻したからこそ、今の建武政権がある。後醍醐のこの言は、暗に「討幕で功を挙げたのは護良ではない」と言っているようにも聞こえる。

諸国の武士を束ねる事ができる足利高氏こそが、建武政権に必要な人物であった。

この現実がある限り、親王の思いが父帝に届く事はありませんでした。

邪魔なのは、むしろ護良親王の方である。とりわけ、親王が討幕の際に、勝手に恩賞を約束した事が、早くも問題となっていた。幕府が倒れた今、親王の令旨をたてに、恩賞と称して他人の所領を奪う者が出ていた。この者達こそ、戦乱の元凶である。

十五日、後醍醐天皇は親王の令旨を無効とし、混乱に終止符を打とうとした。

『自今以後不帶綸旨者、莫致自由之妨、若有違犯法全族者、国司及守護人等不待勅断、召 捕其身』

（金剛寺文書 元弘三年六月十五日口宣案・「建武政権試論」一五頁）

“今後、綸旨（後醍醐天皇の命令書）も帯びず、勝手な狼藉をするな。違反者が出たら、国司・守護はこちらの指示を待たず、その者

を捕らえよ”

即ち、許可もなく、「恩賞」と称して、他人の所領を奪う事を禁じたのである。

これは絶大な効果をもたらし、諸国の勢力は、建武政権の顔色を窺うようになった。

後醍醐は、護良や高氏ではなく、自分に注目を集める事に成功したのである。

まもなく、諸勢力は、帝から安堵を得ようと、続々と京に集まった。

しかし、後世これが「綸旨万能主義」と呼ばれ、「後醍醐天皇は世の全てを、自分の意思だけで決めようとした専制者」と評される事になった。

【六波羅の高氏】

建武の新政が始まった頃、足利高氏は六波羅を本拠地とした。

鎌倉幕府の遺産「六波羅」を受け継ぎ、自らの基盤としたのである。

『1…将軍の本邸

2…六波羅の官僚

3…畿内・西国への勅命を受ける権利

4…畿内近国の軍事を統括する権限

5…畿内近国の裁判を行なう権利。以上の五つが、高氏が引き継ぐべき遺産だった。』

これらの多くは、後の室町幕府に継承される。したがって、「六波羅は室町幕府の母体となった」と言えるかもしれない。

ところで、六波羅が本格的な機関に成長したのは、建治年間以降である（【建治年間の幕府】参照）。そう考えると、鎌倉時代後半の六波羅指導層の活躍が、実は非常に大きな意味を持っていた事に気が付く。かの“嘉元の乱”で倒れた北条時村、鎌倉幕府と共に滅

んだ金沢貞顕。単に保守的な政治家と思われた彼らの名は、「次代へ大きな遺産を伝えた影の立役者」として、記憶され直すべきだろう。

しかし、問題もあった。「九州、周防・長門の統括」である。

3・4・5を検討すると、“六波羅には九州周辺の軍事・裁判権がない”事が分かる。

そう、「六波羅を抑える」だけでは、九州武士の統括ができないのである。

これは、高氏も自覚するところだった。だからこそ、1の出番である。

「源頼朝の後継者は全国の武士を統括できる。

自分は鎮守府將軍であり、六波羅の將軍邸に住む。事実上の頼朝の後継者である。」

だから、九州の武士も統括できる」

高氏は、征夷大將軍になる事を認められなかった。

そのため、数年間この“既成事実”だけを盾に、全国の武士層に君臨した。

『鎮西警固日向・薩摩両国事、任綸旨、可被致其沙汰之状如件』（

「島津家文書」建武元年九月十二日足利尊氏施行状（南九―一二六）

・「建武政権における足利尊氏の立場」四八頁）

“島津殿、九州の警固と日向・薩摩の沙汰は、綸旨に従って行なうように”

そして、専ら後醍醐天皇をたて、諸国の武士達に綸旨（天皇の命令）を守らせた。

『竹原庄先年馳参篠村依軍忠、先々年預御吹挙、先々年八月四日

綸旨ヲ被進』（「小早川家文書」建武三年二月七日小早川祐景申状

（南中二四〇）・「建武政権における足利尊氏の立場」四二頁）

“竹原庄は、篠村に参じた功を二年前「將軍から帝に披露いただき」、綸旨を賜われました”

後世、いわれのない非難を受けているが、高氏こそが建武政権の柱石だった。

一方で、室町幕府の権限が、結局九州に対して弱かった原因は、「六波羅の管轄外にあった」という鎌倉時代の事情にまで、さかのぼる事ができる。九州の武士団は、後年、高氏が「源頼朝」とは違うと判断し、忠実な態度を一気に捨てる事になる。

【鎌倉は誰のものか】

一三三三年六月、京の護良親王と同様、鎌倉にも報われない人がいた。「鎌倉攻略の功労者」新田義貞である。鎌倉は、義貞のものとはならなかった。

最後の得宗北条高時が倒れた後、鎌倉には二つの勢力が並び立っていた。

新田義貞と千寿王である。

両者は、倒幕時には連合して鎌倉攻略を成し遂げた。しかし、鎌倉陥落後、両者の力の差は、日を追って開き、今や千寿王が鎌倉の主となりつつあった。

『諸將悉く四歳の若君に屬し奉りし』（梅松論）

“（鎌倉に集まった）諸將は、ことごとく四歳の若君に従った”

原因は、両者の鎌倉幕府での地位もさることながら、建武政権での地位の差にもよる。

千寿王の父足利高氏は、京で後醍醐天皇の覚えもめでたく、鎮守府將軍に任じられた。

対する義貞は、未ださしたる恩賞も受けていない。

これが致命的だった。建武政権は、既に「恩賞は綸旨で行なう」と宣言している。

だから、「帝の覚えがめでたい大将に功を認めてもらい、恩賞・安

堵を確実にしたい」というのが、諸將の偽らざる気持ちだった。朝廷工作も満足にできず、未だ無位無官の義貞などに用はない。このあたり、早くも義貞は、政治音痴ぶりを発揮している。

御年四歳の千寿王に代わり、実際に鎌倉を治めたのは高氏の家臣達だった。

『京都より細川阿波守。舎弟源藏人掃部介兄弟三人』

京の高氏は、鎌倉の掌握を進めるため、細川一族を鎌倉に派遣した。彼らはの役目は、千寿王の対抗馬となる義貞を警戒する事であった。まもなく、両勢力の間には軋轢が生じるようになった。

『鎌倉中連日空騒して世上穏かならざる』

“鎌倉では、連日空騒ぎが起こり、治安が悪化した”

その詳細は史書の記すところではないが、騒動が続く中、義貞の鎌倉における居場所は、日に日に失われていったようである。

ある日、細川一族が、義貞に引導を渡した。

『和氏。頼春。師氏。兄弟三人。義貞の宿所に向て事の子細を問尋て。勝負を決せんとせられける』

“細川和人・頼春・師氏ら兄弟三人は、義貞の宿所に向かい、騒動の子細を問い正して、（足利に不服があるなら）勝負を決しようではないかと恫喝した”

義貞は屈辱に震えた。

こんな馬鹿な話があったたまるか。

鎌倉攻略に参加もしなかった連中が何を言う。

後からのこのこ出てきて、鎌倉を攻略した自分を、追い出そうというのか。

——いまにみておれ——

義貞はやむなく鎌倉を離れ、一族と共に京に上った。

これが、おそらく六〇八月初頭にかけての事だ、と考えられている。

【七月宣旨】

後醍醐天皇は、「朝敵の所領は没収する」と宣言し、所領の安堵に臨んでいる。

しかし、朝敵とは誰を指すのだろうか。土壇場で、宮方についた者はどうなる。

これらについて、諸国の武士は一樣に不安を覚えた。そのため、武士達は、足利高氏が催促した事も手伝って、一三三三年六月半ばかり、続々と京に集まり始めた。

六月二十日、後醍醐はこれに対応するため、「政所始め」を行なった。記録所を再興し、そこで安堵を行なっていくというのである。この時期、後醍醐は忙しい。幕府を倒した直後だからこそ、政治空白は政権に傷を与える。後醍醐は、その事をよく理解していた。

しかし、七月になると、事態はさらに悪化した。薩摩・奥州からも武士が上京し始めたのである。

都には、文字通り、全国の武士が集結しつつあり、しかも、彼らは口をそろえて所領安堵の手続きを朝廷に求めたのである。

だが、裁決を下せる後醍醐天皇はただ一人である。

その事務処理能力には、おのずと限界があった。

二十五日。後醍醐天皇はついに音をあげ、安堵に関して次の方針を出した。

これを七月宣旨（諸国平均安堵法）という。

『右大納言藤原朝臣宣房、奉勅』

（国分文書元弘三年七月二十五日官宣旨（史料編纂所架蔵影写本）

「建武政権試論」二四（二五頁）

“大納言万理小路宣房、勅を奉る”

『兵革之後、士卒民庶未安堵、仍降糸綸被救牢籠』

“倒幕の後、士卒や民は、未だ安堵を得ていない。そこで、帝は先日綸旨を下された”

『而万機事繁、施行有煩』

“しかるに、万事政治案件が多く、帝一人で安堵を個別に行なうのは困難である”

『加之、諸国之輩不論遠近悉以京上、徒妨農業之条、還背撫民之義』

“これに加えて、諸国の者が遠国・近国を問わず、ことごとく上京してくるため、国元の農業が疎かになり、かえって民の安寧が妨げられている”

『自分以後、所被閣此法也』

“今後、先の法を差し置く事にする”

『然而除高時法師党類以下朝敵与同輩之外、当時知行之地不可有依違之由』

“即ち、北条高時に与した朝敵を除き、当時知行した所領に、変更は加えない事とする”

『宜仰五畿七道諸国、勿敢違失』

“帝は、この法を諸国で施行すると仰せである。違反は許さない”

『但於臨時勅断者非此限者、国宜承知、依宣行之』

“但し、帝から特に恩賞を賜った者はこの限りではない。諸国はこれを承知し、実行せよ”

これにより、所領安堵の仕事は、諸国に任されるようになった。

【公家の御世、武士の世】

一三三三年七月下旬、足利一党に恩賞が与えられた。まず、当主足利高氏には武蔵の守護職と二十九カ所の地頭職が与えられ、そして、弟直義には十四カ所の地頭職が与えられた。大半は、旧北条領である。

繰り返すが、後醍醐天皇は、高氏の地位を認めている。

足利には、北条に代わって武家を統括してもらおう。だからこそ莫大な恩賞であった。

こうした、後醍醐天皇の姿勢は、八月五日の国司人事により、一層明白となった。

西園寺家の伊予・持明院統の播磨など、今まで一つの家が相伝してきた知行国が没収され、新たな国司が充てられるなか、関東の国司も改められた。

その際、高氏は、従三位武蔵守に補されている。

これは、「高氏による鎌倉支配の公認」を内外に示すものに他ならなかった。

もともと東国は、武家の支配が強力な地域である。

関東を朝廷が直接統治するなど荒唐無稽。朝廷の影響がある程度及べばそれでよし。

後世、一般的に考えられているよりも、後醍醐天皇ははるかに現実的だったらしい。

同じ日に、高氏は、名を「尊氏」と改めている。

これは、後醍醐天皇の御名「尊治」から一字を賜わったものであった。

そもそも、「足利高氏」とは、もとは伊豆の土豪にすぎない北条「高」時に屈服させられていた時に与えられた名である。

「高氏」を名乗り続ける限り、たかうじは、北条の影を背負い続けねばならなかった。

— 今や、たかうじは、全ての武士の保護者でなければならぬ —
後醍醐天皇は、そんな、たかうじを慮ったのである。

鎌倉幕府を裏切った「高氏」ではなく、新たな世を築く、帝を守護する「尊氏」へ。

その存在は、後醍醐天皇が肯定する。全ての非難を超えて後醍醐天

皇が肯定する。

だとすれば、これは栄誉であった。

この日、たかうじは確かに生まれ変わったのである。

尊氏は、感激のあまり、生涯この名を改めなかった。

『公家の御世にかへりぬるかとおもひしに中なか猶武士の世に成ぬる』（神皇正統記）

“公家の世に戻ったと思っていたが、却ってますます武士の世となった”

後醍醐天皇による足利の厚遇を、後に北畠親房はそう述懐している。

何故こうなったのか。

政権の重鎮は、「後の三房」、吉田定房・萬里小路宣房・北畠親房である。

しかし、彼らと後醍醐の間には行き違いがあった。能力も経験も十分にある彼らではあったが、後醍醐は彼らに重任を預けるわけにはいかなかったのである。

一方で、この時点で生き残る討幕派は、数少ない。

日野資朝らは、倒幕戦の折に刑死している。

残るは、次のような面々であった。

・護良親王派…四条隆資、四条隆貞（隆資の子）、赤松円心

・三木一草…楠木正成（くすの「き」）、名和長年（ほう「き」のかみ）、結城親光（ゆう「き」）、千種忠顕（ち「ぐさ」）

このうち、結城親光は、奥州・北関東に勢力をもつ結城宗広の二男である。

討幕時には、父宗広が鎌倉攻略に、親光自身は六波羅攻略に参加していた。

『愚息親朝・親光舎弟祐義広堯等及熱田伯耆七郎等、於京都鎌倉奥

州抽随分之軍忠』

（「伊勢結城文書」元弘三年五月九日結城宗広請文案・「福島県史」七・三六八～三六九頁、

「建武政権における足利尊氏の立場」四〇頁）

“（私、結城宗広が高時法師を討った時には、）愚息親朝・親光、弟の片見祐義・田嶋広堯、それと熱田伯耆七郎らが、それぞれ京・鎌倉・奥州で随分奉公したものです“

つまり、宗弘の白河結城は、文字通り一族を挙げて鎌倉幕府と戦ったわけである。

この功で、分家だった白河結城は、鶴の一声で「結城の総領」となった（白川文書）。

武家の総領を天皇が決めるなど、他に例がない。

とはいえ、結城などは、幕府倒壊の直前に宮方についた連中である。

これに、寵姫阿野廉子、文観、洞院公賢を加えれば、実力者はほぼ揃ってしまう。

つまるところ、建武政権は、主力となる人材が不足していた。

そこで、全土を統治するため、見境なく人材が求められた。まず、討幕を傍観していた貴族。更には、各国に国司と守護が併置され、旧幕府の人材までが登用された。伊賀兼光や二階堂道灌らである。

これらは、御家人制度の廃止によって可能となった。

そして、これらのとばっちりを受けたのが護良親王であった。

というのも、九月初頭までには、護良親王は征夷大将軍職を剥奪されているからである。

【尊氏なし】

一三三三年八月下旬～九月上旬、建武政権で最も特徴的な機関が誕生した。雑訴決断所である。

決断所には独自の裁決権が与えられた。

これによって、後醍醐天皇に代わり、この機関が所領安堵を行なうようになった。七月に「所領の現状維持」の大方針を示し（【七月宣旨】参照）、八月に功臣への恩賞（国司・守護人事）が完了した今、いよいよ政権を挙げて所領問題に取り組むべき時期が到来したのである。

その奉行職を担ったのは、公武の有力者達であった。吉田定房・万里小路藤房・四条隆資・楠木正成。あるいは、佐々木道誉・二階堂道蘊。更には、足利尊氏の家臣高師直・上杉憲顕。

後醍醐は、所領問題を解決するため、万全を期したのだろう。

『縦雖賜綸旨、未帶當所牒状者、相觸子細於國奉行、可被書入彼目六』（建武年間記）

“帝から綸旨を得ていても、決断所の書類を揃えていない場合は、届け出る事”

『又無牒者、不可遵行之』

“書類がない場合には、（所領などに対する）実力行使も認めない”

しかしながら、この役割がどこまで守られたかは疑わしい。

確かに、「書類を下さい」と真面目に申告してきた例も残っている。だが、こんな記述がある。

『此條々不被施行之、訴人違於歟、不可説々々々』

“この規定が実行されていない。訴訟人が守ろうとしないのだろうか。けしからん”

『記録所決断所ををかるるといへども。近臣臨時に内奏を経て非議を申断間。綸言朝に變じ暮に改りしほどに諸人の浮沈掌を返すがごとし』（梅松論）

“帝は記録所・雑訴決断所を設置されたが、側近達は、これらの機関に諮らず（恩賞・安堵について）内密で帝に奏上した。そのため、帝の裁決は、朝に変わり夕に改まった。そのたびに、諸人の立場は

手のひらを返すように変わった”

後に、北畠顕家は、女官や僧侶が「政治を汚した」と弾劾している（北畠顕家奏状）。

どれほど優れた制度であっても、それが守られなければ意味がない。

こうした不始末が続く中、一部の公家は、好んで次の言葉を口にするようになった。

『尊氏なし』（梅松論）

“どうして、（武家を統括する）尊氏は姿を見せん”

十月、皇后西園寺禧子が、静かに生涯を終えた。

同じ月、武者所が設置され、新田一族が配された。これによって、新田一族は、内裏の警護を職務とするようになったのである。

【北畠父子の出立】

一三三三年十月二十日、北畠親房・顕家父子が多賀国府に向けて出立した。

多賀国府は陸奥国に設置された朝廷の役所である。かつて北条氏の拠点だった奥州を掌握する事が目的だった。この地で安東氏が内紛を起こし、蝦夷も巻き込んだ大乱に発展した事は記憶に新しい（【儒学奨励と蝦夷蜂起】参照）。

建武政権の成立後も、この地は安定していなかった。津軽で北条残党が反乱を起こし、それに乗じて安東氏が不穏な動きを見せたからである。「津軽合戦」と呼ばれる戦いは、この年の末まで続いた。

後醍醐天皇は奥州の安定を重視し、八月に北畠顕家を陸奥の国司に抜擢している。

これは、顕家個人の資質もさることながら、父親房の手腕に期待し

ての人事だった。

親房に現地を掌握させる。後醍醐の真意はこれであり、だからこそ、まもなく北畠父子に、国司として現地に赴くよう、要請がなされたのであった。

しかし、ここで疑問が浮かぶ。ならば“何故親房に地位を与えない”。

それは、親房の複雑な立場によるところが大きい。

そもそも、北畠親房は故後宇多法皇に学才を買われて登用され、後醍醐天皇からも「後の三房」の一人として重用された人物である。一三二三年には「源氏長者（筆頭）」となっている。北畠家は、村上源氏の中でも極官（その家に認められる最高の官）が大納言に過ぎない家で、良く言って「上の下」の貴族だった。にもかかわらず、堀川・久我・土御門・中院といった大臣を輩出できる同族をさしおいて氏長者になれたのだから、親房は有能だったのだろう。

『对于入道、及種々懇望、以別可被優恕』（「一品記」・「鎌倉・南北朝期の源氏長者」二〇～二二頁）

“親房を源氏長者にと望む声が（村上源氏内で）強かったので、特別に認められた”

後年、「南朝の柱石」となった親房は、藤原氏に対して強烈な敵愾心を燃やし、あるいは清和源氏の足利に対して憎悪に近い感情を見せる。

それも、源氏長者を務めたという自尊心によるところが大きかったと思われる。

そんな親房ではあるが、後醍醐天皇の討幕運動には参加していない。

一三三〇年九月に、傳役を務めていた世良親王が亡くなり、政治を離れていたからである（【老臣との別れ】参照）。“その結果として”、討幕運動からは距離を置いていた。

北畠親房という貴族の厄介なところは、この行動が「どこまで本気だったのか」という点である。

親王の死に悲観したのは本当だろう。しかし、討幕運動に関らなかったのは、宮方が不利と判断したからではないか。現に、元弘の変で後醍醐が敗れて持明院統の治世になった時、親房の子顕家は、持明院統から官位を返されていた。

「後醍醐天皇と北畠親房」の関係は複雑だった。今回の、北畠父子の「平安以来、絶えて久しい国司の現地赴任」も、“古例の復活”とは聞こえが良いが、ていの良い左遷にも見えた。

そのため、親房は、当初後醍醐の命に乗り気ではなかった。

『武勇の芸にもたづさはらぬことなれば、たびたびいなみ申し』（神皇正統記）

“北畠家は、武勇に携わる家でもないので、たびたび断った”

しかし、後醍醐天皇は肯んじなかった。「公家が天下を治めるいま、もはや文の家・武の家の区別などない。昔の朝廷では親王や大臣の子孫が將軍を務めたではないか」と親房の言を入れなかったのである。

『今より武をかねて蕃屏たるべし』

“今からは、武を兼ねて、朝廷の支柱となるべし”

そして、奥羽両国には守護を設置しなかった。これは、国司として赴任する北畠父子らの権限を護るためであろう。この姿勢に、親房は多賀国府行きを受けた。

後醍醐天皇の真意は分らない。しかし、北畠父子に対して、誠意は示された。

『御みづから旗の銘をかかしめ給ひ』

“自ら旗の銘をお書きになり、それを下さった”

そのほか、武具・衣・馬、御前での勅語が与えられた。

与うる限りのものが、父子に与えられたのである。極め付きはこれ

であろう。

『御子を一所ともなひたてまつる』

“皇子の義良親王を伴い、奥州に赴任した”

奥州統治の柱として、皇子が一人預けられた。この親王は、寵姫阿野廉子が産んだ子であった。親王が手元にある限り、北畠父子の身は保障されるであろう。

遠国に赴任する北畠父子にとっては、この上ない「保険」だった。

この赴任に関し、触れるべき事実がもう一つある。北畠親房は護良親王と姻戚関係を持っていた。

しかし、今回の人事で、表立って親王に同情的な動きが取りにくくなった。

『近日或帶宮之令旨、或称国司守護被官、或又地下沙汰人以下、任雅意、有濫妨事』

（結城文書元弘三年十月五日陸奥国国宣事書案・「建武政権試論」一六頁）

“近日、護良親王の令旨を帯び、あるいは国司・守護の家来をかたり、あるいは地下沙汰人以下、勝手に乱暴を働く者が出ている”

これは、赴任前の顕家が結城宗広に送った書状であるが、早くも護良親王の令旨を受けた連中に対する取り締まりが指示されている。

父子には立場ができてしまった。

しかし親房は、その陰で、南部・工藤氏を親王のもとに送っている。せめてもの配慮だったのだろうか。ともあれ、北畠父子は、十一月二十九日に多賀国府に着任した。

【多賀国府と鎌倉將軍府】

一三三三年末から、国司北畠顕家と「政治顧問」親房による、多賀国府の本格的な運営が始まった。北畠父子には、後醍醐天皇から強力な権限が与えられている。

『陸奥国には直勅裁を閣く』

（「建武政権下の陸奥国府に関する一考察」二六九頁、『大日本史料』第六編七、興国三年五月六日条、結城古文書写）

“陸奥国については、中央政府に伺いをたてず、政務をしてよい”
鎌倉時代、奥州は北条の支配下にあったため、北条と共に滅んだ御内人の所領（持ち主のない欠所地）が多い。また建武政権に反抗的な者も少なくない。

そのため、このような権限が認められたのである。

国府の統治組織は急速に整えられた。現地の庶子系武士や吏僚系武士が現地奉行に拔擢され、土地調査・安堵が次々と行なわれていく。一三三四年一月には、現地の有力者である結城宗広・南部師行・伊達行朝らが評定衆に任命された。

多賀国府による統治は、時に強固な抵抗に遭いながらも、概ね成功を収めた。それは、国司顕家が現地の武士達の要望に上手く応えたからである。

与うべき者に力を与える。膨大な欠所地は、当初は結城・伊達・南部・二階堂といった国府の有力者に優先的に与えられ、現地奉行の活躍が必要となった一三三五年には、奉行らに優先的に配分されるようになった。こうした中、現地の奉行は次第に地歩を固め、警察権を認められるようになり、奥州内で独自の武士団を形成していた。

これらの成果は、日本史上重大な意味を持つ。なぜなら、源頼朝の奥州征伐以来、実に百四十年にわたって関東の支配を受けた奥州武士団が、遂に独立を達成したからである。

『捧関東下知以下証状、雖支申、不帶綸旨国宣者、不可許容』

（「建武政権下の陸奥国府に関する一考察」二八二頁、南部「岩手県中世文書」一二一）

“関東から発給された証書を持っても、綸旨または国宣がなけ

れば、認めない”

陸奥の事は陸奥の民が決める。関東からの指図は受けない。それは、鎌倉時代に関東武

士の下で代官をさせられた奥州武士の、長年の願いでもあった。

多賀国府の統治が受け入れられた背景には、この“悲願”があったのである。

したがって、多賀国府の活動は、関東にとって脅威だった。鎌倉を抑える足利はこれに対抗する必要に迫られたのである。一三三三年末頃、足利は、後醍醐に対し、関東にも皇子を貰い受けたいと懇願した。そこで、十二月二十四日、成良親王が下され、相模守足利直義（尊氏の弟）がこれを奉じて鎌倉に下向した。これが鎌倉将軍府である。

【建武元年春】

一三三三年十二月、光厳院が太上天皇（上皇）の尊号を受けた。

建武政権は、光厳天皇の治世を否定していたが（【建武の新政】参照）、ようやく扱いが決まったのである。

翌一三三四年一月二十三日には、恒良親王（阿野廉子の子）が皇太子となり、二十九日には、元号が「建武」に改められた。

したがって、建武政権は、この時期に完成したといえる。

だが、「建武元年」は、建武政権が限界を晒す年となった。この年一月から、各地で北条残党が蜂起している。代表的なのが、筑後で元肥後守護の規矩高政・糸田貞義が起こした反乱である。一月に起きた反乱が、ようやく鎮められたのは、七月の事だった。

同じ時期、鎌倉に着任した足利直義は、鎌倉将軍府の整備に追われている。

岩松経家（新田一族だが足利に従う）・上杉憲顕（憲房の子）らを奉行人として、廟番（実務を行う立場）が編成された。構成員の中

には、相馬高胤など奥州武士の名も見られる。

『東国の武士、多くは奥州に下る』（保暦間記）

“（直義が来るまでの間に）東国武士で、奥州（多賀国府）に下る者も多かった”

組織の整備が遅れば、多賀国府に人材を奪われる。鎌倉将軍府と多賀国府は、水面下で、激しく火花を散らせていたのである

三月、北条残党の本間氏・渋谷氏が武蔵で挙兵し、その鎌倉に攻め込んだ。その勢いは激しく、反乱軍は一時鎌倉に突入した。しかし、直義は何とか両氏を敗死させた。

この事件は、京を動揺させ、旧幕府から政権に参加した人々に対する猜疑を産んだ。

『或は降参、或は所々に隠居したりけるを、皆取出で同日首を刎られけり』

“降参・隠居していた北条一族が捕えられ、首をはねられた”

十七日、「諸国の検注（課税のための荘園調査）」について、勅令が下された。

この検注は、内裏造営の資金を集めるためだった、といわれている。

『兩年閣其節諸國諸莊園檢注事』（建武年間記）

“今後兩年、（予定されていた）諸国の荘園での検注はさしおく”

『民庶猶勞云々』

“民の疲労を考えてのことである”

だが、停止が決まった筈の検注は、この年十月に、実施された記録が残っている。

二十八日、「乾坤通宝」発行（通貨発行）の詔が下された。しかし、建武政権で通貨が発行された史実など、ない。後醍醐天皇の空回りは、果てしなく続いていた。

【建武元年夏・秋】

一三三四年五月、諸国の一宮・二宮（有力神社）が、本家・領家職を停められた。

これによって、出雲・阿蘇神社などが、独立した地位を認められ、所領を回復した。

寺社は朝廷を支えている。だから、その復興は、この時期の政策にしては理にかなっている。玉石混合の政権で、良臣の意見が用いられ始めたのだろう。

六月二十六日、政権の良心、吉田定房が准大臣に任じられた。准大臣とは、家格（家の地位）のせいで大臣にならない貴族に対し、特別に与えられる職である。後醍醐天皇は、仲違いしていた老臣と（【老臣との別れ】参照）、ようやく和解を果たしたのである。

しかし、定房のような老臣は、情勢が揺らぐ前に活躍させるべき人だった。

『兵部卿護良親王。新田金吾義貞。正成。長年。潜にゑいりよを請て打立事度々』（梅松論）

“護良親王・新田義貞・正成・長年が、密かに帝の命を受け、不穏な動きを見せた”

事態は、既に「武力の段階」だった。目的は、足利尊氏の抹殺だったという。

「帝の命」が本当かは分からないが、政権は疑心暗鬼に陥っていたらしい。

六月七日、“護良親王が尊氏を討とうとしている”という噂が流れた。

『武將の御勢御所の四面を警固し奉り。餘の軍勢は二條大路充滿しける』

“諸將は（將軍の）御所を四方から警固し、余った軍勢が二条大路に充滿した”

尊氏に対する諸將の強力な支持を目の当たりにした親王は、やむな

く討伐を諦めたという。この時期、既に多くの武士は、建武政権への不信を固めていたのである。

七月、南九州と越後でも反乱が起きた。さらに八月、武蔵でも江戸氏・葛西氏が反乱を起こした。

結束した武士団の扱いを誤れば、政権を崩壊させる引き金ともなりかねない。

この月、雑訴決断所の組織が改められ、多くの武士が政権に招かれている（建武年間記）。

しかし、政権内で、武家の発言力が強まっただけであつた。

九月九日、吉田定房が内大臣に任じられた。

『言語絶了、可察心中云々』（玉英記抄）

“感激のあまり言葉ありません。心中、お察し下され”

この人事は、かつて後宇多法皇が六条有房に行なった人事を彷彿させる（【道を知る人】参照）。

後醍醐は、御年六十歳の老公卿を、股肱の臣と内外に示したのである。

十月五日、万里小路藤房（宣房の子）が政権を去り、行方が分からなくなった。

藤房は旧討幕派の人物である。どうやら、穏健派の台頭で、居場所を失ったようだ。

【脱線十二・二条河原の落書】

一三三四年八月、京の二条河原に落書が出現した。その落書に曰く。

『比比都ニハヤル物 夜討強盜謀綸旨 召人早馬虚騒動』（「悪党の世紀」三五一―三五三頁）

“この頃都に流行る物 夜討ち・強盗・にせ綸旨 逮捕者・早馬・から騒動”

『生頸還俗自由出家 俄大名迷者 安堵恩賞虚軍』

“生首・還俗・自由出家 にわか大名・浪人者 安堵・恩賞・から出動”

『本領ハナル訴訟人 文書入タル細葛 追従讒人禅律僧』

“本領離れた訴訟人 訴状を入れた細づつみ 追従・讒言・禅律僧”

『下剋上スル成出者 器用堪否沙汰モナク モルル人ナキ決断所』

“下剋上する成り上がり者 有能無能の詮議なく 漏れる人なき（雑訴）決断所”

『キツケヌ冠上ノキヌ 持モナラハヌ笏持テ 内裏マシハリ珍シヤ』

“着なれぬ冠・朝服姿 なれぬ笏を手にとって 内裏に出仕とはこっけいな”

『賢者カホナル伝奏ハ 我モ我モトミユレトモ 巧ナリケル詐ハ』

“賢者顔した伝奏は 寵臣面で威張れども そのたくみな腹芸は”

『ヲロカナルニヤヲトルラム 為中美物ニアキミチテ マナ板烏帽ユカメツ』

“愚か者にも負けている 御馳走責めに満足し うすっぺら烏帽子をしておらせて”

『気色メキタル京侍 タソカレ時ニ成ヌレハ ウカレテアリク色好』

“我がものの顔の京侍 夕焼け小焼けにたそがれて 浮かれて歩く色好み”

『イクソハクソヤ数不知 内裏ヲカミト名付タル 人ノ妻鞆ノウカレメハ』

“いくばくなのか数知れず 「内裏拝み」とお出かけし 人妻なのに男遊び”

『ヨソノミル目モ心地アシ 尾羽ヲレユカムエセ小鷹 手コトニ誰モスエタレト』

“よそ目に見ても心地悪し 尾羽根が折れたえせ小鷹 皆が腕に乗せるけど”

『鳥トル事ハ更ニナシ 鉛作ノオホ刀 太刀ヨリオホキニコシラヘテ』

“狩りは全然できません 鉛づくりの大刀 太刀より長くこしらえて”

『前サカリニソ指ホラス ハサラ扇ノ五骨 ヒロコシヤセ馬薄小袖』
“これみよがしに差している ばさら扇の五本骨 広輿（につく家来は）やせ馬・薄小袖”

『日銭ノ質ノ古具足 関東武士ノカユ出仕 下衆上？ノキハモナク』
“（裏では）毎日質屋通い 関東武士の粥腹出仕 上も下も腹すかせ”

『大口ニキル美精好 鎧直垂猶不捨 弓モ引エヌ犬追物』

“大口袴で着飾れど それでも鎧は捨てきれぬ （公家は）弓も引けずに犬追物”

『落馬矢数ニマサリタリ 誰ヲ師匠トナケレトモ 遍ハヤル小笠懸』
“落馬矢数に勝りたり 誰に師事する訳でなく ひとえに流行る小笠懸け”

『事新キ風情也 京鎌倉ヲコキマセテ 一座ソロハヌエセ連歌』

“こんな流行はじめてだ 京・鎌倉をかき混ぜて 少ない面子でえせ連歌”

『在、所、ノ歌連歌 点者ニナラヌ人ソナキ 譜第非成ノ差別ナク』
“あちらこちらで連歌会 判者にならぬ者はない 家業でないのに連歌会”

『自由狼藉ノ世界也 犬田楽ハ関東ノ ホロフル物ト云ナカラ』

“自由狼藉の世界なり 犬田楽は関東を 滅ぼした物と言いながら”

『田楽ハナヲハヤル也 茶香十ノ寄合モ 鎌倉釣ニ有鹿ト』

“田楽はなお流行中 お茶やお香の寄合も 鎌倉ばやりのものなの

に”

『都ハイトト倍增ス 町コトニ立簀屋ハ 荒涼五間板三枚』

“京でますます大人気 町ごとに建つかがり屋は ぼろぼろ五間に板三枚”

『幕引マワス役所輓 其数シラヌ満、リ 諸人ノ敷地不定』

“幕引きまわした役所ども その数知らず充満し 庶民の住みかはどこいった”

『半作ノ家は多シ 去年火災ノ空地トモ クソ福ニコソナリニケレ』

“作りかけの家これ多し 去年の火災の空き地こそ 家建てられる恵みなり”

『適ノコル家、ハ 点定セラレテ置去ヌ 非職兵杖ハヤリツツ』

“たまたま残る家々は 武士にとられて置き去りに 百姓の武装が今流行る”

『路地ノ礼儀辻、ハナシ 花山桃林サヒシクテ 牛馬華洛モ遍満ス』

“路地の礼儀辻々になく 花を楽しむ心なく 牛馬都に充満す”

『四夷ヲシツメシ鎌倉ノ 右大將家ニ掟ヨリ 只品有シ武士モミナ』

“天下を鎮めた鎌倉の 頼朝公の言いつけで 秩序を守った武士達も”

『ナメンタラニソ今ハナル 朝ニ牛馬ヲ飼ナカラ タニ賞アル功臣ハ』

“狼藉者に今はなる 朝に牛馬で田を耕しながら 夕に賞ある功臣は”

『左右ニオヨハヌ事ソカシ ナセル忠功ナケレトモ 過分ノ昇進スルモアリ』

“今や珍しい事もない たいした忠義や功もなく 過分の昇進おめでとう”

『定テ損ソアルラント 仰テ信ヲトルハカリ 天下一統メツラシヤ』

“失脚してはならないと 上のご機嫌窺うばかり (これで) 天下一統とは笑わせる”

『御代ニ生テサマサマノ 事ヲミキクソ不思議トモ 京童ノ口スサ
ミ』

“ 帝の御世で生きる中 様々見聞く不思議ども 京童の口ずさみ”

『十分一ソモラスナリ』

“ 十分の一をばやいてやった”

かくして、日本史上屈指の名もなき毒舌家によって、建武の新政は、茶化され、あげくに全否定された。京童は、ついに建武政権を見限ったのである。

【建武元年冬】

一三三四年十月九日、（権中納言を辞職していた）四条隆資が修理大夫に任じられた。

これは、まもなく起こる失脚劇のためだった。

二十二日、護良親王が、参内したところを、結城親光・名和長年に拘束された。

『南部工藤を初として數十人召預けられける』（梅松論）

“ 南部・工藤をはじめとして、数十人が召し捕られた”

この時、従う武士は、北畠父子が奥州から派遣した者達くらいだったという。

四条隆貞（隆資の子）と浄俊（日野資朝の弟）も捕えられた。しかし、彼らは、他に行き場のない者達である。行き場のある四条隆資は、身を保障されて親王を見捨てた。

赤松円心も、播磨の守護職を解任された。しかし、命や所領までは取られていない。

すでに親王とは、ある程度の距離を置いていたのだろう。

そして、楠木正成は都にいなかった。この月、紀伊で六十谷定尚

が佐々目僧正某（金沢一族）を奉じて反乱を起こしている。検非違使（京防衛が職務の）正成は、何故かその討伐に出ていた。この転落劇では、後醍醐天皇の冷徹な計算が随所に見え隠れする。

親王に、一体何の咎があったというのか。

『宮の御謀叛眞實はゑいりよにてありしかども。御科を宮にゆづり給ひしかば』

“親王の足利への敵対行動は、実は帝の御意思であつたが、罪は親王にかぶせられた”

『十一月親王をば細川陸奥守顕氏請取奉りて。関東へ御下向あり』

“十一月、細川顕氏が親王の身柄を引き取り、関東にお連れした”

親王は、足利直義が治める鎌倉に流され、東光寺に幽閉されたのである。

『武家よりも君のうらめしく渡らせ給ふ』

“武家よりも、帝がうらめしい”

幽閉先で、親王はそう吐き捨てたという。

十二月、北畠顕家が、陸奥・出羽を鎮めた功を評価され、従二位に叙された。

十七日、中央八省の卿が一斉に交代した。その人事は驚くべきものだった。

「兵部卿…二条道平 治部卿…鷹司冬教 刑部卿…久我長通 式部卿…洞院公賢
民部卿…吉田定房 宮内卿…三条実忠 中務卿…三条実治 大蔵卿…九条公明」

八省の長官は、本来ならば中級貴族が務める職である。

いきなり実務の場に放り出された公卿達は、これを「物狂いの沙汰」と陰口した。

二十八日、二階堂道蘊が六条河原で処刑された。陰謀を画策したのだという。

【中先代の乱】

一三三五年一月末、楠木正成らが、ようやく紀伊の反乱を鎮めて京に帰還した。

そして、二月十六日、吉田定房が内大臣を辞した。こうなると、定房の内大臣就任は、護良親王の失脚に伴う、混乱のまとめ役を押し付けるためだったという観さえある。

しかし、この年になっても、地方の反乱はやまなかった。

『1…公家と武家の軋轢 2…後醍醐天皇と貴族のすれ違い 3…地方の混乱』

建武元年に明らかとなった、建武政権の弱点は、一向に改善されなかったのである。

一説によると、建武政権の改革は、いずれも室町幕府三代将軍足利義満の政策を先取りしたものだだったという。だが、古今「正しいだけの政治改革」が成功した例などないのである。

六月十七日、西園寺公重の密告によって、大掛かりな陰謀が発覚した。

持明院統による政権奪回の計画であった。

『武士多馳集持明院殿、被奉移院於京極殿云々』（小槻匡遠記）

“多数の武士が持明院殿に馳せ集まり、（後伏見）院を京極殿にお移した”

二十二日、陰謀に加担した者達が、次々と拘束された。

『今日西園寺大納言公宗卿・日野中納言入道資名卿父子三人被召置云々』

“今日、西園寺公宗卿・日野資名卿（と日野氏光）父子、三人が召し置かれた”

持明院統派公卿である。

西園寺公宗は、密告をした西園寺公重の兄である。弟公重は後醍醐天皇に近い立場の公卿であり、兄とは立場が異なった。計画を露見

させた密告は、西園寺家の家督争いの一面を持った。

『於建仁寺前召捕隠謀輩了、正成・師直相向云々』

“建仁寺の前でも陰謀の輩が捕縛された。（その際には）楠木正成・高師直が出動した”

二十六日に発された宣旨に曰く。

『奉太上天皇旨、謀危國家』

“（公宗らは持明院統の）院を奉じ、国家の転覆を企てた”

『資名法師乍知子息氏光陰謀與同意、不告官司』

“日野資名は子息氏光の陰謀を知りながら、これに同意し、朝廷に陰謀を届け出なかった”

八月二日、西園寺公宗・日野氏光・三善文衡が斬首に処された。

『うけ給おこなふ輩のあやまりなりとぞきこえし。』（神皇正統記）

“（帝にそのつもりはなく、）係りの者が、誤って処刑してしまつたと聞く”

そんな訳がない。

朝廷で、権大納言以上の者が死罪となるのは、かの「平治の乱」以来だった。

問題は、この事件に持明院統の面々がどのように関与したのか、である。

これより後の一三四年、光厳上皇は広義門院の新御所に御幸した。その際、上皇は、公宗の未亡人日野名子（資名の娘）と“出くわしている”。

『わびしけれども、退く方なきに、わざとも見参とるべうの給はすれば』（竹むきが記）

“（謀反人の妻の身で、その座にいるのが）心苦しくてなりませんでしたが、退座する訳にもいかずいるところ、院がたって話をしたいとおっしゃるので（対面しました）”

『いままでいぶせかりつるについでうれしう』

“今まで、（そなたがどうしているか）気掛かりであつたが、遇えて嬉しい”

だが、事件後の両者の対面は、これがはじめてではない。

光厳上皇は、何かと西園寺の未亡人に気をかけ、北山第（西園寺邸）を度々訪れている。この日の対面は、周囲に名子（国家反逆者の妻）を認めさせるための一芝居であつた。

但し、判断に困る事に、対面を終えて座を立つ上皇のうしろには、一人の貴族の姿があつた。

『竹林院殿御供に勤め給ふ』

“西園寺公重殿が、御供を勤めておられた”

何とも理解しがたい。手が出せない「事情」でもあつたのか。それとも、これは公家社会独特の復讐で、「この一芝居を見せつけるため、わざわざ供に付けた」のだろうか。

さて、京の陰謀は露見したが、企ては終わらなかつた。七月、信濃で北条時行（高時の遺児）が諏訪頼重に擁立されて挙兵し、越中で名越時兼が挙兵した。

十四日、信濃国北部、千曲川ほとり。要は川中島周辺。時行の挙兵に応じた保科弥三郎・四宮左衛門太郎らの軍勢が、守護方の青沼（千曲川の東）を襲撃した。

しかし、この軍勢は、まもなく守護小笠原貞宗に撃退された。

保科・四宮勢は、ほうほうの体で千曲川を渡り、西岸へと逃げていく。そのため、これを追撃する守護方市河助房らも、千曲川を渡り、西の篠井河原・四宮河原で合戦した。

『毎度馳渡千熊河』（建武二年七月付市河助房等着到状）

“その度に、千曲川を渡りました”

助房がこう言っている以上、少なくとも青沼から追い落とす時に一回、その後、篠井河原・四宮河原で戦う時にもう一回。という風に、千曲川を渡った事になる。

これは、一度青沼で壊走した筈の敵が、千曲川の西で軍を立て直した事を意味する。
何か、おかしい。しかし、敵は目の前にいる、戦わなければならなかった。

十五日、助房らは八幡河原で戦った。その後も戦場は移り、南の福井河原（千曲川東岸）では、助房は馬から切り落とされ、危ういところを倫房（一族）の矢に助けられた。

二十二日、気が付けば、戦いは九日目に突入していた。数では劣る保科・四宮勢の奮戦ぶり。敵ながら天晴れ。いや、変ではないか。などといぶかしむ守護方に急報が届いた。
それは、「府中（国府）陥落の報」であった。

保科・四宮勢は陽動だった。信濃北方で暴れに暴れ、守護方の軍勢を引きつける間に、北条時行率いる本軍が、がら空きになった国府（信濃の南にある）を制圧したのである。
こうして、信濃は再び北条の手に帰した。

時行軍は、直ちに上野へと進撃した。各地に逼塞していた北条残党が、時行軍に合流していく。軍勢はたちまち万を超えた。今こそ鎌倉奪回の機。時行軍は、上野国新田荘に住む新田一族に報復した後、鎌倉への南下を開始した。そして、武蔵の女影原で足利方の渋川義季・岩松経家、小手指原で今川範満、更に府中で小山秀朝を敗死させた。

二十三日、自ら迎撃に向かった足利直義も、井出沢で敗れ、鎌倉に退いた。

もはや、時行軍を防ぐ術などなかった。

この時、鎌倉には護良親王が幽閉されていた。征夷大將軍の位を

剥奪されたとはいえ、親王である。時行が、親王を奉じた場合、鎌倉幕府が再興される恐れがあった。

直義は、暫く何事かを考えていたが、やがて意を決した様子で指示を出した。

『親王本より野心御座ければ、伴し奉るにおよばず、奉討ちけり』
(保暦間記)

“護良親王は野心をお持ちの方なので、鎌倉からはお連れせず、お命を縮めた”

『御骸をだにも取り隠したてまつる人も無かりき』

“親王の遺体は埋葬されることもなく、そのまま討ち捨てられた”

後年、直義は、法勝寺の恵珍上人から執筆中の『太平記』三十余巻の提出を受ける事があった。その内容に目を通した、直義曰く。

『是は且見及ぶ中にも以の外ちがひおほし』(難太平記)

“この本は、少し見ただけでも、もってのほかの間違ひが多い”

『追て書入。又切出すべき事等有。其程不可有外聞』

“書き加え、削除すべき個所もある。それまで、人に見せてはならない”

そう言って、“事実と異なる”箇所 of 修正を命じた。しかし、今日に伝わる『太平記』には、直義が親王殺害を指示した話が残されている。直義は、自らの汚点となる出来事を歴史から抹殺しなかった。兄尊氏の手が汚れなければ、それで良いと云わんばかりに。

二十四日、時行軍は、佐竹貞義を武蔵国鶴見で破り、鎌倉入りした。

直義は、成良親王と義詮(千寿王)を連れ、足利の拠点、三河国矢作に遁走した。

三河は、東国の西境である。これ以上は退けぬ。直義は、敢えてこの地に踏み留まり、成良親王を京に帰した。そして、兄尊氏に救援を求めたのである。

【私にあらず】

一三三五年七月末、鎌倉陥落の報は、諸国に伝わった。

『京都の騒動なのめならず』（保暦間記）

奥州の北畠親房も、事態收拾のため、急遽都へ戻っている（関城書）。そのため、奥羽は息子顕家一人の手に委ねられた。この時、顕家は十七歳である。突然の独り立ちであった。

その頃、京では、足利尊氏が、後醍醐天皇に出陣の許可を求めている。

『直義朝臣無勢にしてふせぎ戦ふべき智略なきに依て。海道に引退きし其聞え有上は。いとまを給ひて合力を加べき』（梅松論）

“直義には劣勢を覆す智略もございません。西に退いたと伝わっている以上、いとまをいただき、これに合力したく存じます”

その上で、尊氏は、時行を討伐し、速やかに天下を鎮めるため、次の事を奏上した。

『征夷將軍の宣旨を蒙んと申す』（保暦間記）

“征夷大將軍の宣旨を賜わりたい”

尊氏が考えるに、鎌倉幕府残党による反乱がここまで拡大したのは、建武政権が武士の不満を吸収できなかったからである。足利が、いま受け皿とならねば、時が逆流しかねなかった。

しかし、後醍醐天皇は、八月一日、鎌倉から戻った成良親王を征夷大將軍とした。

尊氏は、後醍醐天皇の最も忠実な臣下である。だが、その前に武家の棟梁であった。

その事について、尊氏自身が内心どう思おうと関係ない。天下のための決断は、自らの意思を超えて行なうべし。尊氏は、敢えて、帝の意に背かなければならなかった。

二日、足利尊氏は佐々木導誉らを従え、勅許なしで出陣し、直義のいる三河へと向かった。

『所詮私にあらず。天下の御為』（梅松論）

“しよせん私にあらず。天下のおんためである”

尊氏の決意は、天をも味方に付けた。四日、鎌倉の時行軍を、突如台風が襲った。

『八月四日夜、大風俄起、大木抜根底、仍当寺忽顛倒』（高幡不動金剛寺藏不動明王火焰背銘、「歴史における自然災害―建武二年八月、関東南部を直撃した台風―」七〇頁）

“八月四日夜、台風がにわか発生し、大木を根から引き抜き、寺を倒壊させた”

時行軍は見事に出鼻を挫かれ、無理やり出陣した末に、次々と尊氏に敗れた。その数は七度に及んだという。破竹の勢いに乗る足利軍は、十九日に鎌倉を奪回し、諏訪頼重ら主だった武将を自害に追い込んだ。しかし、乱の首謀者、北条時行は、いずこかに姿を消した。

同じ日、加賀でも名越時兼が討たれた。乱平定の功労者は、間違いないく尊氏だった。

【閉ざされた途】

一三三五年の中先代の乱で、後醍醐天皇は改めて足利尊氏の力を見せつけられた。

後醍醐は尊氏の行動に憤りつつも、その功績をたたえ、八月三十日、尊氏を従二位に叙した。

間もなく、勅使として中院具光が鎌倉に下され、帝の意が伝えられた。

『今度東國の逆浪速にせいひつする事叡感再三也』（梅松論）

“こたびの逆賊の討伐について、帝もしきりに感じ入っておられる”

『但軍兵の賞にをいては京都にをいて綸旨を以宛行べきなり』

“但し、軍の報償については、京において帝が沙汰すべきである”

『先早々に歸洛あるべし』

“まずは早々に、京へ帰還するように”

しかし、既に尊氏は、功を挙げた者に対し、恩賞を与えている。しかも、同じ三十日には、斯波家長を奥州管領に任じていた。奥州には、北畠顕家がいるわけだから、これは建武政権に対する挑戦だった。

尊氏の本心はいずこにあったのだろうか。

尊氏の望みは、後醍醐天皇の下で征夷大將軍となり、幕府を開く事である。これは、北条時行のような輩を抑えるために必要な事であった。

尊氏には朝廷を傾ける気などない。かつて源頼朝が後白河法皇と行なったような「交渉」を後醍醐天皇との間で行い、落とし所を見出したいだけであった。

しかし、頼朝の時とは異なる要素が存在した。

それは“護良親王の殺害”である。

護良親王は後醍醐天皇の皇子で、かつての征夷大將軍であった。しかし、先の乱で北条時行軍が鎌倉を占拠する直前に、弟直義がこれを手に掛けている。

武士による親王の殺害。これは、公家一統（朝廷が中心の政治）を掲げる後醍醐天皇に容認できるものではなかった。後醍醐は、親王を手に掛けた足利を、放置する訳にはいかなかったのである。現に、政権内で足利の排除を望む声は小さくない。

『尊氏謀叛の志有る由讒』（保暦間記）

“尊氏に叛意ありとする讒言があった”

後醍醐天皇は、これらを鑑みて、尊氏に一刻も早い帰京を命じたのである。

当初、尊氏は、この命に応じようとしたという。

だが、次の報せが、懇意の貴族から届いた。

『上洛せば道にて打つべき由を義貞に仰す』

“（帝は、）尊氏卿が上洛に応じたら、道中で抹殺するよう、新田義貞に命を下された”

この密告は、持明院統の貴族（日野家）がしたものと思われるが、明らかに尊氏を煽っている。

その真義はともかく、これによって、関係修復の道は閉ざされた。

意気消沈する尊氏を叱咤したのは、弟直義だった。直義は、この際、建武政権から離脱し、東国に「武家政権」を再興する事を、兄に強く勧めたのである。

【前夜】

一三三五年十月十五日、足利尊氏は鎌倉の旧將軍邸跡に御所を設

けた。

これは、京には帰還しないという意志を内外に示すものだった。これを察知した京の後醍醐天皇は、閏十月七日、関東に対する調伏を行なった。

両陣営は、開戦へと歩みを始めたのである。

しかし、現実はその間に手際の良いものではなく、この間足利陣営を引っ張っていたのは弟の直義だった。尊氏は、というと、日に日に活力を失っていた。

自分を建武政権から離脱させようとする弟達を眺めながら、尊氏はひとりつぶやく。

『我龍顔に昵近し奉りて。勅命を請て恩言といひ。ゑいりよといひ。いつの世いつのときなりとも』（梅松論）

“後醍醐天皇には昵懇にしていた。勅命をいただき、御言葉をいただき、御志をいただいた。いかなる世、いかなる時であつても、忘れはせぬ”

『今度の事條々御所存にあらず』

“こたびの事は、本意ではない”
救い難い事に、それが尊氏の本心である。

かつて、北条一門が天下を握っていた頃、足利の当主達は、常に身の危険を感じながら生きてきた。

祖父家時は政争に巻き込まれて自害した。父貞氏は得宗の顔色を窺う日常に疲れ、狂気にとりつかれた。そんな足利を救ったのは、まぎれもなく後醍醐天皇だった。

十一月二日、足利直義の名で、新田義貞追討の檄文が諸国に発された。

『可被誅伐新田右衛門佐義貞也、相催一族可馳参之状如件』

（結城白河文書・山本「新田義貞」一八一頁）

“新田義貞を討つ。一族を催して馳せ参じよ”

十二日、足利の動きに対抗して、後醍醐は北畠顕家を鎮守府將軍に任命した。これによって、顕家は名実共に奥羽の統括者となったのである。同時に、重大な指令が下された。

『奥州より顕家卿、後迫に攻め上るべき由、宣下せられけり』（保暦間記）

“北畠顕家に、奥州から背後について攻め上がるよう宣下した”
西から新田義貞。東から北畠顕家。成功すれば理想的な挟撃作戦である。

尊氏は戦慄した。この戦略的不利は、外交をもってしか覆せない。
十八日、尊氏は後醍醐天皇に対して最後の交渉を行ない、「新田義貞の追討」を求めた。

しかし、後醍醐はこれを最後通牒と捉え、足利との対決を決意してしまった。

【矛盾のひとつ】

一三三五年十一月十九日、後醍醐天皇は、尊良親王を上將軍、新田義貞を大將軍として、関東に向けて征討軍を派遣した。

・東海道…尊良親王、新田義貞・脇屋義助、千葉貞胤・宇都宮公綱・大友貞載ら諸將

・東山道…大智院宮、洞院実世・堀川光継（貴族）、江田行義・大館氏義、島津氏ら諸將

（山本「新田義貞」一八五頁・峰岸「新田義貞」九九―一〇〇頁参照）

これを知った鎌倉の足利尊氏は、常識外れの行動に出た。

『政務を下御所に御ゆづり有』（梅松論）

“政務を直義に御譲りになった”

足利の当主の座を弟に譲り、自らは退いたのである。

『浄光寺に御座有し』

そして、細川頼春ら僅かの近習だけを連れ、鎌倉浄光明寺に籠もってしまった。

足利尊氏という“一風変わった英雄”の行動は、本当に理解したい。そこまで、後醍醐天皇を慕うなら、是が非でも帰京すれば良かったではないか。あるいは、足利の当主として弟や家来達を慮ったなら、なぜ腰を据えて陣頭指揮を取ろうとしない。

これらの矛盾に満ちた行動こそ、後世の人が、尊氏を記す事をためらう所以である。

しかし、これらを矛盾のまま放置するのは、本書のような代物にとって余りに不都合である。ここで、「尊氏思想」について一つの仮説を立てたい。

即ち、「足利尊氏とは“棲み分け”の発想をする人だった」のではないか。

現代は、皆が同じである代わりに“弱肉強食の時代”である。これに対し、尊氏の時代は、身分の違いがある代わりに、“棲み分けがなされた時代”であった。つまり、天皇・貴族・武士・百姓・非人・僧がそれぞれ異なる世界を生き、相手の世界を滅ぼそうとしかかった時代である。その善悪は、ここでは論じない。史実である。

尊氏は、おおらかな性格であったと伝わるが、その生涯で何度か激怒した事がある。

その際に共通するのは、「対象となる人物が、己の役割を根本から否定する真似をした」という事である。そして、そのような時、尊氏は政治状況すらも無視する。

尊氏は、そういう価値観を持ったからこそ、後醍醐天皇や夢想疎石を素朴に敬った。將軍の役割とは関係のない事柄に口を出し、その領分を侵す事を好まなかったのである。

そして、これこそが尊氏の弱点だった。棲み分けを容認する尊氏は、それぞれの立場の者の利害が対立した時、その調整をするのが本質

的に苦手だったのである。

【足利尊氏起つ】

一三三五年十一月二十二日、足利尊氏の気持ちも知らず、京で綸旨が下された。

『足利尊氏同直義已下の輩、反逆の企あるの間、誅罰せらる所なり』
(山本「新田義貞」一八五頁)

“足利尊氏・直義とその配下は反逆を企てている、これを討て”

この日、持明院統の花園上皇が出家している。また、同じ月に、兄後伏見法皇も法名を理覚から行覚に変えている。時期が時期なので、背景がありそうだ。

いずれにしろ、争乱の時代が再開されたのである。直義らは、尊氏の態度に業を煮やし、尊氏なしで新田軍の迎撃に出た。しかし、二十五日、三河で高師泰が敗れた。

翌二十六日、尊氏と直義の官位が剥奪された。これらへの報復として、十一月中に、四国で細川定禅、播磨で赤松円心が挙兵している。しかし、この時、新田義貞は強かった。義貞は、背後を振り返らず、一路鎌倉を目指した。

十二月五日、駿河手越河原で直義も敗れた。足利軍の劣勢に、新田軍に寝返る者が相次いだ。

しかるに、「乱の首謀者」足利尊氏は、いまだ鎌倉浄光明寺に籠もっていた。

尊氏の苦悩。かつて、鎌倉幕府を倒した時、庶長子の竹丸が駿河で殺された。中先代の乱では、譜代の家臣を多く失った。今回の戦いでも、尊氏は何かを失うだろう。

しかし、弟らが敗退を重ねているという報が届き、尊氏は悩むのをやめた。

『箱根山にて相待す』（保暦間記）

“新田軍と足利軍は箱根山（鎌倉への最後の関門である）で睨み合っている”

—このままでは、弟が死ぬ—

『守殿命を落されば我有ても無益なり』（梅松論）

“直義が命を落とせば、自分が生き延びて何になる”

八日朝、尊氏は俄かに山名時氏らを従え、戦場に向かった。

『竹ノ下を廻りて、京都の勢を中に取り籠んとす』（保暦間記）

“竹ノ下を廻り、征討軍の退路を断とうとした”

鎌倉から西へ行く進路は二つある。北の足柄山を越えて駿河に出る道と、南の箱根山を越えて伊豆に出る道である。尊氏が選んだのは北の路だった。直義が（箱根山手前の）水呑で対陣している状況を逆手にとり、北の別道から敵の背後を突いたのである。

予期せぬ尊氏の出陣に宮方は動揺した。てっきり、足利軍は箱根をたてに守勢に徹する、と考えていたのである。この動揺に乗じた尊氏は、箱根に陣する宮方の主力へと向かうのは避け、一気にその背後の伊豆国府に向けて南下した。そして、尊氏軍への対応に戸惑う宮方を次々と撃破していった。そして、尊氏軍の動きが、ますます箱根の宮方に揺さぶりをかけていく。

尊氏の戦場への出現により、宮方と足利方の攻守は一挙に逆転した。

【その時歴史が動いた】

一三三五年十二月十二日、遂に宮方の大友貞載が足利方に寝返っ

た。

『十二日、伊豆国佐野山に於いて御方に参じ、合戦忠』（狭間文書・山本「新田義貞」一八九頁）

“十二日、伊豆国の佐野山で御味方に参じ、ご奉公致しました”

宮方には、元々足利尊氏に好意的な武将が少なくない。そのため、尊氏によって劣勢が覆されたとみるや、躊躇なく足利に付いたのだろう。かくして、一度は宮方に寝返った諸将は続々と足利陣営に戻り、足利方はその兵力を回復した。

これに焦った新田義貞は、箱根を退き上げ、尊氏を討ちに向かった。

十三日、伊豆国府で両軍は衝突した。しかし、この戦いで、義貞は敗れ、一路京へと逃れていった。

尊氏は、この後、ようやく弟の軍勢と、無事合流を果たしたのである。

十四日、足利尊氏と足利直義。“両大将”が揃ったところで、軍議が開かれた。

『是より兩将鎌倉に御帰有て關東を御沙汰有べきか』（梅松論）

“この後は、両大将には鎌倉に帰っていただき、關東の仕置をしていただくべきか”

『縦關東を全くし給ふとも。海道京都の合戦大事なり』

“いや、關東を治めていただく事よりも、海道京都の合戦の方が大事である”

『しかじただ一手にて御立有べし』

“ここは、一気に京に攻め上っていただこう”
こうして、足利軍は、一路京へ上る事になった。

この軍議によって、その後の日本は決定付けられた。というのも、尊氏が關東に残らなかったため、後の室町幕府の本拠地が“西国”に置かれる事になったからである。

「京と鎌倉」ではなく、「京に全てが集まる時代」がまもなく始ま

るだろう。

だが、そこに至る道には、まだまだ困難が待ち受けているように見える。海道を進みながら、諸国の軍勢を吸収し、更には九州・中国地方を含めた諸国への軍勢催促を続ける足利軍の背後で、見過ごし難い動きが起きていたからである。

二十二日、奥州。北畠顕家のもとに、大軍勢が集結していた。その指揮官は結城宗広、侍大将は結城親朝である。多賀国府を発する軍勢が向かう先は、足利軍の主力が展開する京周辺。尊氏が最も恐れていた東西からの挟撃が始まるうとしていた。

奥州から京への進軍は、常識で考えて不可能である。しかし、冬の雪国に集結したこの軍勢は、明らかに通常の軍とは異なる熱気を帯びていた。

この軍勢ならば、不可能を可能にするかもしれない。

【第一次京都争奪戦】

一三三六年一月、足利軍は京に殺到しようとしていた。北畠顕家が背後から上洛するまでに、勝負を決めねばならない。八日、足利尊氏は石清水八幡宮を制圧し、陣を布いた。

『九日、十日、於大渡橋抽軍忠畢』（建武三年三月日軍忠状・「大日本史料第六編之二」七七九頁）

“（私、戸次頼尊は）九日、十日は大渡橋の合戦に参加しました”

九日から、足利方は大渡橋を挟んで宮方と衝突した。両陣からさかんに遠矢が放たれる。

これは、既に摂津・河内まで迫っている細川定禅・赤松円心軍と呼応しての攻撃だった。

『明日十日午刻以前に山崎の京方を打破て煙を上べし』（梅松論）

“明日十日の正午前に、山崎から京に攻め入ります”

『同時に御合戦あるべし』

“將軍におかれましては、我等と同時に京に攻め込んでいただきたい”

そして約束の十日、細川・赤松軍は山崎の宮方を撃破し、久我鳥羽に攻め入った。

これに呼応し、大渡橋でも激戦が展開され、その際の火矢によって大渡橋は焼け落ちた。そのため、渡行が危ぶまれたが、足利方の野上資頼らが、焼け落ちた柱に乗って対岸の敵陣まで押し渡る奮戦ぶりを見せ、足利方は遂に渡行に成功した（野上文書）。

侵入した足利軍によって、京は火の海に包まれた。内裏をはじめとする主だった建物が灰燼へと帰していく。そのため、後醍醐天皇は、比叡山への避難を余儀なくされた。

その夜、比叡山へと向かう後醍醐天皇の輿に追い付き、何事かを奏上する武者がいた。

『今度官軍鎌倉近く責下て泰平を致すべき所に。さもあらずして天下如此成行事は。併大友左近將監が佐野にをいて心替りせし故也』
“こたび、官軍は鎌倉に迫り、天下を鎮めるところでした。しかし、そうはならず、天下がこのようになったのは、大友貞載が佐野において、足利に寝返ったからです”

『御暇を給て偽て降参して。大友と打違て死を以て忠を致すべし』
“ここでお暇を賜り、偽って足利に降服し、大友と刺し違え、もって忠を致します”

武者は、「龍顔を拝するのもこれが最後」と涙しながら、戦場に戻っていった。天皇も、

その後ろ姿に肩を震わせる。武者は、「三木一草」の一人、結城親光であった。

十一日、足利軍の入京により、はや宮方は敗色が濃くなろうとし

ていた。

足利に属する諸将は、次々と京の要所を押さえつつあった。大友貞載もそのひとりであった。この日、貞載は東寺南大門に陣を置いた。その勢二百騎。

その陣に、家来数人を連れて降服を願ひ出る者が現れた。件の結城親光である。

親光が投降してきたと聞いた貞載は、ただ「そうか」とだけ言つてこれを受け入れ、尊氏の許しを得るため、共に連れだつて本陣へと向かった。

本陣も近付いてきた樋口東洞院の小河で、貞載は親光に言った。

『法にて候。御具足を預り申さん』

“法である。ここで、貴殿の具足をお預かりしたい”

つまり、武装したままの降人を、將軍に会わせるわけにはいかないというのである。

『御片を頼奉るうへは。耻辱になさぬようにはからひ給へ』

“大友殿をお頼りする上は、どうか恥辱にならぬよう、計らつていただきたい”

やむなく、親光は、具足を渡した。

しかし、太刀を手に持ち、河を西に渡った時、貞載は更に次の事を求めた。

『大友御對面の後可進』

“將軍との御對面の後、（お手のものは）大友がお返しします”

ここまでか。親光は限界を悟った。

あわよくば、尊氏の本陣でひと暴れしたいところであった。が、是非もなし。

親光は、太刀を持つ手を握り締めた。

『馳竝て拔打に切間』

“親光は突怒駆け出して、貞載の横に並び、太刀を抜き打った”
親光の一閃は、貞載の目の上を、深く切りつけた。

しかし、貞載はひるまなかった。

深手を負った身を庇うどころか、逆に親光に組み付いたのである。
親光は、死力を振り絞る貞載に抑え込まれ、あえなく討ち取られた。
半死半生の貞載は、頭に鉢巻きをつけて輿で本陣に向かい、親光の首を持参した。そして、翌日亡くなった。かくして、「三木一草」の一本目が、失われたのである。

第一次京都争奪戦の前半、足利方は優位に戦いを進めた。このまま何事もなく戦いが推移したならば、尊氏は京を制圧しただろう。
しかし、この後、流れが変わった。

十三日、北畠顕家軍が遂に東坂本に到着したのである。北畠軍は、はるばる奥州から、関東の足利方を蹂躪し、東海道を駆け抜け、前人未到の軍事行動を実現したのである。

『官軍大に力をえて、山門の衆徒までも万歳をよばひき』（神皇正統記）

“奥羽勢の到着に、官軍はおおいに力を得て、延暦寺の僧兵までも万歳と声を挙げた”

のちに、父北畠親房は、この時を振り返ってそう記している。これを機に宮方は態勢を立て直した。

十六日、三井寺で激戦が展開され、細川勢はこれを支えきれず、後退し、戦場は三条河原へと移った。

まもなく、新田・北畠・楠木軍による一斉攻撃が始まった。中でも、結城宗広勢の勢いは凄まじかったという。宗広は、さきに憤死した結城親光の父である。

二十七日、足利方は桂川の西に後退した。足利方も健闘を続けていたといえるが。

その際、上杉憲房（尊氏・直義の母上杉清子の兄、「親父」と呼び慕われた）が敵を喰い止めるため、討死した。

三十日、足利軍は遂に丹波に敗走した。尊氏は痛恨の敗北をきしたのである。

【円心の進言】

一三三六年二月三日、足利尊氏・直義は摂津の兵庫に到着した。この地で、援軍の到着を待ち、再度京に侵攻しようと目論んだのである。

この間、足利兄弟の安全を確保したのは、赤松円心だった。円心は、護良親王の失脚で播磨の守護職を剥奪された後、領地で逼塞していた。建武政権は、かつての功労者に、失脚をもって報いた訳である。円心が建武政権を見限ったのは、そうした事情による。

まもなく、周防の大内・長門の厚東に率いられた船団が、兵庫湊に到着した。足利方は、貴重な増援を得た訳であるが、そこに新田義貞・北畠顕家・楠木正成が迫った。

『十日於摂州西宮大手致軍忠』（近江衆徒等軍忠状東京大学史料編纂所所蔵、山本「新田義貞」二〇二頁）

“（近江寺衆徒は新田軍に属し）十日、摂津西宮で足利と戦いました”

十一日、摂津国打出豊島河原でも足利方は苦戦した。

周防・長門の援軍を得ても攻めきれぬ。ここに、足利の劣勢は、明らかとなった。

その夜更け。宮方との対峙に疲れる本陣に、赤松円心が参上し、尊氏に進言した。

『御方疲て大功をなしがたし。しばらく御陳を西國へ移されて軍勢の氣をもつげせ。馬をも休。弓箭干戈の用意をも致して重え上洛有

べき歟』(梅松論)

“御味方は連戦に疲れ、戦果は望めません。しばらく、本陣を西国に移し、軍勢を休息させて下さい。馬を休め、軍備を整えたうえで、再度上洛するのです”

『凡合戦には旗を以て本とす』

“およそ合戦とは、掲げる旗によって、善悪が決まります”

『官軍は錦の御旗を先だつ。御方は是に對向の旗なきゆへに朝敵に相似たり』

“宮方は錦の御旗(天皇の旗)を先頭に立てています。しかるに、お味方にはこれに對抗する旗がないため、まるで朝敵です”

『所詮持明院殿は天子の正統にて御座あれば』

“持明院統こそ、天皇家の正統であらせられます”

『急に院宣を申くだされて錦の御旗を先立らるべき也』

“速やかに、持明院統から院宣を賜わり、錦の御旗を掲げるべきです”

しかし、ここの宮方は誰が抑えるのか、という顔をする尊氏に、円心はこう言った。

『中國攝津播磨兩國をば圓心ふまゆべきなり』

“摂津・播磨は、この円心が踏み止まります”

十二日夜、尊氏を乗せた船団は、兵庫を出港した。向かうは、西の果て九州である。

第六章：室町幕府の誕生 ― 湊川の戦い ―

【正成の進言】

足利尊氏が西国に落ちた。

この現象は、一見して、宮方の完全勝利に思われた。

「逆賊足利尊氏も、まさか北畠顕家卿が奥州の兵を率いて都に来るとは考えなかった」

「尊氏は逃げるしかなかったのだ」
その通りではある。

だが、勝利に驕る都の貴族達は、ここで動乱の本質を思い返すべきであった。

尊氏は、何故あれほどの軍勢を糾合しえたのか。

都で敗れて、なお生き延びられるのは何故か。

答えは明白である。

建武政権への不満が尊氏を大きくしたのである。

だから、敗走する尊氏は、味方に寝首を掻かれる事もなく、西国に落ち延びた。

大内ら西国衆と合流し、彼らの本国に迎え入れられようとしている。

してみれば、事の本質はこうであろう。

「都での決戦で、宮方は尊氏を討つ千載一遇の機会をふいにした」

事実、宮方の有力者、万理小路宣房と千種忠顕は、一三三六年一月中に出家している。

彼らは、宮方に絶望したのだった。

そんな中、楠木正成は、後醍醐天皇に対して次の事を奏上した。

『義貞を誅伐せられて尊氏卿を召かへされて。君臣和睦候へかし』

（梅松論）

“ただちに新田義貞を誅殺し、尊氏卿を呼び戻して下さい。今こそ、和睦する機です”

『御使にをいては正成仕らむ』

“使者は、この正成が務めます”

これを聞いた貴族達は、正成の発言を嘲笑した。

尊氏は朝敵である。帝の御威光に敗れ、西国に落ちていったではないか。

しかし、正成は言葉を続ける。

『君の先代を亡されしは併尊氏卿の忠功なり。義貞關東を落す事は子細なしといへども。天下の諸侍悉以彼將に屬す』

“帝が鎌倉幕府を倒す事ができたのは、尊氏卿の功績です。義貞は、確かに鎌倉を落としました。しかし、天下の諸將は、尊氏卿に従い挙兵したのです”

『敗軍の武家には元より在京の輩も扈從して遠行せしめ。君の勝軍をば捨奉る』

“敗れた足利殿に、元は京にいた輩までもが従い、落ち延びていきました。はばかりながら、彼らは、勝ちを収めた帝を捨て申し上げたのです”

貴族達の顔から、嘲笑の色が消えた。

『爰を以のなき御事知しめさるべし』

“これを以て、帝には徳なき事を、受け止めていただきたい”

今や、貴族達は顔色を変え、正成に憎悪の視線を浴びせる者さえいた。

古今、まことの事を言う者は、憎しみを買うのである。

しかし、正成は涙を流し、言葉を止めようとはしなかった。

『兩將西國を打靡して。季月の中に貴上り給ふべし』

“両将（尊氏・直義）は西国を従え、遠からず再び京に攻め上ってくるでしょう”

『其時は更に禦戰術あるべからず』

“その時には、もはやこれを防ぐ術などございません”

戦は、政治をもって終わらせるものである。これを理解する楠木正成は、威大な将だったのだろう。

だが、正成の進言は、採用されなかった。

【尊氏の西走】

一三三六年二月十三日、海路九州に逃れる足利尊氏は、室津に停泊した。

九州に向かう尊氏は、東を振り返らなかった。東国には千寿王や上杉らがいる。

事実として、この月、行方不明だった北条時興（泰家が改命）が宮方に付いて信濃で挙兵したが、小笠原貞宗に敗れ、今度こそ正真正銘の行方不明となっている。

また、一ヵ月後に奥州への帰途に着いた北畠顕家も、関東で連戦している。

尊氏は、西国の武士団を捨てる事を何よりも恐れた。

東国に引き返せば、西国武士は、二度と尊氏に従うまい。

それを避けるための九州落ちであった。

したがって、この西走は逃走ではない。西国に楔を打つ“進軍”であった。

まもなく、軍議が開かれ、西国諸国に将を配す事が決められた。

○四国（伊予除く）…細川一族 伊予…河野通盛 播磨…赤松円心
備前…石橋・松田 備中…今川顕氏・貞国 安芸…桃井・小早川
周防…大島・大内長弘 長門…斯波高経・厚東（峰岸）「新田義貞」
一〇三〜一〇四頁・「足利政権成立期の一門守護と外様守護」

これと合わせ、尊氏は次の宣言を行なった。これを「元弘没収地返付令」という。

『元弘以来被収公所領事、如元可有知行之如件』（『南北朝遺文
中国・四国編』二四七号）

“（足利に味方するなら）鎌倉幕府から与えられた所領を、再び治めてよい”

これこそ、諸国の武士の望みであった。

武士達はこぞって足利陣営に駆け付けた。

二月十三（十七）日、三宝院賢俊が、待ちに待った光厳上皇の院宣を尊氏に届けた。

『新田義貞与党人を誅伐すべきの由院宣』（硯田叢書所収三池文書・山本「新田義貞」二一四頁）

“新田義貞に味方する者を誅伐せよとの院宣を賜った”

ここに、尊氏は逆賊の汚名を雪ぎ、戦いは「両統の対立」へと構図が変わった。

賢俊は、日野資名の弟である。以前から足利とは協力関係にあった。という事は、持明院統の一部は、早くから足利と結んでいた事になるのだろうか。

もう一つ。歴史の陰で活躍した人々を、ここで紹介しておく。西走する尊氏が、矢継ぎ早に政治決定を行なえたのは、旧鎌倉幕府の官僚達が、これに従っていたからである。

摂津親秀らは、敗走する尊氏を見限らず、黙々と実務を助けていた。

次の時代を切り開くため。彼らは、室町幕府の設立に生涯を捧げる運命にある。

この戦いは、もはや尊氏だけの戦いではなかった。

【老将の死】

ある時、新田義貞・楠木正成・名和長年が、共に出仕する事があった。その席で、「討幕の功者」についての話が出た。その際、正

成は、こう断言したという。

『元弘忠烈者勞功輩雖惟多』（菊池武朝申状）

“元弘の折、忠義を示した者は、確かに多い”

『獨依勅錠墜一命者武時入道也。忠厚尤爲第一蝦蟇』

“しかし、勅命を奉じて命を捨てた者は、菊池武時ただ一人。忠義は抜きん出ている”

この正成の発言が、後醍醐天皇の耳に届いたからだろうか。菊池一族は、建武政権から肥後・対馬の国司職を与えられた。

一三三六年二月二十八日、少弐頼尚が足利尊氏を九州に迎えるため、軍勢を率いて大宰府を離れた事を察知した菊池武敏は、突如その留守を襲った。

菊池一族には、「九州三人（少弐・大友・島津）」に対し、怨みがある（【死闘】参照）。九州三人が、「源頼朝の再来」と仰ぐ尊氏と対決する事に、ためらいはなかった。

二十九日、大宰府は陥落し、少弐妙恵入道（頼尚の父）は、博多から追い落とされた。

妙恵は己のうかつさを呪った。まったく、馬鹿をやってしまった。將軍の到着に浮付き、軍勢を二分する愚を犯すとは。將軍のために用意した、馬も武具も、灰となった。

『合戦に討負る條面目を失ふ間。老後の存命無？なり』（梅松論）

“合戦に負け、面目を失った以上、老いの身を長らえても一族の恥となるだけだ”

『二方の御下向に命を奉るより外別に何の志かあらん』

“両將軍（尊氏・直義）の御下向に、この命を捧げるほか、一族の名誉を守る道はない”

三十日、妙恵は内山で腹を切った。

妙恵噴死の噂は、まもなく筑前芦屋の尊氏の陣にも伝わった。こ

れに驚いた尊氏は、頼尚に対して、この風説が本当であるのか尋ねた。しかし、頼尚は、これを否定した。

『御前にては虚説のよしを申てぞ退出仕ける』

“頼尚は、尊氏の御前では、それは虚説であると申し上げ、退出した”

この時、頼尚は、内山から送られてきた僧から、父の最期の言葉を受け取っていた。

『將軍を御代に付奉るべし』

“將軍を御代につけまいらせよ”

頼尚は、父の死が味方に伝わり、軍勢の士気が損なわれる事を恐れたのである。

そのため、軍全体が妙恵の死を知ったのは、宗像神社に着いた後だった。

【多々良浜の戦い】

「九州三人」こと、少弐・大友・島津は、源頼朝の命を受け、九州に下向した家である。元寇の際、多くの守護職を北条に奪われた後も、頼朝から九州を任されたという意識に

変わりはなかった。足利尊氏の檄に応じて鎮西探題を滅ぼし、その後これに従ったのも、尊氏を「源頼朝の再来」と信じたからであった。

この「九州三人」に対し、土着の菊池氏や阿蘇大宮家は、立場を異にする。

その帰結が、先の博多合戦だったのかもしれない。何となれば、前者の主は將軍で、後者の主は朝廷なのである。京で一安心している後醍醐天皇が責められるべきは、火薬庫となった九州を、尊氏に任せたまま放置していた事だろう（【六波羅の高氏】参照）。

一三三六年三月二日朝、菊池軍の接近を掴んだ尊氏は、宗像神社

を発った。

その率いる軍勢は少ない。細川・斯波といった、譜代の家臣達を、中国・四国地方の守りに残したからである。尊氏は、まさに身一つで九州に渡っていた。

足利軍と菊池軍。双方の軍勢の実数は、よく分かっていない。

しかし、「梅松論」には、「足利軍…千騎未満（うち少弐頼尚五百騎）、菊池軍…六万騎」と記されている。足利が過小で、菊池が一桁多い感はある。だが、「多々良浜の戦い」と呼ばれる戦いで、尊氏が数倍の敵との決戦を強いられた事は、まず間違いない。

尊氏がこの不利な戦いに臨んだのは、一つの勝算があったからである。

『敵は大勢にて候へ共みな御方に参るべき者どもなり』（梅松論）

“敵は確かに大軍ですが、みな将軍に心を寄せております”

とは、少弐頼尚の言である。つまり、本気で足利と戦おうとしているのは、菊池・阿蘇の軍勢くらいのものだというのだ。

『菊池計は三百騎には過ぐべからず』

“菊池だけなら、三百騎も超えないでしょう”

南北朝時代の軍勢の特徴は結束力が弱い点にある。総じて寝返りが多く、少数の精鋭が大軍を破る戦いが少なくなかった。そして、足利尊氏が強かったのは、人心の掌握に長け、個々の武士達が何を求めているのかを、常に考えていたからである。

足利軍と対峙した九州の武士達は、尊氏を討つ事をためらった。尊氏が先に発した「元弘没収地返付令」が、彼らの心を捉えていたからである。本当に将軍を討ってよいのか。

まもなく、松浦党が足利に寝返り、菊池軍は壊走した。菊池武敏は辛うじて肥後に逃がれ、阿蘇惟直は肥前で討たれた。翌三日、尊氏は大宰府を確保した。

【将の器】

一三三六年三月二日、鎮守府“大將軍”北畠顯家が権中納言に任じられた。また、父の親房も、この頃従一位となった。京爭奪戦での働きが評価されたのである。

この間、建武政権の動きは遅い。

足利尊氏を追い落したのは二月十二日である。一体、半月も何をやっていたのか。

同じ期間に、尊氏は政治工作も戦略の練り直しも終え、院宣をたてに諸将を各地に派遣し、自らは大宰府を抑えているのである。

三月十日、新田義貞が、ようやく尊氏討伐のため京を発った。

正成の進言を警戒したのかもしれない。いずれにしろ義貞は出遅れた。そして、この後、播磨の白旗城に籠もる赤松円心に捉まり、更に時間を浪費するのである。

同じ日、北畠顯家率いる奥羽軍も、義良親王を奉じて帰国を開始した。

その際、親王は三位に叙されている。これは、兄成良親王（四位）を超える位であり、皇子の中でも特別な信任を得た事を物語っている。また、顯家には、常陸・下野の統括が命じられた。この時点で、尊氏の再起は伝わっていた筈だが、それを無視して帰国せねばならぬほど、東国の戦況は切迫していたのだろう（【尊氏の西走】参照）。

なお今回、父の北畠親房は、後醍醐天皇の相談役として京に残った。

あるいは、この時期の尊氏こそが、異常なのかもしれない。多々良浜の戦いに勝った後、尊氏は、即座に恩賞・安堵を行ない、九州の大半の勢力を味方に付けた。

その後も休む事なく、三月十三日に大友貞順（兄貞載と異なり宮方）の籠もる豊後国玖珠城に軍勢を送り、二十日には日向・大隅の宮方（伊東氏・肝付氏）に畠山直顕・島津貞久を充てている。そして、

四月二日には、九州を一色範氏に任せ、再度上洛の途に就くのだが、この間わずか一ヵ月。しかも三日には、大宮司の職を餌に、阿蘇の分家を寝返らせ、菊池・阿蘇の動きを封じる事にも成功している。これらと並行して、再上洛のため、軍勢催促・兵糧確保・兵船調達・政治工作を行なった訳だから、尊氏も配下の官僚達も化け物じみている。いつ寝ていたのだろうか。

一方、義貞は、未だ白旗城を抜けないでいた。

『四日後巻御敵等寄来』（『南北朝遺文中国四国編』・『萩著閥閥録』所収、山本「新田義貞」二一二～二一三頁）

“四日、（新田軍に従い、南門を攻めていると、）敵が背後から攻めてきた”

円心の巧みな用兵に、翻弄され続けていたらしい。

後世、「義貞は白幡城を囲み、貴重な時間を失った凡将」と評される。しかし、義貞の

敗因は一戦場に限定されるものではない。また、尊氏の勝因も戦場に限定されない。

【湊川の戦い―楠木正成最期の策―】

一三三六年四月九日、後伏見法皇が崩御した。享年四十九歳。持明院統の将来を憂えた法皇は、勝利を見る事なく、生涯を終えたのである。全ては光厳上皇の手に委ねられた。

五月五日、海路上洛を開始した足利軍は備後鞆の津に到着した。

この地で、尊氏は、軍を水陸の二つに分けた。十日、海路を尊氏が、陸路を弟直義が率い、進軍が再開された。

『梅松論』によると、両軍の編成は次のようなものだった。

・海路軍…足利尊氏（大将）・高師直（副将）、譜代の家臣、関東・京の有力者

・陸路軍…足利直義（大将）・高師泰（副将）、九州・中国勢、関東・京の諸氏

海路を進む尊氏は、四国勢（細川・河野）との合流を目論んでいる。東に向けて航海する海路軍の前に、間もなく、足利の家紋を付けた船五百隻が、姿を現した。

しかし、事前の連絡が上手くいってなかったためか、少しばかり混乱が起きた。

『楠が謀に御方と號して向ふなど聞えて少々騒ぎたり』（梅松論）

“楠木正成が、味方に偽装し、攻めてきたのではないかと少々騒ぎになった”

足利軍は、小なりといえど、楠木正成を恐れていたようだ。

一方、陸を行く直義も、海路軍と歩調を合わせ、軍を東へ進めていく。その役割は、道々で中国勢を吸収する事と、備前の脇屋義助軍（義貞の弟）を蹴散らす事であった。

直義は、大軍を着実に運用する手腕に関しては見るものがあつたらしく、この時は、見事兄の期待に応え、十八日備前から脇屋勢を追い落している。

播磨に近づく足利の大軍を前に、新田義貞・脇屋義助兄弟は、なすすべもなく後退していく。白旗城の囲みも解け、尊氏は十九日、田室で赤松円心との再会を果たした。

『せめ口に捨置旗百餘流持参す』

“攻め口に捨置かれていた旗を、百あまり持参いたしました”

赤松円心という男は、本当に目端がよく利く。

これによって、新田軍の陣容をつかんだ尊氏は、こう言った。

『御方へ戦功有輩は少々見ゆる』

“以前、味方に付いていた者も少々見える”

おそらく、尊氏が西走している間、新田軍から攻撃を受けないため、そうしたのだろう。だが、昨日の都合で動いた連中など、明日の都合で何とでも動かせる。

『是等もはたして御方に参るべし』

“これらも、（今後の）情勢次第で、味方に付くだろう”

『中々快の御顔色なりし』

“將軍は、お喜びの様子であつた”

あるいは、足利尊氏の凄味は、このあたりにあるのかもしれない。尊氏の脳裏には、相次ぐ寝返りで崩壊する新田軍の姿がありありと浮かんでいた。まもなく、天下は決する。

事はすべて、尊氏の思惑通りに動いているかに見えた。

だが、その頃、尊氏の思惑を封じようとする人物が尼崎に着陣していた。

『今度は君の戦必ず破るべし』

“こたびは、君の戦、必ず敗るべし”

悲壮な表情をして戦場に立つ将こそ、摂津・河内・和泉国守護、楠木正成である。

恐るべきは、宮方の敗北を確信しながら、なお戦場に臨んでいる事である。そして、戦場にありながら、正成の目は、足利との決戦ではなく、“戦後”に向けられていた。

正成は、何故か息子正行らを決戦の地に連れず、河内に配している。足利との決戦に、一兵でも多くを必要とする時に、である。河内に護るべきものがあつたのだろうか。

その一つは、「堺―紀伊」沿岸部の制海権だろう。宮方には、紀伊の小山氏らがいる。間もなく誕生する南朝が、半世紀以上にわたって命脈を保ったのは、経済都市「堺」の商人達を味方に付け、紀伊の水軍と結んで畿南の制海権を確保したからである。

商人に水軍。武家の尊氏では、所詮彼らを生かすきれない。だからこそ、正成は後醍醐天皇を仰ぐ。正成亡き後も、楠木一族は河内に割拠し、南朝の民を護り続けるのである。

まもなく、楠木軍は新田軍と合流し、湊川に着陣した。

尊氏率いる水軍は、このあたりで上陸を決行するだろう。しかし、山と海に囲まれた地である。山間部の地形を利用すれば、敵の大軍に一矢報いる機も訪れよう。

失うのは、正成の命一つ。護るのは、宮方に生き場を求める者達の未来であつた。

五月二十五日、足利軍と新田・楠木軍は衝突した。この「湊川の戦い」で、足利方は水陸両軍を展開している。海路軍は足利尊氏が指揮し、陸路軍は足利直義が指揮する。

対する宮方は、新田義貞軍を本軍とし、楠木正成軍を支軍とする。西から順に位置関係を確認しよう。西には足利直義軍が布陣した。直義軍北の「山の手」には斯波高経勢が、南の「浜の手」である和田岬西岸には少弐頼尚勢が布陣した。陸路軍は、三方から東進することになる。これに対処するのは湊川に布陣する楠木正成・正季（正成の弟）である。正成は直義軍と対峙し、正季は斯波勢に対応する。

ならば、少弐勢は誰が止めるのか。新田軍しかない。新田軍は和田岬東岸に先方を置いていた。しかし、ここで疑問が生じる。ならば、海路軍の動きには誰が対処する。

まさか、船戦の経験に乏しい義貞は、水陸両軍に対処できると考えていたのだろうか。

巳の刻（午前十時）、戦いは少弐勢の和田岬東岸への進撃をもって始まった。これを見た尊氏は、海路軍の主力を挙げて和田岬南岸への上陸作戦を決行した。その結果、新田軍は西と南の二方から攻撃を受けた。堪らず、新田軍先方の脇屋義助勢は、後方に退いた。

事態が急転したのはこの後だった。

『四國の勢。兵庫の敵を落さじとて生田の森の邊よりあがりける』

“四国勢が、兵庫に陣取る義貞軍を逃すまいと、生田の森から上陸

した”

和田岬の“更に東”へと進軍した、「海路軍の別動隊」が、突如生田の森で上陸を開始したのである。この戦いで、尊氏の采配は巧緻を極めた。尊氏は、細川定禅率いる別働隊に新田軍後方、つまり京への退路の遮断を命じたのである。

このままでは東西から挟撃される。慌てた義貞は軍を東に後退させた。そして、生田の森で細川勢としばし交戦したあと、浮き足立ち、京への退却を開始した。

細川勢は、退却する新田軍を、追撃しようとしなかった。

『定禅義貞には目をかけずして』

“定禅は義貞には、目もかけなかった”

『湊川に楠正成残て大手の合戦最中のよし聞えしかば、下御所の御勢に馳加』

“湊川に楠木正成が残って、合戦しているのを察知し、直義勢に加わった”

辛辣にも、西の楠木軍目掛けて轉身したのである。

こうして、未だ西方で直義軍・斯波勢と戦う楠木軍は東西から包囲された。

水路尊氏軍・陸路直義軍の連携。別働隊による新田軍の動揺。そして今、別働隊を再利用した新田軍・楠木軍の分断。正成は敗北を悟った。直義軍・斯波勢は、この後、一刻も早く楠木軍を敗走させ、新田軍の追撃にうつるだろう。全軍崩壊の危機だった。

この危機に、正成は戦場に残る事を決意した。やはり、新田では足利は討てぬ。

正成は、己の正しさを噛み締めながらも、“最後の策”を打つ事を決めた。

そこまで生きたいなら、義貞を生還させてやる。直義軍を足止めし、

新田軍を一兵でも多く、戦場から離脱させるのだ。その代わり、義貞には「役割」を負ってもらう。

楠木軍最後の戦いが始まった。それは捨て身であり、楠木軍は死兵であった。

しかし、直義は、長時間にわたる攻勢を凌ぎ、楠木軍を壊滅に追い込んでいった。

十分な時間を稼いだ事を悟った正成は、ようやく逃走を開始した。『疵を被る、をりから布ひきに候なん』（諸庄々文書案全）

まず、傷を負った者から布引瀧方面に落ち延びさせる。その後、自らも二十八騎を伴い、

戦場からの離脱を図った。だが、既に周りは、足利の大軍あるのみである。

正成は、湊川周辺のとある村に逃れた。粗末な小屋がある。

主従は、ここでしばしの休息を取った。だが、程なく、細川勢がこれを嗅ぎつけた。

『申時、小家に火をかけ自害仕候』

“申時（午後四時）、楠木正成は、小屋に火をかけ、自害した”

楠木正成自害。享年は分かっていない。二十八騎もこれに殉じた。小屋の火を見た細川勢は、慌てて既に息絶えた正成の首を捕った。

『魚御堂申候僧所へ所領五十丁の処を寄て、孝養』

“魚御堂という所へ所領を寄進して、孝養が行なわれた”

正成の首は二日間晒された後、懇ろに供養された。

こうして、楠木軍との激戦に疲れ、正成の首級に満足した足利軍は新田義貞を逃した。その間、西宮で反撃を試みてきた新田軍を打ち破ったにもかかわらず。

思い出してもらいたい、足利の敵は「後醍醐天皇」に見えるが、政治的には「新田義貞」である。現に尊氏は光厳上皇を奉じている。

天皇と敵対しているのは“上皇”だった。

尊氏は“あくまで、院の命令で、義貞と戦っているに過ぎない”のである。

したがって、新田軍を温存して足利と衝突させ続ければ、もともと後醍醐天皇との戦いを望まない尊氏の事である。義貞を逆賊にする事を条件に、和睦を持ちかけてくるだろう。

『義貞を誅伐せられて尊氏卿を召かへされて。君臣和睦候へかし』

（梅松論）

正成は、自らの死で、これを実現する路を開いた。“楠木正成最期の策”だった。

その頃、大和には北畠親房の姿が見られる。

『只今は北畠殿拾市に坐られ候か』（諸庄々文書案全）

前回とは違い、息子の参戦は望めない。息子が再び上洛するには、時を要する。

そう判断した親房は、「準備」を始めていた。吉野周辺に足を運び、周辺の豪族を懐柔し出したのである。同じ頃、息子の顕家は、ようやく多賀国府に帰還した。

―天下篡奪―

【第二次京都争奪戦】

一三三六年五月二十七日、後醍醐天皇は、迫る足利軍を恐れ、比叡山に移った。

その際、持明院統の光厳上皇らが、同行を求められた。

『山門行幸、欲被伴申之處、依御惱不慮御逗留』（皇年代略記）

“（しかし）同行を求められた院は、病を理由に京に残られた”

冷静に考えて、この時に宮方が持明院統の身柄を確保しておけば、それこそ足利尊氏には、打つ手が無くなった筈であるが、後醍醐はそれをしなかった。あるいは、上皇なしで足利が勝利すれば、後々朝廷の存亡に関わると判断したのかもしれない。

まもなく、足利方の仁木頼章・今川頼貞軍が入京を果たした。

『去春九州御下向の時捨奉りし輩多く降参す』（梅松論）

“九州に敗走する際に新田に寝返っていた者達も、多くが降参した”
六月三日、花園法皇・光厳上皇が、尊氏に合流した。

これをもって、持明院統は、数年にわたる逼塞を抜け出したのである。

五日、足利直義の主導で、山門攻めが開始された。

朝敵呼ばわりされ、北畠顕家軍が背後から迫ってきた前回とは違い、今回は勝てる。

―だとすれば、先帝に刃を向けるのは嫌である―
そう判断するや、尊氏はまたしても“例の病氣”がぶり返し、戦いを弟に一任していた。

『千種忠顕討死す』

“（この日の戦いで、）千種忠顕が討死した”
そして、戦況は足利方の優勢であった。

だが、宮方には後がない。まもなく、足利方は思わぬ反撃を受けた。

まず六日、紀伊の熊野沖で、足利方の新宮上綱が、宮方の小山実隆に敗れた。これによって、周辺の制海権は宮方に残り、畿南に宮方の根が残ってしまった。

更に九日、兄尊氏に代わって軍勢を指揮する直義は、こんな命令を出している。

『東坂本へ馳向うべきの旨、先立って仰せられ候といえども、西坂本合戦最中なり』

（正文文書・峰岸「新田義貞」一〇五頁）

“東坂本に向かえと、先立っては命令したが、西坂本で合戦が起きている”

『時刻を廻らせず、重ねて京都陣を催すべき』

“（美濃・尾張・伊賀・志摩・近江の軍勢には）一刻も早く京に陣をしいて欲しい”

当初、この軍勢は東坂本から比叡山を攻める手筈だった。しかし、宮方の反撃が思いのほか強く、直義は京の陣を厚くする事を余儀なくされたのである。

三十日、宮方は最後の攻勢に出た。宇治、竹田、南口。各道から宮方が洛中に迫り、東寺を目指す。

その主力は、東から攻める新田義貞・名和長年勢であった。数に劣る宮方の狙いは、足利方の諸将を分散させる事にあった。

法成寺河原に高師直、宇治に細川頼春、竹田に今川頼貞、南口に高師泰、三条大宮に山名時氏。宮方の分撃に、足利方は個別の対応を強いられ、東寺への進路に隙が生じた。

そこへ、新田・名和勢が突入した。

尊氏の陣取る東寺まで、あと少し。
もはや、それは軍略ではなかった。尊氏一人を討てばよい。尊氏さ

え討てば、足利方は四散する。

新田勢・名和勢は、刺客の集団と化していた。

しかし、名和勢が東寺に取り付いた時、突如小門が開いた。

『東寺の小門開ひて。仁木兵部大輔頼章。上杉伊豆守重能以下打て出責戦』（梅松論）

“東寺の小門が開き、仁木頼章・上杉重能勢が出撃してきた”
痛恨の新手であった。

尊氏は、本陣に、仁木・上杉勢を温存していたのである。

『伯耆守長年并余党数千人、或討取之、或生取』

（足利尊氏御判御教書（切紙）・小笠原家文書・東京大学史料編纂所蔵、『足利尊氏文書の総合的研究写真編』三八頁）

“名和長年と配下数千人を、あるいは討ち取り、あるいは生け捕った”

長年は、ここで力尽きた。建武政権で重用された「三木一草」は、ここに枯れ果てたのである。

一方、義貞も、細川定禅に敗れ、辛うじて叡山に落ち延びた。

七月、戦いの舞台は近江・河内・和泉へと移ろうとしていた。

既に一ヵ月。長引く戦いに、将士らの疲労が目立ち始めた。五日、尊氏が動いた。

『東国山道令馳参之輩、暫令居住近江国、打止山徒往反及兵粮』

“東国・東山道から馳せ参じるよう命じた、（甲斐・信濃勢を率いる）小笠原貞宗殿には、近江にしばらく駐留し、僧兵の往来・兵糧の流れを断ち切ってもらいたい”

東近江に陣を張り、比叡山への糧道を封鎖するよう、命じたのである。

そして、書状に、こう付け加える事を忘れなかった。

『爰如風聞者、義貞以下可令没落東国云々』

“ところで、噂によれば、新田義貞は東国に落ち延びようとしている”

るらしい”

義貞をここで仕留められなかった場合の、東国が戦場となる可能性の示唆であった。

遠国の者は、何かと口実を設けて働き惜しみをする。それをさせないためであった。

叡山封鎖には、佐々木導誉率いる近江・伊勢勢までもが投入された。叡山の兵糧が尽きるのが先か、京が飢餓で崩壊するのが先か。

八月十五日、豊仁親王（光厳の弟）が二条良基邸で元服し、光明天皇として即位した。

『以正慶天子爲治世之主』（元弘日記裏書）

“政務は光厳院が行なわれる事になった”

その際、若年で、即位年数も少ない光厳の執政を疑問視する声が、一部の貴族から起こった。確かに、持明院統のこれまでの在り方を考えれば、ここは政治経験豊かな花園法皇が院政を行なうべき状況ではある。しかし、尊氏はあくまで光厳の院政を求めた。

おそらく、花園も、甥のために貴族達の声を抑えに回ったのだろう。こうして北朝が誕生した。尊氏の要望で、その朝廷は「建武」の年号を用いた。

十七日、尊氏は清水寺に参拝し、願文を奉納した。

『この世ハ夢のことくに候』

（足利尊氏自筆願文・常盤山文庫所蔵文書、『足利尊氏文書の総合的研究写真編』四〇頁）

“この世は、はかない夢のようなものです”

『猶々とくんとんせいしたく候』

“私は、一刻も早く、こんな世を捨てたい”

『今生のくわほうにかへて、後生たすけさせ給候へく候』

“現世の権力など、望んではいいないのです。来世の救いこそが欲しい”

『今生のくわほうハ直義にたハせ給候て、直義あんをんに、まもらせ給候へく候』

“現世での果報は、弟直義にお与え下さい。直義を、どうか安らかにお守り下さい”

思えば、突出する弟や家臣達に引きずられ、心ならずもここまで闘ってしまった。

しかし、尊氏は後醍醐天皇の下で、征夷大將軍をしたかったのである。

尊氏は、兵糧に窮した宮方に対し、密かに和睦の交渉を始めた。

十月九日、最後まで抗戦を主張した新田義貞が、洞院実世と共に山を下りた。

『東宮、尊良親王義貞等、趣越前國』（元弘日記裏書）

“義貞は、恒良親王・尊良親王を奉じて、越前に逃れた”

十日、後醍醐天皇が、吉田定房・宇都宮公綱・菊池武敏らと共に帰京した。

『尊氏、本望なりとて悦て奉じ迎て』（保暦間記）

“尊氏は、（先帝の帰京を）本望であると喜んだ”

先帝には、皇子の成良親王を皇太子にすると打診してある。

今の帝は持明院統。次の帝は大覚寺統。朝廷は両統迭立に戻る。それが尊氏の選んだ終幕であった。しかし、その中に、尊澄法親王（宗良）・北畠親房の姿は見えなかった。

【幻の両統迭立】

一三三六年十月、叡山を下りた新田軍には試練が待ち受けていた。新田軍は、追撃を逃れながら、琵琶湖を船で北上し、海津に到着した。

目指すは越前敦賀。かの地は、弟脇屋義助が国司を務めた国で、新田に味方する者が少なくない。義貞は、越前を拠点に北陸を掌握し、

反撃に転じるつもりだったのである。

だが、敦賀に通じる七里半街道には、足利方の守護、斯波高経が待ち構えていた。

京で苦戦を続け、いま越前へと落ち延びる軍勢では相手にならぬ。やむなく義貞は、街道を迂回し、木ノ目峠を越える道を選んだ。

ここで悲劇は起きた。この年は、小氷期氣候に当たった年だった。

『大雪にあひて軍勢共寒さの爲に死す』（梅松論）

“大雪にあつて、新田義貞の軍勢は、凍死した”

例年に勝る豪雪が新田軍を襲い、視界を塞ぐ。軍勢は散り散りとなり、脱落者が相次いだ。義貞は死ぬ思いで峠を踏破し、十三日、ようやく金ヶ崎城にたどり着いたという。

尊氏は、北に逃げた義貞に止めを刺すため、各国に指令を発した。『北国に趣くと云々、早く要害に馳せ向かい、誅伐あるべきの状くだんの如し』

（三浦和田文書・山本「新田義貞」二三八頁）

“義貞は北国のどこかに逃れた。すみやかに軍勢を動かし、これを討て”

この文書の送り先は、越後の三浦和田茂実である。越後には、国府を中心に、新田党が蔓延っていた。そのため、尊氏はここに手をまわしたのである。

京での戦は終わった。だが、諸国の戦は始まったばかりであった。

今、諸国を見渡したところ、一国とて乱のない国はない。鎌倉時代に始まった諸家の本家と分家の争い。抵抗を続ける北条残党。京を窺う宮方。

諸勢力は、“政治体制の変遷とは関係なく”生き残っていた。

そして、それは武士層だけの話ではなかった。寺社・商人・海の民・山の民・村々の民。諸勢力の利害は錯綜し、未だこれを纏める目処はたっていない。

だからこそ、尊氏は新たな時代の幕開けに、再び両統迭立を選んだのである。

將軍尊氏は天下の七分を治め、新たな国造りをする。そして、後醍醐天皇にはそこから漏れた三分を治めていただく。尊氏の考え出した「乱世の処置箋」だった。

十一月、後醍醐上皇から光明天皇へ、「三種の神器」（のちに南朝は偽物と主張）が引き渡され、十四日に成良親王（後醍醐の皇子）が皇太子となった。

【室町幕府の誕生】

一三三六年十一月七日、足利尊氏（三十一歳）は「建武式目」を定めた。

起草を行ったのは、藤原藤範・二階堂是円・少弐頼尚ら八名である。多くが、京出身の学者、鎌倉出身の官僚だった。ご覧あれ。東西がいま一つとなり、新時代が産声を上げた。

『鎌倉如元可爲柳營歟、可爲他所否事』

“本拠地は、以前のように鎌倉にするべきか、他に移すべきか”

『鎌倉群者、文治右幕下始構武館、承久義時朝臣吞天下、於武家者尤可謂吉土哉』

“頼朝公が居を構え、北条義時が天下を鎮めた鎌倉は、武家にとっては吉土といえる”

『爰祿多權重、極驕恣欲、積惡不改、果令滅亡畢』

“しかし鎌倉が滅びたのは、富と権力に安住し、変革を捨てたからである”

『縱雖爲他所、不改近代覆車之轍者、傾危可有疑乎』

“本拠地の移転さえすればそれで良い、という意見こそ、最も悪質な議論である。”

鎌倉幕府の失敗を改めなければ、政治の本質は何一つ変わらない”

『居處之興廢、可依政道之善惡、是人凶非宅凶之謂也』

“新たな幕府の繁栄を決めるのは政治である。「地」ではなく「人」が全てを決める”

『但諸人若欲遷移者、可隨衆人之情歟』

“皆の感情に従い、敢えて本拠地を移す我々は、肝に銘じなければならない”

誕生した室町幕府で政務を行なったのは、副將軍足利直義（三十歳）だった。

『御政道の事を將軍より御讓有し』（梅松論）

“將軍が、政治を譲られたのである”

史実である。尊氏は、人事や恩賞だけを行ない、その他は軍勢催促さえ弟に任せた。

ある日、尊氏は直義に言った。

『國に治る職に居給ふ上は。いかにもいかにも御身を重くして。かりそめにも遊覽なく。徒に暇をついやすべからず』

“国を治める責務を担う以上、そなたは、身を重くし、仮初めにも遊覽はひかえねばならぬ。いたずらに時を費やす暇はないと思え”
おおせはごもつともである。

しかし、舞台を見たりするのが好きなのは、むしろ兄尊氏の方ではないか。

いぶかしむ直義に、尊氏はこう言い添えた。

『我身を軽く振廻て諸侍に近付。人々におもひ付れ。朝家をも守護し奉らむ』

“（しかし、）儂は、身を軽くして人々に懷かれ、朝廷を守護したいと思う”

室町幕府創設時、尊氏は、かの源頼朝のような肅清劇を再演する事を努めて避けた。

これは新田義貞らとの、今後の戦いを見据えての事でもあったのだろう。

肅清を行えば、貴重な戦力が失われる。

また、肅清劇の果てに”第二の北条”が幕府に現れれば、結局足利の首を絞める事になる。

だが、これらの政治的利害を超えて、ここに尊氏の人柄が表れているように思えてならない。

尊氏は、血で血を洗う争いに倦んでいた。

動乱の終息を心から願っていたのである。

かくして、この発言を聞いた諸将は、「どうやら肅清が始まる事はないようだ」と安心した。しかし、後舎弟直義が政務の場で常に睨みを利かせているため、尊氏のこの姿勢に慢心する者は現れなかった。

これを「二頭政治」と呼ぶ。

【脱線十三・八朔の進物】

この頃、八月一日は、「八朔の進物の日」とされ、贈り物が遣り取りされた。

『蓋し是れ近古以来の風俗なり』（花園天皇宸記）

“とはいえ、こんな風習は近年始まったものに過ぎない”

花園法皇などは、これを嫌っていたらしい。

『人に於いて益無く、國に於いて要にあらず。尤も止むべきか』

“誰の利益にもならないし、国家にとって必要でもない。無くすべきだ”

現代でも、お中元・お歳暮・年賀状を、「虚礼」と嫌う人はいる。

花園は、その一人だったようだ。但し、奈良時代の僧行基曰く。

『世に背くは狂人の如し、世に随うは望み有るに似たり』

“空気を読まない狂人呼ばわりされる。世の風習には従っておく

のが無難だ”

行基は、民百姓を救うために寺の外に出て活動し、遂には東大寺の大仏を作った僧である。「寺」という狭い世界の空気よりも、「民」の空気を大事にした僧だった。

これを知る法皇は、嫌々ながらも、この風習に参加していたようだ。

しかし、意地でも参加しない人もいた。一三四五年八月一日にこんな記録がある。

『左兵衛源朝臣禁制此事、敢不受於人』（光明院宸記）

“足利直義は、贈り物を禁じ、人から受け取らないようにしているそうな”

直義は、為政者として、自らを律していたのだろう。

こんな逸話がある。ある時、どう勧めても贈り物を受け取らない直義に腹を立て、外から邸に品を投げ込んだ人がいた。こうすれば受け取らざるをえまいと思ったのである。

だが、直義の方が一枚上手だった。帰宅したその人の邸には、まもなく直義の使いが訪れた。そして、放り込んだ品は丁重に送り返されたという。

ここまで来ると、笑い話である。

一方、この手の事におおらかな足利尊氏は、喜んでこの風習に参加した。

『八月朔日などに諸人の進物共數もしらず有しかども』（梅松論）

“八朔の日には、様々な人々が將軍邸を訪れ、進物は数知れなかった”

『皆人に下し給ひし程に。夕に何有とも覺えず』

“しかし、別の来客にそれらを全て譲ってしまうので、夕方には一品も残らなかった”

但し、弟とは全く別の理由で、手元には一切贈り物が留まらなかったという。

室町幕府の初代将軍・副将軍とは、そうした人達であった。

【南北朝時代のはじまり】

一三三六年十二月二十一日、後醍醐天皇が三種の神器を携えて花山院を脱出した。

『河内国に正成といひしが一族等をめしぐして芳野にいらせ給ぬ』
(神皇正統記)

“帝は、河内の楠木正成が遺した一族を従え、吉野に移られた”
と、この脱走劇をお膳立てした北畠親房（四十三歳）は、素知らぬ顔でそう記す。

吉野。

そこは、かの天武天皇以来の、捲土重来の地である。

険しい山々に囲まれ、山の民が暮らす土地。

小勢にて守るに安く、敵軍の兵站を枯渇させやすい地、吉野。

東には、伊勢の寺社勢力があり、西には河内の楠木一族が割拠する。
しかも、商業都市堺との連絡も容易にとれた。

湊川の戦が行われた頃、親房は、ひとりこの難所を宮方の拠点に改造していたのである。

まもなく、四条隆資・文観らが、この吉野に参じ、もう一つの政権が誕生した。

後世、これを「南朝」と呼ぶ。

ところで、この後醍醐帝の脱走は、相当な隠密行動であった。

そのため、老齡の吉田定房などは京に残されたままとっている。

「北朝」の光厳上皇は、老公卿の心を思い、その官位を停止しなかった。

先帝の脱走に都は動揺した。

しかし、当の足利尊氏は妙に落ち着き払っていたという。
詰め寄せた諸将に対し、尊氏は言った。

『花山院に御座の故に警固申事其期なきに依て以の外武家の煩いなり』（梅松論）

“先帝が花山院におわす限り、警固は武家が永遠に続けねばならず、実は難儀していた”

『先代の沙汰のごとく遠國に遷奉らば。おそれ有べき間』

“といって、まさか鎌倉幕府のように、遠國にお移しするわけにもいかぬ”

『迷惑の處に。今御出は太儀の中の吉事也』

“迷惑していたところ。今、自ら出て行かれたのは、大儀の中の吉事である”

『御進退を叡慮に任せられて自然と落居せばしかるべき事也』

“あの御方は、ご自身の御心のままに、身を置かれるのが一番なのだ”

『運は天道の定むる所也。淺智の強弱によるべからず』

“運は天の定むるところである。我々の浅知恵の及ぶところではない”

それは、まるで宮方の老臣のような物言いであり、とても敵方の指導者の言と思われるものではなかった。

これを耳にした諸将は、しばらくあつけにとられた後、ややあつて、思い直したように「さすがは天下の將軍」と尊氏を称賛した。

が、やはり合点がいかず、將軍邸を退出した後、同輩達について本音

をもらした。

『君を逃し奉て御驚もなかりしぞ不思議の事』

“どうして將軍は、先帝が脱走したというのに、驚かれないのか。不思議だ”

しかし、兄とは違い、政務を切り盛りする弟の方は、そうは言っていない。

『不知御座所之間、所奉尋方々也、嚴密可有尋御沙汰候』

（保田文書・「大日本史料第六編之二」九二二頁）

“先帝の居場所が分からないので、方々をたずねている。何としても探し出せ”

「南北朝時代」と呼ばれる、大乱の時代は、このようにして始まった。

―天下篡奪―（後書き）

というわけで、足利尊氏の大逆転でした。

1…本章では、尊氏の勝利を「表」から描きました。

足利尊氏という人物の、”凄み”を大局的に記せたならば幸いです。

2…本章では、楠木正成のようやく見せ場、「湊川の戦い」が起きました。

第四章「討幕」では、正成の活躍を、”戦略的功績”に重点を置いて描きました。

正成という人物の真価は、「籠城してあれこれ小細工をする戦術家」ではなく、

むしろ、諸国の情勢を読み取り、要所を押さえる戦略家にあると考えたからです。

さて、そんな「戦略家」正成から見て当時の宮方の状況はどう見えたのか？

この視点から本章は始まりました。

正成の見解は一貫しています。

”たとえ尊氏を西国に追い落とそうと、宮方は劣勢。足利には勝てない”

正成は、ある組織（建武政権）にいて、その崩壊が見通せてしまった男でした。

ただ、本章では、それをもって悲劇とはしたくありませんでした。湊川の戦いを、自暴自棄な玉碎戦とは描きたくありませんでした。何故なら、結果として、楠木一族は正成の死後も、南朝を支え続けているからです。

それが出来たのは、正成が死の直前まで、あらゆる手を打ち続けていたからです。

それは、”畿南の宮方勢力を死守するための、周辺勢力との連携の確認”だったり、

あるいは”息子正行の河内への帰国”だったり、
”自らが戦死した場合も変わらぬ一族の団結”の手だったりしたのでしょうか。

本書が描くのは、全知全能の英雄でもなければ、敗北を悟って美しく死ぬような聖人でもありません。

むしろ、その逆です。

敗北を知り、それでも足掻く人間。

理性で計算すれば失われる筈のものを、血みどろになって奪い返す人間。

そういう泥臭い人間です。

こうした人間の行動が時として歴史を”ズラす”（”変える”ではありません）。

そして、それが、何かに影響を遺していく。

これがなければ、一体人間が生きる事に何の意味があるのか？

この根本的な疑問を、本書では考えています。

3..「南北朝は足利尊氏が”望んだ”政治システムだった？」

尊氏にとって、実は「南朝」は都合のよい存在だったのではないか？

少なくとも、当面、足利の勢力を固めるために有益なものだったのではないか？

それは、以前から、頭に浮かんでいた疑問です。

「尊氏の人間性」・「政治家尊氏」の視点。それと、終章の「尊氏

勝利の裏側」を合わせ、さらに深く調べてみると面白そうです。

後醍醐天皇が吉野に逃亡した時の尊氏の発言、その真意はどこにあったのでしょうか？

それを知るための手掛かりは断片しか残っていません。

それでは、以上の事を考えていただきながら、

本書の幕引き「終章…雪の日の想い出」、お楽しみあれ。

終章：雪の日の想い出

【日野名子の闘い 前編】

一三三三年十一月一日、日蝕が観測された。その日、夜からの雪が降り積もり、都は銀世界に包まれた。だが、因習の多い貴族社会では、日蝕の日には、外に出られない。

宮人達は、清涼殿の一室に集まり、雪見を楽しんでいた。

そんな中、ひとり火元を去らず、寂しげにうつむく女官がいた。

これをみた西園寺公宗は、いたずらっぽい表情をして女官に近付き、こう話しかけた。

『こはいかなるにか、雪に怖るにこそありけれ』（竹むきが記）

“一体どうしたというのだ。雪がそんなに怖いのか”

女官は、とたんに顔を赤らめた。

一三三三年一月十三日、女官こと、日野名子の下に、一首の和歌が届いた。

『あら玉の 年まちゑても いつしかと 君にぞ契る ゆく末の春』

“あなたと永遠の契りを交わしたい”

両者の婚姻は、持明院統の次代を繁栄させるものとして、大いなる祝福を受けた。

だが、まもなく先帝（後醍醐天皇）が隠岐を脱出し、都にも赤松円心の軍勢がせまった。

こうした中、持明院統の後伏見上皇らは、御所を離れて六波羅に移り、女官達にも暇が出された。

『身一つはともかくもありなん、見置きたてまつるべき心地もせず』

“私一人の身などかまわぬ。院をお見捨てするなど、できませぬ”

女官としては、ただ一人、花園上皇の女官である正親町実子（宣光門院）だけが残った。

五月、六波羅が陥落し、後伏見上皇・花園上皇・光厳天皇は伊吹山で地獄を見た。

この時、名子の良人、公宗は、家人達に邸へ連れ戻され、その供をできなかった。

邸に戻った公宗は、意気消沈していた。

『世をやそむがまし』

“（このような醜態を見せた以上）出家して世を捨てたい”

名子には、これがたまらなかった。

亡き入道相国（西園寺実兼）の曾孫として、将来を約束されて育った夫は、どこか甘い。

曾祖父にあったような、したたかさが足りず、人を信じすぎるきらいがある。

この人は、西園寺の当主として、失格なのだろう。

だが、しきりに溜息をつくばかりであった公宗は、ふと名子の方を見つめ、口を開いた。

『かくひたみちになしはてゝも、中空にさへや』

“このまま、（私の）そばに置いていたら、あなたの立場もなくなる”

口さがない都人達がこれを聞けば、あざ笑うだろう。

だが、名子は、この瞬間、良人がたまらなく愛おしくなった。

考えてもみよ。

日野家の令嬢と西園寺の御曹司の婚姻。

これには、政治の匂いが付きまとい、ぬぐいきれない。

あの雪の日、公宗が名子に声をかけたのは、「政略結婚」を実現するためだったのではないか。

西園寺の家に、古くから仕える使用人達に勧められての事だった

のではないか。

公宗との生活に不満はなかったが、名子は常にその疑念を拭えな
いでいた。

だが、仮にそうだとしても、いま良人が自分を思っ
て漏らした言葉。

少なくともそこには嘘がなかった。

貴族の世界は、嘘の世界である。

貴族の娘として生まれ、宮中に仕えた名子は、ずっと嘘の世界で
生きてきた。

しかし、いま、ここにまことがあった。

あの雪の日、名子は真実にたどり着いたのである。

一三三五年六月、公宗が刑死した。

弟の西園寺公重が、「兄が政権の転覆を企てている」と密告した
のである。

人のよい公宗は、公重を信じ、計画を漏らしたのだろうか。

西園寺の家は、公重が奪った。

累代の家人達もほどなく離散し、名子は邸を追われた。

その腕には、乳飲み子が抱かれている。

あの人の忘れ形見であった。

日野名子の闘いは、この時から始まった。

【日野名子の闘い 中編】

すすむ見込みのない、たゆとう時。それは絶望の時である。
名子は、二年という時間を耐えた。

一三三七年。時は移り、持明院統に再び春が訪れた。

花園法皇の世。

朝廷の政務は猶子の光厳上皇が執り行い、創設された幕府には、足利尊氏が君臨した。

かの騒乱の折、裏切り者尊氏と持明院統の和解に奔走したのは、父日野資名であった。

今や父資名は、両者からの信頼を一身に集めていた。

乳飲み子は、あれから順調に育った。

名は実俊。まだ三歳だが、利発であった。

その姿に惹かれ、一度は離散した家人達が、一人また一人と戻ってきた。

西園寺の家は、公重のものではない。

まもなく、名子は西園寺家再興の運動を始めた。

この年、実俊は従五位に叙されている。

その姿を見届けた父資名は、その明くる年に亡くなった。

父の死で、名子は後ろ盾を失った。

名子は、今度こそ、一人残されたのである。

だが、名子の悲願はここで潰えなかった。

この時代。公家や武家の女性は、独自のネットワークを持っていた。現代にも残る、こうした女性の手による文書を調べた研究者は、その予想外に広大な彼女達の情報網・人脈に感嘆を禁じ得ないという。官位や職・家柄などを「表の力」と仮に呼ぶなら、こうした女達のネットワークは、明確な記録には残りにくい、「裏の力」と呼ん

でも良いかもしれない。

名子もその例外ではなかった。

名子の運動は、やがて、朝廷内のさるべき女性達の目に止まり始めた。

とりわけ、歴代天皇の後には、西園寺の女が多い。

そんな彼女達が、幼子を抱え、一人闘う名子をほおっておく筈がなかった。

その筆頭が、永福門院（西園寺鏡子、伏見天皇の後・【京と鎌倉参照】）であった。

実俊、”深削ぎの日”（3〜5歳に、髪を整える儀式）。

女院はその様子を見たいと名子に伝え、実俊を北山第に招いた。

西園寺の別荘、北山第。のちに、足利義満が金閣寺を建てるこの邸は、政治の舞台となる事が多い。

女院の父、故入道相国（西園寺実兼）と京極為兼の対立。

後伏見・花園両上皇が、政治工作に訪れた日々。

後醍醐天皇が訪れ、北畠顕家が舞った日。

そして、西園寺公宗が捕縛された事件。

あるいは、この邸は騒乱の全てを見てきたのかもしれない。

その邸を、この日は、一風変わった貴公子が訪れる。

広大な庭園には山水が流れ、一種の幻想的な空間を生み出していた。

その場所に、女院と実俊は腰を落ち着けた。

片手で数えられるほどの齢にしか満たない貴公子は、庭園の山水を興味深そうに見つめ、女院に、この山水はどこから来たのかと尋ねた。

女院は感嘆した。

『ただ人にはあらず』

他愛のない質問である。

しかし、女院は、この日までそのような事を考えた事がなかった。

（それは、そういうものだ）

そう思って、邸に暮らしていた。

庭園の山水に限らない。

入内した伏見天皇との間柄。父と京極為兼の事件。

女院は、これまで万事をそう思う事によって、処してきた。

だが、それから数十年が経った。

当時を振り返り、後悔がないと言えば嘘になろう。

あの時、自分にも何かができたのではないか。

ひよっとしたら、違う結果が生まれたのではないか。

その後悔は、年月によって風化するどころか、日に日に膨らんでいた。

だから、この日、女院は”深削ぎ”の儀が見たいと、この子呼んだ。

日野名子という若い女が、一人奔走している事を知り、ついこの子と話がしたくなったのである。

（今、この邸のあるじに収まっている公重は、山水の由来など考えもすまい）

あれは、山水の流れを、自分のもとに引き寄せる事しか考えない男だ。

女院は、この子が西園寺の当主となった姿を、見たくなった。

一三四〇年、実俊が六歳で従四位に叙され、光明天皇の侍従となった。

まもなく、名子のもとに急ぎの報せが届いた。

『侍従の君、移り住み給ふべう、女院の御方急ぎたゝせ給ふ』

“永福門院様から、実俊を北山第に移り住ませるよう、急ぎの達しがありました”

つまり、永福門院によって「西園寺の当主が公重ではなく実俊だ」と宣言されたのである。

それは、名子を取り巻く状況を一変させる一言であり、まさに鶴の一声だった。

名子と実俊は、実に五年ぶりに西園寺の邸に戻った。

こののち、公重は北朝での居場所を徐々に失い、一時南朝に奔った末、自滅した。

北山第に入った名子は、しばし一人となった。

思い出の邸。名子は、今確かにそこにいる。

―あの日々は、幻ではなかった―

『いづこもありしにかはらねば、おもかげ浮かぶこと多し』

“邸は、いずこもありし日と変わりませんでした。だから、あの人の事を、思い出してしまいました”

名子は一人涙を流した。

【日野名子の闘い 後編】

西園寺嫡流が戻って以来、光厳上皇は、しばしば北山第を訪れた。その度に、上皇は幼い当主の受け答えや作法進退を褒めた。

一三四一年十二月、実俊が七歳で元服した。

『まことや、將軍より馬、太刀たてまつらる』

“本当に驚きました事に、將軍足利尊氏殿から、馬と太刀が贈られてきました”

と名子は記すが、これは、名子の働きかけによるものだったようだ。

『鎌倉の二品、知るたよりありて、時々きこえ通ふ』

“鎌倉殿とは、時おり、手紙を遣り取りする仲でした”

西園寺再興のため。必要とあらば、何者であろうと用いる。

折あらば実俊を蹴落とそうとする、手負いの公重の策動が続く中、名子は、今や政治家としての風格すら見せるようになっていた。

そんな折の一三四二年、ある人の夢に、亡き夫（西園寺公宗）が現れた。

『思ひ置く　それをばをきて　ことの葉の　露のなさけ　などなかるらん』

”現世に思い残す事はさておき、今生きている人々の言動にはあきれ果ててしまう”

名子も、それを人づてに伝え聞いた。

『人の御心ども恨み給ふ事もあるにや』

”夫は人々の心を恨まれているのでしょうか”

夫は、尊氏と交際をする自分のやりように溜息をついているのだろうか。

それとも、尊氏と手を結んだ持明院統の全てに、憤りを感じているのだろうか。

そういえば、夫逮捕の時、指揮を執ったのは楠木正成と、あと一人。”足利家執事の”高師直であった。

八月、名子は霊鷲寺を訪れた。

『この山に過ぎにしあとを残され侍るを、代々の所へ移しきこゆべきを、いまだそのまゝ』

“この山に「遺骨」は納められ、未だ歴代の西園寺当主の廟所には移されておりません”

だから、今夫に会えるのは、この場所だけである。

夫は、未だに国家転覆を企てた大逆人のままであった。

いずれは、名誉を回復し、西園寺の廟所に落ち着けるべき夫の魂。その安らぎを掴み取るのが、名子のここからの闘いであった。

永遠に失われたものがあり、これから取り返さなければならぬものがある。

西園寺の再興はまだ始まったばかりだった。

名子が亡くなったのは、一三五八年の事である。

子の実俊は、一三六六年右大臣に昇進し、その子孫は太政大臣に返り咲いた。

その種を蒔いたのは、ひとりの女であった。

【花園法皇の死 ―もしくは尊氏西走に関する一考察―】

一三四八年十一月十一日、花園法皇が生涯を終えた。五十二歳であった。亡くなる前は、持病の脚気も治まり、前月に、皇子の直仁親王が皇太子となった事を喜んでいたという。

『御叔父御本服三箇月儀可然哉』（円太暦）

“叔父君の心喪なのだから、三ヵ月で十分です”

『法皇御養父難被閣、可五箇月心喪』

“法皇は、我が養父である。五ヵ月の心喪に服す”

『後伏見院御事時、已著御重喪了、重又著養父御服、不存先規』

“父君の時に重喪に服したのに、養父の時にまた重喪に服すなど、先例がございませぬ”

しかし、光厳上皇は、太政大臣洞院公賢の進言を退けた。

喪がとけた後、上皇は、他の皇子を差し置いて、直仁親王を「次の治天」にするための政治工作を進めた。親王は、宣光門院（【日野名子の闘い 前編】参照）が産んだ皇子である。

しかし、上皇は、一三四五年に、この親王が「自分の皇子である」と告白していた。

『子細は朕ならびに母儀女院の外、他人の識らざるところなり』

（熊谷直之氏所蔵文書、原漢文・板倉晴武「地獄を二度も見た天皇光厳院」一三九〜一四一頁）

“その子細は、私と母親である宣光門院だけが知っていた”

あるいは、伊吹山の後、花園は宣光門院に甥の世話をさせていたのかもしれない。

さて、ここで、根本的な疑問を提示しておく。「伊吹山」と「中先代の乱」、二度も敵対した足利に対し、持明院統が表立った支援に動いた、室町幕府成立の逆転劇。

尊氏がしくじれば、今度こそ建武政権に滅ぼされるかもしれない。そんな決断を、二十二歳に過ぎない、「光厳上皇」が下しえただろうか。

持明院統では「後見」が伝統である。

例えば、かの伏見上皇は、「三日に一度」の割合で父後深草法皇に政務を相談しに行った。

後伏見上皇も、院政を行なう際、父伏見法皇の腹心京極為兼の関与を受けた。

そして、光厳天皇も、父後伏見上皇・叔父花園上皇の後見を受けた（【むら時雨】～【そして刑は執行された】）。

これらの伝統から考えて、持明院統の意思決定を、少なくとも「あの時点で」光厳上皇が行ったというのは、どう考えても不自然である。

あの時点の、持明院統を纏めるためには、今一人、重みのある人物の後押しが必要である。

「あの時」を振り返ろう。

・ 一三三六年二月十二日、京方面で敗れた足利尊氏が、兵庫を出港（西走開始）。

・ 同年二月十三日、尊氏、室津に停泊。

・ 同年二月十三～十七日、三宝院賢俊が、尊氏に光厳上皇の院宣を

届ける。

さて、この時期、持明院統の総帥は後伏見法皇であるが、見逃しがたい記録が残されている。

『二月十七日、爲法皇後伏見院、御藥御祈』（門葉記）

”二月十七日、後伏見法皇は、投藥と祈禱を受けられた”

つまり、後伏見法皇は、“あの院宣”が下された頃、死病に倒れていたのである。

そうすると、「あの時」持明院統を纏められた人物は一人しか残らない。

花園法皇である。

―建武政権に政治的なとどめを刺したのは、花園法皇であった―

事実、北朝成立後も、光厳は、重事について、しばしば叔父法皇に相談に行った。

更に後、北畠親房の謀略で南朝に拉致された時でさえ、その法事を絶やさなかった。

結局、親房の策略によって直仁親王の即位は実現せず、光厳上皇の直系子孫も、半世紀以上にわたり沈黙の時代を強いられた。

しかし、一四二九年、その子孫は皇位に復した。現在の皇室の祖である。

その帝は、自らの号を「後花園天皇」と定められた。

終章：雪の日の想い出（後書き）

さて、室町時代を描く第一部「天の夢 地の道」でした。

・とりあえず、次は第二部「地の道 人の難」。

足利義満の山名討伐あたりまでいければ良いと思っています。

書いた分を随時掲載するか、まとめて掲載するか。

とりあえず気長に行くとうましよう。

どうせ、最終部まで行くには、最低限二十年は必要でしょうし。

・「天の夢 地の道」は、あと、若干の手直しと、「恣意的な人物紹介」で完成とします。

参考・引用文献（前書き）

本作品は、

- ・人物のセリフは「史書・史料」にあるもののみ。
- ・できるかぎりノンフィクション。

以上の方針（遊び）で書いています。

したがって、先学の研究に負うところ大です。

ここに参考文献・引用文献を記載し、意欲的な研究を続けられる諸氏に対し、厚く御礼を申し上げます。

参考文献・引用文献に記載した本・論文が、もし一冊でも欠けたら、本作品は成立しなかったでしょう。

参考・引用文献

(一) 史料

井上宗雄「増鏡全訳注(上)(中)(下)」講談社学術文庫

一九七九～一九八三

太田藤四郎「園太暦」(第二卷・第三卷)大洋社 一九三七～一九三八

大町芳衛「神皇正統記評釈」明治書院 一九二五

佐伯真一・高木浩明編著「校本 保暦間記」和泉書院 二〇〇一

高楠順次郎編「仏光国師語録」(大正新修大蔵経八〇)大正一切経刊行会 一九三一

大倉隆二「『蒙古襲来絵詞』を読む」海鳥社 二〇〇七

竹内理三編「建治三年記」(続史料大成)臨川書店 一九六七

「鎌倉年代記裏書」(続史料大成)臨川書店 一九六七

「鎌倉遺文 古文書編第三十三・三十八・三十九卷」

東京堂出版 一九八七～一九八九

次田香澄「とはずがたり全訳注(上)(下)」講談社学術文庫 一九八七

西尾実・安良岡康作校注「徒然草」岩波書店 一九九一

村井正志編「和訳花園天皇宸記 第一～第三卷」(『史料纂集』)続群書類従完成会

一九八二～一九八六

渡辺静子「竹むきが記」(『中世日記紀行文学全評釈第五卷』)

勉誠出版 二〇〇四

「公卿補任 第二篇」(『新訂増補国史大系』)吉川弘文館 二〇〇一

中世内乱史研究会編「親玄僧正日記」(『内乱史研究』)一九九三～一九九五

塙保己一編「群書類従」群書類従完成会(出版年は省略)

「舞御覧記」(第三輯 帝王部)

「承久軍物語」「梅松論」(第二十輯 合戦部)

「菊池武朝申状」「親房卿被贈結城状」「難太平記」(第二十一輯 合戦部)

「峯相記」(続群書類従 第二十八輯上 釈家部)

「見聞私記」(続群書類従 第三十輯上 雑部)

「楠木合戦注文」(続々群書類従 第三輯 史伝部三)

増補史料大成刊行会編・「増補史料大成」臨川書店 一九六五

「後深草天皇宸記」(第一巻)

「伏見天皇宸記」(第三巻)

東京大学史料編纂所編「大日本史料 第六編之一・二・三・九」一九六八～一九七一

(二) 著作

〈全体〉

佐藤進一・網野善彦・笠松宏至「日本中世史を見直す」平凡社 一九九九

網野善彦「日本の歴史をよみなおす(全)」ちくま学芸文庫 二〇〇五

伊藤喜良「南北朝の動乱と王権」東京堂出版 一九九七

海津一朗「神風と悪党の世紀」講談社現代新書 一九九五

小松茂美「天皇の書」文春新書 二〇〇六

清水亮「鎌倉幕府御家人制の政治的研究」校倉書房 二〇〇七

細川重男「鎌倉政権得宗専制論」吉川弘文館 二〇〇〇

本郷和人「中世朝廷訴訟の研究」東京大学出版会 一九九五

「新・中世王権論」新人物往来社 二〇〇四

- 「人物を読む 日本中世史」講談社選書メチエ 二〇〇六
- 本郷和人編「歴史の争点 武士と天皇」新人物往来社 二〇〇五
- 三浦周行「鎌倉時代史」早稲田大学出版部 一九〇七
- 森茂暁「鎌倉時代の朝幕関係」思文閣 一九九一
- 「後醍醐天皇」中公新書 二〇〇〇
- 「南朝全史」講談社選書メチエ 二〇〇五
- 安田元久編「鎌倉・室町人名事典」新人物往来社 一九八五
- 〈第一・二・三章〉
- 佐藤進一「中世法制史料集」第一卷「鎌倉幕府法」 岩波書店
一九五五
- 網野善彦「蒙古襲来」小学館文庫 二〇〇一
- 井上宗雄「人物叢書 京極為兼」吉川弘文館 二〇〇六
- 今谷明「京極為兼」ミネルヴァ書房 二〇〇三
- 奥富敬之「鎌倉北条氏の興亡」吉川弘文館 二〇〇三
- 海津一朗「蒙古襲来 対外戦争の社会史」吉川弘文館 一九九八
- 笈雅博「日本の歴史 第10巻 蒙古襲来と徳政令」講談社
二〇〇一
- 川添昭二「人物叢書 北条時宗」吉川弘文館 二〇〇一
- 佐々木文昭「中世公家新制の研究」吉川弘文館 二〇〇八
- 杉原正明「モンゴル帝国の興亡下」講談社現代新書 一九九六
- 田村憲美「鎌倉期大和国の興福寺検断と地域社会」
（東寺文書研究会編「東寺文書にみる中世社会」）東京堂出版 一
九九九
- 辻彦三郎「藤原定家明月記の研究」吉川弘文館 一九七七
- 永井晋「人物叢書 金沢貞顕」吉川弘文館 二〇〇三
- 福島金治「安達泰盛と鎌倉幕府」有隣新書 二〇〇六
- 美川圭「院政 もうひとつの天皇制」中公新書 二〇〇六
- 南基鶴「蒙古襲来と鎌倉幕府」臨川書店 一九九六
- 村井章介「安達泰盛の政治的立場」（『中世東国史の研究』）東京
大学出版会 一九八八

山内讓「海賊とは何か」

（中野栄夫編「日本中世の政治と社会」）吉川弘文館 二〇〇三

北条氏研究会編「北条時宗の時代」八木書店 二〇〇八

山野井功夫「北条政村及び政村流の研究」

磯川いづみ「北条時章・教時について」

遠山久也「得宗家庶子北条時輔の立場」

下山忍「極楽寺流における北条義政の政治的立場と出

家遁世事件」

永井晋「北条実政と建治の異国征伐」

鈴木宏美「安達一族」

菊池紳一「嘉元の乱に関する新史料について」

〈第四・五・六章・終章〉

佐藤進一「日本の歴史9 南北朝の動乱」中公文庫 一九七四

網野善彦「異形の王権」平凡社 一九九三

新井孝重「悪党の世紀」吉川弘文館 一九九七

板倉晴武「地獄を二度も見た天皇 光厳院」吉川弘文館 二〇

〇二

岩崎小弥太「人物叢書 花園天皇」吉川弘文館 一九六二

上島有「足利尊氏文書の総合的研究 写真編・本文編」国書刊

行会 二〇〇一

遠藤巖「建武政権の陸奥国府に関する一考察」

（豊田武教授還暦記念会編「古代・中世史の地方的展開」）吉川弘

文館 一九七三

小川信先生の古稀記念論集を刊行する会

「小川信先生古稀記念論集 日本中世政治社会の研究」続群書類従

完成会 一九九一

漆原徹「南北朝初期における幕府軍事制度の基礎的考察」

峰岸純夫「元弘三年五月、上野国新田庄における二つの討幕蜂起」

河北騰「足利尊氏 人と作品」風間書房 二〇〇五

工藤雅樹「蝦夷社会における交易について」

（東京大学文学部「北日本中世史の総合的研究」）吉川弘文館 一九九〇

近藤成一「両統迭立期の院宣と綸旨」

（鎌倉遺文研究会編「鎌倉時代の政治と経済」）一九九九

阪田雄一「雑訴決断所と鎌倉將軍府」

（佐藤博信編「中世東国の政治構造 中世東国論…上」）岩田書院 二〇〇七

杉本尚雄「人物叢書 菊池氏三代」吉川弘文館 一九六六

鈴木由美「中先代の乱に関する基礎的考察」

（阿部猛編「同成社中世史選書4 中世の支配と民衆」）同成社 二〇〇七

高坂好「人物叢書 赤松円心・満祐」吉川弘文館 一九七〇

高柳光寿「改稿 足利尊氏」春秋社 一九八七

中島敬子・山本宮子「二条河原の落書」

（悪党研究会編「悪党の中世」）岩田書院 一九九八
新田一郎「日本の歴史 第11巻 太平記の時代」講談社 二〇〇一

羽下徳彦「足利直義の立場」

（羽下徳彦編「中世の政治と宗教」）吉川弘文館 一九九四
原美鈴「『二河原の落書』について」

（悪党研究会編「悪党と内乱」）岩田書院 二〇〇五

平田俊春「南朝史論考」錦正社 一九九四

福島金治「得宗専制政治」

（佐藤和彦編「北条高時のすべて」）新人物往来社 一九九七
安田次郎「全集 日本の歴史7 走る悪党、蜂起する土民」小学館 二〇〇八

峰岸純夫「人物叢書 新田義貞」吉川弘文館 二〇〇五

森茂暁「南北朝期 公武関係史の研究」文献出版 一九八四

「太平記の群像」角川選書 一九九一

「人物叢書 佐々木導誉」吉川弘文館 一九九四

- 「皇子たちの南北朝」中公文庫 二〇〇七
- 「戦争の日本史8 南北朝の動乱」吉川弘文館 二〇〇七
- 山本隆志「新田義貞」ミネルヴァ書房 二〇〇五
- (三) 論文
- 〈第一・二・三章〉
- 秋山哲雄「書評『鎌倉政権得宗専制論』」(歴史学研究752)
二〇〇一
- 磯川いづみ「二月騒動の史料再考」
(再興中世前期勉強会会報 段かづら 第3・4号)二〇〇四
- 熊谷隆之「六波羅探題考」(史学雑誌113・7)二〇〇四
- 五味文彦「王法と仏法―両様の接近―」(法蔵館書店 別冊2
季刊仏教)一九八九
- 末常愛子「武蔵守金澤貞顕連署就任の意義」(政治経済史学3
70)一九九七
- 「正和五年に於ける金澤貞顕連署留任と従四位下昇叙」
(政治経済史学400)一九九九
- 高橋慎一郎「北条時村と嘉元の乱」(日本歴史553)一九九四
- 永井晋「鎌倉時代後期における京都・鎌倉間の私的情報交換
―六波羅探題金沢貞顕の書状と使者―」(歴史学研究726)一九
九九
- 服部英雄「『蒙古襲来(竹崎季長) 絵詞』の再検討」(日本歴史6
98)二〇〇六
- 保永真則「鎌倉幕府の官僚制化」(日本史研究506)二〇〇四
- 渡邊晴美「北條政村の研究(二)・(三)」
- (政治経済史学370・387)一九九七・一九九八
- 〈第四・五・六章・終章〉
- 伊藤喜良「建武政権試論」
(行政社会論集第10巻 第4号)福島大学行政社会学会 一九九八
- 小川剛生「京極為兼と公家政権」(「文学」二〇〇三年一一・一
二月号)

堅月基「鎌倉・南北朝期の源氏長者」（日本歴史610）一九九九年
田中大喜「『得宗専制』と東国御家人」（地方史研究294）二〇〇一

澤博勝「西大寺流の組織化と勢力拡大」（日本歴史第508）一九九〇

永原慶二「尊氏と四国・九州」（南北朝遺文・月報4）東京堂出版 一九九二

野村朋弘「鎌倉後期の持明院統と廷臣」（國学院雑誌104編7号）二〇〇三

「『花園天皇宸記』にみえる『尚書』談義」

（再興中世前期勉強会会報 段かづら 第3・4号）二〇〇四

橋本芳和「元弘元年康仁親王立体子の背景（一）」（三）」

（政治経済史学473）475）二〇〇六

「花園天皇の御学問」（政治経済史学370）一九九七

本郷恵子「八朔の経済効果」（日本歴史第630号）二〇〇〇

松蘭斎「王朝勢力と〈情報〉——情報装置としての日記——」

（歴史学研究729）一九九九

峰岸純夫「歴史における自然災害——建武二年八月、関東南部を直撃した台風——」

（日本史研究53

4）二〇〇七

村井章介「吉田定房奏状はいつ書かれたか」（日本歴史587）

一九九七

吉原弘道「建武政権における足利尊氏の立場」（史学雑誌111

・7）二〇〇二

恣意的な人物紹介（前書き）

自分で言うのもなんですが、この小説は登場人物が多すぎます。

しかも、顔見せ程度に登場する人物までもが、物語の構成上大きな役割を果たしています（北条政村・時村とか）。

また、後深草天皇・亀山天皇などの歴代天皇も、広く知られていません。

しかし、この小説は「過去にあった事実の再現」をテーマとしています。

史実に基づいて描き、人物も史実通りに動かししました。

法然・親鸞・一遍・日蓮・栄西・道元といった人達も、登場こそしてませんが、「スポットライトのあたっていない所にいる」つもりで書いています。

そこで、複雑な人物関係を理解いただく助けとして、恣意的な人物紹介をします。

乱暴な紹介が多いですが、あくまで「恣意的な」紹介なので、ご寛恕のほどを。

恣意的な人物紹介

【序章・前史】

後白河法皇…

“日本第一の犬神”（頼朝談）。源平争乱の中で、朝廷を守りぬく。更に、天下を掌握しつつあった源頼朝に政治的な猛反撃をしかけ、日本の東半分に分じ込める事に成功する。まさに外交・謀略の天才。しかも、その影では、文化の保護にも努めていたという。とげもあれば、花もある。帝王としての資質に疑いはない。しかし、策に溺れて、時に大ゴケするのが玉に瑕である。

久我通親…

村上源氏一の政略家。“日本中世史第一のマキャベリスト”と呼ばれる。

北畠親房・顕家の偉大なるご先祖様。

晩年の源頼朝を、孤立に追い込んだのは、この男と云われる。

源頼朝…

鎌倉幕府初代将軍。後白河法皇の死で、征夷大将軍に就任する。

足利尊氏は、頼朝の手口をお手本に諸勢力を糾合しつつも、反面教師とした。

頼朝は、晩年、御家人達との間に溝を作り、終には「落馬が原因」という不信な死を遂げている。一方、尊氏は、まがいなりにも天寿を全うしている。この差は大きい。

源氏将軍は三代で滅びたが、足利将軍は十五代続くのである。

北条政子…

演説だけ登場。

北条義時（江馬）…

名前だけ登場。得宗家の源流に位置する人物。

後鳥羽上皇…

ほぼ万能の帝王。単純な能力でいえば、後醍醐天皇よりもはるかに上。この人が、承久の乱で敗れたのは、時流に恵まれなかったからという他ない。

しかし、この物語が、あくまでも南北朝時代がメインであるため、承久の乱は駆け足にならざるを得なかった。かえすがえす残念。

四条天皇…

この人の死から、齒車が狂い始めた。宮中でそのような死に方は、奇怪極まりない。実は、「あの死」は、“誰かが暗殺に成功したのではないか？”と勘繰りたくなる。

調べると、宮中で命を狙われた天皇はいて、後宇多天皇・伏見天皇がこれに当たる。そのため、疑念が強まってしまった。信頼できる鎌倉時代の日記類を読む限りで、内裏警護は相当ズサンで、外部からの侵入者がけっこういた。

暗殺者だって、楽々と侵入できただろう。

「実は己の死期を悟った泰時が、九条道家を失脚させるために仕組んだのだ！」という、トンデモ小説を、誰か書いてくれないかな。

北条泰時…

伝説の政治家。公家に醍醐・村上朝の徳治あれば、武家に泰時の法治あり。鎌倉・室町時代を通じて、史上最高の武家指導者との評を受ける。「道理」に基づいた統治は日本の政治をより高い次元へと移行させた。

物語でもわざと「伝説の政治家」としての側面を強調して描いている。足利直義などは、この人の政治を理想としていたようだ。

しかし、生前には干渉自体を好まない公卿たちから、白眼視を受けた。

四条天皇の死後、後嵯峨の即位に一役買ったが、その年のうちに急死した。そのため、後鳥羽の怨霊の仕業との憶測が幕府の指導層に長く語り継がれる。

九条道家..

承久の乱に負けてボロボロになった朝廷を復活させた男。鎌倉には我が子九条頼経が將軍として君臨し、京では孫の四条天皇が君臨しており、その権勢は絶大だった。しかも、権力の座に無為に鎮座せず、ちゃんと政治をしたのだから凄い。

その辣腕を幕府と後嵯峨上皇に警戒され、失意の晩年を過ごす。

西園寺公経..

元祖西園寺。以上。この人も、承久の乱を流したせいで、最大の見せ場を奪われた人になってしまった。

後嵯峨上皇..

実は平安京に君臨した天皇のなかで、五本指に入る調整型政治家。初代桓武と、能力はあっても浮き沈みが激しかった帝（後白河とか後鳥羽とか亀山とか）を除外すると、嵯峨・醍醐・後三条・白河に次ぐ功績を挙げている。

鎌倉幕府にヘイコラしていただくと見るのは失礼である。

この人の女性関係の凄さは、子孫の大半に受け継がれてしまった。

北条時頼..

名前だけ出演の予定が、九条道家の没落を描くために、結構活躍してしまう。執権政治の黄金時代を築く。三浦氏討伐によって、名実共に北条氏の天下を実現する。

安達景盛..

宝治合戦の仕掛人。老いて出家し、高野山に登っていたが、わざわざ

ざ鎌倉に帰還して、三浦泰村の肅清を子の義景・孫の泰盛に説く。その後、安達氏によって「三浦が謀反を企てている」という根も葉もないデマが流される。

泰村は一貫してこれを否定し、執権時頼も信じなかった。しかし噂と言うのは恐ろしい。しだいに三浦は追い詰められ、終には安達の攻撃を受けるのである。

哀れ三浦一族数百人は、頼朝の墓前で自決し、三浦氏はほぼ族滅した。

この宝治合戦で、安達氏は三浦氏に取って代わり、御家人第二位の地位を手にするのである。景盛老人が、再び登った高野山で大往生を遂げたのは、翌年の事だった。

なお、景盛老人は、高野山で源実朝・北条政子らの供養をしていたという。

とすると、そういう老人がわざわざ下山して滅ぼした三浦氏は、やはり源実朝の暗殺に関与していたのだろうか。

安達義景..

安達泰盛の親父。美味しい役回りが、なんか多い。

西園寺実氏..

西園寺の黄金時代の当主。徒然草によると、格式にうるさい人だったらしい。

【蒙古襲来】

北条政村..

ちよい役なのだが、時宗よりもおいしい役どころになってしまった。時宗の良き後見人。時宗没後の貞時時代を見てみると、「結局、“時宗時代”を築いたのはこの人で。この人がいたから時宗は貞時のようにならずに済んだのだ」と思ってしまう。

実際、この人が一族長老として睨みをきかせていたから、時宗が二

月騒動のような無茶をしても政権は揺れなかったのである。
おそらくは、この老人が亡くなった瞬間から幕府の内部対立は本格的になった。

時頼時代から亡くなるまでの、要所での活躍ぶりを描くうちに、北条一族で一番好きな人物になってしまった。

金沢実時..

「智」という言葉が似合う人。時宗に、政務の手ほどきをする。ちなみに、安達泰盛は、この人と共に、設立間もない時期の越訴奉行を務めている。その関係もあり、ある時期まで、金沢北条氏と安達氏は非常に仲が良い。

北条時宗..

元寇、両統迭立の当事者。父時頼の教育方針の影響で、指導者意識が強く、プライドが高い。しかし、彼について知れば知るほど、別の顔が見えてくる。二月騒動はその好例で、時宗の持つ果断さと危うさがよく分かる。北条政村・安達泰盛・平頼綱らの“程よい補佐があつてこそその時宗政権”だったのではないか。

この人は、守りに入ると本当に弱い。カウンセラーの無学祖元も大変だっただろう。

元寇時にも、祖元は「迷われるな」と時宗を一喝している。

晩年は、泰盛と頼綱の対立に悩む。

安達泰盛..

「乗馬が得意」と公卿たちの間で評判。しかし、武士なのだから、馬に乗れて当たり前である。この評判は、つまり、朝廷とのつながりがそれだけ深かったということを示すのだろう。北条泰時に次ぐ評価を後世得られたのも、京都政界で好評を得て“公家によってその人柄が実体を超えて語り継がれたから”かもしれない。

一方で、「亀山上皇との仲」が本当に良好だったのかは疑問になる。

後嵯峨上皇の信頼を得たのは事実である。しかし、あろうことか鷹司兼平とも仲良くしている。このあたりを考えると、泰盛は“よく分らない人”になる。

源氏の御家人として、將軍の権力を再構築するというのは分かる。しかし、だったら何故「執権時宗と歩みを共にして、コバンザメのように自らの権力を構築していくのか」？得宗家を怪物にしたのは、他ならぬ泰盛なのである。矛盾している。

一方で、こうした矛盾を持続できた事自体が、「大政治家安達泰盛の凄味」ともいえる。鎌倉時代には、泰盛のような政治手法を採って、二三年くらいで為す術もなく肅清された政治家のなんと多い事か。やはり、泰盛だけは、別格だったのだろう。

得宗家が気づいた時、“最大の味方安達泰盛は、同時に、最大の潜在的な脅威”となっていた。そのせいで、晩年の時宗はノイローゼになって、寺院通いを続けている。

ただ、泰盛が結局、殺されたのも、このあたりの矛盾による。御家人の半分は泰盛を「御家人層を拡大して、その層を厚くしようとした政治家」ではなく、「御家人」という特権階級を、西国の武士に解放しようとした裏切り者」と判断した。亀山上皇が、泰盛の死後に徳政をしているのも、「泰盛との密約を守った」というよりも、「ある意味で目障りな泰盛が死に、別の意味で目障りな平頼綱が反徳政を掲げたので、その隙に京周辺の諸勢力を糾合しようとした」ようにすら見えてくる。

しかしながら、泰盛の改革が上手くいけば御家人と御内人の均衡の上に將軍が君臨する新しい幕府が誕生し、鎌倉幕府はもっと長期的な繁栄を謳歌できた可能性がある。室町幕府の出番もなかったかもしれない。泰盛の死で鎌倉幕府は未来を閉ざした。

竹崎季長..

この人を「猪武者」と判断する人は、洞察力に欠ける。

「鎌倉に直訴に行って、泰盛の情けにすぎた」という安い評価がある。しかし。

？季長は、政治情勢を詳しく知らない状態で鎌倉入りし、「自分の訴えを聞いてくれそうな政治勢力の親玉が泰盛である」と“状況分析”し、直訴に及んだのである。

？加えて、当時の幕閣（国務大臣）である泰盛との対面を自力で実現した。

季長は、泰盛に仕える同郷の人とも仲良くなっている。おそらく季長は、鎌倉に着いた後、自分が持つ縁という縁を駆使して、泰盛まで「たどり着いた」のである。

？しかも、直訴に際しては、「そうとう綿密な準備」をしていた。

泰盛は、「鎌倉幕府の訴訟制度を完成させた」とさえ評される、鎌倉時代で最も有能な裁判官である。かたや季長は、裁判について、素人である。なのに、季長は泰盛を相手に善戦している（手続き論争では、泰盛を一瞬たじろがせている）。

次に、「元寇時に、暴走しかしてないのでは？」という誤解。そんな事はない。

？“先駆け”“小舟で夜襲未遂”“嘘をつきまくって、追撃に参加”いずれも、「自分の少ない手勢でできる、最も効果的な戦法」を選んでいる。

？“たかまさ”の船にお邪魔した時、「蒙古軍の戦法」を口にして

いる。
蒙古軍の戦法を自分なりに研究していたようだ（河野通有から聞いた“情報”や戦場での“観察”を駆使して）。

「泰盛が死んだ時、岩門合戦に駆けつけないのは、冷たくない？」について。

？季長は、“情報”の大切さを知る現実主義者である。

季長は、岩門合戦に参加して泰盛に殉ずるよりも、「生き残って

泰盛を伝える」方が、泰盛に報いる事ができる事を理解していた。そして、頼綱が転ぶまで辛抱強く待って、『蒙古襲来絵詞』の作成という、大事業を成し遂げたのである。

『蒙古襲来絵詞』を読んだ後世の人々の多くは、「泰盛は良い人だ」と信じて疑わない。現代ですら、多くの学者は、泰盛に好意的である。

極端な場合、「泰盛は善玉で、平頼綱は悪玉」と言い切る人さえいる。

泰盛自体の魅力もさることながら、我々は未だ季長の掌の上にいる。余談ながら、河野家との良好な関係は、その後、数百年続いたようだ。

（何と、河野家の「九州の領地の管理」まで引き受けている！）
季長は、よほど魅力的な人物だったのだろう。

この人は「鉄砲玉」どころか、「ベンチャー企業の凄腕社長」なのである。

叡尊..

名前だけ登場。旧仏教である西大寺を、興隆に導いた人。聖人と評すべきか、怪僧と評すべきか。迷うところである。しかし、鎌倉時代の政治史で無視できない僧は、法然でも親鸞でも日蓮でもなく、この人である（思想では、親鸞・道元だが）。それに気付いて、あわてて安達泰盛の「弘安徳政」の場面で、登場してもらう。

私見だが、この時代には5つの型の僧がいる。

？破戒僧（僧兵とか）

？修業と学問と権力にしか興味がない僧（比叡山とかに多い）

？我が道を行く僧（兼好法師が「徒然草」で嬉しそうに紹介している変な僧達）

？民に布教はするが、教えの純度を何よりも優先する僧（道元が筆頭格である）

？布教拡大を第一として、清濁にはこだわらない僧

叡尊は、？だった。布教をして迷える民を救うが、お布施はしつかり取る。それで、組織作りをする。信徒を増やすためなら、朝廷や幕府の権力者に接近する事も厭わない（時頼から、「わしの時には、お布施とらないの？」とツツコミを受けていたりする）。結果、時頼に受戒し、更に葉室定嗣の仲介で後嵯峨上皇に受戒する。更に元寇時には、鎮護国家の祈禱に、大きな役割を果たす。

このあたりの姿勢は、道元などとは対照的である。「多少濁ろうとも、それで多くの人を救えるなら、良いではないか」というスタンス。確かに、間違っていない。

“最大多数の最大幸福”という考えも、世の真理の一つである。ただ、その手段は、「叡尊」という偉大な僧がいてこそ使える“もろ刃の剣”だった。鎌倉時代後期に西大寺流は得宗家と癒着し、全国規模で拡大する。一方で、年を追うごとに西大寺流は腐敗していた。

のちに日野資朝が、どうこう言うのも、これを背景とする。

鷹司兼平..

亀山時代の貴族のリーダー。「とはずがたり」に登場する姿からは、単にスケベなオジサンにしか見えない。しかし、“政治”（政策ではなく、「駆け引き」の方の）は得意だった。朝廷ナンバー2として、“朝廷改革に対する、良きブレーキ役”をつとめる。

一二七九年二月二日、晴れ。その日の夜、『勘仲記』を記した広橋兼光は、関白鷹司兼平邸に参上していた。兼平に贈り物をする武士がいたからである。

『泰盛朝臣、御馬二疋・御劔一腰・砂金五十両、予に付けて進入』（勘仲記、以下同様）

“安達泰盛が、馬と劔と砂金を私（兼光）に託して、殿下に進上した”

兼平は、泰盛からの名馬の贈呈を喜んだが、劔と砂金は舍人に返さ

せた。

ところで、この遣り取りだが、実は奥が深い駆け引きかもしれない。かの『六韜』の「文韜 第十五文伐」に曰く。

（以下は「林富士馬訳 六韜」257頁・中公文庫参照）

『二に曰く、其の愛する所を親しみて、以て其の威を分て。一人両心ならば、其の中必ず衰えん。廷に忠臣なければ、社稷必ず危うからん』

『三に曰く、陰に左右に賂いて、情を得ること甚だ深からば、身は内にして情は外に

し、国、将に害を生ぜんとす』

“ 文王に「武力なしで、敵を潰す方法、何かない？」と聞かれた太公望。

二番目にこう言った。

「重臣（兼平）に肩入れして、王（龜山上皇）と權威を二分させるのです。敵（朝廷）は分裂し、弱まります。忠義の臣がいなければ、朝廷は危うくなります。」

三番目に言った。

「側近（兼平）に賄賂を贈って仲良くなれば、そやつは内にあって外になびきます（朝廷にあって、幕府になびきます）。国（朝廷）はガタガタになるでしょう」“

これを踏まえると恐ろしい事が分かる。

そう、安達泰盛は、「兼平に金品・名馬を贈り、朝廷を分裂させる」計略を仕掛けたのだ（泰盛は教養人なので、『六韜』くらい知っているだろう）。

しかし、相手が悪かった。兼平は“藤原のボス”である。『六韜』は家伝の書である。

兼平は「名馬だけ受け取り、金品は突っ返した」。

全て受け取れば「泰盛の計に嵌る」、全て突っ返せば、「幕府の心証を害する」。これらを踏まえて、「一部だけ受け取り、一部は突

っ返した」のだ。

かくして、泰盛の計略は破られた。兼平は、なかなかの政略家だったようだ。

平頼綱…

恐怖政治家。しかし、考えてみれば、北条一族から政治の実権を奪うことに成功した最初の人。しかも、その政権を数年間維持している。貞時が政権奪還時に用いた手段は、地震後のドサクサに紛れた闇討ちにも等しいもので、天下の得宗がとる手段として信じがたいものがある。その事は、却って“頼綱政権”がその末期においても、その基盤は「案外安定していた」ことを示しているのかもしれない（信望はなかったようだが、泰盛の時に比べて、その死の波紋はほぼゼロだし）。どちらかというと、ある程度の基盤が存在していたからこそ、トップの座を貞時が奪っても、頼綱支持層の御内人は「それほど自分達の地位は没落しない」と安心していたのかもしれない。

以上を踏まえると、平頼綱は安達泰盛と並ぶ大政治家だったと考えられる。実際、むしろ“貞時政権”になってからの方が、政変や兵乱が多い。

頼綱は自害する瞬間も「私に何の咎があったのだ？」と自問していた事だろう。

頼綱は確かに得宗専制体制誕生の産婆役を務めたのだ。赤ん坊に蹴り飛ばされたけど。

後深草上皇…

よく分からない人。女言葉。すぐ泣く。温厚だが、陰険で、時に非情。

父親の後嵯峨の都合に振り回されて、若干屈折したのが原因と思われる。亀山政権下で、相当な鬱屈振りをみせる。

しかし、浅原事件前後あたりから一皮剥ける。その後は、引退して

いるくせに、たまに姿を見せた時には変な貫禄をみせるようになる。多分、弟亀山から政権を奪った時に、父を超克することができ、人間的に成長したのだろう。

亀山上皇..

競馬が大好き。才気滂瀾。好色。子供には良い父親。ある意味で理想的な帝といえる。元寇の時に命を懸けた願掛けをしたり、幼少期の後醍醐に影響与えたりしたため、剛毅な面ばかりが世に強調されている。しかし、文字とかを見る限り、几帳面な実務家である。利害関係さえなければ、気の良い親分だったようだ。

北条貞時..

頼綱を蹴飛ばして、得宗専制体制を完成させようとした人物。その彼が政治改革にさじを投げ、享楽に身を委ねた瞬間、幕府は本格的に行き詰ったといえる。

彼は、懷刀を闇討ち同然に消して手に入れた執政権を、嫌気がさして捨てているわけで、人格面の欠陥は覆いがたい気もする。

西園寺実兼..

朝廷の元老。回りくどいことが嫌いな性格だったようだ。若い頃は、正統派の貴公子として二条と浮名を流す。後年、政治に謀略に活躍する姿も、何故か全て“正統派”という印象を受ける。良く言えば、けれん味がない。悪く言えば、派手な政治活動をしているのに、どこか面白くない。

彼の半世紀に渡る政治活動を追えば、両統迭立の朝廷の動きは大体掴める。まさに生き証人。でも本当は、後深草上皇が亡くなった後は引退したかったのだと思う。

花園上皇の日記を読むと、「文保の和談」後の持明院統との“微妙な関係”が描かれていて面白い。何というか、互いに腫れ物にさわるような遣り取りが、その死までずっと続くのである（西園寺邸で、

しょっちゅう待ちぼうけをくわされた花園は、「庭を“徘徊”して、時間をつぶした」とか、相当ダルそうに書いている）。

しかし、花園は、「持明院統にとって、本当に都合の悪い事について、迂闊な事を書かない」ので、残念ながら持明院統と実兼（あと、京極為兼）に何があったのかは、今もってよく分からない。

二条..

その美貌と才知を武器に、後深草の後宮でやりたい放題した娘。こともあろうに、龜山上皇と密通して、宮中から追放される。

しかし、その後、尼姿で驚異的な行動力を見せ、全国の神社仏閣を訪ね歩く。『とはずがたり』に書かれた、鎌倉で平頼綱夫婦に会う場面は非常に興味深い。二条のせいで、恐怖の独裁者平頼綱は、フアッションセンスが悪く、しかも奥さんの尻に敷かれていたらしい事が記録に残ってしまった。哀れ頼綱。

なお、『増鏡』の作者は、“二条と縁のあった人”かもしれない。あるサイトに面白い見解があったので紹介する。

？増鏡中盤は『とはずがたり』を基にした話が多い（しかも二条に教えてもらったのではないかと思いたくなる、参考資料が不明の、西園寺実兼のヨタ話も出てくる）。

？最後の方で、やたらと村上源氏関係の人物が出てくる（二条も村上源氏である）。

？増鏡には一ヶ所だけ筆者がふざけるシーンがあり、そのダシに使われているのが二条である（どこかに行く行列を構成する女官らを列举する場面で、「1番目ダレダレ。2番目ダレダレ。3番目は“ある女官”だったが“二条”なのに“2番目”でなかったので困っている」というのがある）。

「というか、『増鏡』の冒頭に出てくる“老婆”は、ひょっとして二条ではないか？」とそのサイトでは勘繰っていた。

※但し、勝浦令子「古代・中世の女性と仏教」の81頁には130

2年に亡くなったと書かれていた。これは、何か然るべき古文書でも発見されたのだろうか？

後宇多法皇…

亀山の嫡子。後醍醐の父。皇后大事。長らく同居した父亀山と仲違いするまで、多分父との仲は非情に親密だったのだろうし、信頼しきっていたのだろう。

その意味で、父との仲違いの意味は大きい。晩年の父亀山は、（西園寺実兼の娘との間に）孫よりも幼い愛児をこさえてしまい、これがもとで、後宇多と亀山は仲違いしてしまう。結果、大覚寺統は分裂、後宇多は父が信じられなくなり、愛妻にますます傾いた。そして、その妻の死後は、供養のため密教に傾倒する事になった。常に何かに頼らないと駄目な人だったのかもしれない。

そんな後宇多にとって、自分の力量を信じて揺るがない息子後醍醐の生き方は、圧倒されるものだったのではないか。後醍醐の母忠子を事実上捨てたという負い目も手伝って、晩年は後醍醐に振り回される。

しかし、政治家としては優れていて、表での善政・裏での謀略、両方に優れていた。室町院領問題・文保の和談で持明院統を抑え込んだ辣腕ぶりを見ていると、後醍醐程度なら押さえ込めたように思える。その気になって、躊躇しなければ。

伏見上皇…

激情家。側近への甘さがなければもっと大成できたはずの人。策を弄することも多々あったが、本質的にはお人よしだったのだろう。京極為兼に自分が見た夢を話している姿は牧歌的である。父後深草の死に号泣する姿には好感が持てる。但し、大覚寺統との対立で暢気なことはできなかったので、敵には必要以上に攻撃的になったのだろう。身内以外にとっては、厄介な人。

京極為兼…

伏見の懷刀。この為兼とタッグを組んだとき、伏見の政治力は飛躍的に上がる。でも、結局は鉄砲玉。花園も彼を“歌道の師”と仰いでいるが、“政道の師”とは見ていない。為兼の弊害を理解していたのだろう。

もし後半生で歌道のみ専心していれば、花園と組んで、もっと面白い活動ができたかもしれない。為兼の和歌の本質は“ありのままの事を、ありのままに詠う”という点にある。一方、花園の学問も“虚飾を嫌い、本質を追及する”という代物である。二人が協力すれば、「虚飾にうつつをぬかす朝廷の気風」を和歌と学問によって一掃できたかもしれない。その点残念である。花園もその可能性を惜しんでいた節があり、日記でしきりに「伏見院と為兼の歌道の正義」を強調している。

一方で、その生き様にはどこか憧れるものがある。伏見への忠義を貫き、六波羅に連行されていく様子は多くの者の心を打った。

後伏見法皇…

ある意味一番割を喰った人。父伏見の生存中は、父にベッタリの京極為兼に手を焼き、父の死後は後宇多・後醍醐親子にしてやられ続ける。元弘の変で後醍醐が隠岐に流され、ようやく自分の時代が来たと喜んだが、甘かった。

救いは、弟花園が自分を生涯立ててくれる人物だったことだろう。

後二条天皇…

この人が亡くならなければ、後醍醐の即位はありえなかったわけで、その意味で南北朝動乱開始のキーマン。

【倒幕・建武の新政】

金沢貞顕…

気配りの人。もっと安定した時期に生まれていれば、「祖父金沢実

時の遺風を受け継いだ穏健な政治家」と評された事だろう。六波羅赴任中の早朝、屋敷に仕える女性と会話をしている姿などは、どうみても“人の良い旦那様”である。

しかし、時代は「物分かりの良い人」など求めていなかった。貞顕は、高時政権が揺らいだ時、悪役をするべきであった。

六条有房..

御宇多法皇の懐刀。長年にわたる活躍を、本書ではすべて省略している。

これを申し訳なく思っていた所、【末代の英主】で数行スペースが余ったので、死の床で、内大臣に拔擢されるシーンだけ登場してもらう。

後に、橋本芳和氏の「元弘元年康仁親王立体子の背景(?)」を読んで、これが大ビンゴだったと知り驚く。有房は、なんと？子女王（永嘉門院の姉・室町院領の相続に口出しできた女性・室町院領を確保するため後宇多上皇の後宮に入る。これによって、上皇と政治的な同盟関係となる）と一時恋仲にあった過去を持つらしい。

これだから、宮中の人間関係はややこしいのだ。

花園上皇..

本小説の影の主人公。

現在では過小評価され、好学の上皇としてのみ記憶されている。

10代の頃から、約10年間天皇を務め、その間印象的なのは、年がら年中発熱している事である。

本人も認めるところであるが、病弱で、長く生きられるかどうか自信がない。

そんな若年期を過ごした事は、この人を語るに際して、無視できない。

生きたあかし。「何かを残したい」という思いは、ほとんど本能的

渴望だったのである。

だからこそ、この人は学問研鑽に励んだ。

在位10年目に、控えめながらも「自分も少しは学問のことが分かってきた」と日記に書き残しておられる。そこに、却って揺るぎない自信と、余人の追隨を許さない学識を感じる。

退位後、早い時期から出家して学問に身を捧げようとするが、兄後伏見から甥光厳の教育を頼まれ、鎌倉幕府倒壊まで俗世に止まる。だから、“北朝の帝王学”に花園が与えた影響は多大である。しかし、そのせいで、討幕騒ぎに巻き込まれ、さらには後醍醐天皇と政治的に闘うことになった。

この人の学問は、古今東西の大学者と比べても、遜色がない。

しかも、読む本の選定基準は、あくまで実用重視だった。とりわけ、後醍醐天皇の周辺がきな臭い動きを見せ始めた時期には、「孟子」・「台記」を読んでいる。

その成果か、後醍醐天皇が正中の変に失敗した際には、かなり冷静な分析をしていて、「欲に基づいた挙兵など、上手くいくものか」と後醍醐の討幕計画の真の動機（皇位の独占を狙う野心）を看破している。

この人の日記に本作品は救われたが、「日記」について触れたい事がある。

晩年まで執筆されていた筈のこの日記だが、“護良親王の挙兵”直後までしか残っていないのが、本当に残念でならない。

しかし、「その後十数年分の日記」は未だ見つかっていない。どこかの古寺に眠っているのか。応仁の乱で焼失したのか。それとも、“誰かが処分したのか”。

北朝の貴族あたりが、それをやったとしても驚かない。何せ「見つかっていない時期」には、「鎌倉幕府倒壊に巻き込まれる持明院統」

「建武政権下での闘争」「九州に逃れた足利尊氏との政治交渉」が記されている事は間違いないからである。

場合によっては、足利（尊氏・義満）が、南朝の天皇に対して比較的好意的だった理由や、北朝の天皇との関係も分かるかもしれない。仮に、「まだ見つかっていない部分」が発見された場合、冗談ではなく、世の歴史書は書き直しを余儀なくされるだろう。

これは本編にも書いた推測であるが、「中先代の乱」足利尊氏による建武式目」の期間、持明院統の手綱を握っていたのは、“実は花園上皇ではないか”と私は疑っている。

？後伏見は鎌倉幕府崩壊後すぐ出家したが、花園は建武二年まで出家しなかった事実

（そのタイミングも凄い。なんと建武政権が、足利尊氏・直義兄弟の除名を決めた日である）

？尊氏が九州から京に反転してくる間に、後伏見が病死している事実？その頃の光厳上皇は政治経験が少ないという状況

？鎌倉時代末期に、花園上皇が見せ始めていた政略家としての手腕。これらを踏まえると、当時の持明院統を後見できたのは、花園を置いて他にない。

花園が“病床の後伏見に代わって後見役をしていた”と考えた方が、自然である。

一応その傍証らしきものはある。本文に書いた事以外にも『風雅和歌集』の序文。

『風雅和歌集』は光厳上皇が作成した和歌集である。念のため断わっておくが、当時の「和歌集作成」は、文化事業ではなく、政権の一大政策である。

この和歌集は、足利尊氏と協力して、戦乱をほぼ収束させた（南朝は、この頃、追い詰められている）事を記念して作成されたものだった。

さて、花園は、その序文を代筆している（園太暦）が、気になる事を書いている。

『今は塵のほかはこやの山静かなる住まひを占めながら、なほ天の下万の政を聴きて、夙に興き夜はいぬる暇無し。然るを此の頃八つのみち乱れし塵も治まりて、野飼の駒もと繋かず、四方の海荒かりし波も静まりて、ふな渡しする貢物絶えずなりにければ、万の道衰へ、四方の事わざの廃るるを歎く』

（岩橋小弥太・「人物叢書花園天皇」122頁、以下同じ）

“今となつては、私は山中の静かな住まいに身を落ちつけているが、なお天下の政治について意見を聞かれ、朝から晩まで暇がない。そうではあるが、この頃は戦乱も鎮まり、四海は安定し、諸国から船で運ばれてくる（朝廷への）税も絶えなくなつた。そのため、ようやく私にも、和歌の衰えを嘆く余裕が生まれた”

『名づけて風雅和歌集といふ。これ色に染み、情に引かれて、目の前の興をのみ思ふにあらず。正しき風、古の道末の世に絶えずして、人の惑ひを救はむが為めなり』

“この和歌集を風雅和歌集と名付ける。これは、私が風流にかぶれ、人の情緒に興味引かれて、趣味で作つたものではない。正しい風潮・古の道を、今の世でも絶えないようにし、人の心を戦乱の迷いから救うための和歌集である”

この序文は、“甥の代筆をしている”というよりは、“かつての戦乱で大きな役割を果たした人物が、収束を記念して、隠居の身ながら一筆書いた”ように見えてならない。

本物の策士というのは、自らが活動した後さえ、残さないのである。とはいえ、これらは、あくまで憶測である。真実を知るには、花園上皇の日記の後半部分が発見されるのを待つ他ないようだ。

追記。なお、本小説で描き損ねたのは、花園上皇と北畠親房の関係である。

「京極為兼事件前後〜後醍醐天皇即位してしばらく」の期間、

花園上皇が北畠親房を持明院統に近づけようと盛んに誘っている様子が散見される（日記から）。

のちの”北朝の黒幕”と”南朝の柱石”、あまりにも意外な組み合わせだが、

事実なのだから仕方がない。

あるいは、後宇多法皇（大覚寺統のボス）派を弱らせて、後醍醐天皇（大覚寺統の反主流）派と、

仲良くする一環だったのだろうか。

いずれにしろ、これがのちの事件を考えると、いろいろと想像をかきたてられる。

「地の道 人の難」では北畠親房が北朝に一大計略をしかけるのだが、

これを発動できたのは、そのほんの少し前に花園上皇が崩御されていたからである。

仮に存命だったら、上皇との「過去の関係上」、あそこまでの暴挙には及べなかったはず。

……とついつい、思ってしまう次第だが、如何。

日野俊光..

日野資朝・資名の父。持明院統の大黒柱。花園上皇の日記の影響で、さんざんな扱いをしてしまい、反省している。

北条高時..

最期の執権。闘犬・田楽を好んだらしい。長崎円喜らの専横甚だしい政情で、退廃的な享楽に明け暮れる。そのため史書は“暗愚”と記す。

しかし、そんな主君のために千人近い殉死者が出るとは思えない。享楽に酔っていたのは、本当に高時か？政争に膿んでいた幕府指導層ではないか？

高時の代で北条一党が倒れたのは、得宗専制体制がついに破綻したからであって、高時個人の問題ではない。
最も、こうした高次元の政治問題を解決できる器でなかったのは確か。

長崎円喜…

最大の悪役。わざわざ、呼び方も「円喜入道」で統一し、憎まれ役を担ってもらう。

安達時顕という対抗馬がいたのだから、幕府を傾けた責任の“半分”しか負わない筈である。でも、そんな事は無視した。鎌倉時代末期の幕府上層部を描くためには、こういう人が動いてくれないと、書く方も困るのである。

一応ここで弁護しておく。当時、幕府は行き詰まっていた。

今更、平頼綱時代の再現はできない。かといって、安達泰盛のような手法もありえない。北条一門も力を残している。高時時代の幕府は、御家人・御内人・北条一門の全てが、それなりの立場を持っているという異常な時期であった。

そんな中、高時が執権でいた期間については、発火を抑えていたのだから、その気苦労くらいは、評価しても良いのではないか。

後醍醐天皇…

評価の分かれる天皇である。しかし、そもそもこの人が「何に便乗していたのか」という事を考えると、幾分かは公正な評価ができる。？まず、討幕戦で便乗したのは“御家人と御内人の長年にわたる抗争”である。楠木正成？護良親王？山門？それがどうした。

幕府を倒したのは“北条に不満を持った御家人達”である。断じて、宮方ではない。足利尊氏が討幕の意志を内外に示した時点の情勢をみると、既に“純粹な宮方（赤松とか、菊池とか、楠木とか、護良とか）による討幕”は膠着状態に陥っていた。内戦が長期化すれば、幕府によって遠からず殲滅されていただろう。

後醍醐による討幕計画はついに「幕府を倒せなかった」のである。これを考えると、足利尊氏が建武の親政下で、あれほどの信望を集めた理由が分かると思う。

？それでも、後醍醐がやはり非凡なのは、「そんな状況下で、一時的ではあっても、尊氏を政権下に置く事に成功した事だろう」。よく、“建武の親政はたった三年で崩壊した”というが、当時の情勢を見ると、あんな状況で“三年も政権を維持できたのは奇跡に近い”。ここに、後醍醐の非凡さがある（あまつさえ、一度は尊氏を九州に追い落とす事にさえ成功している）。

？その秘訣は、“北条の遺産を引き継いだことにある”。即ち、北条得宗家が、“かつて掌握し、あるいは掌握しようとした勢力”を幕府倒壊のドサクサに紛れて、自分の支持基盤として吸収した点にある（まず、奥州の諸勢力。菊池・阿蘇などもカウントして良いかもしれない。楠木もそうだという説さえある）。それと、海賊・山賊・悪党。商人。これらが、建武政権を支え、南朝六十年の歴史を可能にしたのである。

（これを考慮すると、後に北条時行が南朝に帰参したのも“北条の残党を吸収した一環”といえるのかもしれない。とすると、南朝と北朝の戦いも、“北条残党と元御家人の延長戦”という側面すらあるかもしれない）

後醍醐天皇の評価については、この？・？・？で全てが語れていると思う。それ以上を加えると、過大・過小評価に陥る可能性が大である。

（ここで少し、？について脱線する。一方で、尊氏が便乗したのは“鎌倉幕府の対蒙古体制”である。というのも、討幕直前から連絡を密にし、建武政権に一度は敗れた尊氏が頼ったのは、他ならぬ“九州の御家人”である。鎌倉幕府が蒙古との合戦用に配置しなおし、日本最強の防衛体制を構築した、九州の御家人である。尊氏は、対蒙古の戦力を、建武政権打倒の軍事力に転用したのである。）

最後に一点。後醍醐天皇は「宮中でのプライベートな逸話が少ない」。

うん、確かに太平記・その他に“それらしき物”はある。でもそれは、鎌倉幕府や尊氏にどんな「公的な」態度をとったのかを示す逸話である。また、“親王時代の逸話”は増鏡・徒然草にもある。しかし、天皇になってからの逸話は少ない。

そう“後醍醐天皇”には、他の天皇・上皇達のような「人間くさい逸話」がほとんど残っていないのである。そのため、プライベートでの後醍醐の“人間性”を想像することは至難である。あるいは、北朝に残った公卿達は、後醍醐のプライベートな逸話を根こそぎ抹消したのかもしれない。逸話が残り、「逸話に登場する自分達と後醍醐のプライベートな関係が記録に残ってしまう」事をはばかって。

日野資朝..

討幕を始めた人。

余談ながら、日野資朝がからかった西園寺当主が「もしも西園寺公相だったら」と思うと恐ろしい。資朝は、西園寺当主直々に、百叩きにされたであろう。

公相は西園寺実氏の子で、太政大臣となりながらも、若死にした人物である。徒然草には、「その道ウン十年の馬の口取り」に余計な口出しをした使用人に対し、このオジサンがヤキを入れる姿が描かれていて、たいへんおっかない。美意識は認めるが。子孫の西園寺実衡が普通の人で良かった。

なお、元友人の花園は、その死について“一言も”日記で触れていない。

死者に対して敬意を払う花園にしては、このような事は異例である。それだけ、討幕を策した資朝に失望したのか。あるいは、心の整理がつくまで保留にしたのか。

人と人の関係の難しさを思わざるを得ない。

吉田定房..

この人は苦勞ばかりしている。

後醍醐天皇に仕えた貴族は数あれど、「生粋の貴族」が示せる最大限の誠意を見せた」のは定房である。

後醍醐天皇は父法皇とは仲違いしていたが、兄弟との仲は良かった。しかも、老臣にも恵まれていた。その波乱に満ちた生涯には、案外と影は少ない。

その所以は、定房を代表とする“身内”に恵まれていたからであろう。

楠木正成..

正成は戦術家ではなく、戦略家として描いた。

熱湯・落石、その他諸々が「太平記」の合戦シーンには出てくる。しかし、正成のこのゲリラ戦法は、「典型的な悪党の戦法」に過ぎず。いわば、小道具である。

正成の神髄は、むしろ「後醍醐天皇を奉じ、拳兵に踏み切った情勢判断力」、「呼応勢力を煽るという“戦略に徹した”ゲリラ戦・籠城戦」、「新田を肅清し、足利との和睦することを進言した政治感覚」にある。

恣意的な人物紹介（後書き）

まあ、こんなところでしょうか。

足利尊氏・足利直義については、「地の道・人の難」で書きます。
というより、二十六年しか人生経験のない私には、まだ「尊氏」と
いう複雑怪奇な人の事が、到底理解できていません。

【地の道 人の難】 ・おさらい（前書き）

続き! ! !

【地の道 人の難】 ・ おさらい

【おさらい】

一三三三年、北条高時が自刃し、鎌倉幕府は滅びた。

まもなく誕生したのが、後醍醐天皇による建武政権である。

それは、天皇の下に公家と武家が座するという、新たな政治体制であった。

しかし、中央の有力者は、自らの力が削がれる事を恐れ、地方の有力者は、中央の干渉を嫌った。

そのため、政権の内部では軋轢が絶えず、外部では反乱が相次いだ。

一三三五年、北条時行（高時の子）が挙兵し、鎌倉を占拠した（中先代の乱）。

これに危機感を覚えたのが、足利尊氏である。

このまま鎌倉幕府を再興されれば、時代は北条の天下に戻る。

尊氏は、佐々木導誉らを従え、後醍醐天皇の許可なく関東へと出陣した。

かくして、乱を平定した時、尊氏は京に戻れなくなった。

尊氏の意に反し、関東の足利が、京の建武政権と対峙する形勢が生まれたのである。

まもなく、新田義貞の率いる討伐軍が鎌倉に迫った。

足利と宮方（後醍醐天皇方）。動乱の始まりであった。

一三三六年、北畠顕家が奥羽の軍勢を率いて上洛した。

この予期せぬ敵勢の出現に、京を占領しつつあった足利は敗れ、尊氏は西国に逃れた。

しかし、負けた足利軍は四散しなかった。

落ち延びる尊氏に、少なからぬ武士が従ったのである。

この情勢に、持明院統の花園法皇・光厳上皇が、足利の支援を決意した。

まもなく、尊氏の陣を三宝院賢俊（日野一族）が訪れ、光厳上皇の院宣が下された。

力を得た尊氏は、九州に下向したのち、西国を糾合した。

この時、北畠顕家は奥羽への帰途にある。宮方に、再起した尊氏を防ぐ術などなかった。

湊川の戦いで、宮方は楠木正成を失い、京を維持できなくなった。

足利軍が京を占領し、光厳上皇を治天（指導者）とする新たな朝廷が誕生した（北朝）。

まもなく、叡山に追い詰められた先帝（後醍醐帝）も尊氏と和し、室町幕府が成立した。

しかし、新たな時代が始まる影で、反撃の準備が整えられていた。

ある日、突如先帝が都から姿を消し、吉野に移ったのである（南朝）。

伊勢で打倒足利の策を練る、北畠親房の差し金であった。

第一章：はるかなる都 ―旅立ち―

【ある男の略歴】

『此の条々、去る十三日夜に之を仰せ置かる。偏に御平滅を期し記し置く能はず』

（ミネルヴァ書房「北畠親房」岡野友彦・四十九頁、「御遺命書」天竜寺文書）

“親王は、去る十三日、私に遺言された。

しかし、私は回復を信じた。だから、ご臨終まで遺命を書き記せなかった”

一三三〇年九月十七日、北畠親房は、世良親王を失った。

長年、傳役として養育してきた皇子であった。

親王は後醍醐天皇の皇子である。成長すれば、次の天皇になる筈であった。

しかるに親王は亡くなった。

「村上源氏・源氏長者、極官…従二位大納言」

それが、親房の全てとなった。

大覚寺統派の北畠家に生まれながら、持明院統の花園天皇に取り立てられ、次いで大覚寺統の後醍醐天皇のもとで活躍した、華やかな経歴。

学識を買われ、同族を差し置いて、源氏長者となった栄光。

もはや、そんなものは過去の事である。

貴族としての人生が終わった。

勉強に励んだ日々、お偉方に供奉した日々。

過ぎてみればうたかたであった。

落胆した親房は一線から退き、その後、後醍醐天皇から距離を置いた。

北畠の家は子の顕家が継いだ。

鎌倉幕府を倒した後醍醐天皇のもとで、顕家は多賀国府行きを命じられた。

義良親王を奉じ、陸奥を統治する事が任務であった。

当時、顕家はまだ十代である。若年の息子が手に負える仕事ではなかった。

親房は後醍醐天皇の意図を察した。

どうやら、帝はもう一度自分に働けと言っている。

親房は息子を補佐するため陸奥に赴いた。

現地での生活が、中先代の乱が起こるまで続いたのは、史料の示すところである。

そんな親房が、奥州を息子に任せ、伊勢に身を寄せる事となったのは運命の悪戯である。

―足利尊氏の謀反―

引退した筈の男が、残る生涯を政治の中枢で過ごした理由は、これに尽きる。

【当国擾乱】

一三三七年一月八日、奥羽の北畠顕家は、本拠地を多賀城から霊山に移した。

足利尊氏が、光厳上皇を奉じ、室町幕府を開設したのは前年の事である。

以来、当地を治める顕家らは、吉野の後醍醐天皇（南朝）に従う「逆賊」であった。

逆賊。まったく馬鹿げた話であった。

逆賊とは足利兄弟の事ではないか。

しかし、顕家の思惑に反し、奥羽では、南朝を見限る者が後を絶たなかった。

この月、そんな現地の情勢も知らず、吉野から上洛の勅命が下った。

二十五日、顕家は、これに関し、伊勢で活動する父親房に書状を送っている。

『臨幸吉野事、天下大慶、社稷安全基、此事候』

(ミネルヴァ書房・榊原結城文書・山本隆志「新田義貞」二四三頁)

“帝は吉野に移られたとの事。天下の吉事、朝廷安定の礎、とはこの事です”

『須馳参候之处、当国擾乱之間』

“私も、一刻も早く上洛したいところですが、陸奥国では戦闘が続いております”

『令対治彼余賊、？可企参洛候』

“逆賊の退治を終えしだい、上洛の兵を挙げます”

『去比新田右衛門督申送候之間、先而致用意候了、而于今延引、失本意候』

“実は、これよりさき、新田義貞からも（呼応して、共に上洛する事を求める）使者が届き、その用意をしていたのですが、不本意ながらも、上洛は今まで延びていました”

『此間親王御座靈山候、凶徒囲城之間、近日可遂合戦候也』

“この間、義良親王は靈山に移られました。城を囲む凶徒とは、近日決着を付けます”

『下国之後、日夜廻籌策外、無他候、心労可有賢察候』

“陸奥に下った後も、私は日夜（宮方勝利の）策を廻らせてきました。心労お察し下さい”

『恐鬱処、披御礼散鬱蒙候』

“しかし、意気消沈していたところ、父上から書状をいただき、心も晴れました”

『且綸旨到来後、諸人成勇候、毎事期上洛之時候』

“帝から綸旨を賜ったうえは、諸人勇躍し、上洛の機を窺います”

『以此旨、可令披露給候也』

“父上におかれましては、このことを宜しく帝にお伝え下さい”

現在、本拠靈山すらも敵軍に囲まれた、劣勢の一軍による上洛作戦。

無謀ともいえる乾坤一擲の軍事行動が始まろうとしていた。

【金ヶ崎落城と関東の情勢】

その頃（一三三七年一月）、兄尊氏に代わって幕府を指揮する足利直義は、越前金ヶ崎城に籠る新田義貞に対し、高師泰率いる軍を派遣していた。

斯波・仁木・今川。層々たる将の参加する大軍は、あっさりと金ヶ崎城を包囲した。

『此城に兵糧盡て後は馬を害して食とし。廿日あまり堪忍しける』

（梅松論）

“（城方は）兵糧が尽き、その後は馬を殺して食べ、二十日余を凌いだ”

三月六日、足利方の猛攻により、金ヶ崎城は陥落した。

『子息越後守自害しければ。一宮も御自害あり』

“義貞の子義顕が自害し、尊良親王も自害された”

義貞は桃山城（弟脇屋義助がいる）に逃れ、一人、恒良親王だけが京へ連れ戻された。

近年の研究によると、この親王は「天皇」として活動されていたという。

前段の書状には、「義貞が顕家を上洛に誘った」とある。叡山で、事実上後醍醐天皇に捨てられた義貞は、吉野とは別の「帝」を奉じ、野心を遂げるつもりであったのだろうか。

五月十九日、義貞の野望を阻止した直義は、関東の上杉憲顕に書状を送っている。

『御下向之後、国中静謐目出候』（足利直義自筆御内書・上杉家文書 米沢市蔵、上島有『足利尊氏文書の総合的研究写真編』45（46頁）

“憲顕殿が下向された後、上野国も平穏となり、たいへんめでたい”
『諸国の守護の非法のミ聞候二』

“（政務を行なう私のもとには）諸国の守護が、不法を行う報せばかりが届く”

『当国の沙汰如法殊勝之由』

“（そんな中、）憲顕殿の治める上野国は、よく法を守っている”

『去年正月討死之後ハ、万事力を、とし候て、悲歎無極之処』

“去年正月に、親父殿（上杉憲房、尊氏・直義の母は上杉清子である。したがって、母の兄である憲房は伯父に当たった）が京で討死し、嘆きの余り力を落していたところ、”

『御親父のいき帰られて候と悦入候』

“（憲顕殿の働きを聞き、）親父殿が生き返ったと喜んでいる”
金ヶ崎城での勝利は、足利方の優勢を決定付けるものに見えた。
そのため、この書状の直義は、いつになく寛いである。

しかし、七月、関東で重大な事件が起きた。

中先代の乱以来、消息を絶っていた北条時行が突怒姿を現し、南朝に降伏したのである。

―陵王―

【奥州軍の第二次上洛作戦】

一三三二年一月三日、親政を開始した後醍醐天皇は、父後宇多法皇と共に式部卿親王邸を訪問した。

やがて宴席が整い、法皇と帝のお出ましとなった。

姿を見せた天皇は、父法皇に拝礼した。

その光景を、公卿達は見つめる。

法皇の側近達はどこか複雑な表情で、天皇の側近達はどこか誇らしげな表情で。

そんな中、しきりに袖を拭う、老公卿の姿があった。

『内の御めのとの吉田の前大納言定房、まみいたう時雨たるぞあはれなる』（増鏡）

後醍醐天皇の傅役、吉田定房であった。

一三三七年七月二十日、吉田定房は、北朝に官位を返上した。

自らの役割の終焉と寿命を悟ったのである。そして、この年の秋から冬にかけて、吉野に出奔した。

定房は、諸国の宮方の決起を聞き、後醍醐天皇の側で死ぬ事を決意したのである。

この夏、北畠親房は、宗良親王（尊澄法親王が還俗した）と共に、伊勢でさかなな軍事活動を始めた。これは、最終的には、後醍醐天皇の上洛を視野に入れたものであったが、陸奥の顕家も、これに呼応して第二次上洛作戦を開始した。

八月十一日、顕家は義良親王を奉じて奥州を発った。

これに、結城宗広・伊達・南部ら、陸奥の宮方の大半が従った。留守には結城親朝を残すのみである。あたかも奥州を捨てるかのようであった。

十九日、奥州軍は白河関を突破し、下野小山城を攻めた。しかし、奥州軍の二度目の上洛戦は難渋を極めた。

顕家らは、この後数ヵ月、下野で足止めされている。おそらく、収穫前に出立したため、兵糧物資に窮し、行動をとれなくなったのである。

大軍を擁しての活動は、絶えず自壊の危険性を孕む。

飢えた兵は、あるいは四散し、あるいは暴徒と化す恐れがあった。

皮肉な事に、奥州軍の背を押したのは、彼らが出立した後の、奥州の変化であった。

いまや、奥州は空である。宮方の軍勢が殆ど残っていない。これに勢いづいた足利方は即座に宮方の拠点を攻撃し、その大半を攻略していた。

父親房は、出立前に次のような事を書き送っている。

『相構へて相構へて今度は国中留守の事ども、よくよく沙汰あるべし』（結城家文書・延元二年正月一日・岡野友彦「北畠親房」百頁）

“よいか、くれぐれも、今度は留守の事も考えて出兵せよ”

これは、上洛に成功しながらも本拠地の情勢を悪化させた前回は踏まえての事であろう。

親房は、顕家の果断を誇りにしながらも、危ぶんでいた。

そして、その懸念は的中したのである。

関東北端で立ち往生する奥州軍は、すでにして、帰る場所を失った。

だが、奥州軍を率いる顕家と結城宗広らは、これを逆手に取った。すなわち、故郷への後退をあきらめ、上洛し、中央をひっくり返す道を選んだのである。

—そうすれば、再び官軍として奥州に帰れる—
そう決断した時、奥州軍は狂兵と化した。

十二月、進軍経路にある村々から食糧を強奪しつつも、奥州軍は決死の思いで上野を踏破し、武蔵に侵攻した。

『武蔵上野の守護人防戦共、凶徒大勢なれば引き退く』（保暦間記）
“武蔵・上野の守護人達は防戦したが、南朝方が大軍であるため、退却した”

奥州軍が強大化したのは、上野で新田義興（義貞の子）、そして、北条時行が合流したからである。新田に北条、彼らは「足利にくし」で固まった連中であつた。

奥州軍は、一路鎌倉へと進撃していく。

二十三日、奥州軍は鎌倉に打入り、二十五日、足利方の斯波家長を敗死させた。

そのため、追い詰められた足利義詮（千寿王・尊氏の子）は、三浦に逃走した。

ここに、南朝方は、東国の中心地鎌倉を奪取したのである。

年を跨いで、一月二日、奥州軍は鎌倉を発した。

これを、上杉憲顕ら、関東の足利方が追う。

『桃井駿河守に今播磨守。宇津宮勢三浦介以下爲味方自跡おそひ上りし』（難太平記）

“桃井直常に、宇都宮・三浦介らが、奥州勢の後を追った”

十二日、奥州軍は遠江で宗良親王の軍勢と合流した。

しかし、事態は辛辣であつた。

遠江で今川範国。三河で吉良満義・高師兼。

奥州軍の前に、次々と足利方の将が立ち塞がり、その行く手を阻んだのである。

『海道所々にて合戦なり』（同）

“東海道のいたるところで、合戦が起きた”

しかも、足利方は、いくら打ち払おうと消滅せず、後方から奥州軍

を追う関東勢と合流していった。奥州軍が一步京に近付くごとに、後背から迫る足利方はその数を増やした。

その頃、吉野。二十三日、吉田定房が没した。六十五歳であった。
『事とはん 人さへまれに なりにけり』

我世の末の 程ぞしらるる』（新葉和歌集・一三七〇）

“心通じあった臣下が次々と亡くなっていく。我が世も長くない”
後醍醐天皇は、自らのために生涯を犠牲にした老臣の死に、力を落とされたという。

【青野原の戦い】

一三二三年一月二十八日、奥州軍は東海道を抜け、美濃を進軍していた。

美濃を突破すれば、京が射程に入る。

対する足利方は、何としても、ここで奥州軍を止めなければならなかった。

美濃国守護の土岐頼遠（土岐頼貞の子）は、上杉・桃井・宇都宮・今川・吉良らに協力を要請し、土岐山から打って出た。

青野原が両軍決戦の場となった。

この地は、後年「関ヶ原」と呼ばれる地である。

「青野原の戦い」の特徴は、両陣営の統率が、ろくにとれていなかった点にある。

同格の将で構成され、明確な指揮官が不在の足利方は言うに及ばず。奥州軍も、実態は、顕家ら奥州勢に、関東勢（新田等）・北条時行（北条残党）・東海道勢（宗良親王ら）が後から加わった寄せ集めであり、一個の集団ではなかった。

有り体に言って、「ばらばらの集団が並走している」状態であった。

自然、両軍の戦いは、各部隊が現場の判断で無秩序に交戦する形と

なった。

こうした混戦は、数で勝る足利方の統一行動を妨げ、士気で勝る奥州軍を有利に導いた。

『桃井。宇津宮勢等うち負けし』（難太平記）

“桃井・宇都宮勢は、打ち負けた”

桃井らは支えきれず、赤坂宿の南を、杭瀬川の方に退いた。

土岐頼遠も敗れ、東の長森城に逃れた。

この戦いに参加していた今川範国も、奥州軍に押され、抗瀬川の堤防の上に退いていた。

そこに、非人の住む小屋があった。

（なお、この時代は、身分がある時代である。

そこら辺、茶を濁す意義を感じないし、こうした実態をありのままに記す方が、意味があると考えるので、当作品では、こののちも「記録通りの表現」を使う）

さて、範国はその小屋で、休息を取る事にした。

しかし、この日の激戦で、今川の家臣達は、気が立っていたらしい。

『？田の味方に加り給べし』（同）

“殿、（すぐにここを出て）黒田の味方に合流しましょう”

だが、外は暗い。雨さえ降り出していた。

『只是にて明日御方を可待』（同）

“ここで（夜を過ぎし）、明日、味方が来るのを待てば良いではないか”

範国は、いらだちを隠そうともせず、ぶっきらぼうに、そう答えた。

今川家の当主は、雨の日に戦場で休息をとると、ろくな目に遭わない宿命にあるらしい。

『如此のおこがましき大將をば焼ころすにしかじ』（同）

“こんな馬鹿な大将は、焼き殺してやる”

範国のうかつな発言に、米倉八郎右衛門という家臣が激こうした。自分は戦場で勇戦し、手傷を負ったというのに、この馬鹿大将は何を言ってるやがる。

小屋で休み、そこを敵勢に襲われたら、一溜まりもないではないか。殿は戦を知らぬ。知らぬなら教えてやるまでだ。

眼に獐猛な光を宿した八郎右衛門は、範国らの休む小屋に火をかけた。

雨がどうした。夜がどうした。

小屋を燃やせば、ほれ立派な灯りとなるではないか。

闇夜に“大きな灯”が出現した。

これに慌てた範国は、命辛々小屋から抜け出し、軍を発した。

その夜、今川勢は、この“灯り”をたよりに、黒田にある味方の陣まで行軍したという。

北畠顕家は、「青野原の戦い」で、足利方の武将を次々と退けた。しかし、それは、奥州軍が死力を尽くしての戦果であり、犠牲は小さくなかった。

そして、にもかかわらず、敗走した足利方の各隊は、今川勢のように味方と合流していったのである。奥州軍は、勝ったのではなく、単に青野原を切り抜けただけであった。

青野原の先には、黒地川がある。

黒地川を渡れば、近江に入れる。京まであと少し。

だが、黒地川には、足利直義が派遣した高師直・高師泰・佐々木導誉らが陣取る。

背後には関東・東海道の足利方を残している。このまま進んで勝てるか。

越前の新田義貞は、南下してくる気配すら見えない。

満身創痍の軍では、ここまでが限界だった。

『打ち破りかたくて、顕家卿伊勢国へ廻りて』（保暦間記）

“顕家卿は、敵を打ち破る事が困難と判断し、（軍を突如）伊勢国に向けた”

これが、後世謎とされる、「京を目前とした、奥州軍突然の転進」である。

【脱線一・ある村の決意】

古今東西、兵糧に窮した軍勢のする事など決まっている。

「現地調達」という名の、略奪である。連戦を続ける奥州軍も例外ではなかった。

『奥州前國司？當國根尾山凶徒等〇三入庄家』

（大友氏泰代宗運・興喜重陳状案、筑後大友文書、「南北朝遺文九州編第二巻」・一五五六号）

“北畠顕家卿の軍勢と、美濃国根尾山の凶徒が、仲村庄に攻め入り、”

『至于種子料令濫妨之間、土民等逃出忽不及耕作業』

“種子まで奪っていったため、住人は庄から避難し、耕作ができませんでした”

同国大井荘などは、さらに悲惨である。一三三五年の初冬以来、

大井荘は足利と南朝双方の軍勢から、何度も略奪を受けていた。次の旨が、領主東大寺に訴えられている。

『両御方の軍勢等、日夜朝夕上洛の刻、庄家に乱入せしめ、牛馬已下資財等はその数をしらず、米・大豆等に至りてはことごとく負い運びしめ』（「東大寺文書」『岐阜県史史料編 古代中世三』八九九～九〇〇頁・森茂暁「戦争の日本史8 南北朝の動乱」五九～六〇頁）

“双方の軍勢が、日夜朝夕関係なく上洛する際、庄家に乱入し、牛馬以下の財産は数知れず、米・大豆等に至っては、ことごとく運び

去っていきました”

『散々の呵責におよぶといえども』

“私どもは、さんざん（やめて下さいと）抗議しました”

『隠し置くべき所なきにより、無代に運び取られるの間』

“しかし、食料を隠し置くところもなく、なすすべもなく持つて行かれたのです”

『所詮餓死に及ぶべき』

“もはや、餓死するほかありません”

もし、村人全員が餓死しそうなら、大和まで訴え出る余力もない筈である。

おそらく、非常食の一部くらいは隠しぬき、野草を食料にして、凌いだのだろう。

だとしても、年寄りや子供は、厳しい食料事情のなか、死んでいったに違いない。

だが、村人達は、これで終わらなかった。

『身命を捨てて問答つかまつり、防ぎ申すべきのよし、同心合力』

“今後は、命を捨てても軍勢に抗議し、食糧の持ち出しを防ぐ事を、皆で誓いました”

『連日警固つかまつるにより、無窮の乱妨を停む』

“連日、庄を警固し、非道な乱暴を防いでおります”

自分達の庄は自分達で護る。争乱の中、庄の民は、生き抜くための戦いを始めた。

【花散る】

一三三七年二月一日、北畠顕家率いる奥州軍は伊勢に入った。

越前の新田義貞はまだ来ない。

―何をしている―

二十一日、やむなく単独で大和に突入した奥州軍は、二十八日、奈

良坂・般若坂の戦いで足利勢に敗れ、河内に逃れた。
もはや軍の疲労は極限に達し、上洛は絶望的となっていた。

だが、顕家は、義良親王・宗良親王らを吉野に帰し、一人戦場に残った。

なおも、河内・和泉で転戦したのである。

そんな顕家を支援するため、伊勢にいる父親房は、顕信（顕家の弟）を援軍として派遣し、京近くの男山に陣取らせた。これは、京に軍事的圧力をかけると同時に、足利方の大軍を分散させる事を狙いとした軍事行動であった。

そのため、足利方を率いる高師直は、河内・和泉の顕家、男山の顕信の二軍への対応を強いられ、戦いは長期戦の様相を呈し始めた。

だが三月、足利軍の動きが一変した。

後世、この時期に足利方が発した軍事関係の書類を精査した研究者は、その要因を、次のように解明している。

「足利尊氏が、軍勢を直接指揮し始めたのである」

事実、この時期から、尊氏の名による書状が一気に増えている。

幕府創設以来、弟直義に軍事を一任していた尊氏が、ついに動き始めたのである。

尊氏は、奥州軍の抵抗に危機感を募らせていた。

畿内の騒乱をこれ以上長引かせれば、創設間もない幕府の権威に傷が付く。

何より、越前にあつて北陸掌握を目論む新田義貞に、跳梁の時を与えかねない。

一步退いて事態を観察していた尊氏には、事の本質が見えていた。

つまるところ、幕府軍は数において宮方（南朝方）を上回る。

しかも、畿内の宮方に、これ以上の増援はない。
であるなら、兵力の分散など愚の骨頂。

北畠親房が描いた絵図の上で、幕府軍が踊る必要など一切ない。

―他の軍勢には目もくれるな、顕家卿率いる本隊を叩け―

尊氏の指示を受けた高師直は、男山には抑えの兵だけを置いた。

かくして、標的は顕家に絞られたのである。

奥州軍は、足利方の集中攻撃を受け、日に日にその数を減らしていった。

五月十五日、ついに顕家は死を覚悟した。

まもなく燃え尽きようとする命。長くはなかった一生。
残せたものは何か。

顕家の脳裏に、奥羽を統治した三年間が蘇る。

思えば、この三年こそ、顕家が生きた時だったのかもしれない。

辺境ゆえに目の当たりにした地方の実情。遠国ゆえに見えた都の歪み。

顕家は、吉野への上奏を決意した。

『一所に於て四方を決断せば、万機紛紜して、いかでか患難を救わんや』

（北畠顕家奏状・『日本中世史を見直す』二五八―二六九頁）

“帝が中央で全てを決定されたため、地方は混乱し、今日の救い難い状況は生まれました”

『速やかにその人を撰びて、西府および東関に発遣せよ』

“（民を救うため、）すみやかに然るべき人物を選び、九州・関東に派遣して下さい”

『以後三年は、偏えに租税を免じて、民肩を憩わしめよ』

“（そして）以後三年は、租税を免じ、民を休ませて下さい”

何が正しく、何が間違っていたのか。

死を目前にした今、顕家にはそれがはっきりと見えた。

『辺境の士卒に逮びては、いまだ王化に染まらずといえども、君臣の礼を正し、忠を懷き、節に死するの者、勝計すべからず』

“ 辺境の士卒は、彼らなりに帝を想い、命を賭しました ”

『恵沢いまだ遍かざるは政道の一失なり』

“ それでも勝てなかったのは、帝の政治に過ちがあったからと申す他ありません ”

『陛下、諫めに従いたまはざれば、泰平期するなし』

“ 帝が、この諫言をお容れにならないなら、太平が実現する事はないでしょう ”

『符節を辞して范蠡の跡を追い、山林に入って伯夷の行を学ばん』

“ 私も、官を辞し、山林に入って世を逃れたいと思います ”

二十二日、顕家は和泉堺・石津浜の戦いで戦死した。まだ、二十一歳であった。

その父親である北畠親房の人が変わったのは、これ以降の事である。

【文治の季節】

一三三七年六月、足利尊氏・直義兄弟は、関東に帰還した上杉憲顕に書状を送った。

『若御前は鎌倉へ御出候らん、目出たく候』

（足利直義・尊氏自筆御内書・上杉家文書、上島有『足利尊氏文書の総合的研究写真編』五〇～五一頁）

“ 義詮殿が、無事（避難先から）鎌倉へ戻られた事を、めでたく思う ”

『民部大輔もとへの事書二近国とハかり候て、国々の名候ハさりし』
“さて、以前の書状には（義詮殿が治める国を）「近国」と書き、
国名を書いていなかった”

『伊豆・さかミ・かつさ・下うさ・上野・下野・安房・ひたちなど
にてこそ候』

“（管轄は、）伊豆・相模・上総・下総・上野・下野・安房・常陸
などである”

これが「鎌倉府」の誕生である。

ここまでが直義の筆、以下は、尊氏の筆である。

『たとひこれより申候ハすとも、さた候て、よく候ぬへく候ハん事
をハ、たゝはからひさたあるへく候』

“例え、京からの指示がなくても、必要と判断をした事は、独自に
処理してかまわぬ”

『かまへてあまりにしんしやくあるましく候』

“くれぐれも、周囲に気兼ねして、判断を曲げる事のないように”
かくして、鎌倉府は尊氏のお墨付きを得て、強大な権限を与えられ
たのである。

文治の季節が到来しようとしていた。

七月十一日には、男山が陥落して北畠顕信が伊勢に退き、畿内の政
情も安定した。

閏七月には、新田義貞の首が届いた。義貞は、斯波高経に味方する
平泉衆徒が籠もる藤島城を攻めていたという。そこに、不慮の事故
が起こり、あっけなく討ち取られた。

『首を都に進たりければ、大路を渡りて獄門の木に懸けられけり』（
保暦間記）

尊氏は、この翌年、新田氏と縁深い長楽寺に所領を寄進し、義貞
の冥福を祈った。

義貞を失った越前の新田党は、弟の脇屋義助に率いられ、なおも抵抗を続けた。

この年、畿内の南朝方の軍事活動が収まる前後から、夢窓疎石のすすめで一国一基塔婆の建立がはじまった。死者を弔い、天下の泰平を祈る事は、時代を創る者にのみ許される。

尊氏・直義兄弟、それに光厳上皇は、時代の勝者であった。

『久米田寺塔婆の事、勅願の儀として修造の功を遂げ、殊に天下泰平を祈り奉るべし』

（久米田文書、原漢文・板倉晴武「地獄を二度も見た天皇 光厳院」
一三一頁）

“和泉国久米田寺の塔婆建立は、勅願である。修造を成し遂げ、天下泰平を祈るように”

諸国に建立された塔婆は「利生塔」と呼ばれ、塔婆を持つ寺は「安国寺」と呼ばれた。

そして八月十一日、足利尊氏はようやく正二位・征夷大將軍に就任した。

【脱線二・夢窓国師、尊氏を評す】

この頃、天下の尊敬を集めたのは、夢窓疎石という僧だった。名僧として評判高く、足利尊氏・直義兄弟も帰依し、北朝の光厳上皇からは国師号を与えられていた。

疎石は、多くの為政者の信を得た。後醍醐天皇も、去る一三二五年十月、内裏で疎石と問答を交わしている。ただ、問答の内容を掴んだ花園上皇（当時是在俗）は、こう評している。

『日來道者の聞え有り。仍て召さるるところなり。而して此くの如き問答は、都て未だ？』

綱を出でず』（花園天皇宸記）

“日頃、道者と評判がある。それで内裏に呼ばれたようだが、問答

の内容は禅ではない”

疎石は禅僧である。その問答が「禅ではない」と評すのだから、全否定に近い。上皇は、

鎌倉で幕府と親交を結び、京で後醍醐と会う疎石に不信を覚えていたらしい。

確かに、『夢中問答』などを読むかぎり、疎石の思想は“禅らしくない”。疎石は、『夢中

問答』の中で、「広く布教を行ない、大衆を結縁（信仰）させる」事を足利直義に説く。

その思想は、寺に籠って悟りと向き合う禅とは、どこか違う。

『此の仁を以て宗門の長老に用ひらるるは、即ち是れ胡種族を滅ぼす』（同）

“このような人物を禅林寺の長老に用い続ければ、いずれ宗門を滅ぼすだろう”

上皇の評も、故なしとはいえない。

しかし、これに関しては、花園の予想は完全に外れた。

室町時代、疎石の登場により、禅宗は政治・経済・文化を牽引し続けるのである。

思うに、疎石は「禅を逸脱した」僧というより、「禅の枠に納まらない」僧だったのだろう。

疎石の仏教観は、戦乱前夜に、驚異的な脚力で諸国の寺院を修行して廻った末に得とくしたものである。また、為政者との親交も、単に「来たるものを拒まず」、虚心で向き合った結果に過ぎない感がある。

疎石は、単なる政治僧とは一線を画す存在であった。

その疎石は、足利尊氏をこう評している。

『身命を捨給ふべきに臨む御事度々に及といへども。？を含て怖畏

の色なし』（梅松論）

“命を捨てる場面にたびたび臨んでも、笑みを含んで、怖れる様子が
ない”

『多く怨敵を？宥有事一子のごとし』（同）

“怨みのある敵を、まるで我が子のように許される”

『御心廣大にして物惜の氣なし』（同）

“御心が広く、まるで物欲というものがない”

疎石は見抜いていたのかもしれない。尊氏ほど変わった権力者も珍しい、と。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7172h/>

天の夢 地の道

2011年8月22日00時34分発行